

人文・自然・人間科学研究

第 48 号

2022 年 10 月

論文

- 意味づけの多様性 — 読書会による検証 — ……………河原 清志 (1)
- A Conflict Between Imperialism and Ecosophy:
The Emperor Jones as a Drama of Kingship ……………大森 裕二 (25)
- エドワード六世時代におけるイタリアとの邂逅 ……………富田 爽子 (41)
- 慶応 3 年の憲法構想
 ～赤松小三郎・津田真道・松平乗謨・西周・山本覚馬 ……………関 良基 (65)
- ドイツ外交文書に記された桂太郎の生涯 ……………田野 武夫 (84)

研究ノート

- 『梅蘭芳歌曲譜』と劉天華 ……………久米井敦子 (98)
- 小浜藩英学教師、塚越酸素彦 (鈴彦, 1842-1886) 関連史料調査報告
 於福井県福井市, 小浜市 ……………塩崎 智 (116)
- 事前刺激トレーニングによる走力の向上とコンディショニング ……………米重 修一 (136)

資料

- “El Conde Niño” de Riojarchivo.com ……………オスカル・メンドサ (148)

抄録

- 明治 4 年頃の英学に関する一考察
 — 額田県の郷学校に焦点を当てて — ……………保坂 芳男 (177)

論文

- 青少年期の福島安正と情報活動の起源……………澤田 次郎 (1)

- 拓殖大学研究所紀要投稿規則…………… (181)

- 『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』執筆要領…………… (184)

意味づけの多様性

— 読書会による検証 —

河原清志

Diversity of Sense-Making: Verification through Book Reading Sessions

Kiyoshi KAWAHARA

要 旨

本稿はスピリチュアリティの日常性仮説を検証することを通して、意味づけの多様性を考察することを趣旨とする。スピリチュアリティは日常のひとつひとつの場面、一刹那一刹那での人の言動として顕現するものであり、その言動がさらにスピリチュアリティに刻まれて絶えず更新される。そういう円環として描かれる。人によってスピリチュアリティが異なるのは、人によって日常経験が異なるためである。したがってその蓄積であるスピリチュアリティも異なる。そうであるならば、ある言葉を聞いたり読んだりした際に、その言葉に対して受け手がどのように反応するかは人それぞれに異なる。また、どのような場でその言語テキストに接するかによっても異なる。さらに、同じ言語テキストでも時間の経過とともに同じ人にとっての意味づけは変容してゆき、そもそもなぜそのように意味づけるのかについての深い意味合いは不可知なままである。そのような経験が蓄積した総体がスピリチュアリティであるとも言える。

本稿は人の人生観、価値観、人間観、死生観などを励起する書籍のテキストを素材にした読書会を開催し、参加者のテキストに対する意味づけがいかに多様であり、それが参加者ひとりひとりのスピリチュアリティに根ざしていることを、読書会での個々の発言を分析することによって検証した。

キーワード：スピリチュアリティの日常性仮説、意味づけの多様性、多義性、履歴変容性、不可知性

はじめに

本稿は、日常での言葉の解釈の不確定性と多様性のなかに、その人その人なりのスピリチュアリティが宿するという仮説（本稿では「スピリチュアリティの日常性仮説」と呼ぶ）を立てる。この仮説を検証するために、人の人生観、価値観、人間観、死生観などを励起する書籍のテキストを素材にして6~7名からなる3グループの読書会を、2021

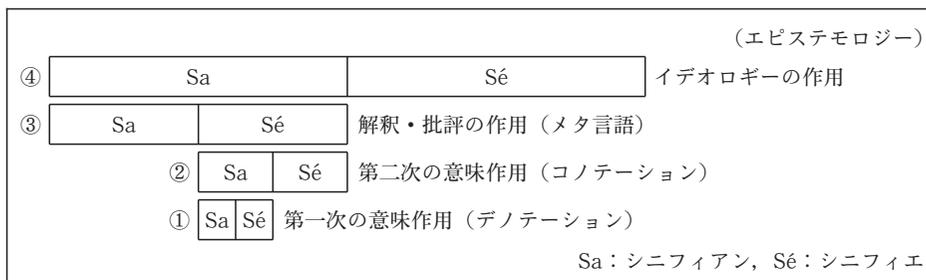
年4月から6月にかけて各々5回にわたって実施した会話録を分析する。グループダイナミクス（複数人による言語コミュニケーション的相互行為）のなかで回を追うごとにテキストに対してどのような気づきや解釈・意味づけの変化が見られるか、そしてその意味づけがいかに変容していくかについて、逐語録から言語データを分析することによって、そのプロセスを解明し、本稿の仮説を論証してゆくのが本稿の趣旨である。

スピリチュアリティの概念をめぐるには、百家争鳴状況があり共通理解としての定義を施すことは難しい。一般的にはスピリチュアリティとは、人の魂・精神・アイデンティティ・生きている証・いのち・自己存在・生き甲斐などに意味や目的・自意識・主観的社会的価値を構築し付与する機能というのが共通理解であろう。さしあたり本稿では、スピリチュアリティはすべての人に備わった人間の本質を表す言葉であり⁽¹⁾、すべての人はスピリチュアルな存在であって、生命の危機、死、挫折体験、喪失体験などによってスピリチュアリティが覚醒する（窪寺，2019，pp. 256-257）という概念定義と特徴記述に依ることとする。但し、本稿ではスピリチュアリティが危機に面した際のみ注目するのではなく、あらゆる日常性の場面にスピリチュアリティが顕現しているという上述の仮説を検証していくこととする。

1. スピリチュアリティの日常性仮説

人は芸術、学術、宗教といったある種の非日常において言語を使って豊かで多様な意味を紡いでいる。しかし、ごくありふれた日常のなかでも、人は言葉によって絶えず意味を紡ぎ出している。その意味を掬い取りながら、日々の生活のなかでさえ、人は自分とは何か、他者とは何か、世界とは、人生とは、という考えをめぐらす場面は多々ある。その意味は多層的であって（図1）、

図1 テキストの重層的意思作用（土田・神郡・伊藤，1996，p.32の図参照）



①として記号表現（signifiant）＝記号内容（signifié）の字義解釈（外延；denotation），
②として①を包摂した記号表現＝記号内容が表象するその概念対象の共通性のうちに含

まれる諸徴表の総体的解釈（内包；connotation）、③として②を包摂した記号表現＝記号内容が対象を解釈・批評する解釈項（メタ言語性）、④として③を包摂した記号表現＝記号内容によって解釈者の意識的・無意識的に有しているイデオロギーの表出的解釈（エピステモロジー）、以上4つの層が考えられる（土田・神郡・伊藤，1996，p.32）。

そして言語によるコミュニケーションの場面を想定すると、人があるテキストを目に（あるいは耳に）する。すると、㉞そのテキストという記号対象に対して、㉟解釈者が発する発言（テキスト）、㊱その発言を受けて別の解釈者が㉞㉟を対象に発する発言（テキスト）、㊲その発言を受けてさらに別の解釈者が㉞㉟㊱を対象に発する発言（テキスト）、そして会話参与者間でターンテキング（話者交代）を繰り返しながら、重層的な先行発話に対する発話を繰り返すというサイクルを描いて、日常のごくありふれた複数名の会話は進行していく。権力や立場の格差のそれほどない、この何気ないやり取りのなかに、意味の無限更新のプロセスが内包されており、㉞㉟㊱㊲…と数珠繋ぎに相互行為が進行するたびに、①②③④の意味作用も更新され改変を続けるのである。そしてその基底にはその人その人なりのスピリチュアリティが言葉としてその都度その都度顕在化してゆく。逆に言うところあらゆる言葉、あらゆる発言の根底にはその人その人のスピリチュアリティが潜在しているとも言える。本稿はこのような想定のもとに、スピリチュアリティの顕現化プロセスを実例とともに検証してゆく。

ここで言葉に対する意味づけの機制を確認しておこう。言葉を解釈する、意味づけるという営みは一体どういうことなのか。端的にいうと、あるテキストをめぐって、これを解釈する社会的な場があり、そこにいる解釈者が個人個人に特有の個人史に照らしたインタラクションによってそのテキストに対して特定の解釈を施し、それに連動して発言をしたり行動を起こしたりするというリアクションのことであり、これは絶えず無限更新を繰り返す、意味を改変しつつづけてゆく記号作用の営みである。記号論という学問を用いれば、ひととおりこのような説明はつく。

また、意味づけ論という理論を以てすれば以下のような説明も可能である。つまり、人の意味づけ作用には、そのダイナミズム、およびその無限更新性に鑑みると、受信者と解釈者が同じ記号（ここでは言語）をめぐって、同じ解釈過程を取るわけではなく、一回一回の出来事としての記号（言語）の遣り取りの中で各々が独自の意味づけを行っている。つまりは、コミュニケーションという相互行為の中で、言葉（という記号）は記憶連鎖のさまざまなチャンネルを活性化させ、その作動が互いに引き込み合って記憶の関連配置を形成する、即ち意味づけを行う。この意味づけが、これまで思ってもみなかった記憶の関連配置を形成するとき、新しい意味が創造される。そして、この意味づけは、言葉という記号と意味の結合形成を非確定的なものにする。つまり意味は記憶の引き込み合いに由来する不確定性を伴う。

この「意味づけの不確定性」には、「多義性」（意味の状況依存性；状況によって意味づけが変わる）、「多様性」（意味の記憶依存性；人によって意味づけが変わる）、「履歴変容性」（意味の時間的可変性；時間の経過とともに意味づけが変わる）、「不可知性」（意味の潜在意識性；意識不能な意味づけがある）の4つが含まれる（深谷・田中，1996, pp. 118-119）。これは行為や出来事一般を含む記号にも充分当てはまる。人は記号生成・解釈において、意味づけの不確定性に晒されながら常に意味編成を無限に更新している。となると、同じ記号（言語）であっても、発信者と受信者とはその解釈過程が異なり、まさにコミュニケーションという出来事の一回一回、一コマ一コマ、その場その場において具体的コンテクストの中で偶発的に起き、絶えず自分にとっての記号の意味作用を変容させるのである。

しかし、筆者が議論の俎上に乗せたいのは、解釈者による解釈の背後にある、仏教でいう機根^{きこん}とか境界^{きょうがい}という言葉で表現されるもの、C. S. パース記号論、およびそれを展開したU. エーコの言葉でいう根底なるもの（ただし、パースもエーコもスピリチュアルなレベルでの議論は行っていない）。これこそが、解釈者の一回一回の意味を担う根源的な何かであり、全人格をかけた人間の意味づけのあり方、つまりスピリチュアリティを本質的に規定するものであると考えることができる。言葉の解釈の根底にあるものを問い続けることによって、意味のあり方、意味づけのあるべき姿とは何かという問いに本質的に答えることができるのではないか。これが、言語学・コミュニケーション学・通訳翻訳研究をとおして、学術的に言葉の意味の探求をしてきた筆者の根源的な問いである。

このことを事例とともに鮮明に描き出すために、上述のようにスピリチュアリティや悲嘆を扱ったテキストを素材にして読書会を実施した。この読書会の逐語録を分析して、各人の意味空間がどのように変容していくかについて考察し、意味づけの背後にある「根底」なるものに肉迫してみたい。

2. 読書会の目的・方法・実施状況

本読書会は、スピリチュアリティの日常性仮説を検証するために、人のスピリチュアリティや悲嘆を励起する書籍のテキストを素材にして6~7名からなる3グループの読書会を、2021年4月から6月にかけて各々5回にわたって実施した。グループダイナミクス（複数人による言語コミュニケーション的相互行為）のなかで回を追うごとにテキストに対してどのような気づきや解釈・意味づけの変化が見られるか、それがいかに変容していくかについて、逐語録から言語データを分析することによって、そのプロセスを解明してゆく目的で行った⁽²⁾。

がん闘病に関する本（宮野真生子・磯野真穂（2019）『急に具合が悪くなる』晶文社）を素材にして読書会を実施後、逐語録を書き起こした。そしてその言語データについてテキスト分析を以下で行う。読書会実施に際しては、Zoom（Zoom ビデオコミュニケーションズが提供するクラウドコンピューティングを使用した Web 会議サービス）を用いて、その様子を録音および録画した。本書を選んだ理由としては、人は日常的に病気や体調不良、がんなどについて話題にし、これらの話題に関連する自分の思いを表明することは多い。そういう日常的な場面を想定し、著者の2人が日常的に交わっていた口語体で記した書簡を素材にして、本稿の「スピリチュアリティの日常性仮説」を検証するためである。

毎回、読書会のはじめにチェックイン、おわりにチェックアウトを行い、各参加者がどういう思いでこの場に臨み、どういう思いを抱いて読書会を終了しようとしているかについても述べてもらった。筆者は消極的なモデレーションを行うこととし、積極的に談話管理をしたり、意見を率先して述べたりすることは行わないように努めた。尤も、参加者から意見表明を求められた場合には、積極的に自身が感じる情感や意見を述べた。その他は、できるだけ各参加者に任せて議論を進めてもらった。

読書会の回数と時間は以下のとおりである。各実施時間は19時以降の時間帯で、100分から140分程度実施した。下記括弧内の人数は筆者を除いた人数である。関東と関西に在住する筆者の知人のうちから、読書会のテーマやスピリチュアルケアに関心を持つ人たちに呼びかけ、研究の合意を得て実施した。今回の研究は、性別・年齢・職業その他の社会的属性には一切無関係なグループ編成を行った。また権力格差が極力生まれないように、各グループに均等に年齢別の配置をし、また男性を1名ないし2名、配置した。したがって、以下のグループ構成には特段の積極的な特徴づけはない。

甲組（7名）：2021年4月11日、4月24日、5月8日、5月22日、6月7日

男性1名、女性6名、30代から80代。

乙組（6名）：2021年4月10日、4月24日、5月9日、5月23日、6月5日

男性1名、女性5名、20代から60代。

丙組（6名）：2021年4月17日、5月1日、5月15日、5月29日、6月12日

男性2名、女性4名、20代から70代。

3グループ合同読書会（7名）：2021年7月17日

3グループのなかで日程の都合が合った7名が参加した。男性2名、女性5名。

読書会は、上記の内容を各参加者が発表しつつ、その場で抱えている思いを自由に語ってもらった。本書の著者は、宮野真生子氏（九鬼周三・偶然の哲学の専門家）であり、

医療人類学者の磯野真穂氏とがん闘病に関する書簡を交わしたものが書籍化されたものである（著者に対する呼称は本文中では「氏」、引用文中では「さん」で統一することとする）。宮野氏はその後、40代にして若く亡くなられた。本書は1便から10便までの往復書簡を掲載している。

読書会では、各便の特定の一節を指定し、それについてどう思うか、どう感じるかを、テキストの文面を離れてもよいので、ご自身の人生経験を踏まえて、自由に意見を述べ合うという形で進めた。この読書会では、テキスト理解そのものよりも、自身の意見を自由に言う場を設けることを趣旨とした。そして読書会終了後、以下の4つを各参加者に記してもらった。

- 1) 今回の読書会の印象
- 2) 今回のテーマについての気づき
- 3) 自分自身についての気づき
- 4) その他、自由に

事前に検討してもらった箇所のうち、本稿は紙幅制限上、ごく一部しか取り上げられないため、第4便を取り上げたもののみを以下に掲げる。この箇所を分析対象として選んだ理由は、乙組にとってこの箇所が5回の読書会の中の最終回に該当していたため、回を経て参加者の意味づけの変化がどうであったかを検証するのに最もふさわしい回だったからである。同一の箇所を、甲組と丙組は第4回で取り上げていたため、グループ間での回のばらつきが生じた。

〈事前検討箇所〉

第4便96ページ【追伸】：世界への信をもって「いま」に身を委ねて、偶然を生きるのはとても素敵ですし、私はそんなふうに生きていきたいと一方で願っているのですが、しかし、この偶然に身を委ねることは、周りを巻き込むことにつながっていて、一人の選択では済まない、というところが次なる問題として待っています。恋愛の偶然に身を委ねることと、自分が病になって周りを巻き込むことはけっこう違う、というのが偶然の哲学を考えてきた私の現在一番の悩み、です。

読書会で使用したテキストと著者の概要は以下のとおりである（以下、Amazon 紹介欄）。

・本書の概要：

もし明日、急に重い病気になったら——見えない未来に立ち向かうすべての人に。哲学者と人類学者の間で交わされる「病」をめぐる言葉の全力投球。共に人生の軌跡を刻んで生きることへの覚悟とは。信頼と約束とそして勇気の物語。もし、あな

たが重病に罹り、残り僅かの命言われたら、どのように死と向き合い、人生を歩みますか？ もし、あなたが死に向き合う人と出会ったら、あなたはその人と何を語り、どんな関係を築きますか？ がんの転移を経験しながら生き抜く哲学者と、臨床現場の調査を積み重ねた人類学者が、死と生、別れと出会い、そして出会いを新たな始まりに変えることを巡り、20年の学問キャリアと互いの人生を賭けて交わした20通の往復書簡。

- 宮野真生子：福岡大学人文学部准教授。2007年、京都大学大学院文学研究科博士課程（後期）単位取得満期退学。博士（人間科学）。専門は日本哲学史。著書に『なぜ、私たちは恋をして生きるのか』（ナカニシヤ出版）、『出逢いのあわい——九鬼周造における存在論理学と邂逅の倫理』（堀之内出版）、などがある。2019年7月に亡くなる。
- 磯野真穂：国際医療福祉大学大学院准教授。2010年、早稲田大学文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。専門は文化人類学、医療人類学。

3. スピリチュアリティのダイナミズムと意味づけの多様性

では、以下でスピリチュアリティが実際の読書会のやり取りのなかで、どのように顕現し、作用しているか、そして言葉の言表からスピリチュアリティの日常性がどのように同定できるかについて検証する。以下、3グループを甲乙丙、参加者をA～S、筆者をXで表記する（本稿では、本文中も引用文中も参加者に「さん」の呼称を用いることとする）。本研究では、参加者の性別・年齢・職業その他の社会的属性別の分析は目的としておらず、権力格差のない対等なもの同士が自由に議論を展開できるコミュニケーション環境という、ごく日常的に見られる場面を想定した読書会であるため、参加者の社会的属性などは事前には説明せず、分析に必要な最小限の程度で、分析の中で言及するのみとする（発話の言表的特徴からある程度、社会的属性を自由に読み取ることは、本稿の読者の任意である）。

意味づけの多様性に関する分析のポイントを絞って説明すると、次のようになる。

- ㊦ 多義性（意味の状況依存性）：同一テキストに対する3グループの意味づけのあり方の違いを分析する。
- ㊧ 多様性（意味の記憶依存性）：同一テキストに対する同グループ内での複数の参加者の意味づけのあり方の違いを分析する。
- ㊨ 履歴変容性（意味の時間的可変性）：同一の参加者が回を追うごとに、同一著者・同一著作に対する意味づけのあり方の変容を分析する。
- ㊩ 不可知性（意味の潜在意識性）：参加者が読書会后にリフレクションを記した内

容から析出される気づきや覚醒のあり方を分析する。

これらをポイントとしながら、実際のグループ内発話に見られるスピリチュアリティを分析してゆく。

(1) コミュニケーションと意味づけについて

ここで、読書会における（それに限らず一般的な）コミュニケーションのあり方について理論的に考察しておく。まず、本稿は「スピリチュアリティの日常性仮説」を検証するうえで、人が発する「言葉」と「意味」に着目してきた。ここで、「意味づけ」とは「人間が状況を把握し、対応を思念する内的営み」と定義する（深谷・田中、1996, p. 10）。そして、意味づけとは「記憶の関連配置の形成」である。他者の言葉を自己の主体内に取り込み、自己の経験基盤によって蓄積してきた長期記憶のなかから、関連する記憶を励起させる。記憶は、その場に対する意味づけ、情況編成を行いながら、互いに引き込み合い関連配置を形成する。情況とは、意味の包括的関連配置であり、{[記憶の関連配置]の関連配置}である。情況は意味づけの総合的な複合的・融合的所産であり、多様な諸相を持っている。その場、つまり意味づけられた場、すなわち情況は、当該客観的状況の主観的な内的風景としての場なのである。この情況内において、他者の言葉を見聞きしてインプットすると、それが自己の長期記憶とのインタラクションを起こして記憶の関連配置を起こす。これが意味づけである。この意味づけが理解の相であり、それが話者の言葉の意味づけられた意味である。これは話者の意図から独立し自立して聞き手に届いてしまう。どのようにその発話が意味づけられるかは、聞き手に完全に委ねられているのである（意味づけの宛先依存性）。そして、その意味づけが聞き手によってどのようになされるかについては、話し手はコントロールできない（他者の他者性）。つまり、意味づけは不確定性を原理的に内包している（この不確定性に多義性・多様性・履歴変容性・不可知性があることは前述のとおりである）。

本稿の読書会の例で言うならば、「偶然」という言葉を聞いた際に、甲組では自分の選択と他者への影響について語る人、九鬼周造に関連させつつ東日本大震災で自らが助かった時のことを語る人、パワハラを受けたときに、その職場を選んだことがそもそもパワハラを招いたのであって加害者と思いき2人の言動によって苦しんだという因果関係の怪しさを語る人、三宅島や東日本大震災の被災者支援の現場で、苦しみの中に光るものを発する人たちが偶然を受け入れて生きている姿について語る人、ホスピスボランティアでがんになった患者さんの偶然を必然として引き受けている姿について語る人など、これらが自らの実体験に基づいた意味づけ、つまり記憶の関連配置の形成である。

この記憶に関連づけられた意味を基に、今度は聞き手である自己が対応をめぐる記憶の関連配置を起こし、コミュニケーションにおける応答形成を行う（応答の相）。その

配置における言葉の配列が、主体内から外界へ生み出されると、自ら発話した言葉となる。情況編成は、他者の言葉の意味づけ、そして自らの発話の言葉の配列編成を含む記憶の包括的関連配置の形成である。このようなコミュニケーションにおける内的プロセスは、記憶の励起、引き込み合い、関連配置の形成をとおり、記憶連鎖の複雑な網の目を介して進行していく。記憶の活性化、共振の増幅と抑制、活性化した記憶どうしのダイナミックな均衡をもちながら展開していく（深谷・田中、1996、p.40）。

たとえば、読書会の甲組では「今 F さんのお話を聞きながら、そうかそうか、すごいな、そういうふう思うんだっていう、改めて教えられました。本当にありがとうございました」とか、「やっぱり一つの真理に出会ったときの、お一人お一人の目の輝きっていうかそれがね、すごく綺麗に見えました。僕には。[中略]すごいグループなんだなっていうふうに思います。それはもちろん今までの学んでこられた、いろんな研究なさってきたことの、そういう積み重ねもあるんだけど、同時に生きて誠実に生きていくっていうところにね、根ざしてるんじゃないかなっていうそんな感じを持ちました。はい。そこは多分僕にとってもこのグループが持っている魅力だし、そういうものに出会える。ちゃんと向き合って、人生と向き合って、生きていく。そういう姿勢にすごく私自身は魅力を感じているんじゃないかなと思います」という A さんの共感的な発言が特に顕著である。このように会話という相互行為では、ダイナミックな均衡をもちながら応答形成が展開する。

これらのことを端的に表したのが、後掲の図 2, 3, 4 である。甲乙丙の 3 グループのやり取りを、トニー・ブザンのマインド・マップの手法を応用して作成したものである（ブザン、2000）。マインド・マップは本来、1 ブランチに 1 ワードを記すやり方によってイメージを重視するのであるが、本稿では少しそれにアレンジを加え、注目すべき際立ったフレーズやセンテンスだと筆者が思ったものを記している。

また、意味づけの記憶、つまり、記憶を関連づけた経験もまた長期記憶に格納される。これが記憶連鎖の形成である。記憶連鎖は、言葉だけでなく、感覚、イメージ、音像、概念、出来事、場面、さらには記憶の関連配置の仕方そのものなど、さまざまな記憶相互の間に形成される。記憶と記憶の関連づけの記憶は、日々の生活経験をつうじて形成され、蓄積され続けてゆく。言葉は身口意（からだ・ことば・こころ）の融合態なのであり、それが意味を形成するのである。

そして、記憶連鎖がもつ重要な特質は、連鎖に親疎・強弱の濃淡があることである。生活体験の中で、さまざまな記憶が関連づけられ、蓄積され続けるが、それは自身の関心の度合いやインパクトなどによって親疎・強弱の濃淡を帯びた連鎖を形成する。そして、それは記憶の無限更新的な改変によって、濃淡の度合いも含めて絶えず再構成され続けてゆくのである。たとえば、乙組では臨床現場のエピソードやヨーガの話、丙組で

は自身の治らない病気の話や恋愛・結婚における経験の話が、強い関連性を帯びた連鎖記憶として活性化し、想起されて発話されたものと思われる。

このように、言葉によって意味世界は形成され再編され続ける。言葉が意味世界を豊穡化すると言ってよいが、それは二重分節性と記憶の関連配置形成とが協働するからである。本稿の読書会の事例でいうと、「偶然」をめぐる意味空間において、「恋愛」という「ポジティブ思考」と「病気」という「ネガティブ思考」とが二重分節として立ち現れる。そのうえで、恋愛と病気の偶然性は違うという意見や同じという意見が錯綜する。そういう意見の重層的なやり取りのなかで絶えず意味づけが改変されていく。つまり、記憶のある部分を活性化して引き込み合わせ関連づけを行いながら会話が進行する。記憶は絶えず分解・再編・統合されるのである。このようなことが可能なのは、おそらく、ニューロン・ネットワークの作動特性によっているはずである。生理学レベルの記憶は、ニューロン・ネットワークに記された神経インパルスの発火パタンの痕跡である。つまり、生理学レベルの記憶は、ニューロン同士の結合連鎖にある。この結合は長期記憶化されれば消滅することがないといわれている。この連鎖には親疎・強弱の濃淡があり、それが経験の重なりによって、改編されるといわれている。発火パタンの痕跡は、発火を招いたのと同型の刺激によって発火パターンを再現する。このニューロン・ネットワーク上の発火パタンの引き込み合いが、意味レベルの、記憶の分解・再編・統合をもたらすものと推測される（深谷・田中、1996、pp.41, 53-54）。

また、意味づけは言葉の慣習的な意味（外延・内包）を前提とするが（前提的機能）、外に開かれたコミュニケーションの中で、そのシニフィアン＝シニフィエ関係は絶えずしなやかに構造の変化を起こす（創出的機能）。主体同士の意味づけの相互作用によって、言葉と意味の関係が変容していくのである。それが解釈・批評というメタ言語作用（メタ語用論的作用）である。これは、同一のコミュニティ内では、特定の（無意識に作用する）イデオロギーの下で行われるが、時としてそのイデオロギー自体をも改変するインパクトを持つことがある（エピステーメーの改変）（図1参照）。このように、コミュニケーション行為の中で繰り返される意味づけの営みが、慣習的に結びついたシニフィアン＝シニフィエの絆を緩め、解放すからこそ、人は言葉によって種々の物語を紡ぎ出す、つまり絶えず構造を再編成することができるのである（深谷・田中、1996、p.63）。

たとえば「偶然」という語を取り上げてみよう。外延（denotation）としての標準的な辞書の意味は「何の因果関係もなく、予期しないことが起こること。また、そのさま」であろう。また内包（connotation）としては、一般的な人が想起するこの語からのイメージの代表として、ウィキペディアによる説明を踏まえると、偶然という語によって喚起されるイメージは、事前に意図しない結果が発生、思いもよらず、そのつもりは

なかった、限定的偶然と絶対的偶然、人間存在の不条理・無意味さ、などであろう。ところが、この語をめぐるメタ言語レベルの解釈・批評のレベルとなると、その解釈はまさに多様性にかかっている。そして、この読書会では、哲学という科学分野の高次領域で「偶然性」が論じられているスピーチ・コミュニティのイデオロギーが、基底世界での日常言語のやり取りのなかで批判され、覆されつつ、同時に共感や賛同を受け、さらに哲学領域のイデオロギーや哲学者である宮野氏自身のもつイデオロギーを相対化する言説が繰り広げられた。これがまさに慣習という鎧からの解放であり、スピリチュアリティの覚醒へとつながるものである。これは、人との対話、自身の内面との対話、そして時として大いなるもの（とさしあたり呼んでおく）との対話の円環によって、そして言葉というエネルギーを循環させることによって顕現していることが、この読書会の会話録から如実に読み取れるであろう。では、一体、この言葉というエネルギーとは何か。

(2) コミュニケーションと言霊について

ここで、鎌田（2017）の言語観を参照してみよう。鎌田は「言語とは、エネルギーの変換装置であり、そこに『言霊』のはたらきがあるといえる」（鎌田，2017，p.55）として、言語学とは人間学であり、さらには霊学にまで突き進むものであるという（p.52）。そして、「言霊とは、呼吸し、生命をもって成長する言葉ないし言語活動であり、成長する時間性を内含している。言葉は、霊であり、社会身体の血であり、母の乳なのである」という（p.334）。したがって、言霊論は、言葉ないし言語行為と靈魂ないし霊性が切り離せない存在論的結節であると説く。また、生命的な生成する身体性を持つ言霊は、現実に対して、意識や物質に対して、創造的な力を持って働きかけると説く。したがって、言霊のレベルでは、言と事、言葉と出来事とが一致し、言が事、霊が物を呼び出す力となる。名辞と物、能記と所記との自然的同一性がごく自然に導出される。言霊は人類の「初発」にのみ起源があるのではなく、根源的な「響き」の体験によって生起する瞬間にも開示され、繰り返される。まさにひとつひとつの言語的発声の発現場で繰り広げられる根源的働きである（pp.334-335）。

言語には物質的なレベルから、生命宇宙的なレベル、社会的なレベル、霊的なレベルまで多次元的な位層があり、そうした多層的次元が互いに流動的に浸透し合い、言語の内部生命に人間が深く関わるときに、創造的な産出力が各位層を貫いてダイナミックな力動をもたらす。言葉と物と意識とが響き合い浸透し合う（p.54）。

がんに罹ってしまったこと、震災に遭ったこと、火山噴火に遭ったこと、パワハラに巻き込まれたこと、愛する人の死に直面したこと、枚挙に暇がないほど人はさまざまな経験を。それらの生の体験に元々言葉はない。この経験が強烈にその人のスピリチュアリティに深く刻み込まれる。そして、沸々と湧き上がる熱い思いが内面で込み上げる。

そのどうしようもない遣る瀬無さを抱握するエネルギーに言葉を付与する。辛い。苦しい。悲しい。どうしようもない。やりきれない。いや、頑張ろう。闘おう。正面から向き合いたい。いや、忘れたい。執着から離れたい。前を向いて生きよう。さまざまに生起する感情に、言葉を貼り付ける。言葉とそのエネルギー作用を正面から論じた南方熊楠の理論を援用するならば、人間世界を包括する大きな宇宙の意味場において、「心」の作用によって「物」に接したときに「事」が起こる。あるいは、病気や震災などの出来事や経験という「物」が経ち現れたときに「心」が顕現する。そしてその顕現したエネルギーが言動というアクションを起こす。これが「事」である。被災住宅に住む、新たな津波防止柵を作る、復興活動に尽力する、被災者を弔うなど、このアクションが別の人のアクションを連鎖的に引き込み合い、一連の「事」が生起する。それがイメージとしての「名」を生み、そのものに「印」というシニフィアン＝シニフィエを形成することとなる。そして南方は、発話される言語の奥に潜むより本質的なものとしての「言語」を「名」と考えていた（唐澤，2017）。つまり、「名」とは間主體的に共有される潜勢態としての言語、つまり言霊であり、これこそが場に顕現するスピリチュアリティであるといえよう。それにイメージの物質性を付与した、具体的な象徴をあらわしたものが「印」である。「物」と「心」は、「事」によって現れ、「名」を介して「印」を生じさせる。まさに、スピリチュアリティの機能（「事」や「印」に顕現するという機能）と現象（「事」や「印」になって現れるという現象）を言い得ている。そして、南方のいう「名」とは、スピリチュアリティそのもの、ないし類似したものを示唆する概念だったことが推察される。

③ 言語の虚と実、偽と真、および覚醒について

では、このように「印」という物質としての言語、具体的な象徴をあらわすとされる言語は、本当に言霊ないしスピリチュアリティを忠実に表象するのだろうか。この問いは、言語の虚と実、偽と真という両義性の論点以外にも、本来的な言語化不能性の論点、言語化した物質としての言語そのものが可変的で変容するものであるという論点をも内包している。読書会の会話録の発言から、これらの論点に関係する箇所を一部引用しつつ、検討してみたい。

① 真実性・言霊性

- ・甲組 E さん「そこのところをなんか私は言葉にできてなかったのを、その宮野さんだったり磯野さんが言葉にしてくれてるっていう感覚があって」
- ・甲組 E さん「私のパワハラの時の経験とか、何かそのモヤモヤを説明してくれてるっていうか、言語してくれてるみたいなその感覚で読んでいきました」
- ・甲組 E さん「その偶然性について書かれてるところとか、自分の中ですごくしっ

くりきたっていう」

- ・甲組 D さん「自分ではその今までの人生を言葉にすることはできなかった部分をこの方が言葉にしてくれた」
- ・乙組 I さん「もう亡くなってしまうとその方の言葉っていうのは聞けなくなっちゃうから、本当に良かったのかなって自分も思うところもあるし、難しいです」
- ・乙組 L さん「さっきの美しさってところに話を持ってくると、この言葉が出てきたことで、なんていうかな…、この方は哲学者としての最後の仕事、最後の仕事としてこの本、書簡のやりとりをしてるんだらうなと思ったので、その哲学者としてというか、この人がこの仕事をしながら生きてきたそのアイデンティティって言うか、みたいなのが核にあって」
- ・乙組 H さん「偶然っていうのは努力した者に対して神様が与える架け橋だって言い方してる、っていうのが私、すごく言葉が好きで」
- ・筆者 X「自明なことに言語を付与するっていうのも哲学っちゃ哲学で」

これは漠とした思いが言語化されることにより「意味」として顕現し、「言霊」が「ことば」化されることによって、いわばエネルギーが形を獲得する作用でもある。これは、「ことば」によって気づきを得ること、スピリチュアリティの覚醒を得ることであり、真実なる言葉の側面である。

② 虚偽性・戯論性

- ・乙組 H さん「現実とは、この一瞬にたまたまさまざまな原因が重なり合って今が生まれって書いてあるんですけど、なんか私こんなこと歳とりゃわかるだろうと思って（笑）。これをわざわざ言語化したか、みたいな」
- ・乙組 L さん「迷惑かけたくないし、かけられたくないと。それから正しい選択とかっていう言葉が前に出てきたと思う」
- ・乙組 L さん「もちろん哲学の話題なのでこういう抽象的なことを頭の中でぐるぐる言葉をかき混ぜているような感じに読めるところはあるのかもしれない」
- ・丙組 P さん「偶然の哲学は考えてきた研究者の宮野さんの言葉がちょっと私は腑に落ちないんです。そんなに恋愛、軽かったんですかって、逆に」
- ・丙組 Q さん「文章上には偶然に身を委ねるって、偶然を生きるのは素敵だって書いてあって、そのあとには恋愛の偶然に身を委ねるって、同じ偶然って言葉を使ってる。この最初の偶然と恋愛の偶然って何がどうちがうのみたいな感じになっちゃって。同じ言葉を使ってるのに、違うものと捉えてるんだったらもうちょっとわかりやすい書き方してくんないかなってすごい思いましたね」
- ・筆者 X「やっぱり病気を目の前にして、体も蝕まれてつらくなってきて、そこが、ほころびがどんどん出てきている様をなんとか言葉で表現しようとして書いてるん

ただその必死さがうまく伝わってこないというか。本人は理路整然として書いてるかもしれないけど、こっちにとってはよくわからない。そのよくわからなさが実は、この方の人間性をよく現わしてるんだなという、そんな感じにも読めますよね」
①とは対照的に②は、言葉への不信、言葉の虚偽性を表す側面である。言葉による分節ないし分別ぶんべつにより、言葉がスピリチュアリティから乖離してしまう事態を指している。物象化に伴う虚偽なる言葉の側面である。

③ 言語化不能性

- ・筆者 X 「哲学を知らないとかそんなに興味がない人は、一足飛びでパンとわかってしまう、でも言語では語れない」

これは言語化が不能であるとともに、余計な言語化は不要であることも表している。②の虚偽性・戯論性を踏まえると、無用な言語化はかえって真実から乖離してしまうため、言語をむしろ要しないという言語の側面を表しているといえる。

④ 言語の可変性・変容性

- ・筆者 X 「哲学者で、結構硬い、割と難しい言葉を使って抽象概念も多いし、すごいことを書いてるのかなと思って読んでも意外と、実はどんどん変わって行って、そういう側面もあるんでしょうね」

言葉はあくまでも暫定性・当座性があり、意味が絶えず無限更新するのと同様、それを物象化した言葉も絶えず無限更新する。であるならば、一刹那での言葉は可変性を伴うものであり、絶えず虚と実、偽と真の間を行き来するのである。そしてある刹那に至って言葉が現れた時、スピリチュアリティの覚醒を得ることとなる。それが次の⑤である。

⑤ 言語による覚醒

- ・甲組 E さん「その自分の中では切り捨てた過去の自分を言葉にすることによって成仏というか供養してくれたとかそういう感じ」

これは言葉によって自身の持つ経験の意味に覚醒し気づきを得る事態を指している。スピリチュアリティの覚醒が言葉を通じて行われる局面である。

以上を踏まえて、スピリチュアリティの4つの不確定性について、読書会の会話録を基に検討してゆく。

3-1. スピリチュアリティの多義性（場のダイナミズム）

まずはスピリチュアリティの多義性（意味の状況依存性）、つまり同一テキストに対する甲乙丙の3グループの意味づけのあり方の違いを分析する。場にどのようにスピリチュアリティが顕現するかを見てゆく。

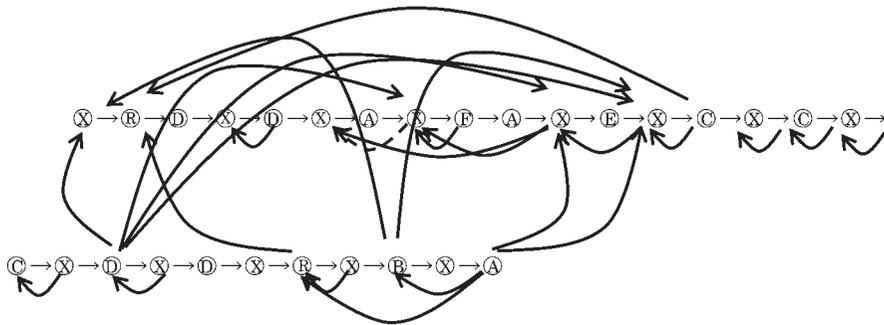
以下の甲乙丙3グループのマインド・マッピング（図2・図3・図4）は、「偶然」と

なのである。いわば空白の話者がコメント部として顕現させた色あいが、その場のスピリチュアリティを創出し、その話者が発した言葉がその話者の今ここのスピリチュアリティの在り様を表出し、その話者のスピリチュアリティを構成してゆく。つまり、言葉ないし言霊が反射的・受影的にその話者を構成してゆくのである。つまりは、その場におけるその場の言葉が、その場の人を構成するのである。

図2, 3, 4で示したマインド・マッピングは、甲乙丙の各グループの意味曼陀羅であり、元々は白いキャンバスであったものが、多彩な色どりで放射状に塗られているのがわかる。無の場所に主語（S）という参照点を頼りに、標的としての述語（P）が網の目ないしリゾームのように言霊の顕現である言葉を数珠繋ぎに紡いでいるのである。この繋がりは、単に独立した個と個が自立した形で存在するのではなく、互いのスピリチュアリティ、互いの言霊が響きあい、それが同時共起的、相依相待的に顕現した言葉として表出される。

一例として、甲組の相依相待的な相互言及指示の交差状況を図に表すと、以下の図5のようになる。

図5 相依相待的な相互言及指示の共感的な交差状況



これが示すパターンは、互いに共感し合う共鳴関係である。メイナード泉水が「パトスのレトリックは『空白の話者』を具現化する表現手段として機能」というのは、このことを指している（メイナード、2000）。たとえば、甲組Aさんの「Fさんのお話を聞きながら、そうかそうか、すごいな、そういうふう思うんだっていう、改めて教えられました」、Cさんの「さきほどEさんのお話でも思ったんですけども」、Eさんの「Aさんの話、Fさんの話とか聞いてると、すごく真摯にこうしっかり全部読み解こうとなさってるんだなっていうふう感じたんです」などの表現に見られる相互の言及指示である。

3-2. スピリチュアリティの多様性（人のダイナミズム）

つぎに、多様性（意味の記憶依存性）、つまり同一テキストに対する同グループ内での複数の参加者の意味づけのあり方の違いを分析する。

ここでは、がんにかかったことの「偶然性」、恋愛、そして宮野氏をめぐる丙組内での意味づけの多様性について見てゆく。以下が各参加者の発言のキーフレーズである。

Oさん：周りを巻き込むこと、強烈な惹き合う何か、偶然とは思えない何か、自分の美学

Sさん：家族は何にでもすがりたい気持ち、偶然とは宇宙からのメッセージ、職業病

Mさん：自分ひとりで生きていける思い、恋愛はいろんな感情が渦巻く

Pさん：欲求を押さえる合理性を持った自分への過信、完璧主義

Nさん：自分の存在は人に影響を及ぼすものであり、それが生きる醍醐味

Qさん：がんの闘病をして頑張っている自分を見てほしいという承認欲求

図4「丙組のマインド・マッピング」を参照しつつ上記の発言を見てみると、独立した統一的で主体的な自我論を想定するよりも、ありのままのコミュニケーション経験を通して、主客未分な状態での純粹経験によって、そして経験的反省によって個人どうしが共感し合いながら発話をし、その場の意味空間を生成し合っているという、相依相待的に実在するという人間観や存在論のほうがしっくりくる。コミュニケーション経験が生じるのは、その「場所」であり、その場所は己を照らす鏡のようなものである。そのなかで、各自のスピリチュアリティ顕現してくる言葉が紡ぎ出されるのである。

置かれた場で人はいくつもの自己を経験し、場所によって自己が変化することも知ることができる。その自己とは、多様な状況の中で幾多の行動を起こし、ある傾向を見せる多様な働きの集合体である。もっと根源的にとらえると、相矛盾する多様な自己と向き合うことで、矛盾的自己同一なる自己が露見する（メイナード、2017, pp.50-54）。そこには特段、一貫性のあるアイデンティティが貫かれるわけではなく、平野啓一郎がいう「分人としての話者」がその姿である（平野、2012）。相手との反復的なコミュニケーションを通して、自分の中に形成されてゆくパタンが人格であり、人格はスピリチュアリティの顕現したものの束であり、言語はそのことを垣間見せてくれる機能を果たしている。

以上からもわかるように、実際のコミュニケーションの場では、話者は創造的に言語行為に参加し複数の自分を演じる者である。一貫した個として存在するのではなく、その場で必然的に相手との関係性において流動的で可変的な存在である。まさに個のなか

でさまざまな現象する刹那刹那でのスピリチュアリティの具体的な姿が、いわば分人的な形として立ち現れてくる。そして、個々に多様性を有する個人どうしが絶対矛盾性を孕みつつも、同じ場を共有し、融通無碍な状態で共感し合うのが、コミュニケーションの姿である。そしてその場が間主体性を共有する状況を生み出しているのである。

3-3. スピリチュアリティの履歴変容性（時のダイナミズム）

つぎに、履歴変容性（意味の時間的可変性）、つまり同一の参加者が回を追うごとに、同一著者・同一著作に対する意味づけのあり方がどのように変容するかを分析する。ここでは、宮野氏に対する印象が、①その回のなかでどう変容するか、②5回にわたる読書会によってどのように変容するかを見ることで検討してゆく。ここでは①の短いスパンでの履歴変容を扱い、次項で②の長いスパンでの履歴変容を扱う。本項では、3グループのなかから一部の参加者の発言を引用して検討する。

Aさん：僕も文庫の粋の研究、あれ読んだけれども、よくわからなかったです。[中略] 今お話を聞いてそうか、それとこの宮野さんと繋がって、それから偶然の哲学っていうようなことが繋がっていくんだな。それはたとえば今ここに偶然、病気になったり、あるいは偶然たとえば震災に遭ったりしたときを、それを読み解く。それを読み解くための大きな道具になっていくっていうことを今Fさんのお話を聞きながら、そうかそうか、すごいな、そういうふうに思うんだっていう、改めて教えられました。

Bさん：ここから感じ取るこの宮野さんという人物の人間的な部分って何だろうっていうふうにちょっと感じて、最初前の方の章で私はこの人は強い人だっていうふうに思考を持っていて、自分の中でさまざまなネガティブな感情が消化できるから強い人だと思っていたんですけど、ここら辺に来てこの人は人に迷惑をかけたくないっていう気持ちがとても強い人なんかになっていうふうに感じて。

Hさん：宮野さんがすごく、なんていうか、自分の中のいろんな弱い部分とか、どうしようもない部分を出てきてなんていう表現してるのは、なんか私はほっとするなという気がちょっとしています。

Kさん：すごい宮野さんが真面目な方なんだなと思ったのと同時に、今回のこの宮野さんのご返信の内容を読んで、だんだん私の考えに近づいてきたというか。その人間味が見えてきた、哲学者としての宮野さんじゃなくて、一人間っていうんですかね、一般人って言い方おかしいですけど。その宮野さんが見えてきたっていう感じがすごかったです。

Jさん：私も結構皆さんと同じで、今回は宮野さんの人間的な部分がまたより見えて

きたなと思いました。ご病気になって、今までの合理的な生き方というか、ガチガチの鎧が落ちたというか、手放したというか。それで本来の、こっちが本来の自分で、そういう自分らしさが見えて来たのかなと感じました。

以上からわかるように、宮野氏が往復書簡を繰り返すなかで見せてきた自身の姿が、意識的であれ無意識的であれ変化する。それを承けて、そのテキストを読む側も宮野氏への印象を変化させていく。それが、読書会のなかで他者の発言を聞き、他者と共感したり、時として反対の印象を持ったりする中で、宮野氏への印象が他者の発言と相俟って変化していくことが上掲の会話録の引用から読み取れる。AさんはFさんによる九鬼周造の偶然の哲学の説明を聞いて、九鬼の研究をしていた宮野氏への印象が変わってきたと表明している。他の4名の発言は、具体的にグループ内の他者への言及はないものの、先行する他者の発言を承けて、それに共感を示すように宮野氏の印象が変化したことを表明している。

このことからわかるように、意味空間は刹那刹那で絶えず変化してゆく。意味の無限更新性はコミュニケーションには必然であり、ひとつひとつの言動がスピリチュアリティに刻まれ、そのスピリチュアリティが次の瞬間にも次の言動となって顕現していくという絶えざる循環がスピリチュアリティの機能のひとつとして作用しているからである。そして、一刹那一刹那において、スピリチュアリティも変容し、その顕現である言動という現象は、その時その場でのその人のスピリチュアリティをよく表しているものでもある。

3-4. スピリチュアリティの不可知性（深層意識のダイナミズム）

最後に、スピリチュアリティの不可知性（意味の潜在意識性）、つまり参加者が読書会後にリフレクションを記した内容から析出される気づきや覚醒のあり方を分析する。発言をしている瞬間には気づき得ない意味は、その瞬間には不可知な部分がかなり大きい。しかし、あとになって気づきを得て、大なり小なり自らのスピリチュアリティに覚醒することがある（前述の②長いスパンでの履歴変容も生起する）。この点について、参加者から提出してもらった事後感想文を分析する。例として、気づきや覚醒に関する記述が比較的多かった乙組のIさんの感想文を取り上げる。「読書会会話録」の言語データは紙幅制限の関係で本稿には掲載しない。（第3回は欠席。）以下が分析結果である。

第1便：まず、言葉への意味づけや解釈は、不確定性に満ちており、多様性があるとの指摘がある。また、言葉への意味づけには自身の過去の記憶が想起されることがあるとの指摘もある。さらに、自身の現在置かれている視点も関与すること、肩書

や資格で武装して強く見せようというエゴが働くことの指摘もある。

第2便：言葉への意味づけが他者の意見に触れることで変容すること、視野が広がること、自身の考えの再考を促されること、自身の生き方に対する反省が生まれることの指摘が見られる。同時に、このような状態へと導かれるのは、当該グループのメンバー間に生じる安心感と信頼感のおかげであるとの指摘もある。読書会参加への真摯な姿勢、懸命さがそのような雰囲気を生み出すことも指摘している。

第4便：読書会の回を重ねることで、読書対象の本の著者への印象も大きく変容し、気難しさから愛おしく身近な存在へと変わっていったことが読み取れる。それは、参加者の人生、そして自身の人生経験と重ね合わせることで、他者の語りを聞いて癒しが得られ、他者への信頼感と尊敬の念が増しているためだと分析できる。

第5便：第5回目になると、読書会が安心・安全な語りの場になっていること、テキスト内で言及されていた不運や不幸についても議論を通して意味あることとの解釈を再認識していること、他者の語りを聴くことで自分自身も癒され、良い刺激を受けていると感じていること、他者との距離感を大切にしつつも、言葉の意味が腑に落ちる、つまり身体化することで相互理解が深まり、むしろ言葉がなくても互いに安心な存在であると感じ合えることを指摘している。読書会の回を重ねるごとに、自分がどう解釈するか、ということから、他者とどう響き合い解釈が変容していくか、と同時に、そういう他者を受け入れ、他者から受け入れられる経験を経て、相互に信頼感と安心感を得て尊敬の念が出来し、それが癒しへとつながることも見て取れる。そういうやり取りのなかで、言葉の真の意味が身体感覚化し、言葉を超えて、言葉を用いなくてもある程度の気持ちを伝え合うことができる状態になることも読み取れる。このようなやり取りは、自身のスピリチュアリティの覚醒と他者の幸せの祈りを内包している。だからこそ、このようなやり取りが人に心の平安を与えてゆくように思われる。互いに安心感を与え合い、癒し合うという相互ケアのコミュニケーションが重要であることも、回を重ねるごとにIさんの感想の変容からも読み取れる。

4. スピリチュアリティの日常性仮説の検証

本稿の「スピリチュアリティの日常性仮説」にいう「日常性」は、コミュニケーション参加者が対等で権力格差がなく、特段の制約もない状況で自由に発言できることを指しており、本読書会はまさにその状況下で行われたものである。また読書会というやや特殊な状況設定ではあるものの、扱ったテーマは、誰もが日常的に語る病気、恋愛などであり、日常性的一幕である。「人はコミュニケーションせざるを得ない存在である」

ことは、一連の発話から明らかであろう。人とのコミュニケーションによって新たな気づきや納得、学びを得たり（例：甲組 A さん）、自分の人生を振り返りながら新たな意味を見いだしたり（例：甲組 F さんの九鬼周三に関する意見を受けた他の参加者の反応）、共感しつつ癒されたりしながら明日の人生へと向き合っていくのである。「人は意味づけをせざるを得ない存在である」ことに関しても、宮野氏の執筆箇所をめぐる、参加者があれこれと錯綜する意味づけを行いながら、自分の人生観や価値観を確認しつつ、それを更新していることが、この読書会のプロセスから観察される（例：「偶然」「必然」をめぐる各参加者の解釈とその変容）。

日常のやり取りの中で、人は自身の人生の意味を感じる瞬間、スピリチュアリティの覚醒の瞬間は多々ある。それを自覚的・意識的に行うこと、自然に人とそれを共有し、やり取りをする中で、ごく自然に他者の視点からものを考え、自分の人生を振り返り、多角的な捉え方をするようになる。そうすることで、他者の違いにも寛容になれ、他者のスピリチュアリティを尊重しつつ、自身のスピリチュアリティを受け入れ、肯定し、自分を自分としてそのまま見るようになる（如実知見）。そして心の平安と安心感がごく自然に訪れてくる。そのような場が今回の読書会であった。

宮野氏・磯野氏の本の読書会を通して、参加者ひとりひとりが自身のこれまでの「人生の意味」を振り返る中で、（本稿では理論的にあまり触れられなかったが）超越的なものとの関係性（神仏や大いなるもの等）において把握しようとする人もかなり多くいた（例：丙組 S さんの「大日如来」への言及）。人生の意味を構成するもの、あるいは少なくとも人生の意味づけに必要なものを、スピリチュアルな領域との関係性に見出すという心のあり方にオープンである人がほぼ全員であった。自身がそういう志向性を持たない場合にも、他者が超越的・超自然的志向性を持っていても、互いに認め合う姿が多くみられた。

当該テキスト、そして著者に対する意味づけをめぐる言説について考える際に、二人称の他者へ何を投げかけるか、一人称の自身に何を問いかけるか、が言葉の意味を考えるコミュニケーションの基盤（場の醸成力）となり、スピリチュアリティの覚醒へと導かれる。そのきっかけは、日常のやり取りのなかに潜んでいるのである。これはまさに、スピリチュアリティの日常性仮説を裏付けるものである。

おわりに

本稿はスピリチュアリティの日常性仮説を検証することを通して、意味づけの多様性を考察するものであった。スピリチュアリティは日常のひとつひとつの場面、一刹那一刹那での人の言動として顕現するものであり、その言動がさらにスピリチュアリティに

刻まれて絶えず更新される。そういう円環として描かれる。人によってスピリチュアリティが異なるのは、人によって日常経験が異なるためである。したがってその蓄積であるスピリチュアリティも異なる。そうであるならば、ある発言を聞いたり、ある文章の一節を読んだりした際に、その言語テキストに対して聞き手や読み手がどのように反応するかは人それぞれに異なる。また、どのような場でその言語テキストに接するかによっても異なる。さらに、同じ言語テキストでも時間の経過とともに同じ人にとっての意味づけは変容してゆき、そもそもなぜそのように意味づけるのかについての深い意味合いは不可知なままである。後になって気づく場合もあれば、何も気づきを得ないままやり過ごすことも多々ある。そのような経験が蓄積した総体がスピリチュアリティであるとも言える。

言葉の意味の理解は、共通基盤として辞書的な意味（デノテーション）に頼ることは可能であるし、同じ文化を共有していれば含意（コノテーション）もある程度共有される。しかしながら、現実の意味づけは不確定性に満ち、多様性に開かれているのである。その源泉は、人の多様なスピリチュアリティにあることを本稿は理論的に示した。

付記

本論文は、本学人文科学研究所 2021 年度個人研究助成を受けた研究「日常言語の使用におけるスピリチュアリティの顕現と覚醒について」の一部を発表するものである。

《注》

- (1) この点、スピリチュアリティの機能や特徴について着目するとスピリチュアリティの輪郭がはっきりする。窪寺はスピリチュアリティの機能や特徴として、①生得的機能、②覚醒のプロセス、③自己を捉え直す超越的視点、④超越的存在との垂直的関係性、⑤癒しの機能、⑥本来の自己を取り戻す機能（窪寺, 2019, p. 279）、また、⑦自己喪失（自己分裂、自己の内面の希薄化、信じる力の低下、自己否定する自己）とその回復プロセス（超越的・究極的なもの、普遍・不変なもの、愛なるものとの関係の形成）におけるスピリチュアルなものとの関係の取り結びを挙げている（窪寺, 2019, pp. 187-207）。
- (2) 参加者全員に、研究内容説明書と研究協力依頼書を提示し研究の概要を口頭で説明したうえで、研究参加の同意書と同意撤回書に署名してもらった。

引用文献

- ブザン, T. (2000) 『人生に奇跡を起こすノート術 — マインド・マップ放射思考』 田中孝顕 (訳) きこ書房
- 深谷昌弘・田中茂範 (1996) 『コトバの「意味づけ論」 — 日常言語の生の営み』 紀伊國屋書店
- 平野啓一郎 (2012) 『私とは何か 「個人」 から「分人」 へ』 講談社
- 鎌田東二 (2017) 『言霊の思想』 青土社
- 唐澤太輔 (2017) 「南方熊楠による『世界認識構造図』の解説と考察 — 『名』と『印』をめぐる言説を中心に —」 『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』 第 2 号 (8), 1-22.

- 窪寺俊之（2019）『死とスピリチュアルケア論考』関西学院大学出版会
- メイナード泉子（2017）『話者の言語哲学 日本語文化を彩るバリエーションとキャラクター』
くろしお出版
- メイナード泉子（2000）『情意の言語学 ―「場交渉論」と日本語表現のバトス―』くろしお出版
- 宮野真生子・磯野真穂（2019）『急に具合が悪くなる』晶文社
- 土田知則・神郡悦子・伊直哉（1996）『現代文学理論 ― テキスト・読み・世界』新曜社

（原稿受付 2022年6月17日）

A Conflict Between Imperialism and Ecosophy:

The Emperor Jones as a Drama of Kingship

Yuji OMORI

Abstract

Eugene O'Neill's *The Emperor Jones* is a drama of kingship in which Brutus Jones, an imperialist caricatured after Napoleon Bonaparte, is feared as an emperor under the protection of strong magic. However, the play focuses on the final stage of kingship or dethronement, and, as Jan Kott points out about Shakespeare's *King Richard II*, the drama of kingship closely resembles a cruel and tragic farce in the final stage of dethronement. This is also true for *The Emperor Jones* because the scenes in the forest, where Jones gradually takes off his magnificent Napoleonic attire, are indeed cruel and ridiculous, resembling the ancient entertainment of the mock king. While discussing *The Emperor Jones* as a farce or tragicomedy, this article also reveals the conflict between imperialism and ecosophy, as well as the influences of the Noh drama of Japan and W. B. Yeats' *At the Hawk's Well*.

Keywords: Napoleon Bonaparte, the mock king, Michio Ito, *At the Hawk's Well*

I. The Mechanism of Kingship

According to James G. Fraser (1854-1941), the sacred king in an archaic society was considered inseparably connected with the welfare of the entire society. Therefore, when he became senile or seriously ill, the king was killed (in many cases by his successor) to ward off the bad effects he might have brought upon society. Although anthropologists after Fraser maintained that such killing of the king was not so much a practice as a legend, it seems certain that the king was assumed to be "expelled as an incarnation of evil when he lost the power to control the universe."¹ Many dramas of kings, such as *Oedipus Rex*, *Macbeth*, and *Hamlet*, that begin with the killing of the former king seemingly reflect the ancient mechanism of kingship. The Grand Mechanism Jan Kott discovered in William Shakespeare's (1564-1616) histories is almost similar.² As Kott argues, "the history of the Renaissance is just a grand staircase, from the top of which ever new kings fall in the abyss. There exists only the Grand Mechanism." Among kings endowed with the divine right in Shakespeare's histories, "there are no bad kings, or good kings; kings are only kings. [...] there is only the king's

situation, and the system.” Similar circumstances are also found in Shakespeare’s other dramas of kings, each of which “ends with the monarch’s death and a new coronation.” For instance, in *Macbeth*, “[t]he great and true murder, with which history begins, is the murder of a king. Then the killing has to go on, until the killer is himself killed. The new king will be the man who has killed a king.”³ Shakespeare’s drama of kingship essentially deals with cruel power struggles over the sacred throne. Shakespearean kings reach a crueler end than the king in an archaic society does, as they are murdered before they become senile or ill.

Eugene O’Neill (1888–1953), who owned Fraser’s *The Magic Art and the Evolution of Kings* (1917) and *The Golden Bough* (1925), not to mention a collection of Shakespeare’s plays, was undoubtedly interested in ancient kingship. *The Emperor Jones* could be regarded as his drama of kingship. In the play, set on a Caribbean island modeled after Haiti, islanders fear Brutus Jones as the emperor under the protection of strong magic. Shrewdly, taking advantage of the emperor’s position similar to that of a sacred king in an archaic society, Jones rules the island and exploits its people. Two years earlier, Jones had driven back an assassin sent by Lem, a naïve chief of the island. He used his tact to state confidently that he had received a charm and therefore, no lead bullet could kill him, but only a silver bullet could. As the silver-bullet myth has widely spread among islanders since then, Jones cunningly plays the role of the awe-inspiring emperor as in the “big circus show” (1035) and has the island under firm control.⁴

In addition to the incident of cleverly fighting off the assassin, Jones’s background of being arrested for murder in the US and breaking out of prison to find himself on the island seemingly parodies the extraordinariness of the ancient sacred king crowned after killing the preceding king. Extraordinariness and sacredness are one and indivisible, and as Yamaguchi discusses, “a sinful circumstance is necessary to make the king sacred in the system of kingship.”⁵ In fact, the fear that islanders originally felt about Jones due to the rumor of his breaking out of jail in the US functions as a catalyst inspiring a firmer feeling of awe through the silver-bullet myth. Furthermore, Jones himself expects to be dethroned before long and is meticulously planning an escape. Secretly saving money in a foreign bank and examining the best route to the port through a forest, Jones has placed guides and stored food on the route in advance, even preparing a silver bullet in his gun as a means to kill himself in case of an emergency. Certainly, Jones presupposes the doom that the ancient king must accept in the end.

II. Imperialism as a Great Band of Robbers

Despite his striking resemblance to the ancient king, Brutus Jones is not depicted as an ahistorical character. On the contrary, several modern historical incidents and characters are reflected in *The Emperor Jones*. The sudden revolt

and ensuing rally of islanders in the forest recalls the Bois Caiman Ceremony that took place in 1791 at the beginning of the Haitian Revolution. As is well known, the silver-bullet myth derives from an anecdote about Guillaume Sam (1859–1915), the former President of Haiti who briefly took office but was assassinated in 1915, as he was believed to keep a silver bullet for self-defense.⁶ After Sam's assassination, Haiti was occupied by the US until 1934. As stated in the stage direction that the island is "yet not self-determined by White Marines" (1030), *The Emperor Jones* is set in the historical stage of imperialism before the US gained global hegemony after the two world wars. Notably, the stage direction goes on to specify that "[t]he form of native government is, for the time being, an Empire" (1030). Guillaume Sam was not an emperor, but the president of a former French colony that became an independent nation. Therefore, it is appropriate to see Sam as nothing more than a model on whom the silver-bullet myth was based. Although Brutus Jones is a fictional character, it is important to note that the playwright emphasizes his character as an imperialist emperor. Hence, Brutus Jones should be compared with Napoleon Bonaparte (1769–1821) because, historically, Napoleon is the emperor most associated with imperialism in the islands of the Caribbean Sea.

The colors of Jones's military uniform, consisting of a blue Napoleon jacket and a pair of red trousers, worn in his whitewashed palace, are arranged to suggest the post-Revolutionary French Tricolor as if the scene were a satirical political cartoon. The three colors of blue, white, and red were used in most Napoleonic military uniforms, which had a great influence on military uniforms around the world in the nineteenth century, and their style, particularly Napoleon jackets, established itself as part of modern fashion.⁷ It is like Napoleon for Jones to wear a pair of trousers and boots. Although the king and his liege lords habitually wore culottes in pre-Revolutionary France, where poor working-class people were despised as *Sans-culotte*, meaning those who did not wear culottes, Napoleon regularly wore trousers and boots as a style suitable for revolutionary fighters against the ruling class. Thus, Napoleon's style as the heroic emperor was established.⁸ Even the slightest detail in Jones's outfit, such as his boots equipped with spurs, seems to suggest Napoleon by recalling Jacques-Louis David's (1748–1825) famous oil painting *Bonaparte Crossing the Great St. Bernard* (1805), following the long tradition of equestrian portraits of powers.

Just as Napoleon quickly climbed the social ladder in the aftermath of the Revolution, Brutus Jones rose to the top and became emperor in a short time. A particularly important historical fact about Napoleon is that he dispatched a large army to Saint-Domingue to restore French colonial control over the island in 1801 and declared the restoration of slavery the following year. However, he could not suppress the rebellion, and Saint-Domingue declared its independence as the Republic of Haiti in 1804. Napoleon Bonaparte is generally regarded as a symbol of the French Revolution who proclaimed liberty, equality, and

fraternity, and he reformed the French Civil Code in 1804 to stipulate the inviolable right to own private property, equality before the law, and freedom of economic activities. On the other hand, “black slavery was preserved in the West Indies and they were put outside the scope of the law” by Napoleon.⁹ As Kojin Karatani argues, Napoleon’s external aim was “a simple imperialist extension of the nation-state in the absence of any principle for rule,” which had “the paradoxical effect of sharpening the nationalist consciousnesses of the diverse people under that rule.”¹⁰ According to Karatani, imperialism is “a nation-state’s domination over other nations without the principles of the empire” of plundering and redistribution (or control and protection).¹¹ The structure where labor and natural resources in the global south are exploited and plundered to maintain the imperial lifestyle in the global north still remains a difficult unresolved subject even in the twenty-first century, which is typically not considered an age of imperialism.¹² In Caribbean history, Napoleon, who worked to promote the structural gap between the global north and south, had aspects of an imperialist and a degree of racism incompatible with the Revolutionary ideals of liberty, equality, and fraternity.

Given these historical circumstances, the sudden rebellion of the islanders in *The Emperor Jones* must be seen as a rise of nationalism standing against imperialism, and Brutus Jones is an imperialist emperor caricatured after Napoleon.¹³ Jones’s generous attitude toward local customs, religion, and language of the island is suggestive of the protective policies by which an empire ruled multiple countries before imperialism. It is clear, however, that redistribution as the imperial ruling principle was not sufficient, because Jones’s first priority was to line his own pockets by exploiting the islanders as much as possible. Of course, it also goes without saying that his famous claim that the emperor’s plundering is immune from legal punishment is imperialistic:

Ain’t r de Emperor? De laws don’t go for him. [judicially] You heah what I tells you, Smithers. Dere’s little stealin’ like you does, and dere’s big stealin’ like I does. For de little stealin’ dey gits you in jail soon or late. For de big stealin’ dey makes you Emperor and puts you in de Hall o’ Fame when you croaks. [reminiscently] If dey’s one thing I learns in ten years on de Pullman ca’s listenin’ to de white quality talk, it’s dat same fact. And when I gits a chance to use it I winds up Emperor in two years. (1035)

Robert Dowling insists that Jones’s claim stems from Max Stirner’s political anarchism;¹⁴ however, it should be noted that Augustine (354–430) was likely a fundamental reference. Augustine argues that kingdoms without justice are great bands of robbers, which is directly linked to Brutus Jones as the imperialist emperor. A devout Catholic, at least until his teens, O’Neill must have known the following argument by Augustine:

Justice removed, then, what are kingdoms but great bands of robbers? What are bands of robbers themselves but little kingdoms? The band itself is made up of men; it is governed by the authority of a ruler; it is bound together by a pact of association; and the loot is divided according to an agreed law. If, by the constant addition of desperate men, this scourge grows to such a size that it acquires territory, establishes a seat of government, occupies cities and subjugates peoples, it assumes the name of kingdom more openly. For this name is now manifestly conferred upon it not by the removal of greed, but by the addition of impunity. It was a pertinent and true answer which was made to Alexander the Great by a pirate whom he had seized. When the king asked him what he meant by infesting the sea, the pirate defiantly replied: 'The same as you do when you infest the whole world; but because I do it with a little ship I am called a robber, and because you do it with a great fleet, you are an emperor.'¹⁵

Moreover, Jones's whitewashed palace cleverly implies the hypocrisy in imperialism because, as Toshio Kimura points out,¹⁶ the whiteness of the palace evokes the image of whitewashed tombs mentioned in the Bible:

You Pharisees and teachers are show-offs, and you're in for trouble! You wash the outside of your cup and dishes, while inside there is nothing but greed and selfishness. [...] You're like tombs that have been white washed. On the outside they are beautiful, but inside they are full of bones and filth. That's what you are like. Outside you look good, but inside you are evil and only pretend to be good.¹⁷

It is quite suitable to compare the palace to a whitewashed tomb because the imperialist emperor is plundering on a large scale like a great band of robbers by imposing heavy taxes and accepting bribes while apparently pretending "de big circus show." In fact, Smithers appropriately compares the whitewashed palace partly covered with red carpets to "a bleedin' tomb" (1032) at the beginning when he notices that the palace is empty and the subjects are almost all gone. Borrowing words from the witches in *Macbeth*, the way Jones rules the island as the emperor is at once fair and foul.

III. The Scenes in the Forest as an Entertainment

As briefly mentioned in the previous chapter, *The Emperor Jones* begins after the subjects have left the palace to hold a rally to rise in revolt against Jones' tyrannical rule. This means that as a drama of kingship, the play focuses on the final stage of the mechanism, or dethronement. As Kott and Kantorowicz argue about *King Richard II*, a drama of kingship could closely resemble "a cruel and tragic farce" at the final stage of dethronement.¹⁸ In *King Richard II*, for instance,

it is narrated how wildly a huge crowd of people welcomes Bolingbroke as the new king in a parade while throwing dust at Richard II. The former king, who shakes off the dust “[w]ith such gentle sorrow / His face still combating with tears and smiles,”¹⁹ seems to deserve some pity but is also literally an object of ridicule. Falling from the throne, Richard II is ludicrous both in words and deeds like “a fool playing king and a king playing fool.”²⁰ Brutus Jones falling from the emperor’s status is more or less the same. Jones is laughable in a series of scenes in the dark forest, where he is panic-stricken, while gradually removing the emperor’s gorgeous outfit. A difference between Richard II and Brutus Jones is that there is almost no room to pity the latter. In fact, in the production of the play in Harlem, Langston Hughes (1902–1967) reported that the audience responded with uproarious laughter seeing Jones running naked in the forest, and jeered one after another, “There ain’t no ghosts, fool!” or “Why don’t you come on out o’ that jungle back to Harlem where you belong?”²¹

O’Neill’s note about the appearance of Jones in the imperial attire in the stage direction is important: “Yet there is something not altogether ridiculous about his grandeur. He has a way of carrying it off” (1033). John R. Cooley argues in a critical tone that Brutus Jones is “a combination of several white stereotypes of black character” and that his dress is perhaps “not altogether,” but mostly “ridiculous,” which reveals O’Neill’s essential attitude toward Jones: “the tone of his portrait is pejorative. The Emperor Jones is more clown than hero, ultimately a laughable pretender to be pitied and dismissed.”²² However, it is natural that Jones is created as a laughable, pseudo-heroic emperor as the play has an aspect of a cruel and tragic farce of dethronement, particularly in its forest scenes. A slight hint of inappropriateness that can be found in Jones’s imperial attire, despite his stylish manner, implies that he is essentially not of the right caliber to be an emperor. Just as his palace resembles a whitewashed tomb, it is suggested that Jones is a hypocritical leader who cuts a magnificent appearance but is filled with greed and license.

The scenes in the forest are like a modern computer game in which Jones must shoot one ghost after another with a fixed number of bullets until the greatest enemy appears at the end. This is not the only reason why the forest scenes are entertaining. It is also noteworthy that the scenes resemble the rituals of a mock king in archaic societies around the world. According to Mikhail Bakhtin, a slave or a fool was crowned as the mock king and subsequently decrowned in a carnival of ancient Rome: “regal vestments are stripped off the decrowned king, his crown is removed, the other symbols of authority are taken away, [and] he is ridiculed and beaten.”²³ It is true in all ages and places that a public figure’s fall provides good material for entertainment, and the age-old ritual of the mock king firmly survives in modern variations. For example, in a documentary film by Martin Scorsese (1942–), Bob Dylan (1941–) looks back on his hometown in Minnesota, stating that a traveling circus came and did “stuff that didn’t make any sense at all,”

such as “George Washington in blackface or Napoleon wearing blackface.”²⁴ It is a common practice for fools and comedians to perform in a historical figure’s outfit.²⁵ Impersonators cause laughter by exaggerating a famous person’s habits, thereby reducing the person’s favorable impression. As in *King Richard II* and the ritual of the mock king, these entertainments are based on a person’s downward movement, whether it is real or not.²⁶ The more authoritative position the person falls from, the larger outburst of laughter it causes because of the divide.²⁷

Laughter based on a person’s downfall was also used in the minstrel shows popular in the nineteenth and early twentieth centuries in the US. White minstrel shows, in which white performers in blackface travestied blacks, often caricatured famous historical figures. According to Joel Phister, for instance, antebellum politicians like Daniel Webster were often caricatured by blackface minstrels, “whose bombastic oratory in stage ‘negro’ dialect functioned to make fun of the ungrammatical blacks even more than of the politicians.”²⁸ In *The Emperor Jones*, in which the black emperor, imitating the large-scale plundering of white imperialism, is dethroned, racial arrangements seem to be intentionally reversed from those of white minstrel shows, where white performers in blackface cause laughter by mimicking blacks. There is no doubt that *The Emperor Jones* belongs to the above-mentioned type of entertainment causing cruel laughter. Jones’s stately appearance in his own way as well as “something decidedly distinctive about his face—an underlying strength of will, a hardy, self-reliant confidence in himself that inspires respect” (1033) must be a prerequisite to create the divide with his ridiculous behaviors in the later scenes in the forest.

IV. The Mind as an Open System

It has been pointed out that expressionism had great influence on scenes in the forest, where Jones sees the ghosts of the men he killed and other visions,²⁹ but Shakespeare’s plays must have had a great effect as well. In *Julius Caesar*, seeing the ghost of Julius Caesar twice, Marcus Brutus realizes his end is approaching. When Brutus asks who he is upon his first appearance, the ghost answers, “Thy evil spirit, Brutus.”³⁰ Just as the appearance of Caesar’s ghost is closely linked with Marcus Brutus’ guilt, the ghosts of the men Brutus Jones killed appear because they are the source of his deeply buried guilt. In *Macbeth*, when seeing the ghost of his close friend Banquo he had ordered assassinated, Macbeth panics at a banquet, just as Brutus Jones does in the forest. As Youichiro Miyamoto states that *The Emperor Jones* is “like a Shakespearean tragedy” and that *Voodoo Macbeth*, a historic production directed by Orson Welles (1915–1985) with an all-black cast in New York in 1936, “intrinsically has a lot to do with *The Emperor Jones*,”³¹ significant similarities could be found in both plays. It is noteworthy that Macbeth is gradually affected by the witches’

prophesies until the messenger's words that Great Birnam Wood was moving are credible,³² for Brutus Jones is placed in similar circumstances as Smithers' malicious warning, like witches' prophesies in *Macbeth*, threateningly works on Jones's mind, gradually drowning him in fear:

SMITHERS: And they're there 'oldin' their 'eathen religious service—makin' no end of devil spells and charms to 'elp 'em against your silver bullet. [He guffaws loudly.] Blimey, but they're balmy as 'ell!

JONES: [A tiny bit awed and shaken in spite of himself] Huh! Takes more'n dat to scare dis chicken!

SMITHERS: [Scenting the other's feeling—maliciously] Ternight when it's pitch black in the forest, they'll 'ave their pet devils and ghosts 'oundin' after you. You'll find yer bloody 'air 'll be standin' on end before termorrow mornin'. (1041-1042)

Under the influence of heat, hunger, and the sound of the drum incessantly played by the islanders somewhere in the forest, Jones is seized with panic and has a series of visual hallucinations. Among them, the appearance of a huge crocodile as an animal god in the forest in Scene Seven is as extraordinary a situation as if the forest had begun to move. These scenes in the forest have been sometimes negatively regarded as atavism that may promote stereotyping black people by connecting them with primitiveness.³³ However, the process in which Jones sinks deep into panic could be understood as the workings of the mind as an open system. As Toshio Kawai argues, from a modern perspective, the mind is generally viewed as a closed system complete in an individual, but in premodern societies, the mind was widely believed to be open to the outside world. Accordingly, the boundaries between reality and illusion (dreams) or oneself and others were not as clear, and these binarily-opposed realms were believed to be inter-penetrative.³⁴ For instance, in *Julius Caesar*, set in ancient Rome, the characters occasionally believe in the mind as an open system, for some of them interpret a night dream, strange behaviors of animals, or extraordinary natural phenomena as ominous signs, as when Julius Caesar, bearing in mind a soothsayer's words, "Beware the Ides of March," seriously takes a nightmare his wife had the night before and temporarily decides not to go out on the day. The news that "the bird of night did sit / Even at noon-day upon the market-place, / Hooting and shrieking" is rumored to be an omen of a nationwide-scale catastrophe. Even Caius Cassius, who believed in Epicurus' idea that beliefs in omens are mere superstitions, has a strong premonition of failure and death when seeing "ravens, crows, and kites / Fly o' er [their] heads and downward look on [them] as [they] were sickly prey" just before the crucial battle.³⁵ As mentioned earlier, Marcus Brutus sees a ghost of Caesar and expects his imminent death. When the ghost appears for the first time, Brutus does not completely lose his calm despite being seized with fear. This is not

only because he is a brave warrior, but also seems to reflect the idea that illusions could penetrate reality was not so strongly denied. Conversely, it is quite natural that O'Neill's Brutus Jones is undone by seeing the ghosts, as he belongs to modern civilization, where reality is sharply distinguished from illusion.

Regardless of time and race, a man's mind could work as an open system in extreme situations. As in Shakespeare's plays or in *The Emperor Jones*, intense memories become tangible under such extreme circumstances.³⁶ A difference between Shakespearean characters and Brutus Jones is that the latter sees what he has not personally experienced, such as a slave auction in the 1850s or a transatlantic voyage on a slave ship. These scenes are widely accepted as "a Jungian dramatization of race consciousness and of an archetypal experience."³⁷ It is noteworthy that the Noh drama of Japan possibly provided a theatrical model for O'Neill to conceive the scenes of collective racial experiences.³⁸ In the two-part dream vision (*mugen*) Noh play, a traveling priest (*waki*, or the secondary character) typically meets a villager (*shite*, or the main character) in the first part, hinting that he or she is the ghost of a person in a famous local story in the past. After the intermission, the main character reveals his or her true self as the ghost in the priest's dream in the second part. What should be stressed here is that there is no personal relationship between the ghost and the priest, and the ghost sings and dances to represent a historical event or a legend of his or her own. Given this structure, it seems almost beyond question that the Noh play had an impact on the bold idea that Brutus Jones have visual hallucinations of impersonal historical incidents under slavery.

V. The Epiphany of the Deity in the Forest

The fact that Michio Ito (1892–1962) choreographed the dance of the Congo witch-doctor for the first production provides a piece of supporting evidence of the influence the Noh drama of Japan had on *The Emperor Jones*.³⁹ In 1916, Ito choreographed W. B. Yeats' (1865–1939) *At the Hawk's Well*, inspired by the Noh drama of Japan, and played the hawk woman in the first production in London. Leaving for the US in the fall of the year, Ito directed and choreographed a New York production of *Bushido*, a kabuki play, through which he quickly gained prominence as a choreographer and dancer in the US. In 1918, he performed in the first New York production of *At the Hawk's Well* in Greenwich Village. At first glance, it may seem strange for a Japanese dancer to choreograph the dance of the Congo medicine man, but O'Neill must have expected that Ito, who had choreographed and played the hawk woman in *At the Hawk's Well*, could create a dance appropriate for the Congo shaman to transport the crocodile as an animal god—Ito had already created some pieces of dance dealing with animals, including *Fox*, which he had developed by making his "soul into the soul of a fox" on a hill.⁴⁰

At the Hawk's Well is loosely based on a Japanese Noh play, *Yoro* (*The Sustenance of Age*) by Zeami.⁴¹ In *Yoro*, an imperial messenger visits a fountain rumored to be effective for longevity in the mountain, to examine its water. When asked about the water, a local old man and his son explains how effectively it works and present a bucket of water for the emperor. Music is then heard with flowers falling down from the sky at the end of the first part. In the second part, the mountain god appears and performs a divine dance celebrating the emperor's peaceful reign. Notably, as the god compares the emperor's benevolent reign to the clear flow of water, public peace is seamlessly connected with the natural world.⁴² Conversely, Yeats adapts *Yoro* into a play based on conflicts between characters. The amiable parent-child relationship in *Yoro* is replaced by a conflict between an old man and a young man (Cuchulain) quarreling over the water of eternal youth and immortality. The young man, who has just arrived at the well, is partly similar to the role of the messenger in *Yoro*. The most significant change is that, as opposed to *Yoro*, in which the water of longevity is generously given to all, water is not given to anyone at all in *At the Hawk's Well*. Unlike the mountain god celebrating the emperor's tranquil reign in *Yoro*, the well is strictly guarded by a hawk woman from Sidhe. The play ends when the musicians beat a gong wildly and cry to represent the fierce women of the hills roused to battle and the young man bravely goes out to fight against them. As the young man tells the hawk woman on his mettle, "Grey bird, you shall be perched upon my wrist,"⁴³ nature is regarded as an object of human conquest. *At the Hawk's Well* is thus based on the tradition of heroic stories in the West, in which human heroes defy various dangers to acquire wealth deeply hidden in nature.

It is clear that *The Emperor Jones*, in which the crocodile god appears as a formidable foe of Jones, is strongly influenced by Yeats' play. Just as the movements of the old man in Yeats' play "suggest a marionette,"⁴⁴ the movements of the figures in Jones's hallucinations are "marionettish" (1053). There stands a blighted hazel, a sacred tree of life in Irish mythologies, near the well and the hawk woman stands among "grey boulders,"⁴⁵ whereas a "rough structure of boulders, like an altar" stands side by side with "a gigantic tree" by a great river, where the Congo witch-doctor brings over the crocodile god (1057). Just as the young man "grows pale and staggers to his feet" when the hawk woman starts dancing,⁴⁶ Jones is similarly "paralyzed with awed fascination" by the Congo medicine man's dancing and chanting (1058). The sound of the gong struck by the musicians clearly corresponds to the islanders' beating of the tomtom. Ito's composition of the Congo shaman's dance was not merely incidental, but his involvement must have been already assumed in the initial stage of developing the idea for Scene Seven. *At the Hawk's Well* supposedly played a significant role in connecting the Japanese dancer with the African character.

In comparison with *At the Hawk's Well*, it becomes noticeable that *The Emperor Jones* has a far more up-to-date theme. Contrary to the traditional

heroic stories in the West, O'Neill introduces the Congo witch-doctor, another human character in support of nature in the conflicting schema between nature and culture, in addition to Brutus Jones, who is highly proud of being a civilized man, standing in support of culture. In spite of only a few years' difference in time between their first productions, O'Neill's play, at least thematically, seems like a much more recent piece of work than Yeats' because O'Neill's moral or ethical standpoint is with the Congo medicine man and the crocodile god supporting nature, not with Jones supporting culture. Jones is an imperialist who has exploited the islanders, while the Congo medicine man fights back with the crocodile god against the emperor to protect the forest as their common wealth. It is clear that the African shaman and the animal deity are morally right.⁴⁷ The face-off in Scene Seven of *The Emperor Jones*, must strongly remind contemporary readers and theatergoers of James Cameron's (1954-) *Avatar* (2009). In the final stages of the film, the indigenous humanoids and animals on Pandora, a fictional planet, jointly fight a fierce battle against humans from the Earth seeking natural resources on the planet so as to protect the forest as their common wealth with the sacred tree of Eywa at its center, a mother goddess, whose name incidentally suggests wisdom and harmony in Japanese. As if the humanoids' prayers were heard by the goddess, gigantic animals suddenly recognize humans from Earth as their common enemies. The scene is exactly as extraordinary as Scene Seven of *The Emperor Jones* or the moment when Macbeth sees the forest moving in his mind's eye. *The Emperor Jones* has been generally remembered as one of the first American plays that substantially carved out a path for African-American actors to successfully pursue theatrical careers, but another great achievement of the play is that it was among the first to deal with the issue of the large-scale plundering by imperialists, and in so doing, reversed or deconstructed the conflicting framework of nature and culture in the West.

VI. Animals and Ecosophy

As the Congo witch-doctor is in league with the crocodile god in *The Emperor Jones*, animals appear at critical moments in some of O'Neill's major works. In *The Hairy Ape* (1922), Yank attempts to make a union with a gorilla caged in the zoo to resist capitalism to commodify all forms of life, although in vain. While *The Emperor Jones* focuses on the issue of imperialism that generates a global-scale divide between rich and poor, *The Hairy Ape* deals with domestic conflicts between the classes under capitalism. Despite their apparent differences, both plays share similar underlying concerns because imperialism is a global expansion of capitalism to maintain the wealthy imperial lifestyle in developed nations in the global north by outsourcing and exploiting natural resources and the labor force in the global south. What is unique to O'Neill in these plays is that, as the gorilla or the crocodile appears at significant moments,

O'Neill not only considers the above issues from the human point of view, but also from the viewpoint of non-humans.

Interestingly, in *The Last Will and Testament of an Extremely Distinguished Dog* (1956), written in the form of his beloved dog Blemie's last will and testament, O'Neill clearly shows his fundamental views of animals. As Blemie narrates, "Dogs are wiser than men. They do not set great store upon things. They do not waste their days hoarding property," and "Dogs do not fear death as men do. We accept it as part of life, not as something alien and terrible which destroys life."⁴⁸ Blemie musingly concludes that it would be best if death were "eternal sleep in the earth" he has loved so well, but no matter how deep his sleep might be, "not all the power of death can keep [his] spirit from wagging a grateful tail" for the O'Neills.⁴⁹ For O'Neill, animals are wise and brave creatures because, unlike humans, they do not excessively take and store wealth from nature and live a sustainable life and die as part of the natural cycle. This view of animals is in part what thematically separates *The Emperor's Jones* from Yeats' *At the Hawk's Well*. The young man's persistent search for immortality, which is closely connected with his fear of death, is depicted rather heroically in Yeats' play, whereas Jones's avarice is a subject of criticism, and the islanders' symbiotic lifestyle that the Congo medicine man and the crocodile represent is affirmatively seen as a practice of the ecosophical life Blemie states.

What the Congo medicine man conveys through his dance is that the "*forces of evil demand sacrifice*" and Jones "*must offer himself for sacrifice*" (1058). Gabriel Poole argues that the narrator of the play "shares Jones's 'white' perspective, inasmuch as the mysterious powers of the black world as the 'forces of evil,'" adding that "there is no possible salvation" for Jones.⁵⁰ However, the stage direction does not seem to mean that O'Neill defines the witch-doctor and the crocodile as simply evil. It should be noted that the pair of characters is similar to Dion Anthony in *The Great God Brown* (1925) in terms of their thematic roles. Dion, wearing a mask of Pan turned Mephistopheles, visits William Brown's place to proclaim that "it's the devil come to conclude a bargain,"⁵¹ but it is still Dion who is depicted as the character holding the key to changing the materialistic world Brown represents in the play. Likewise, even though they are suggested as part of the forces of evil in the stage direction, the Congo witch-doctor and the crocodile still provide a perspective to solve the issue of imperialism. Furthermore, the issue in this scene is not Jones's personal salvation. Since the medicine man aims to save the symbiotic community on the island suffering under Jones's tyranny, he would not pursue Jones's personal salvation.

Carlos Castaneda (1925–1998), who apprenticed himself to a native Mexican shaman, and other anthropologists have revealed that primitive humans possessed "a sense of ecological balance" and "regarded animals and plants as their equal beings to have a symbiotic life with."⁵² It can be assumed that they already practiced what post-humanists call "Zoe-centered egalitarianism" today.⁵³

Their actions were consistently based on a primitive way of thinking similar to the law of energy conservation. For them, hunting animals or gathering plants entailed the reduction of a certain amount of energy in the forest. Therefore, they tried to “return the reduced amount of energy through rituals or myths to the forest so that the total amount of energy in the world constantly remains the same.”⁵⁴ For instance, anthropological studies have found that primitive people worked in the jungle along the Amazon River, but the jungle seemed like pristine nature because of their ecosophical way as described above.⁵⁵ The primitive human mind eloquently grasps the importance of maintaining what Karl Marx (1818–1883) terms the balance of material exchanges between man and nature because Marx, who had a great ideological influence on O’Neill as well, repeatedly warned in *The Capital* (1867–1894) that “capital could cause an irreparable crack in material exchanges between man and nature if it unilaterally takes away natural wealth.”⁵⁶ It was myths and rituals that played a significant role in regulating human activities to prevent such a crack.

Considering primitive humans’ mythical logic and practice, it could be understood why Brutus Jones, who abused his imperial position to exploit and exhaust the symbiotic community on the island, was required to sacrifice himself in the ritual in Scene Seven. Although he barely escapes danger by shooting at the crocodile with the silver bullet, Jones is finally shot to death in Scene Eight by the islanders with several silver bullets they made overnight. Historically, the discovery of silver in Mexico in the sixteenth century gave great momentum to European settlement of the New World. Indigenous people and African slaves were forced to work hard in silver mines, and many of them lost their lives because of the overdemanding work. On the other hand, European nations traded silver with Asia and gained huge profits as they built wealthy colonies one after another in the New World. Given the role of silver in the history of the American continents, the ending with Jones shot dead with silver bullets is seen as sharply ironic, for the imperialistic emperor is seemingly getting what he deserves, while he is also a distant descendant of African slaves who were transported for forced labor in the silver mines. As in Smithers’ closing words, Jones “died in the ‘eight o’ style” (1061), not as a fugitive criminal but as the imperialist emperor. In other words, Brutus Jones dies a grand death as a scapegoat, taking with him all the evil inherent in imperialism like the hypocritical, whitewashed tomb that is both fair and foul. His death thus graphically reveals a unique cruelty and tragicness of *The Emperor Jones* based on a long-lasting type of entertainment.⁵⁷

Notes

- 1 Masao Yamaguchi, *Cultural Anthropological Studies of the Emperor System of Japan* (Tokyo: Iwanami Modern Library, 2014), 14.
- 2 Yamaguchi states that “Kott’s observations summarize the universal mechanism of kingship Shakespeare revealed in histories,” discussing a variety of kingship across

- the world. See Yamaguchi, *ibid.*, 39.
- 3 Jan Kott, *Shakespeare, Our Contemporary*, trans. Boleslaw Taborski (London: Methuen, 1965), 6–70.
 - 4 Eugene O'Neill, *The Emperor Jones* in *Complete Plays: 1913–1920*, ed. Travis Bogard (New York: The Library of America, 1988). Numbers in parentheses refer to page numbers of this edition.
 - 5 See Yamaguchi, *op. cit.*, 27.
 - 6 Barrett H. Clark, *Eugene O'Neill: The Man and His Plays* (New York: Dover Publications, 1947), 72.
 - 7 Lucien Rousselot, *Napoleon's Army 1790–1815*, trans. Yoshifumi Tsujimoto et al. (Tokyo: Maar-sha, 2014), 6.
 - 8 Kenichi Sato, *Portraits in the French Revolution* (Tokyo, Shuei-sha, 2017), 4–5.
 - 9 Yoshihiko Sugimoto, *Napoleon—The Last Absolute Ruler, the First Modern Politician* (Tokyo: Iwanami Paperback, 2018), 174.
 - 10 Kojin Karatani, *Isonomia and the Origin of Philosophy*, trans. Joseph A. Murphy (Durham: Duke University Press, 2017), 105.
 - 11 Kojin Karatani, *Nation and Aesthetics—On Kant and Marx*, trans. Jonathan E. Abel et al. (New York: Oxford University Press, 2017), 23.
 - 12 Kohei Saito, “*Capital*” in *the Anthropocene* (Tokyo: Shuei-sya, 2020), 27–28.
 - 13 Aside from Guillaume Sam, Toussaint L'Ouverture (1746–1803) is mentioned as a model for Brutus Jones—see Margaret Loftus Ranald, *The Eugene O'Neill Companion* (Westport: Greenwood Press, 1984), 207. However, since L'Ouverture fought as the leader of the independence movement in Saint-Domingue against the Napoleonic Army, was arrested, and died in prison, he is politically in a directly opposite position to the imperialistic emperor in the play; Marcus Garvey (1887–1940), a black activist who asserted that an independent nation for black people should be founded in Africa, is also referred to as a model for Jones—see Joel Phister, *Staging Depth: Eugene O'Neill & The Politics of Psychological Discourse* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1995), 129. Again, however, Garvey's political beliefs as a black nationalist are quite contrary to Jones' white imperialism. It seems that L'Ouverture and Garvey are compared to Jones because of their apparent similarities as black political leaders wearing magnificent military uniforms, and the important point is that the style itself originates in Napoleon.
 - 14 Robert M. Dowling, *Critical Companion to Eugene O'Neill: A Literary Reference to His Life and Work, Vol. I* (New York: Facts on File, 2009), 152.
 - 15 Augustine, *The City of God*, trans. Marcus Dods (New York: Random House, 1950), 112–113.
 - 16 Toshio Kimura, “‘Whitened Sepulchre’ in Eugene O'Neill's Plays” in *Doshisha University Jinbungaku*, 18 (1955), 61–74.
 - 17 See Matthew, 23, 25–28.
 - 18 See Kott, *op. cit.*, 33.
 - 19 William Shakespeare, *King Richard II* (London: Bloomsbury, 2002), 5.2.30–35.
 - 20 Ernst Kantorowicz, *The King's Two Bodies: A Study in Mediaeval Political Theology* (Princeton: Princeton University Press, 2016 [Kindle Version]), 33.
 - 21 Langston Hughes, *The Collected Works of Langston Hughes, Vol. 13* (Columbia: University of Missouri Press, 2002), 198.
 - 22 John R. Cooley, “*The Emperor Jones* and the Harlem Renaissance” in *Studies in the Literary Imagination* 7.2 (1974), 74–77.
 - 23 M. M. Bakhtin, *Problems of Dostoevsky's Poetics*, ed. and trans. Caryl Emerson (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1984 [Kindle Version]), 124–125.
 - 24 Martin Scorsese, *No Direction Home: Bob Dylan* (Paramount Pictures, 2005).
 - 25 For instance, the costume for a mock hero played by Takeshi Kitano (1947–) in a variety show in the 1980s consisted of a Napoleon jacket and a royal culotte, which is historically impossible and therefore nonsensical, contributing to creating the

- character who “helps the strong and hate the weak” as in his theme song.
- 26 In Japan, it is common for celebrities who have caused scandals to apologize in public in an ordinary suit instead of fashionable clothes they usually wear; they are skewered by entertainment reporters or are treated as an object of ridicule in variety shows to have their scandals forgiven. This is also a similar entertainment.
- 27 In an interview with Shigehiko Hasumi, Kitano thinks back on his severe motorbike accident in 1994, and states that “[he] felt the public as well as people in show business secretly enjoyed [his] fall,” adding that “their feelings are understandable because people want to see someone fall by nature, but it is still a little scary to remember the circumstance.” The cruel nature of entertainment for the public is clearly articulated here. See Jean-Pierre Limosin, *Takeshi Kitano: l'imprévisible* (Paris: AMIP, 1999).
- 28 See Joel Phister, *Staging Depth: Eugene O'Neill & The Politics of Psychological Discourse* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1995), 129. This also explains why impersonators seldom receive complaints from the person they mimic: The more bombastically they mimic the person, the more right-minded and decent the person looks in comparison. Public figures thus rather welcome their impersonations as a means to draw public attention to themselves.
- 29 See Dowling, *ibid.*, 590.
- 30 William Shakespeare, *Julius Caesar* (Oxford: Oxford University Press, 2010), 4. 3. 281.
- 31 Youichiro Miyamoto, *The Twilight of Modern Times—Dismantling Imperialism and Creating Modernism* (Tokyo: Kenkyu-sya, 2002), 260. As for similarities between *The Emperor Jones* and *Macbeth*, also see Toshio Kimura, “*The Emperor Jones and Macbeth*” in *Doshisha University Jinbungaku*, 60 (1962), 21–32.
- 32 See *Macbeth*, 5.5.33.
- 33 C. W. E. Bigsby, “Four Early Plays” in *Eugene O'Neill*, ed. Harold Bloom (New York: Chealsea House Publishers, 1987), 136.
- 34 Toshio Kawai et al., *The Origin of the Mind and Its Future* (Tokyo: Iwanami Shoten, 2016), 39–72.
- 35 See *Julius Caesar*, 1.2.18, 1.3.26–28, and 5.1.84–85.
- 36 In his earliest one-act plays, including *Bound East for Cardiff* (1914), O'Neill depicted characters in extremities to focus on how the human mind works under such circumstances, in which some of the characters see visions just like Brutus Jones. Regarding Jones' hallucinations, O'Neill states that the idea of “the effect of the tropical forest on the human imagination” stems from “the result of [his] own experience while prospecting for gold in Spanish Honduras.” See Barrent H. Clark, *Eugene O'Neill—The Man and His Plays* (New York: Dover Publications, 1967), 72.
- 37 See Bigsby, *op.cit.*, 137.
- 38 There are not many documents and other forms of evidence left to prove O'Neill's interest in the Noh drama, but in “Memoranda on Masks” in *The Spectator* (November 1931), for instance, O'Neill refers to Japanese Noh masks as an example of the mask that is “more subtly, imaginatively, suggestively dramatic than any actor's face can ever be.” In addition, visitors to O'Neill's Tao House in Danville, California, can also find several Noh masks, among others, hung on the wall. As for the influence of the Noh drama on *The Long Day's Journey Into Night* (1956), see Yuji Omori, “Wandering About in the Moonless Darkness: The Plight of the Mother in *Long Day's Journey Into Night*” in *The Eugene O'Neill Review* 37.1. (2016), 57–70.
- 39 Edna Kenton, *The Provincetown Players and the Playwrights' Theatre, 1915–1922* (New York: McFarland, 2004), 126.
- 40 Helen Caldwell, *Michio Ito—The Dancer and His Dances* (Berkley: University of California Press, 1977), 42.
- 41 Sylvia C. Ellis, *The Plays of W. B. Yeats—Yeats and the Dancer* (New York: Palgrave, 1999), 136.
- 42 Zeami, *Yoro* in *A Collection of Noh Songs I* (Tokyo: Shogakukan, 2007), 53.

- 43 William Butler Yeats, *At the Hawk's Well* in *At the Hawk's Well and Other Plays* (Tokyo: Eihosya, 1972), 21.
- 44 *Ibid.*, 13.
- 45 *Ibid.*, 16.
- 46 *Ibid.*, 21.
- 47 Historically, Saint-Domingue was an important base for sugar production for France. To cultivate sugarcanes, which were not native to the Caribbean islands, on a large scale, primeval forests were cut down and the ecosystem of the island was totally changed. The economy of Haiti still largely depends on exporting sugars and a few other products; the surviving forest area has been reduced to one percent of the total land. Monoculture and deforestation directly cause severe poverty as well as reducing resilience toward serious damage from natural disasters. Haitians still suffer from negative legacies of colonialism. See Tadao Hama, *Glory and Hardship of Haiti—The Future of the First Black Republic in the World* (Tokyo: Tousui Shobo, 2007), 67, 80–84.
- 48 Eugene O'Neill and Adrienne Yorinks, *The Last Will and Testament of an Extremely Distinguished Dog* (New York: Henry Holt and Company, 1999), 4 and 12.
- 49 *Ibid.*, 20 and 42.
- 50 Gabriel Poole, “‘Blarsted Niggers!’: *The Emperor Jones* and Modernism’s Encounter with Africa” in *The Eugene O’Neill Review* 18.1&2 (1994), 33.
- 51 Eugene O’Neill, *The Great God Brown*, in *Complete Plays: 1920–1931*, ed. Travis Bogard (New York: The Library of America, 1988), 506.
- 52 Yusuke Maki, *Rolling Air Currents—A Symphonic Commune* (Tokyo: Chikuma Academic Library, 2021), 59–63.
- 53 Rosi Braidotti, *The Posthuman* (Cambridge: Polity Press, 1999), 60.
- 54 Shinichi Nakazawa et al., *Lucy in the Future—Humans Can Become Animals or Plants* (Tokyo: Seidosha, 2020), 70.
- 55 *Ibid.*, 18.
- 56 Kohei Saito, *A Great Book in a Hundred Minutes—Karl Marx’s “Capital”* (Tokyo: NHK Publishing, 2021), 101.
- 57 This article was developed from a paper titled “Kingship, Imperialism, and the Mind as an Open System in *The Emperor Jones*,” presented as part of the panel discussion, “Philosophy, Modernism, and Postmodernism in American Drama” in the MLA Annual Convention in January, 2021.

(原稿受付 2022年4月13日)

エドワード六世時代におけるイタリアとの邂逅*

富田 爽子

English Encounter with Italy in the Age of Edward VI

Soko TOMITA

要 旨

エリザベス朝のイタリア積極受容は英文学に大きな影響を与えた。本論はそれ以前のエドワード六世時代に、イタリア本が28版も出版されていたことを示す。今まで考えられていた以上にイタリアの影響はあった。その最大の特徴は、プロテスタンティズムとの強い結びつきである。エリザベス朝以前に無意識及び意識的受容があったことは、この時代がイタリア文化と無関係ではなかった証明だ。これらはエリザベス朝の、より明確な意識的受容の下地となった。そして、この時代に出版されたジョン・ボーンネットの『カテキズム』のイタリア語版は、意識的発信であった。

この時代の英国のエネルギーは、イタリア要素の無意識的受容を助けつつプロテスタント振興という形で国内に向けられていた。そのエネルギーが自我の目覚めと結びつき、プロテスタンティズムを急速に成熟させた。その成熟を外部へ発信したのがこの1冊である。これは後進国英国の自己主張である。その矛先が、ルネサンスの花開いたイタリアであったことは着目に値する。国民レヴェルでは無意識的受容が大勢を占めており、一見、無意識にイタリア要素を吸収していたのみに見える。しかしイタリア語の『カテキズム』の存在は、英国がイタリアを交流の相手とし、自らの意志でイタリアに接近しようとしていたことを示す。イタリアへの発信の書はたった1冊であるが、英国が既にイタリアに関心を持っていた貴重な証拠である。

キーワード：エドワード六世，イタリア，出版，プロテスタンティズム，カテキズム

1. はじめに

エリザベス一世時代の文学の大きな特徴に、多様性や人間性の探求がある。エリザベスの社会にはイタリア文化の影響が色濃く反映しており、その例は枚挙にいとまがない。劇作家は一様にイタリアの文化や生活についての洞察を作品にちりばめた。一方でエリザベスより前、メアリー一世やエドワード六世時代（以降エドワード時代と記載）にお

けるイタリアの影響はあまり注目されておらず、理解されていない。エリザベス時代のイタリア文化への傾倒は、この時代のみで培われたものだったのであろうか。エドワード時代は英国ルネサンスの土台となった時期であったと考える。エドワード時代における英国のイタリア文化とのかかわりを考える上で着目すべき1冊がある。それはジョン・ポーネットが編纂した『カテキズム』のイタリア語翻訳である。

本論執筆に際しては、STC, ESTC, USTC等を基にしている⁽¹⁾。これらは本研究分野においては一般的な資料であり、本論文においても、これらに基づいて調査・考察を行った。また考察においては、これらの資料がそうであるように、現存する書物のみを対象としている。

2. エドワード六世時代の出版物

ヘンリー八世は英国をローマのカトリック国際組織から切り離したばかりでなく、大陸のプロテスタントの世界とも一線を画していた。しかしエドワードが9歳で即位した時、新体制はその宗教政策を著しく開放的にした。わずか6年半の治世であったが、エドワードが熱心なプロテスタントであったことが、時代をはっきりと特徴づける。大陸ではトリエント公会議によりカトリック教会の改革が進む中、英国では信仰のみによって立ち、聖体にキリストの真の存在を主張するプロテスタント寄りの礼拝様式が確立された。さらに工業・農業・貿易などが発展し、社会が大きく変化した時代だった。中世的な諸関係が次々と破壊されていく中、エドワード時代の前半は、王の伯父初代サマセット公爵エドワード・シーモアが摂政として政治を行う。サマセットはプロテスタントの典礼と祈祷書の作成に心を砕いた。一方でカトリックには厳しい態度で臨み、パンフレット作者でロンドン司教のエドモンド・ボナーやウィンチェスター司教スティーヴン・ガーディナーを投獄した。後半は初代ノーサンバーランド公爵ジョン・ダドリーが中心となって、礼拝統一法、42箇条の作成など、さらに積極的なプロテスタント政策を行ない、福音主義系の出版に対し明確な支援を行う。つまりエドワード時代を通して、英国はプロテスタントを振興したのだ。英国の宗教改革は大陸とは異なり、国王主導型、すなわち「上からの」の改革であった。

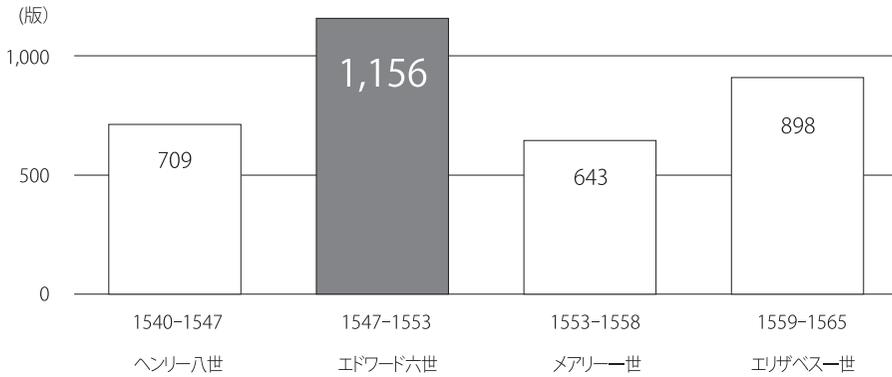


図1 時代別 出版数

図1は、ヘンリー八世からエリザベス一世までの、それぞれ7年間の出版数を表したグラフである⁽²⁾。出版に後れを取っていた英国では、大陸の出版社が多くロンドンに支店を構えており、パリ、アントワープといった主要な印刷拠点で生産した本を、十分に供給していた。ヘンリー八世時代は英語の書物も多くを大陸に頼る状態が続いていたのである。エドワードの治世になって、政府が印刷というメディアをフルに活用したため、印刷技術が急速に発展した。このことが、大きな社会的・宗教的・文化的変化をもたらした。この時代には1,156版もの書物が出版された。エリザベス時代の総出版数が少なくとも9,404版以上あることを考えると、とるに足らないほど少なく見えるが、エリザベス時代の最初の7年間に区切ると、むしろエドワード時代の出版数の方が多い。

16世紀初頭までに、書物は1回の印刷で1,000~1,500部ほど生産されていた。当時のイングランドとウェールズの人口が合わせて300万人だったことから判断すると⁽³⁾、1,156版という数は、貴族や知識階級だけでは、到底消費しきれない数だ。読者として裕福な中流の上位に位置する商人を思い出す必要がある。ライトによると、中流階級は13世紀頃からゆっくりと力を蓄えており、英国は中流階級の台頭に国を変革していく力を感じていた⁽⁴⁾。修正主義の立場からトニーも、中世的慣習が次々と破壊されていく中で、勃興してきたジェントリの中核に専門職や富裕な商人を含めている⁽⁵⁾。クレシーはダラム、エクセター、ノリッジにおける文盲率の推移を階級別にグラフで表した⁽⁶⁾。地域や階層により異なるが、彼のグラフから、1550年頃のヨーマンや商人の識字率は既に25%~45%に達していたことが分かる。

教育が商業の繁栄に繋がるとし、裕福な商人はヘンリー八世の頃から子弟を大学や法学院に送り込んでいた⁽⁷⁾。また15世紀頃からグラマースクール等も設立していた⁽⁸⁾。中流階級が本格的に知的な目覚めを迎えるのはエリザベス時代を待たねばならないが、エリザベス時代で活躍する作家の父親の多くは、中流階級であった⁽⁹⁾。さらに商業の発

達に伴い、読み・書き・計算が、奉公人にも望まれるようになり、書物の需要も加速する。新たな消費者として、字の読める中流階級の下位層が加わった。

庶民向けとして、プロテスタントのパンフレットの洪水が起こった。宮廷人や大学の知識人向け、また政府刊行物や教会専用とされていた書物とは、外観も内容も異なり、ページ数が少なく、易しい英語で書かれた廉価版が巷にあふれた。書物が身近な存在になったのだ。それまでは教会で説教を聴くだけだった人々が、自分で書物を読んで、聖書や信仰について考えるようになった⁽¹⁰⁾。学校の普及などによる識字率の向上に応じて、書物が供給された。印刷出版の急速な普及は、国民の新しい宗教や情報の吸収を促進することになる。本の世俗化が進んだ。

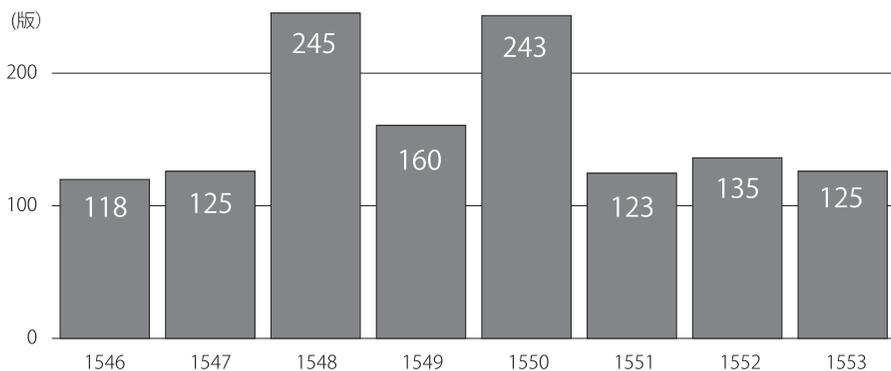


図2 年代別 出版数 (1546-1553)

図2は1546年とエドワード時代の出版数を年代別に表したグラフである。特に出版数の多かった1548年は、前年にそれまでの出版統制が撤廃され、新政策が実施された影響を示している。また1550年は同じく前年に、プロテスタント弾圧を逃れて大量の亡命者が大陸からやってきた影響の反映と考える。それに伴い外国文化が流入し、一般国民の外国に対する認知の促進に繋がった。亡命者の多くはロンドンの外国人教会に身を寄せた。中には印刷業者も多くおり、印刷技術の向上と出版数の増大に貢献したのである⁽¹¹⁾。

大陸からの輸入に依存していた印刷業界は、リチャード・グラフトンやジョン・デイ、ウォルター・リン、エドワード・ホイットチャーチといった大物印刷業者が現れ、国内の印刷・出版は発展していく。彼らは政権と結びつき、政府の意図を反映して市場を独占するようになった。ロンドンの外国人人口が時代初頭には5,000~6,000人にまで膨れ上がったことも、人々に異文化に接する機会を与えていた⁽¹²⁾。

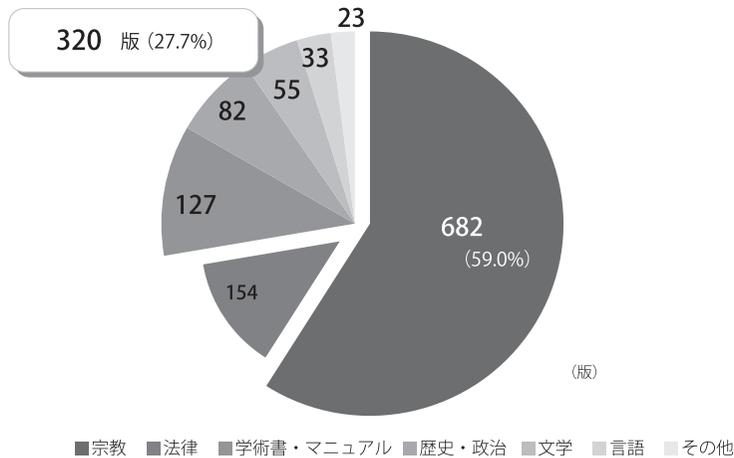


図3 ジャンル別 出版数 (1547-1553)

図3のジャンル別出版数を見ると、大きく2つの特徴が見て取れる。ひとつは、全体の59.0%を占める宗教書の出版だ。この時代の出版の最大の特徴であり、後述の着目すべき一冊の重要な背景となる部分である。

莫大な量の宗教書は偶発的なものではなく、政府が特許や支援を与えて、広く中流階級の下位層にプロテスタントの教義を広めようとした意図的なキャンペーンの成果なのだ。プロテスタンティズムが社会に大きく影響を与えた時代と言える。682版の宗教書は、判明しているだけで、150名の著者、そして少なくとも88名の翻訳者による。つまり、宗教書は一部の限られた人々によって生み出されたのではなく、多くの文人が関わっていたのだ。682版の宗教書のうち3版のみがカトリック、そして残りの679版がプロテスタントの書物であった。プロテスタンティズムが時代の原動力だったのだ。

政府の強烈なプロテスタント振興政策は、必ずしも国民全般に浸透したのではないという議論がある⁽¹³⁾。この時代、プロテスタント本の出版数は激増し、カトリック本は激減した。政府の寛大政策はプロテスタントの書物に限られ、カトリックに対しては厳しい弾圧が行われた。国内で出版されたカトリックの書物はオックスフォード大学の神学欽定教授リチャード・スミスによる2冊(STC 22818, 22823)と、パンフレット作者マイルズ・ホーガースによる1冊だけである(STC 13560)⁽¹⁴⁾。ガーディナーは、サマセット公爵のプロテスタント政策に抗議したため投獄され、著書はこの時代に国内で出版されることはなかった(STC 11592)。

しかし、プロテスタント本の増加は実際のカトリック信者の減少とは必ずしも結びつかない。プロテスタント振興が国策であり、「上からの改革」であったため、表面的に体制に服したカトリック信者はいたのだ。「信仰」や「影響」といった事象は、数字だ

けではその全容を測ることはできない。また出版には統計に表れない様々な事情や偶然を伴うことを考慮しなければならない。出版数によって分析を行う際には留意すべきだ。それでもエドワード時代全体を見た時、プロテスタント本のこのように多い出版数と全体に占める割合から、少なくとも国民の身近にプロテスタント本が存在するようになったのは確かと言える。

この時代の出版のもう一つの特徴は、宗教書・法律書以外の知的生産物である。その中には非常に興味深い書物が出版されている。ここで初期の書籍印刷のほとんどが、宗教と法律書だったことを思い出す必要がある。ヘンリー八世時代から既に、学術・歴史・文学・言語といった世俗的な出版が増え、エドワードの治世には27.7%、を占めるまでになっていた。中でも注目すべきは学術書と文学書の出版であろう。

学術書やマニュアルはこの時代で127冊出版されており、その内容は多岐にわたる。特に医学関係の書物は38版にも及び、病気や治療に関する知識が広く一般にも求められていた。また暦や予言、カレンダーなどが30版も出版され、天文学、占星術、農業など、宮廷の外の庶民生活に関わる書物の出版が目につく。エリザベス時代では、宗教書の出版は減少し、これらの世俗的なジャンルが激増する。印刷・出版が発展した結果、人々が宗教・法律書以外の知的生産物に関心を示し、学術や実生活に関わるマニュアルを書物に求めるようになっていたのである。後のエリザベス時代の大きな需要にくらぶべくもないが、これらのジャンルの出版が、この時代すでに総出版物の1/4以上を占めていたことは、書物の社会における役割が変わってきたことを示す。貴族だけでなく、中流上位の人々の知的生産物への関心も窺える。膨大な出版数、世俗的な刊行物から、書物の国民への浸透が見て取れる。

文学書はこの時代55版が出版されている。著者は名前が分かっているだけで28名を数える。文学書の特徴としては、ジェフリー・チョーサー⁽¹⁵⁾、トマス・チャーチャード⁽¹⁶⁾、ウィリアム・ラングランド⁽¹⁷⁾を除いた著者の多くは1版か2版しか出版していない。全集4版がすべてフォーリオの大著というチョーサーは例外で、オクティヴォの文学書が圧倒的に多い。特に注目すべき書物としてはスティーヴン・ミールドマンが印刷したトマス・モア卿の『ユートピア』(STC 18094)、ジョン・スケルトン (STC 22595.5) やトマス・ワイアット卿の詩 (STC 26053.5) や、『百物語』(STC 23664.5) などがある。著者の多くが宮廷と深い繋がりがあり、詩や物語に人気があった。このことから、文学書は学術書やマニュアルより限られた範囲、つまり宮廷やその周辺で愛読されていたことが窺える。出版物をジャンル別に見ると、人々のニーズや時代の流れが見えてくる。書物が社会において果たす役割が、明らかに変わってきているのだ。読者の本に対するニーズの多様化が見える。それが、エドワード時代に起こっていたのである。これは、その後の出版の歴史に大きな意味を持つことになる。

図4はエドワード時代の出版物のサイズ別出版割合を示したものである。

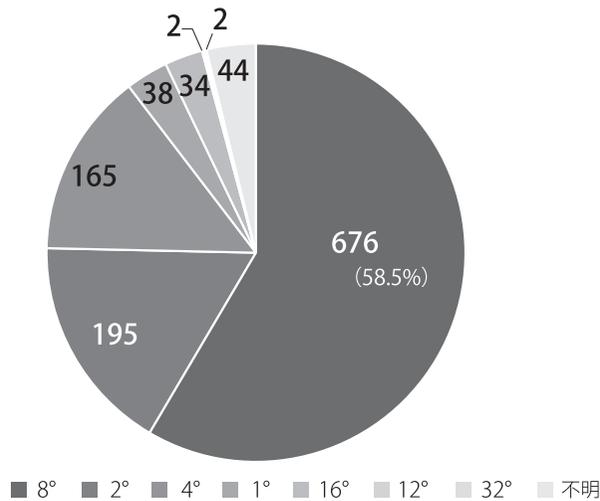


図4 サイズ別 出版数 (1547-1553)

一番多いのはオクテイヴォで、全体の58.5%を占める。サイズによって、著者の地位や、献呈先、また内容や対象とする読者に違いがあるようだ。とはいえ、オクテイヴォの書物が必ずしも全て中流階級向けではなかった。例えばアルドゥス・マヌティウスのオクテイヴォ版は、そもそも大陸で「ルネサンス・ヨーロッパの世俗的な知識人」と呼ばれ、イタリア文化にかぶれた名士たちに人気があった⁽¹⁸⁾。イタリアの宗教改革論者ベルナディーノ・オキーノの説教集のように、オクテイヴォであってもサマセット公爵に献呈されたものもある (STC 18765)。またポリドール・ヴァージルの発明史のように、500ページを超える大著もある (STC 24657)。一概には言えないが、やはり一般の国民にとっては、オクテイヴォの書物はフォーリオよりは手に取りやすい書物であったことは間違いない。本が庶民にとって身近なものになったのだ。これは次の時代における重要な要素となる。

3. イタリアからの書物

パークスはこの時代のイタリア本には6版しか言及せず、数の少なさを強調した⁽¹⁹⁾。しかし今回の調査の結果、イタリア本は28版も出版されていることが明らかになった⁽²⁰⁾。28版というのは決して多い数ではないが、少なくとも一般に考えられていたより、はるかに多い出版数である。

さらに2作品 (STC 2726, 7272)⁽²¹⁾を除き、どのイタリア本のタイトルにもイタリア由来であることがはっきり印字されている。タイトルにはイタリアという文字が記載されているか、明らかにイタリアであることが分かる固有名詞が記されている。つまりイタリア由来であることが、宣伝だった。読者の間にもイタリアへの関心が芽生えていることを、翻訳者も印刷業者も既に時代の中に感じ取っていたのだ。書物の庶民化と同時に、イタリアの英国への浸透の兆しを窺わせる。

ちなみに、イタリア文化の影響が強いと言われているエリザベス時代でも、最初の7年間にはイタリア本は35版しか出版されなかった。しかし、エリザベス時代全体では528版も出版されており⁽²²⁾、やはりイタリアの影響が色濃い時代だったのは間違いない。それではエドワード時代のイタリア本28版から、イタリアの影響について何が言えるのだろうか。

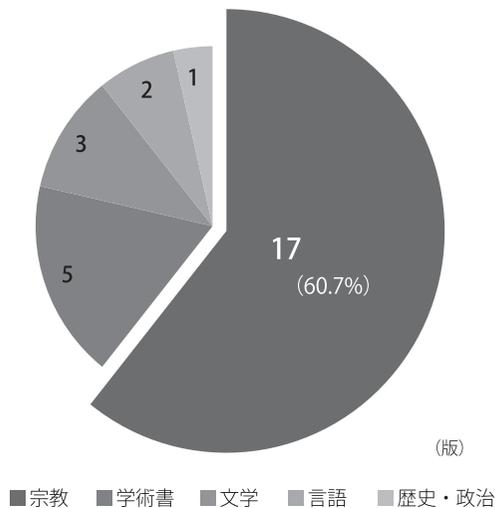


図5 ジャンル別 イタリア本の出版数 (1547-1553)

イタリア本でも宗教書が最も多く出版され、全体の60.7%を占めている。イタリア本においてもプロテスタントの盛り上がりが必要要素であった。そしてイタリア本では、これらの宗教書の全てがプロテスタントの書物だった。時代全体において宗教出版が多いことが、イタリア本の宗教出版を後押ししていたのだ。

特に大司教トマス・克蘭マーの招聘でイタリアから英国にやってきたオキーノの影響は、宮廷で広まった。教育に熱心な貴族アントニー・クック⁽²³⁾を父に持つアン・クック・ベイコンや、ガーディナーの後を継いでウィンチェスター司教に任命されたポーネットの翻訳により、説教集やローマ攻撃の寓意物語を6版も出版し、大きな影響を与え

た⁽²⁴⁾。国策であるプロテスタント振興政策の後押しにより、これらの書物は、宮廷や大学の枠を超えて、多くの人々に届けられたに違いない。

クランマーの招きでオキーノと共に英国に渡ったピーター・マター・ヴェルミーリはオックスフォードで行った、カトリックの神学者との公開討論会で成功をおさめ⁽²⁵⁾、その論争はラテン語と英語で出版された (STC 24673, 24665)。このふたりのプロテスタントイズムへの転向はイタリアに相当な衝撃を与えたが、英国でも、ふたりの著作や活動は国民に大きな影響を与えた。ヴェルミーリは共通祈禱書や教義要綱の定義づけ、また 42 箇条の編纂など、政府のプロテスタント政策に積極的に関与した。この時代にイタリアの宗教書を 2 冊以上出版した著者はふたりをおいて外にいない。このことから、このふたりの影響の大きさが窺える⁽²⁶⁾。

イタリアの宗教書を英訳した人々は、上述のベイコンやポーネットを含め、全員が宮廷と何らかの繋がりがあり、また保護を受けた人々だった⁽²⁷⁾。イタリアの宗教書出版は宮廷を中心に行われたのだ。イタリアの宗教書を印刷した業者は 13 名でそのうち複数印刷したのは、ヒル、ミールドマンとデイのみ。他は 1 版しか印刷していない。しかし各印刷業者の印刷数を比較すると、総じて宗教書の出版割合が高い印刷業者はイタリアに関心を示し、イタリアの宗教書を印刷していることが分かる⁽²⁸⁾。

しかし、宗教書出版の第一目的はプロテスタントイズムの浸透であって、イタリア文化の普及ではなかった。政府の後押しや、時代のうねりに押されて、人々はプロテスタントイズムを理解する人も、しない人も宗教書に手をのぼしたと考える。読者がそれらの書物に含まれる宗教以外のイタリア文化からの影響にも、知らず知らずのうちに感染していたとしても不思議ではない。無意識的なイタリア文化の受容はこの時代の特徴であり、イタリアの影響を積極的に受容する、後のエリザベス社会の風土醸成につながった。

宗教書の次に出版が多かったのは、学術書やマニュアルの類だった。28 冊のうち 5 冊がこのジャンルに該当する。中でも当代一のイタリアの名外科医ジョヴァンニ・ダ・ヴィーゴの医学書は 3 冊も翻訳されて出版されている⁽²⁹⁾。数少ないイタリア本の出版の中でヴィーゴの著書が 3 冊も出版されていることは注目に値する。特にバーソロミュー・トラヘロンの訳した 1550 年版はフォーリオで出版された。専門用語の解説が添えられ、一般読者も対象とされていたようだ。上述の通り医学知識の需要があったと考えられるが、フォーリオ版の出版目的は幅広い読者を想定しているとは言えない⁽³⁰⁾。

イタリアで商法を学んだヤン・インピン・クリストフェルスによる会計学の本は (STC 26093.5)⁽³¹⁾、ルカ・パチョーリの世界で最初に出版された複式簿記の文献から編集⁽³²⁾、イタリア語からオランダ語、フランス語を経て英訳された。原著は大陸で人気のあった大著だが、英訳では 40 葉にまとめられている。時代はこのような実用書を必

要としていたのだ。内容が専門的であり、国王御用達のグラフトンが印刷したことから、本書の読者も限定されていたと考えられる。

もう1冊はイタリアのヒューマニスト、ヴァーギルの発明史である (STC 24657)⁽³³⁾。初版は1546年に出版され (STC 24654)、大変な人気で1560年頃に再版されている (STC 24658)。出版数は少ないものの、イタリア本のこのような先進的、知的著作の出版は時代の傾向と連動しており、英国はイタリアの学術書や実用書に無関心ではなかった。

文学書をみると、宮廷ではダンテ、ペトラルカ、ボッカチオは輸入本で、既によく知られていた⁽³⁴⁾。しかし国内では、彼らの傑作はこの時代1作も出版されていない。16世紀初頭までにイタリアでは、ボイアルドの『恋するオルランド』やアリオストの『狂えるオルランド』のような叙事詩の傑作が出版されていたが、これらが英語で出版されるのは16世紀末のことである。それでもイタリアの文学書が3版も出版されたことは注目に値する。文学書は、宗教書ともまた学術書やマニュアルなどとも異なり、より形而上的なジャンルである。時代全体で見ても、文学書の出版は4.8%にすぎず、エリザベス時代と比べればまだ活発とは言えなかった。出版された3版のうち2作の著者はピッコローニの名で知られるローマ教皇ピウス二世である。ルネサンスを代表する人文学者で、『アレクサンダー・パークレーの牧歌』と題する田園詩がその1冊だ (STC 1384a)⁽³⁵⁾。もう1作はボッカチオ風のロマンス物語で、本作品が英語で出版されたのは特筆に値する (STC 19970)⁽³⁶⁾。著者のエロティックな散文物語をライムロイヤルの弱強5歩格に英訳したもので、イタリアでも非常な人気の作品だった。この2作品は英国人の心に訴える特別なものがあつたに違いない。エリザベス時代でもその人気は続き、後に多く再版され、別の翻訳も出版されることになる。エリザベス時代に花開く、イタリア文学への熱狂的な傾倒の先駆けと言えよう。

出版されたもう1冊は『オテアの書簡』である (STC 7272)⁽³⁷⁾。著者クリスティーヌ・ド・ピザンは、中世のヴェニス出身の詩人、文学者で、フランス文学最初の女性職業文筆家だった。人生の大半をフランスで過ごしたが、父親の教育で、しっかりとイタリア文学の教養を身につけていた。著者が創造したオテアという女神が、トロイア王子ヘクトールのために神話伝説から教訓を引き出し、騎士道精神を養うため助言を与えるという内容である。国を統治する人物を教育しながら、国の将来を案じたこの作品はフランスで大成功をおさめ、英国でも15世紀中に3つもの翻訳が出た。ピッコローニもピザンも、エドワード時代の読者にはダンテより身近な存在であったのかもしれない。

文学書に加えて、この時代ではイタリア語の書物が4版も出版されており⁽³⁸⁾、前後の時代には見られない現象だった⁽³⁹⁾。エドワード時代におけるイタリアへの関心の高

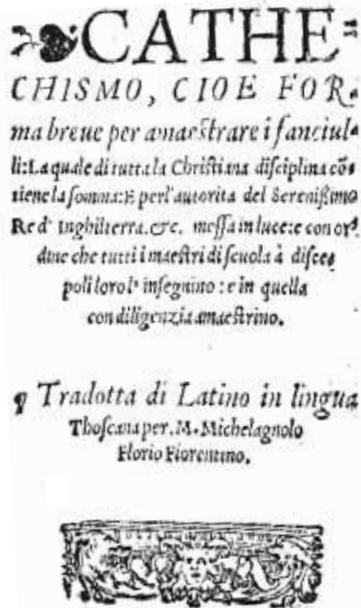
まりを示す一つの兆候だ。特にクレアやトマス作品、および6カ国語辞書からは、積極的にイタリア語を習得し、イタリア文献を読もうとする読者の姿勢が窺える。これらの宗教書以外のジャンルの書物はイタリアの優秀性を認識した上での意識的受容であり、最先端の知見を印刷本に求めた時代の風潮と一致する。エドワード時代は書物が巷にあふれる中、これらの知的生産物が、本に興味を持ち始めた中流のより広い範囲にまで広がった時代だったのだ。

後進国が先進国の文化を受容する場合には、意識的に受け入れる場合と、無意識に受容する場合とがある。意識的受容とは、エリザベス時代に見られるように、読者がイタリアの先進性を認識し、積極的に取り入れようとする事だ。これに対して無意識的受容とは、書物に浸み込まれているイタリア的なものを、それとは認識せずに吸収しているケースである。「イタリア的なもの」がどういうものであるかを言葉で説明するのは難しいが、あえて言うなら、「イタリア人の持つ性格、あるいはイタリア人の存在自体が醸し出す雰囲気」であろう。当時のイタリア文化の影響を考える時、この「イタリア的なもの」も考察の対象と考える必要がある。そしてエドワード時代においては、この「無意識的受容」が最大の特徴なのである。書物からの無意識的受容と、意識的受容の両方が同時進行で行われ、エリザベス朝の積極的なイタリア文化受容の備えをなしたのだ。それがこの時代の特徴であった。

テューダー朝は、英国の自我の目覚めの時期である。そしてエドワード時代は、その中間に位置する。イタリア文化の無意識的受容は、イタリア文化に浸み込まれた「ルネサンス魂」の無意識的受容だった。それは英国において、自我を認めることや人間性の解放を後押しした。このことが、後のイタリア要素の積極的受容と、それによる英国の自我・自負・自立・自信のさらなる覚醒に影響を及ぼしたと考える。当然ながら、エリザベス時代に花開く文学や演劇の多様性・人間性の探求にも多大な影響を与えた。多くの人々はこの無意識的な受容を、書物を読むという行為の中で経験したのだ。

4. 着目すべき1冊

ところで、イタリア本の中に他とは異なる希少価値を持つ書物が1冊ある。



EEBOの画像。クラリバイト社より掲載許可取得済み。
Early English Books Online <<http://eebo.chadwick.com>>

図6 『カテキズム』(STC 4813), A1^r。

それはジョン・ポーネットの『カテキズム』のイタリア語版で、図6はその標題紙である。英国で成熟したプロテスタンティズムの真髄を英国人が編纂し、イタリア人がイタリア語に翻訳、英国在住のイタリア人に向けて出版した書物、つまり英国人がイタリア人に向けて発信した書物である。まだまだ無意識的な受容が多い中で、英国がイタリアに向けて発信を行ったという点で、着目に値する。第一義的にはロンドンにいるイタリア人のために出版されたものだが⁽⁴⁰⁾、1548年のヴェニスでの書物の大量焼却以降⁽⁴¹⁾、プロテスタント書物の出版が出来なくなったイタリア本国のプロテスタントにも向けられていたと考える⁽⁴²⁾。

プロテスタント振興政策は着々と進み、折衷的と批判された共通祈祷書 (STC 16267-16277) も1552年には改良され、プロテスタント色を鮮明にした (STC 16279-16290.5)⁽⁴³⁾。ダドリーは教理問答をラテン語と英語で編纂するよう、当時宮廷で最も影響力のある聖職者だったポーネットに委託し、クランマーが作成した信仰箇条、42箇条 (STC 10034, 10034.2)⁽⁴⁴⁾ を添えて出版させた。国の広い国民層と次世代にプロテスタント教育を徹底し、42箇条を浸透させて、宗教論争における英国国教会の立場を明確にしようとしたのだ。

カテキズムはキリスト教の教理を分かりやすく説明し、洗礼や聖餐といったサクラメ

ントの前に行われる入門教育で用いられる。教理問答が全キリスト教会に普及したのは、言うまでもなく印刷機の発明のおかげだ。ルターが活躍した頃から「書籍の印刷なくして宗教改革なし」とよく言われていた。ルターが教理問答についての本格的論文を書いてから2世紀の間に⁽⁴⁵⁾、英国では1,000種類もの異なる教理問答が出版された⁽⁴⁶⁾。教理問答がいかに重要視されていたかが分かる⁽⁴⁷⁾。プロテスタント信仰の最も重要な柱とされ、図6のタイトルは「子供を教育するための冊子で、キリスト教の全ての教義が掲載されている」と説明している。クランマーのカテキズムより明確にプロテスタンティズムの成熟が見られる。

この本には「すべての学校で本書を使って教えるべし」とのエドワードのイングランドとアイルランドのグラマースクールの教師にあてた命令書が掲載されており（A4^v-A5^v）、ラテン語版、英語版とは異なり、フローリオのダドリー宛の献呈文や（A2^r-A3^r）、王の臨終の祈り（E7^v-E8^r）、そして臨終に立ち会った人々の署名まで印刷されている（E8^r）。いわば国家のお墨付きの書物だったのだ。王の存命中に印刷が進められたものの、まさに時代の変わり目出版された。このような国家的要素の強い重要な著作が、英国からイタリアへ向けて発信されたのだ。さらに、このイタリア語版は42箇条を削除したことが幸いしたためか、メアリー時代での焼却を免れ、結果的に当時の英国におけるプロテスタンティズムの有りようを今に伝える、歴史的にも貴重な資料となった。エリザベス時代にアレクサンダー・ノーウェルがカテキズムを編纂した際には、フローリオ訳がそのもととなったと伝えられている（STC 18701）。

この本を印刷したスティーヴン・ミールドマン（fl. 1536-1559）はアントワープから亡命してきた、エドワード時代で第3位の印刷数を誇る大物印刷業者である。3版のイタリア本を印刷し⁽⁴⁸⁾、同時代の出版の解明には不可欠な人材だ。その活動は、この時代の英国における印刷業者の特徴を体現しており、時代を映す鏡としての分析が有効である。代表的な著者や、大物印刷業者との関係を構築し、イタリアへの傾斜をいち早く先取りした、極めて興味あるプリンターである。

本書の翻訳をしたイタリア人ミケランジェロ・フローリオ（1515-1572?）はエリザベス時代にイタリアの文化を届けた偉大な貢献者ジョン・フローリオの父である。1550年来英し、クランマー、セシル、オーキーノ、そしてヴェルミーリの保護を受ける。息子の偉大な業績の陰に隠れがちだが、息子の教育に心を砕き、言語学者及びイタリア文化の紹介者としての息子の活躍を可能にした。外国人教会のイタリア教会牧師も務める。フローリオの評価が高かった証拠だ。本書の外に、未出版も含めると著書3版を著し、翻訳書1版を出版している⁽⁴⁹⁾。

ミールドマンとフローリオには幾つかの共通点がある。まずふたりとも熱烈なプロテスタントであった。ミールドマンは親方マテウス・クロムの工房に来た時から、プロテ

スタンティズムに対して明確な考えを持っていた。フランシスコ派の修道士だったフローリオは1540年代初めにプロテスタントに改宗し、投獄や死刑の判決まで受けるが、脱獄して大陸を放浪し、信仰を貫いた。またふたりとも亡命者であり、ミールドマンは1546年6月のカール五世の勅令によりアントワープから、フローリオは大陸放浪の後、当局の手を逃れてロンドンにやってきた。そしてふたりとも外国人教会に深く関わっていたのである。さらにミールドマンもフローリオと同じく翻訳を試み、強烈な教皇攻撃の書『ローマカトリック教会の崩壊』を英語からオランダ語に訳した(STC 21307.3, 21307.5)。また共訳で旧約と新約聖書をオランダ語に翻訳している(USTC 408030)。メアリー治世になってふたりは英国を後にし、ミールドマンはエムデンへ、フローリオはストラズブルへと旅立った。

1550年に設立の勅許がおりた外国人教会は、低地諸国やフランスなどから来英した人々を中心とした教会である。国内で唯一、英国国教会のルールに従わなくてよいとされ、プロテスタント振興の中心だった。当時のロンドンの人口については諸説あるが⁽⁵⁰⁾、5万～6万人と考えられる。時代初めには5,000～6,000人とされていた外国人も、1553年の時点では、ペティグリーによると、少なくとも1万人はいた⁽⁵¹⁾。外国人が人口の1/5という割合は、国が無視できない大きさだ⁽⁵²⁾。そのうちイタリア人がどれくらいいたか、正確な数は不明だが、勅許のおかげで外国人教会は栄え、オランダ教会とフランス教会の会員数は合わせて3,000～4,000人にも達していた⁽⁵³⁾。イタリア教会にも相当数の会員がいたことが窺える。さらにロンドンには外国人教会に属さないイタリア人も多くいたことを考えると、フローリオがロンドン在住のイタリア人のために、ポーネットの教理問答のイタリア語翻訳を依頼されても当然だ。

フローリオが翻訳を思いついたもう一つの理由として、ロンドンにおけるプロテスタント教会のあり方が、既に大陸にも発信できるほど成熟していたことが挙げられる。外国人教会、中でもオランダ教会は大きな盛り上がりを見せ、最高責任者ラスコーの著作を次々とオランダ語⁽⁵⁴⁾・イタリア語(STC 16576)・フランス語(STC 16573)に訳し、大陸へ発信していた。ラスコーの大きな影響力と一連の翻訳を見て、フローリオが自分もイタリア人に、ポーネットの完成度の高い教理問答を届けたいと願ったとしても不思議ではない。外国語の印刷経験が豊かなミールドマンにとっては、イタリア語印刷のハードルは高くなかった。クランマー、ダドリーといったイタリアと結びつきの深い有力者にも助けられて、この「発信の書」の出版が実現したと考える。

文化の意識的受容は、相手の文化を受け入れるか拒絶するかは別にして、相手の文化の存在を認めることから始まる。エリザベス時代のイタリア文化受容は分かりやすいものだった。エリザベス時代の英国は、理解の幅はあったであろうが、シェイクスピアの描くイタリアを、上流階級も庶民も楽しんでた。

俺は学芸を生み育てた都、
美しいパドヴァを一目見たいと願ってきたが、
とうとう実り豊かなロンバルディアにやってきた。
ここはまさしく偉大なイタリアの楽園だ。

ウィリアム・シェイクスピア 『じゃじゃ馬馴らし』 1.1.1-4

STC 22273, S3^v.

人々はイタリア文化のすばらしさ・先進性ととも、好ましからぬ面もよく理解して、それを積極的に取り入れ、あるいは拒絶しようとした。一般人はイタリアといえ、ば信仰心のなさや、不正直、華美なファッション、毒薬などを連想した⁽⁵⁵⁾。以下はイタリアのネガティブな側面への言及で知られているアスカムやシェイクスピアからの引用である。

奴らはキルケーの魔法でイタリアから呼び寄せられたのだ。
イングランドの風紀を乱すためにな。

ロジャー・アスカム 『教師』, STC 832, I2^v.

毒薬がお手のもののイタリア人に、だまされて
あの方は今、大変な思いをされているのかしら。

ウィリアム・シェイクスピア 『シンペリン』 3.4.15-16

STC 22273, 3a3^v.

一方、エドワード時代の国民レベルでの受容は様相が異なる。イタリア文化に対する理解はまだ一部に限られていた。一般国民には、イタリアには美人が多いとか、快適な気候、立派な都市、学問と文化の伝統といったイタリアの魅力的なイメージや、道徳的退廃といった好ましからぬイメージは、まだ書物を通しては届いていなかったのだ。そのような状況で、フローリオの「発信の書」が存在することにはどのような意味があるのだろうか。

英国はテューダー朝を通じ、紆余曲折しながらアイデンティティーを確立していった。エドワード時代はその紆余曲折の一つの偏重だったのだ。大きくプロテスタントに傾いた時期に、英国のエネルギーはイタリア要素の無意識的受容を助けつつ、プロテスタント振興という形で国内に向けられていた。そのエネルギーが自我の目覚めと結びつき、プロテスタントを急速に成熟させた。そしてその成熟した英国の姿を外部へと発信したのがこの1冊だった。ふつつと煮えたぎるものが英国内にあり、その高

まりをまずはロンドン在住のイタリア人に、ひいてはイタリア本土に向けて噴射したので。これは後進国英国の立派な自己主張である。その自己主張の相手が、ルネサンスの花開いたイタリアであったことが着目に値する。エドワード時代は国民レベルでは無意識的受容が大勢を占めており、一見、無意識にイタリア要素を吸収していただけたように見える。しかしフローリオの『カテキズモ』の存在は、この時代の英国がイタリアを交流の相手としてはっきり認識し、自らの意志でイタリアに接近しようとしていたことを示している。この時代の発信の書はたった1冊であり、その出版は偶然の産物だったかもしれない。しかし、英国が既にイタリアに関心を持っていた貴重な証拠である。この時代の出版を言語別に見てみると、表1のようになる。

表1 言語別 宗教書 (1547-1553)

(版)

言語	出版数	宗教書
ラテン語	91	22
多国語	31	4
フランス語	13	11
オランダ語	8	8
法律用フランス語	6	0
ウェールズ語	2	1
イタリア語	1	1
スコットランド英語	1	0

伝統的に学術書、法律書は、国内向けであってもラテン語で書かれていたので、ラテン語の書物の出版数が圧倒的に多いのは当然である。また、フランスとは歴史的に見て、長い間深い関係にあったので、それが出版数に反映されているのも頷ける。注目すべきは宗教書の出版だ。表1からこの時代における英国のプロテスタンティズムに対する自信が、他国への発信という形で表されていることが窺える。ラテン語で出版された91版の書物のうち、22版が宗教書であったことは、これらの書物が大陸でも読まれた可能性を示唆する。その次にフランス語(13版)、オランダ語(8版)と続く。これは当時の外国人教会の盛況ぶりを反映している。これらの書物もロンドン在住の外国人だけでなく、大陸へも届けられたであろう。他方、スペイン語とドイツ語の書物は、母国語による宗教書の出版はない。イタリア本はたった1冊ではあるが、この1冊から英国がすでにイタリアに関心を持ち始めていたことが分かる点が重要な点だ。

5. ま と め

エリザベス時代におけるイタリアの積極的受容が英文学に大きな影響を与えたのは間違いない。エリザベス時代の人々は、イタリア文化をよく知った上で時代に花開いた文学や戯曲を楽しんでいた。今回エリザベス以前の時代、具体的にはエドワード時代の6年間半において、イタリア本が国内で28版も出版されていたことを明らかにした。これは新事実である。今まで考えられていた以上にイタリアの影響はあったのだ。その影響の様相の最大の特徴は、プロテスタンティズムとの強い結びつきである。エリザベス時代以前に中流階級において無意識的受容があったことは、エドワード時代がイタリアの文化に対して無関係ではなかったことの証明である。これは後のエリザベス時代における、より明確な意識的受容の下地になった。一方で、今回のテーマである着目すべき1冊は、これらの受容とは異なる意識的発信なのだ。

影響にはいろいろな形がある。顕著な例は、他国の文化を取り入れ、自国の文化に反映することだ。エリザベス時代に見られるような演劇や文学にイタリアの要素が反映されている例である。これらのイタリア要素を吸収した作品は、英国国民の精神に深い影響を与えた。また、上述のアスカムのように拒否・反発という形で表れ、それが文章や作品に反映されたこともある。これもまた、英国国民の精神に影響を与えたという意味で、イタリア文化の影響と言える。

それでは、この1冊の存在の何が重要なのだろうか。英国で成熟したプロテスタンティズムにとってはカテキズム自体が重要であるが、イタリアの影響を考えるにあたっては、内容がカテキズムであることが重要なのではない。重要なのは発信が、英国によるイタリアへの「文化的接近」であった点である。

フローリオの『カテキズモ』は後進国英国側から「イタリアへ伝える」という明確な意志を持ってなされた時代特有の出版だった。国内で成熟したプロテスタンティズムのエネルギーが「発信」という形で表出したのだ。つまりイタリアを文化交流の相手として見る意識が存在していたのである⁽⁵⁶⁾。その背景には、今まで述べた通り、当時の英国におけるプロテスタント振興があり、その成果として英国のプロテスタンティズムが、エドワード時代に発信のレベルにまで成熟していたことに起因する。エドワード時代の国民レベルでのイタリアの影響は、受容においても、発信においてもほぼプロテスタント一色だった。プロテスタントのムーブメントがあったからこそ、イタリアの受容も発信もあり得たのである。政府が印刷物というメディアを駆使したことが、このような大きな社会的・宗教的・文化的な変化をもたらしたのだ。

エドワード治世における、急激なプロテスタント信仰への傾倒に対して、庶民の多く

が不安を抱き、メアリーの反動政策をむしろ歓迎したという説もある。しかし、歴史の流れに逆らって、ヘンリー八世より前の国際主義的、親教皇的なカトリシズムに戻ろうとしたメアリーの政策は、失敗であったと言わざるを得ない。プロテスタントのムーブメントは宗教思想だけでなく、時代の進行に伴い国民の自意識、また有産階級にとっては獲得した修道院領の分けまへの確保というような、様々な状況の変化をももたらしていた。そのようなムーブメントの中で、エドワード時代におけるイタリアの受容と発信ははぐくまれたのである。

英国民の幅広い層に広まったイタリア文化への目覚めは、エリザベス時代におけるイタリアかぶれが突如として興ったものではないことを示している。エドワード時代の「文化的接近という行動」が次の時代にどう作用するのだろうか。この時代は書物の庶民化と海外文化への目覚めの時期であった。この特色がどのように変化してエリザベス時代の熱狂的イタリア受容に発展したかを明らかにするためには、エドワードの次に来るメアリー時代、およびエリザベス時代初期におけるイタリア文化に対するスタンスの変化を探らねばならない。

《注》

- * 本論は第59回シェイクスピア学会（2021年10月9日）における発表に基づき、発展させたものである。本論の引用の日本語訳は全て拙訳である。また本論では読み易くするために、連続3版以上のSTC番号等は注に記載した。
- (1) STC: *A Short-Title Catalogue of Books Printed in England, Scotland, and Ireland and of English Books Printed Abroad 1475-1640*, comp. by A. W. Pollard and G. R. Redgrave, 2nd edn, rev. and enlarged by W. A. Jackson and F. S. Ferguson, completed by Katherine F. Panzer, 3 vols (London: Bibliographical Society, 1986). ESTC: *English Short Title Catalogue*. The British Library. <<http://estc.bl.uk>>. USTC: *Universal Short Title Catalogue*, comp. by Andrew Pettegree and others, <<https://www.ustc.ac.uk>>.
 - (2) 出版年のはっきりしない書物は沢山ある。本論文ではSTC, ESTC, RCC, USTC及び一般に認められている推定年を照合の上、採用した。エドワード六世時代と前後の時代の境である1547年と1553年については、判別できる書物は各時代にて集計しているが、不明なものについてはエドワード時代の出版として集計した。メアリー一世時代とエリザベス一世時代の境については、エリザベスの即位が1558年11月17日であることから、便宜上1558年出版についてはメアリー一世時代、1559年以降をエリザベス一世時代として集計している。RCC: *Renaissance Cultural Crossroads*, created by the University of Warwick. <dhi.ac.uk>.
 - (3) John Miller, *Early Modern Britain 1450-1750* (Cambridge: Cambridge University Press, 2017), p. 144.
 - (4) Louis B. Wright, *Middle-Class Culture in Elizabethan England* (New York: Octagon, 1980), p. 3.
 - (5) R. H. Tawney, 'The Rise of Gentry', *Economic History Review*, 11 (1941), 1-38 (p. 1).
 - (6) この3地域では、1550年頃、特に商人の識字率の向上が顕著である。David Cressy,

- Literacy and the Social Order: Reading and Writing in Tudor and Stuart England* (Cambridge: Cambridge University Press, 1980), pp. 162-63.
- (7) Louis B. Wright, *Middle-Class Culture in Elizabethan England* (New York: Octagon, 1980), p. 47.
- (8) 食料雑貨商ウィリアム・セヴノークスは1432年に商人として初めてロンドンに学校を設立。同じく織物商ジョン・アボットや金細工師パーソロミュー・リードも学校を設立している。Wright, *ibid.*, p. 45.
- (9) クリストファー・マーロウの父は靴屋, アントニー・マンデイの父は呉服屋, ジョン・ウェブスターの父は仕立て屋, ウィリアム・シェイクスピアの父は皮手袋商人だった。
- (10) 1543年5月12日に英国議会で成立した法律で聖書を読むことが許されたのは, 聖職者, 貴族, ジェントリ, 裕福な商人, そして身分の高い女性のみだった。この制限はエドワード治世になるまで続く。
- (11) Anna E. C. Simoni, 'Dutch Printing in London', in *Foreign-Language Printing in London 1500-1900*, ed. by Barry Taylor (Boston Spa and London: British Library, 2002), pp. 51-69 (p. 51).
- (12) Andrew Pettegree, *Foreign Protestant Communities in Sixteenth-Century London* (Oxford: Clarendon, 1986), p. 78.
- (13) John Guy, *Tudor England* (Oxford: Oxford University Press, 1990), p. 204.
- (14) ホーガースの *An Answer to the Ballade, Called the Abuse of ye Blessed Sacram[e]t* はロバート・クローリーが全文を引用して反駁している (STC 6082)。
- (15) STC 5100, 5071, 5072, 5073, 5074.
- (16) STC 5225.5, 5241, 5246, 5252, 5258.
- (17) STC 19906, 19907, 19907a.
- (18) Martin Lowry, *The World of Aldus Manutius* (Oxford: Blackwell, 1979), p. 147.
- (19) G. B. Parks, 'The Genesis of Tudor Interest in Italian', *PMLA*, 77 (1962), 529-35.
- (20) 資料1参照。
- (21) 資料1, Nos 6, 11.
- (22) エリザベス時代のイタリア本の出版数およびその詳細については以下を参照されたい。
Soko Tomita, *A Bibliographical Catalogue of Italian Books Printed in England 1558-1603* (Farnham: Ashgate, 2009) 及び Soko and Masahiko Tomita, *A Bibliographical Catalogue of Italian Books Printed in England 1603-1642* (Farnham: Ashgate, 2014), pp. 337-412.
- (23) 人文主義者で, エドワード六世の教育を担当した。
- (24) オーキーノの説教集: STC 18764, 18765, 18766, 18767; 『ローマ司教の不当な篡奪の悲劇又は対話』(STC 18770, 18771)。資料1, Nos 3, 4, 21, 22, 7, 8.
- (25) 1549年オックスフォード大学総長リチャード・コックスの司会で, 化体説を擁護する3名のカトリックの神学者ウィリアム・トレシャム, ウィリアム・チェドシー, モーガン・フィリップスと討論した。
- (26) イタリア本の宗教書の著者については資料1参照。
- (27) イタリア本の宗教書の翻訳者については資料1参照。
- (28) この時代で最多の印刷数208版を誇るグラフトンは81冊の宗教書を出版し, シアーズとの共同印刷を含めて123版を印刷したデイは107版, 86版を印刷したN. ヒルは60版, またミールドマンも87版の印刷物のうち68版までが宗教書であった。彼らは皆イタリア本を印刷している。
- (29) STC 24721, 24725, 24725.3。資料1, Nos. 19, 20, 26。原典: *Practica in chirurgia. Copiosa*

- in arte chirurgica nuper edita* (Rome: Guillery and Nani, 1514) と *Pratica in professione chirurgica. Compendiosa muncupata nouissime compillate* (Rome: Mazochim, 1517).
- (30) イタリア本でフォーリオの医学関係書にはターナーの『新本草書』がある (STC 24365)。
- (31) 資料 1, No. 2.
- (32) *Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita* (Venice: Paganini, 1494).
- (33) 資料 1, No. 24.
- (34) ISTC はベトラルカを 93 版, ダンテを 31 版, ボッカチオを 81 版掲載している。ISTC: *Incunabula Short Title Catalogue* (London: British Library, 2016)。ペティグリーによれば, ベンボーが「俗語論」(1525) で, 文体の模範としてベトラルカとボッカチオを賞賛したため, 16 世紀に両作家の著作集がイタリアで洪水のように出版され, 相対的にダンテの地位が低くなった。Andrew Pettegree, *The Book in the Renaissance* (New Haven and London: Yale University Press, 2010), p. 158.
- (35) ピウス二世の *De curialium miseria* (Rome: Plannick, c. 1490) の意識。資料 1, No. 5.
- (36) 資料 1, No. 28.
- (37) 資料 1, No. 11.
- (38) STC 5409, 6832.23, 24020, 4813。資料 1, Nos. 1, 13, 16, 27.
- (39) イタリア語の書物はヘンリー八世の最後の 7 年間では 0 版, メアリー時代では 2 版, エリザベスの最初の 7 年間では 1 版のみの出版だった。
- (40) Denis B. Woodfield, *Surreptitious Printing in England 1550-1640* (New York: Bibliographical Society of America, 1973), p. 80.
- (41) Paul F. Grendler, *The Roman Inquisition and the Venetian Press, 1540-1605* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1977), p. 82.
- (42) この書物の書誌学的記述については, 資料 2 参照。
- (43) 英国の宗教改革は国王の権威への服従だったとして, 「上からの改革」を強調する修正主義の立場の研究は, 教区レベルでの実態を示す教区巡察記録や遺言書, 教区委員記録などを重視し, プロテスタントイズムは一般民衆には浸透しなかったと主張する。Christopher Haigh, *English Reformations: Religion, Politics and Society under the Tudors* (Oxford: Clarendon, 1993), pp. 12-21. *The English Reformation Revised*, ed. by Christopher Haigh (Cambridge: Cambridge University Press, 1987), pp. 19-33。一般民衆への浸透具合をどう評価するかは, 後のメアリーやエリザベス時代のプロテスタントイズムの評価と合わせて考えなくてはならない。しかし, 上述のエドワード時代における宗教書の大量出版を「上からの改革」のみで説明し, 国民が服従してこれらの書物を購入したとするには無理があると考えられる。
- (44) 信仰によってのみ義とされるとし, 洗礼と聖餐以外の聖典礼を廃した。また化体説を否認し, 英国を新教国として確定した。
- (45) *Deutsch Catechismus Mart. Luther* (Wittenberg: Rhaw, 1529)。
- (46) プロテスタントと一言と言っても, 信仰にも多くのヴァリエーションが見られ, 教区民レベルでの信仰のあり方に適した, 多くの教理問答が出版された。Michael Mullett, *Historical Dictionary of the Reformation and Counter-Reformation* (Lanham, Tronto, Plymouth: Scarecrow, 2010), p. 72.
- (47) ポーネットのほかに, 主なものとしてルター (USTC 635684), クランマー (STC 5992.5), ラスコー (STC 15260) によるカテキズムがある。
- (48) STC 4813, 11903, 22992。資料 1, Nos. 27, 25, 23.
- (49) *Apologia di Michel Agnolo Fiorentino* (Basel: Catani, 1557)。未出版のイタリア語文法

- 書 *Regole et Institutioni della Lingua Thoscana* はジェーン・グレイへの献呈本が大英図書館に所蔵されている。ジェーンの伝記: *Historia de la vita e de la morte de l'Illustriss. Signora Giovanna Graia* ([Middelburg]: Riccardo Pittore, 1607). 訳書には *Catechismo* の外にゲオルク・アグリコラの *De re metallica* (Basel: Froben, 1563) がある。
- (50) 香内三郎は 6, 7 万人と推定している。『活字文化の誕生』(東京: 晶文社, 1982), p. 54. 山田昭廣は 1569 年の段階で 64,285 人と計算している。 *Experiencing Drama in the English Renaissance: Readers and Audiences* (New York and London: Routledge, 2017), p. 4. Folgerpedia は 1550 年には 5 万人が在住していたとしている。
(<https://folgerpedia.folger.edu>).
- (51) Andrew Pettegree, *Foreign Protestant Communities in Sixteenth-Century London* (Oxford: Clarendon, 1986), p. 78. 1568 年時点でのロンドンにはオランダ人とフランス人だけで、6,342 人いた。 *Returns of Aliens Dwelling in the City and Suburbs of London from the Reign of Henry VIII to That of James I*, ed. by R. E. G. and E. F. Kirk, 4 vols (Aberdeen: Aberdeen University Press, 1900-08), III, p. 439.
- (52) 近年、英国において都市が宗教改革にどのような役割を果たし、宗教改革は都市に何をもたらしたかという問題が注目されているが、その重要性はこの在英外国人の割合からも窺える。Patrick Collinson and John Craig, *The Reformation in the English Towns, 1500-1640* (Basingstoke: Macmillan, 1998). Robert Tittler, *The Reformation and the Towns in England: Politics and Political Culture, c. 1540-1640* (Oxford: Clarendon, 1998).
- (53) Andrew Pettegree, *Foreign Protestant Communities in Sixteenth-Century London* (Oxford: Clarendon, 1986), p. 78.
- (54) STC 15260, 15260.5, 15260.7, NB 17994. NB: *Netherlandish Books*, ed. by Andrew Pettegree and Malcolm Walsby (Leiden: Brill, 2011).
- (55) Andreas Mahler, 'Italian vices: cross-cultural constructions of temptation and desire in English Renaissance drama' in *Shakespeare's Italy: Functions of Italian Locations in Renaissance Drama*, ed. by Michele Marrapodi and others (Manchester: Manchester University Press, 1993), pp. 49-68 (p. 49).
- (56) エリザベス時代全体ではイタリア語の本は 41 版出版されている。その多くは 1584 年以降に出版された。最初の 7 年間では 1 版のみ (国の外交文書のイタリア語版) であり、1584 年以前の 27 年間でも、4 版のみにとどまっている。すなわちエドワードの 6 年間半と同じ出版数でしかない。このことからエドワード時代に、時代を先取りして本書が出版された意義を見逃すべきではない。

(原稿受付 2022 年 6 月 15 日)

英国で出版されたイタリヤ本一覽 (1547-1553)

No.	STC	Date	King	Edition	Author/Compiler	Short Title	Translator	Printer	Publisher	Dedicattee	Place	size	Genre	Genre 2	Language
1	5409	1547	Henry /Edward	AE	Clerc, John	De mortuorum resurrectione, & extremo iudicio in quatuor linguis succincte conscriptum opusculu[m]. Ioanne Clerco	-	Herford, John	Toy, Robert	-	London	4°	RT	Resurrection & Judgment Day Protestant	L,E,I,F
2	26093.5	1547	Henry /Edward	F	Ympyn Christoffels, Jan bossed on Luca Pacioli & Jehan Paulo de Bianchi.	A notable and very excellent woroke, expressing and declaring the manner and forme how to kepe a boke of account[ment]es or reconynges.	unknown	Grafton, Richard	Grafton, Richard	unknown	London	2°	LM	Accounting	E
3	18764	1548	Edward	F	Ochino, Bernardino	Sermons of Bernardino Ochine of Sena godlye, fruitful, and very necessarye for all true Christians	Bacon, Anne Cooke, Lady	Car, Roger	Riddell, William	-	London	8°	RT	Protestant sermons	E
4	18765	1548	Edward	F	Ochino, Bernardino	Sermons of the pyght famous a[n]d excellent clerke Master Bernardino Ochine,	Argentine, Richard	Scoloker, Anthony	Scoloker, Anthony	Duke of Somerset by Richard Argentine	Ipswich	8°	RT	Protestant sermons God	E
5	1384a	1548	Edward	AE	Pius II, Pope (Enea Silvio Piccolomini)	Here begynneth the egloges of Alexander Barclay, priest,	Barelay, Alexander	Powell, Humphrey	Powell, Humphrey	-	London	4°	Lit	Court & Courtiers poetry	E
6	2726	1549	Edward	F	Arestino, Pietro; Harrington, John (ed.)	Certaine psalmes chosen out of the psalter of Dauid, called thee. VII. Penytentiall psalmes, drawen into englyshe meter by sir T. Wyat [Ed.] (J. Harrington.)	Wyatt, Thomas	Raynald, Thomas	Harrington, John	William, Marquis of Northampton by J. Harrington	London	8°	RT	Psalms Protestant	E
7	18770	1549	Edward	F	Ochino, Bernardino	A tragoeidie or dialogue of the vniuste vsurped primaacie of the Bishop of Rome,	Poynet, John	Hill, Nicholas	Lyme, Walter	Edward VI by Bernardino Ochino	London	4°	RT	Protestant attack of Bishop of Rome Reformation allegory	E
8	18771	1549	Edward	AI	Ochino, Bernardino	A tragoeidie or dialogue of the vniuste vsurped primaacie of the Bishop of Rome,	Poynet, John	Hill, Nicholas	Lyme, Walter	Edward VI by Bernardino Ochino	London	4°	RT	Protestant attack of Bishop of Rome Reformation allegory	E
9	24018	1549	Edward	F	Thomas, William	The historie of Italie, a boke exceeding profitable to be redde:	Thomas, William	Berthelet, Thomas	Berthelet, Thomas	John Dudley by William Thomas	London	4°	HP	Italian History	E
10	24673	1549	Edward	F	Vermigli, Pietro Martire	Tractato de sacramento Eucharistia, habita in celeberrima vniuersitate Oxoniensi in Anglia,	-	Wolfe, Reyner	Wolfe, Reyner	Thomas Cranmer by Vermigli	London	4°	RT	Lord's Supper	L
11	7272	1549	Edward	F	Du Castel, Christine (Christine, de Pisan)	Here foloweth the .C. hystories of Troye. Lepistre de Othea deesse de Prudence	Wyer, Robert	Wyer, Robert	Wyer, Robert	-	London	8°	Lit	Troy Romances	E
12	2985.3	1550	Edward	F	-	Christen prayers & godly meditations vpon the Epistles of saint Paule to the Romains	Becon, Thomas	Wyer, John	Wyer, John	M., T. by Becon	London	16°	RT	Romans Biblical exegesis Protestant	E
13	6832.23	1550	Edward	AE	-	Sex linguaru, Latine, Teuthonica, Gallice, Hispanice, Italice, Anglice, ditididistinus dictionarius.	unknown	Hill, Nicholas	Jugge, Richard	-	London	8°	Lan	Dictionaries L,F,S,I,E,G	L,F,S,I,E,G
14	11313	1550	Edward	F	Bartholomaeus de' Rinonichi (L orig.); Erasmus Albertus (G ver.)	The Alcaron of the Bare-foote Friers	-	Grafton, Richard	Grafton, Richard	-	London	8°	RT	Francis, of Assisi Protestant	E
15	12365	1550	Edward	F	Gribaldi, Matteo and John Calvin (preface)	A notable and maruailous epistle of the famous doctor, Mathewe Gribalde, professor of the law,	A. F. [As]lo[n]y, Edward]	Oswen, John	Oswen, John	-	Worcester	8°	RT	Jesus Christ; Protestant	E
16	24020	1550	Edward	F	Thomas, William	Principal rules of the Italian grammar, with a dictionarie for the better understanding of Boecae, Petrarchia, and Dante:	-	Berthelet, Thomas	Berthelet, Thomas	-	London	4°	Lan	Italian Grammar	I, E
17	24665	1550	Edward	F	Vermigli, Pietro Martire	A discourse or traictee of Petur Martyr Vermilla Flore[n]ine... sacrament of the Lordes supper	Udall, Nicholas	Whitchurch, Edward	Udall, Nicholas	William Parr, marquess of Northumberland by Udall	London	4°	RT	Lord's Supper	E

資料 1

No.	STC	Date	King	Edition	Author/Compiler	Short Title	Translator	Printer	Publisher	Dedicatree	Place	size	Genre	Genre 2	Language
18	24666	1550	Edward	F	Vernigli; Pietro Martire	An epistle vnto the right honorable and christian prince, the Duke of Somerset written vnto him in Latin, atome after his detourance out of trouble	Norton, Thomas	Hill, Nicholas	Lyme, Walter	Vernigli's epistle to Somerset	London	8°	RT	Somerset	E
19	24721	1550	Edward	AE	Vigo, Joannes de	The most excellent workes of chirurgery, made and set forth by maister Iohn Vigen,	Bartholomew Traheron	Whitchurch, Edward	Whitchurch, Edward	Richard Tracy by Traheron	London	2°	LM	Medicine	E
20	24725	1550	Edward	F	Vigo, Joannes de	This lyvell practyce of Ioh[an]nes de Vigo in metecyne,	unknown	Wyer, Robert	Wyer, Robert	-	London	8°	LM	Medicine prescriptions	E
21	18766	1551	Edward	F	Ochino, Bernardino	Certaine sermons of the ryghte famous and excellent clerk master Barnardine Ochine,	Bacon, Anne Cooke, Lady Argentine, R.	Day, John	Day, John	-	London	8°	RT	Protestant sermons God Salvation Predestination	E
22	18767	1551	Edward	F	Ochino, Bernardino	Fourtene sermons of Barnardine Ochyne, concerning the predestination and election of god:	Bacon, Anne Cooke, Lady	Day, John & William Seres	Day, John & William Seres	Lady Anne Fitzwilliam [Anne's mother]	London	8°	RT	Protestant sermons Predestination	E
23	22992	1551	Edward	F	Spagnuoli, Baptista [Mantuanus]	A lamentable complayme of Baptista Ma[n]uanus,	Bale, John	Mierdman, Steven	Day, John	Griffine Tyndale by John Bale	London	8°	RT	Death not to be feared Protestant	E
24	24657	1551	Edward	AE	Vergilius, Polydorus (Vergil, Polydore)	An abridgement of the notable worke of Polidore Vergile concerninge the deuises and first finders out aswell of artes....	Langley, Thomas	Grafton, Richard	Grafton, Richard	Sir Antony Demy by Langley	London	8°	LM	History of Invention	E
25	11903	1552	Edward	F	Dalla Rovere, Giulio	Of the Christian Sabbath a godlye treatise of Mayster Iulius of Milayne, translated out of Italian	Langley, Thomas	Mierdman, Steven	Riddell, William	William Lewis of London by Langley	London	8°	RT	Sabbath	E
26	24725.3	1552	Edward	AE	Vigo, Joannes de	This lyvell practyce of Ioh[an]nes de Vigo in metecyne	unknown	Wyer, Robert	Wyer, Robert	-	London	8°	LM	Medicine prescriptions	E
27	4813	1553	Edward	AT	Poynet, John	Cathechismo, cioe forma breue per amaestrare i fanciulli: la quale di tutta la Christiana disciplina	Florio, Michelangelo	Mierdman, Steven	Mierdman, Steven	Dudley, John by Florio, Michelangelo	London	8°	RT	Catechism Protestant	I
28	19970	1553 /Mary	Edward	AE	Pius II, Pope (Enea Silvio Piccolomini)	The goodli history of the moste noble and beautifull ladye Lucrece of Scene in Tuskanie	unknown	Day, John	Day, John	-	London	4°	Lit	Eurrius & Lueres Prose	E

【略語】

版	F	初版
	AE	別版
	AI	別刷
	AT	別訳

ジャンル	HP	歴史・政治
	Lan	言語
	Lit	文学
	LM	学術・マニユアル
	RT	宗教

言語	E	英語
	F	フランス語
	G	ドイツ語
	I	イタリア語
	L	ラテン語
	S	スペイン語

【本論文におけるイタリア本の定義】

英国で出版された書物で、執筆から出版までの過程で、イタリアの要素が含まれている書物

「イタリア本」に含まれるのは

1. イタリア語で書かれ、英語に翻訳された書物 例 STC 18765
2. イタリア語で書かれ、英国で出版された書物 例 STC 6832.23
3. イタリア人によってラテン語で書かれ、英国で出版された書物 例 STC 24673
4. イタリア語に翻訳され、英国で出版された書物 例 STC 5409

『カテキズモ』の書誌学的記述

A translation

1553

STC 4813

L: C.37.a.3.

[S. Mierdman]

L: the British Library

I. Transcription

☛ CATHEꝰ | CHISMO, CIOE FORꝰ | *ma breue per amaestrare i fanciulꝰ | li: La quale di tutta la Christiana disciplina cõꝰ | tiene la fomma: E per l'autorita del Serenissimo | Re d'Inghilterra. &c. meffa in luce: e con or ꝰ | dine che tutti i maestri di scuola à difceꝰ | poli loro l'infegnino: e in quella | con diligenza amaestrino.*

¶*Tradotta di Latino in lingua | Thofcana per .M. Michelagnolo | Florio Fiorentino.* |
[title page vignette]

English translation:

A catechism in brief form to instruct children. Which contains the total of all Christian teaching. And by the authority of the most serene king of England is published; and in order that all schoolmasters might teach it to their pupils and in which they might instruct them with diligence.

Translated from Latin into the Tuscan language by .M. Michelangelo Florio Fiorentino.

No colophon.

II. Collation

8°: A-E⁸ F⁴, 44 leaves unnumbered; [S5 signed (-A3, 4, D2)]

III. Contents

A1^r: TP; A1^v: blank; A2^r–A3^r: dedicatory epistle to 'Il' Signore Giouanni, Dudele degnissimo Duca di Nortamberlande [Lord John Dudley, most worthy Duke of Northumberland]' by 'Maestro Michel agnolo Florio'; A3^v–A4^r: Florio's preface to 'Al Pio e Christiano lettore [to the pious and Christian reader]'; A4^v–A5^v: injunction of King Edward VI being the head of 'la chiesa d' Inghilterra, e d' Hibernia [the Church of England, and of Ireland]', to 'tutti i maestri di scuola di gramatica che fono, e che faranno. [all the teachers of the grammar school who are, and who will be]' dated 'à Granuicci Adi .20. di Maggio. L'Anno. VII. del nostro regno. [at Greenwich the 20 May the 7th year of our reign]'; A6^r–E7^r: text headed 'Catechismo, cioe forma breue per amaestrare i fanciulli: La quale di tutta la Christiana disciplina contiene la fomma: fatta in Dialogo: Maestro, & Auditore. [Catechism, that is a brief form for the training of children: in which the whole Christian discipline is contained: done in dialogue between master and auditor.]' with 'Amen' at end; E7^v–E8^r: prayer headed 'Orazione del Serenissimo Re Edouardo festo d' Inghilterra fatta da lui il festo giorno di Luglio hanno. M.D.Liij. Della sua eta festodecimo, e del suo regno VII. tre hore innanzi che morisse, non pensando d'esserudito, con gl'ochi chiusi [Prayer of the Most Serene King Edward sixth of England given by him on the sixth day of July in M.D. Liij. Of his sixteenth age, and of his seventh reign. Three hours before he died, not thinking of being heard, with the closed eyes] followed by five signatures of those present at the deathbed of Edward VI; E8^v–F4^r: prayers headed 'Preghiere di M.M.F.F. Vtilissime ad ognuno' [Prayers of M.M.F.F. Very Useful to everyone] containing eight orations including 'Benedizione della tauola' [Blessing of the table] and 'Ringratiamento' [Thanksgiving]; F4^v: blank.

慶応3年の憲法構想

～赤松小三郎・津田真道・松平乗謨・西周・山本覚馬

関 良 基

The Constitutional Designs in 1867, Japan:
Kosaburo Akamatsu, Mamichi Tsuda, Norikata Matsudaira,
Amane Nishi, and Kakuma Yamamoto

Yoshiki SEKI

Abstract

In 1867, the last year of Edo period, there was a wave of making Japan's constitutional designs. These constitutional designs were drafted by either Tokugawa administration or *samurais* from pro-Tokugawa clans. Even if there had been no Meiji Restoration, Japan would have been able to create a constitution and a parliament. This paper examines the five constitutional plans drafted by Kosaburo Akamatsu, Mamichi Tsuda, Norikata Matsudaira, Amane Nishi, and Kakuma Yamamoto and shows that there could have been alternative scenarios in Japan's modernization.

キーワード：憲法構想，幕末議會論，天皇，議會，国民の権利と義務

I はじめに

「大政奉還」と呼ばれる政治変動が発生した慶応3年（1867），政体改革を求める建白書が相次いで提出されている。いずれも日本の政治制度を近代化しようという意図の下で提案されたものであった。主なものを提出の順番に挙げれば以下のようなになる。

慶応3年 5月17日：赤松小三郎「御改正之一二端奉申上候口上書」

6月24日：薩土盟約「約定書」

9月 津田真道「日本国総制度・関東領制度」

10月3日：土佐藩「大政奉還建白書」

10月18日：松平乗謨「病夫譚語」

- 11月 : 西周「議題草案」
11月 : 坂本龍馬「新政府綱領八策」
慶応4年6月 : 山本覚馬「管見」

これらの中で、赤松小三郎、津田真道、松平乗謨、西周、山本覚馬の五つの建白書は「憲法草案」といってよい水準のものである。西周の「議題草案」は研究蓄積があるものの⁽¹⁾、残り四つの一般的な知名度はそれほど高くない。これらの初期憲法草案は、史料的に紹介されることはあっても⁽²⁾、横断的に分析し、これらの構想の特徴を比較検討するという作業はなされてこなかった。

従来、大政奉還に至る政局の流れは、慶応3年6月の坂本龍馬の「船中八策」を起点として、それが同月の土佐藩と薩摩藩で結ばれた薩土盟約の「約定書」に結実し、その盟約から薩摩が離脱したが、土佐藩は単独で「大政奉還建白書」を提出し、徳川慶喜はそれを受け入れたと説明されてきた。土佐・薩摩中心の叙述である。しかし近年の研究では、坂本龍馬が大政奉還前の6月の段階で書いたとされる「船中八策」という文書は存在せず、後世の創作であることが指摘されている⁽³⁾。坂本龍馬が確かに書いた文書として慶応3年11月の「新政府綱領八策」があるが、これは大政奉還の後に書かれたものであって、大政奉還の前に書かれて影響を与えたというものではない。西南雄藩中心の歴史観によって、事実が歪められてきた側面は否めない。

憲法草案の作成者である5人の当時の所属を見ると、赤松は信州上田藩士、津田と西は公儀開成所教授、松平乗謨は公儀陸軍総裁で老中格、山本覚馬は会津藩士であった。彼らはいずれも徳川政権ないし「佐幕派」とされた諸藩に属していた。西南雄藩中心に組み立てられてきた従来の幕末維新史の「物語」においては、「保守的」であるはずの側に先進的な憲法草案が起草されていたという事実は不都合であったのかも知れない。「佐幕派」から出された憲法草案に、日本の近代的立憲政体を目指す萌芽が育まれていたとしたら、西南雄藩中心の歴史観は修正を迫られることになるだろう。

本稿では、慶応3年に徳川政権や「佐幕派」とされた側から建白されていた初期の憲法構想を比較検討し、それぞれ差異はありつつも、大きな流れとして、近代的な立憲政体を志向していたこと、明治維新とは異なる近代日本のオルタナティブの可能性がいくつもあり得たことを明らかにしたい。

なお、五つの中で山本覚馬の建白書のみ慶応3年ではなく翌4年の戊辰戦争の最中に出されているが、後述するように赤松や西の建白書との関連も深いこともあり、検討対象に含めることにする。

II 「幕末議會論」に対する従来の評価

(1) 戦後歴史学の評価

戦後歴史学の研究蓄積の中で、慶応年間の議會政治論についての評価は概して低いものであった。まず戦後の明治維新研究の方向性を規定する影響力をもったものとして遠山茂樹の『明治維新』を紐解きたい。遠山は「幕末議會論」について、「イギリス・フランスの外交官の指導」により、「中央集権的国家体制，議會制度が次第に新しい政治理念として浮かびあがってきた」⁽⁴⁾とし、日本人の主体性よりも、外国からの指導の側面を強調した。さらに議會論の内容については、「民の声を聴く，衆議を納れるとの王者の心構えを説く儒教的政治思想と，蘭書および中国書によって輸入紹介された欧米の議會制度の外形だけの知識とによって，次第に成形してゆくに従って，分解せんとする封建政治機構の補強救済策としての列藩會議論に定着していった。（中略）議會制度論は，もっぱら封建支配者間の対立を緩和し，封建支配秩序を再建する手段として，受け取られた」⁽⁵⁾と断じた。すなわち「幕末議會論」は，最終的に「列藩會議論」となって，封建的秩序を再建していくための手段として用いられるようになったという評価である。

遠山のこの評価が戦後歴史学の主流の解釈となった。代表的なものとして，憲政史を専門に研究してきた歴史学者の坂野潤治の見解を紹介しておく。坂野は，幕末議會論を「封建議會論」⁽⁶⁾と規定し，次のように述べている。

「大政奉還」前後の二院制論には，「政府」の権限と選出方法についての記述がまったくない。（中略）それらには議會権限についての記述も，まったくなかった。「政府」についても「議會」についても，明確な規定のなかった幕末の「公議會」論には，新政治体制を創設する力がなかったのは当然であろう。「新政府」の性格は，旧幕府軍と薩長軍が鳥羽・伏見で一戦してみても決めるしかなかったのである⁽⁷⁾。

すなわち，慶応年間の「封建議會論」は未熟なもので，自立した新政府を創出する力はなかったので，薩長が戊辰戦争で幕府を粉砕するしかなかったという理解である。

(2) 大正期の評価

ところが戦前の大正期には戦後歴史学の「定説」とは全く違った見方が存在した。大正6年（1917）に出版された洪沢栄一編『徳川慶喜公伝』は，土佐藩の「政権奉還建白書」に先立つ議會論として，大久保忠寛（一翁），横井小楠，赤松小三郎などの議會政治論を紹介し，これらの議會政治論の流れが「揆を一に」して「政権奉還」につながっ

たと評価した上で、「氣運の然らしむる所、歐洲思想の模倣とのみは言ふ能はざるなり」と総括した⁽⁸⁾。幕末議會論は、時勢の氣運が高まる中で生じた必然的なものであり、単なるヨーロッパ思想の模倣とは言えないのだ、と。

ついで大審院判事を務めながら憲政史研究の分野を切り開いた尾佐竹猛は、大正14年(1925)に『維新前後に於ける立憲思想』を著し、幕末議會論を、土佐藩、幕府、福井藩、その他の諸藩の順で紹介。慶応3年に議會設置の氣運は高まっており、徳川慶喜も「議會設置と大政奉還とは不可分の条件」⁽⁹⁾として、大政奉還に踏み切ったとする。土佐藩は、大政奉還後に諸侯會議を招集し、上院・下院の議事院を設置すべく動いていたが、薩摩・長州の武力討幕派は、議會設置と大政奉還を「切り離して、無条件の大政奉還と為し」、さらに「武力討伐を為さんと」企図。ついに戦争の勃発に至り、「砲烟、鳥羽伏見の窓を蔽ふて議會論は烟の如く消へ去った」⁽¹⁰⁾と結論する。

大正期の尾佐竹猛は、戦後歴史学の定説と真逆の主張をしていた。戦後歴史学は、幕末議會論が封建制から脱却できない未熟なものだったからこそ、鳥羽伏見で徳川軍を叩く必要があったと考えてきたのに対し、尾佐竹は幕末議會論の先進性を評価し、薩長が武力討幕に踏み切らず、鳥羽伏見の戦いがなければ、平和裏に議會政治に移行していたはずであると主張していた。実際のところはどうかだろう。

(3) 赤松小三郎再評価の動き

戦後において、尾佐竹史観を継承していた歴史学者が大久保利謙であった。津田真道と西周の研究をライフワークとしていた大久保は、彼ら二人がオランダ留学から持ち帰った学問は「最初から国策の源泉たる性格を持ち、実践的色彩が濃厚である」とし、津田の「日本国総制度・関東領制度」と西の「議題草案」を、「両者ともわが国政の基本を考案した憲法私案とも言うべきもの」⁽¹¹⁾と評価している。ただし、幕末議會論をこのように積極的に評価する大久保利謙ですら、津田と西を評価する一方で、それよりも先進的な構想を提示していた赤松小三郎や山本覚馬については何も語っていない。

近年になって赤松小三郎の構想に注目する研究が見られるようになってきた。奥田晴樹は、幕末議會論では「領主支配と身分秩序を解体していくような深度での改革は、提起されていない」と、定説通りに「思想的限界」を指摘しつつも、戦後歴史学が無視していた赤松小三郎の建白書に着目し、赤松の構想が実施されれば、「結果として領主支配と身分秩序の解体へと連動する可能性を内包」していたとし、「ここに、『公議政体論』の、一つの到達点を見出すことができよう」と結んでいる⁽¹²⁾。赤松の構想に封建体制を崩す可能性を見出したという点、戦後歴史学の定説とは異なる一步踏み込んだ評価であろう。

青山忠正は、大政奉還に至る政局を分析する中で、薩摩と土佐が平和的に政権を徳川

から朝廷に移管させようという慶応3年6月の薩土盟約の構想に、赤松小三郎の建白書が影響を与えた可能性を指摘している⁽¹³⁾。筆者も、赤松小三郎の憲法構想は議会制民主主義を求めたものであると論じた⁽¹⁴⁾。岩下哲典は、赤松の構想の「民主的」側面とともに、佐幕派も倒幕派も取り込んだ「オールジャパンの国家構想」であったと評価している⁽¹⁵⁾。

Ⅲ 憲法草案が提出された背景

五つの憲法草案が提出された背景を概観したい。大きく分けると、津田・西・松平の三つの建白書は、徳川政権の人間が、内部からの改革案として起草したものである。これに対し、赤松小三郎と山本覚馬の建白書は様相が異なる。赤松と山本は、主として薩摩が討幕しようと振り上げた拳を降ろさせようと、薩摩と徳川を和解させようという意図で書かれたものなのである。

(1) 津田真道と西周

津田真道と西周の二人は、開成所の教授手伝並として文久2年(1862)から慶応元年(1865)まで徳川政権の派遣留学生としてオランダのライデン大学に学び、シモン・フィッセルリング教授から自然法、国際公法学、国法学、経済学、統計学の五科を伝授された⁽¹⁶⁾。

二人は、慶応元年12月にオランダ留学を終えて江戸に戻り、慶応2年4月にフィッセルリング教授の講義録の訳述を命じられた。津田は、フィッセルリング講義の中の国法学を担当し、日本初の西洋法学の専門書となる『泰西国法論』、西は国際公法学を担当し『万国公法』の訳述にそれぞれ取り組んだ。しかし、二人がこれらフィッセルリングの講義録を出版することができたのは徳川政権終焉後の慶応4年のことになる⁽¹⁷⁾。

それに先立つ慶応2年9月、津田と西の二人は京都で政務をとっていた徳川慶喜から呼び出された。西は京都に留め置かれたが、慶喜にフランス語を教える他、あまり重要な仕事は与えられなかった。津田の方は、当面は用なしということになって江戸に戻るようになった。津田は江戸に戻って訳業の傍ら、大政奉還の前月の慶応3年9月に「日本国総制度・関東領制度」を起草。西は大政奉還翌月の11月に徳川慶喜の諮問を受けて「議題草案」を提出した⁽¹⁸⁾。

なお津田の憲法草案は、連邦政府としての「日本総政府」と旧徳川領を引き継ぐ連邦構成国としての「関東領」の制度(憲法)をそれぞれ述べているが、本稿では連邦憲法としての「日本国総制度」のみ検討対象とする。

(2) 松平乗謨

松平乗謨は、三河奥殿と信州佐久の田野口に分散した領地を持ち、合わせても1万6000石という小大名であった。本来は老中になれる家格ではない。松平は、ペリー来航直後の嘉永6年(1854)には、いち早く領内に農兵制度を設け、本拠と定めた佐久の田野口に西洋式の五稜郭(龍岡城)を築城するなど、西洋式の近代化を追求した人物である⁽¹⁹⁾。その能力を買われて慶応2年に27歳の若さで公儀の陸軍総裁かつ老中格という異例の昇進を遂げた。

翌年に政権返上(大政奉還)の報を受けると、江戸にいた松平乗謨は老中の稲葉正邦とともにただちに上京し、徳川慶喜に対し、政権返上と引き換えに議会政治を導入しようという新政権の政体構想を建白した。政権返上から4日後の慶応3年10月18日のことであった。この松平乗謨の建白書は「病夫譚語」と題されている。

(3) 赤松小三郎

赤松小三郎は信州上田藩士であり、慶応元年(1865)に1862年版の最新式のイギリス陸軍の軍隊訓練の教本(*Field Exercises and Evolutions of Infantry*)を加賀藩士の浅津富之助とともに訳出し『英国歩兵練法』として出版、英国式兵学の第一人者として知られるようになった⁽²⁰⁾。慶応2年10月には薩摩藩に招かれ、同藩の京都藩邸で英国式兵学を教授した。門人には、野津道貫、野津鎮男、東郷平八郎、上村彦之丞など後年の日本陸海軍の指導者たちが多数含まれている。同時に赤松は、会津藩の山本覚馬が京都に設立した会津洋学校の顧問も務めた。

赤松は、倒幕派と佐幕派の双方にまたがる人脈を最大限に活かし、慶応3年5月に建白書を起草し、越前・薩摩・徳川政権など各方面に提出した⁽²¹⁾。赤松は、特定の藩に肩入れしない自由な立場で動き、対立する双方の陣営に同じ建白書を出し、互いを和解させ、挙国一致で議会政治を実現しようとした。

薩摩藩は、赤松が建白書を出した翌月の6月には土佐と約定を結び、平和的に政権を移行させた上で議会政治の実現を目指す可能性の模索を始めた(=薩土盟約)。これは赤松の提案した方向性であった。しかし、8月になって薩摩首脳は方針転換をし、土佐との盟約を破棄し、長州と組んで武力討幕に向かう。赤松は、西郷隆盛に武力討幕を思いとどまるよう必死に説得に努めたが、上田に帰国しようとしたところを、薩摩藩の武力討幕派である中村半次郎らの刺客団によって暗殺されてしまった⁽²²⁾。

赤松小三郎の建白書は、越前藩の松平春嶽に提出したものが「御改正之一二端奉申上候口上書」、島津久光と徳川政権へと提出したものが「数件御改正之儀奉申上候口上書」とタイトルが若干異なるが、略せば、ともに「御改正口上書」となる。なお赤松が、徳

川政権にも同様な建白書を提出していたことは2016年に発見された新事実である⁽²³⁾。

(4) 山本覚馬

会津藩士の山本覚馬は藩主の松平容保が京都守護職に任命されると、容保とともに入京し、公務の傍ら洋学研究にも没頭した。慶応2年には藩士のみならず門戸を広く開いた洋学教育機関として会津洋学校を開設し、その顧問として赤松小三郎と西周を招請した。会津洋学校で学んでいた廣沢安宅は「覚馬は在京有司に謀り、慶應2年、藩洋学校を京都西洞院の寺院に設く。(中略)覚馬の京都に在るや、西周助、廣瀬元恭、栗原唯一、赤松小三郎等に交り、専ら西洋文明の事を研究す。(中略)又幕府の洋学侍講西周助及び上田藩赤松小三郎を請ふて顧問に充つ」⁽²⁴⁾と記している。西周と赤松小三郎と山本覚馬の三名は互いに親交を深めていた。

山本は、薩摩藩の軍事教官であった赤松小三郎に依頼し、小松帯刀と西郷隆盛に交渉してもらって会津と薩摩の和解を模索していたとも証言している。鳥羽伏見の戦いが勃発すると、会津藩士の山本覚馬は薩摩藩に捕縛され、藩邸内の牢に閉じ込められた。獄中で視力を失いながらも、山本は薩摩藩当局に宛てた上申書を口述筆記して提出した(慶応3年3月)。その中には「万事一洗、彼此嫌疑氷解仕度奉存候二付、昨卯年六月私儀赤松小三郎ヲ以テ、御藩小松氏西郷氏江其段申述候処、御同意二付」⁽²⁵⁾と記されている。すなわち山本覚馬は、薩摩藩が会津藩にかけている嫌疑を氷解させ、薩摩と会津を和解させようと、薩摩の軍事教官である赤松小三郎に依頼して小松帯刀や西郷隆盛などの薩摩首脳と談判してもらっていたというのである。

この上申書に続いて獄中の山本が薩摩藩に提出したのが「管見」であった。「管見」には、議会政治、三権分立、学校建設、殖産興業、通貨改革、肉食の奨励などの提言がされ、赤松小三郎の建白書と重なる部分が多い。さらに山本の「管見」の特徴として、製鉄、通貨、衣食、太陽暦への転換、醸造、公衆衛生、医療等への提言があり、近代の産業振興策のマスタープランとしての側面も大きい。こうした産業政策や公衆衛生への提言は他の四つの建白書にはないものであるが、これは憲法論の枠を超えるので、本稿では割愛する。

IV 五つの憲法草案の比較

五つの建白書の比較検討に入りたい。各人の憲法草案の原文は以下の史料から引用した。以下、五つの建白書からの引用文は、煩雑を避けるため注を付けないが、いずれも下記文献からのものである。

・赤松小三郎「御改正口上書」

『鹿児島県史料 玉里島津家史料（五）』鹿児島県歴史資料センター黎明館，1996年，194～198頁。

『続再夢紀事（六）』，東京大学出版会，1977年復刻，245～252頁。

・津田真道「日本国総制度・関東領制度」

大久保利謙・桑原伸介・川崎勝編『津田真道全集（上）』みすず書房，2001年，253～266頁。

・松平乗謨「病夫譚語」

東京大学史料編纂所『維新史料綱要』7巻289頁。「維新史料稿本データベース」⁽²⁶⁾

・西周「議題草案」

大久保利謙編『西周全集』第2巻，宗高書房，1962年，167～183頁。

・山本覚馬「管見」

青山霞村，『増補改訂 山本覚馬傳』京都ライトハウス刊，1976年，212～228頁。

赤松小三郎の建白書は，越前藩の松平春嶽に提出したものが『昨夢紀事』，薩摩藩の島津久光に建白したものが『玉里島津家史料』と，公刊史料にそれぞれ収録されている。津田と西の憲法草案については，大久保利謙らが編集した全集にそれぞれ収録されているので，それを用いた。松平乗謨の「病夫譚語」は，公刊史料に全文が収録されたものは見当たらないので⁽²⁷⁾，東京大学史料編纂所の『維新史料綱要』と連動した維新史料稿本のデータベースにあるものを用いた。山本覚馬の「管見」は，青山霞村の『山本覚馬傳』に全文が収録されている。

本稿では憲法上重要である，天皇，議会の権限，議員の選出方法，内閣と行政，国民の権利と義務，地方自治，軍事という，七つの項目に絞って，それぞれの論者の論点を比較検討する。比較結果をまとめたものが表1である。

(1) 天 皇

赤松小三郎の「御改正口上書」（以下，赤松案）において，天皇は「天子」と呼ばれる。天子を補佐するため，「大閣老」以下6人の「宰相」を選出して内閣を組織，これを「朝廷」（＝行政府）と定義する。天皇は行政府の長であるが，実質的な行政は内閣が担うと想定されている。また，「朝廷」は議会の決定に意見を述べることはできるが，最終的な拒否権はない。

津田真道の「日本国総制度」（以下，津田案）において天皇は「禁裡」と呼ばれ，通常は政治に参画しないが，「極重大之事件は禁裡之勅許を要す」とされる。ただし，「極重大事件」がどのような事案を指すのか具体的な規定はない。

表1 五つの憲法構想の比較

起草者名	赤松小三郎	津田真道	松平乗謨	西周	山本覚馬
建白当時の肩書	上田藩士／薩摩藩の兵学教授／会津洋学校顧問	開成所教授	陸軍総裁・老中格	公儀目付、徳川慶喜側近	会津藩公用人
出身藩	上田藩	津山藩	奥殿藩・龍岡藩	津和野藩	会津藩
建白書名	御改正之一二端奉申上候口上書	日本国総制度	病夫諭語	議題草案	管見
提出時期	慶応3年5月	慶応3年9月	慶応3年10月	慶応3年11月	慶応4年6月
提出先	松平春嶽／島津久光／徳川政権	不明	徳川慶喜	徳川慶喜	薩摩藩
天皇	行政府の長。議会決議に拒否権なし。	通常は政治に参加せず。「極重大事件」のみ勅許を下す。	権限は十分に明記されず。議会決議に拒否権なし。	改元、暦法、叙爵、神仏両道の長。議会決議に拒否権なし。	叙爵、度量の制定、神仏儒の長、議会の議長を任命。
議会	立法権。すべての国事を決議。 上院：公卿・諸侯・旗本より30人を入札で選出。 下院：国をいくつか束ねた選挙区より入札で130人を選出。	立法権を行政府と分掌。 上院：各藩の藩主。 下院：国民10万人につき1人の議員を「推挙」。	立法権。行政権と司法権も下院に直属。 上院：諸大名から10名を選出。 下院：大名・小名の中から30名を選出。	立法権。内閣の人事を承認する権利。上院議長は大君が兼任。 上院は各藩の藩主。 下院は各藩が藩士を1人選出。	立法権。 上院：公卿と諸侯より。 下院：藩士より選出。1万石で0.5人、5万石で1人、10万石で2人、20万石で3人の割合。
内閣と行政	天皇の下に内閣を組織。「大閣老」など6人の大臣と高官を議会が選出。議院内閣制。	連邦政府の「大頭領」を選出。6人の大臣は大頭領が任命。	下院の直属して外務や財務の行政が行われる。議会統治制度。	徳川家当主が世襲で大君職を継承し、行政府の長となる。大君は5人の大臣を任命する。	記載なし。
国民の権利・義務	法の下での平等。個性の尊重。職業選択の自由。勤労の義務。義務教育。納税の義務と課税の平等化。ただし遊楽業への税は重くする。	記載なし	記載なし	記載なし	職業選択の自由。均分相続。身分・財産を不問に平等に教育を受ける権利。女子教育の振興。平等に課税するが、遊芸・遊郭などの税は重く、生活必需財への税は軽く。
地方自治	記載なし	藩はそのまま連邦制。	藩に代わって州郡を設置。州ごとに地方議会を設置。	藩はそのまま。	封建制と郡県制の中間を模索。
軍	最新鋭の兵器を備え、平時は軍人の数を少なく。常備軍は陸軍2万8000人、海軍3000人。日頃軍事訓練し、戦時は国中の男女が民兵。	大頭領が全国軍務の長官。ただし徳川家の支配する関東領の陸軍はそのまま。	諸藩の軍をなくし、大君が国軍の軍事指揮権を一元的に掌握。	当面、従前通り軍は徳川と諸藩がそれぞれ持つ。	藩士は禄に応じて一家に一人ないし0.5人を兵士として出す。徴兵制。

松平乗謨の「病夫譚語」（以下、松平案）において天皇は「主上」と呼ばれ、国家元首である。議会の決議事項について「決議之事ハ容易ニ主上モ御議論不被為在候様」「右之通王制御施行」とされ、議会の決議に対し、天皇に拒否権はなく、それを承認・施行しなければならないことが明記されている。

西周の「議題草案」（以下、西案）において天皇は「禁裏」と呼ばれ、以下の権利を持つ。「欽定之権」（議会で可決した法案を欽定する権利であるが、法案への拒否権はない）、「紀元之権」（改元の権利であるが、災害等を理由に改元してはいけない）、「尺度量衡之権」（長さや重量の単位を定める権利であるが、改正には議会承認が必要とされる）、「神仏両道之長たる権」、「叙爵之権」、「高割兵衛ヲ被為置候権（各大名から1万石につき2名の兵卒を徴する権利）、「大名より貢献之奉被為受候権（大名からの贈り物を受け取る権利）」である。さらに、「禁令」として「公卿殿上人は山城国より外出不叶」とされている。皇族と公卿は山城国から出てはいけないという。天皇は、祭祀と儀礼に特化した存在である。

山本覚馬の「管見」（以下、山本案）において天皇は「王」とされ、「官爵ノ権、度重ノ権、神儒仏ノ権、議事院ノ吏長ヲ黜ル権是ハ専ラ王ニ帰スベキ」と記されている。西案に似ているが、議会の議長を罷免する権利が追加されている。

五つを比較してみると、天皇の職務を主に祭祀や儀礼に限定した西案と山本案が似ており、親交があった二人が日頃こうした問題を話し合っていたことをうかがわせる。赤松案と松平案は、いずれも天皇は議会の決定に従うべき存在と規定されている。五つの構想に天皇に政治的な大権を持たせようという発想は見られず、君臨すれども統治せずの原則に沿っていると言えるだろう。これが慶応年間の議会政治論者の標準的な発想であった。政権を掌握した薩摩・長州を中心とする藩閥政権は、天皇を神格化するとともに、軍の統帥権など強大な権力を付与したが、彼らは徳川方の知識人の標準的感性から乖離していたといえるだろう。

(2) 議会の権限

赤松案において議会は「議政局」と呼ばれ、上局と下局に分けられる。「此両局にて総而国事を議し、決議」とされているから、議会は国権の最高機関である。議会権限としては「旧例之失を改め、万国普通之法律を立、并ニ諸官之人撰を司り、万国交際、財貨出入、富国強兵、人才教育、人気一和之法律を立候を司り候」とされる。立法、条約の締結、予算の策定の他、行政の諸官吏を人選する権利まで含まれている点がユニークである。

津田案において議会は「制法上下両院」と呼ばれる。立法権は「制法之大権は制法上下両院と総政府の分掌」と規定されている。すなわち立法は、議会と行政府がそれぞれ

分担して行う。その他の議会の役割として「日本全国政令之監視」、すなわち行政府を監視する権限が規定されている。

松平案において議会は「議事院」と呼ばれ、上院と下院がある。「先下院ニ而議決候處ヲ上院ニ而猶議決著相成候上御施行」とされていて、法案の先議権は下院にある。「法御国政都而右両所之議ヲ経而御奏聞」とされ、「法度」すなわち立法権は議会に帰属し、「国政」すなわち行政権も議会に付属する。「下院ニ會計外国曲直裁断之職ヲ分」と述べられ、下院の中に「会計（財務）」や「外国（外交）」の行政機能も設けられる。「曲直裁断」は裁判権を指すので、司法機能までも下院に直属させようとしている。松平案は三権分立ではない。議会に行政機能や司法機能も付属させようという議会統治制度なのである。

西案において議会は「議定院」と呼ばれ、「今議定院相立ち、是ニ立法之権あり」とされ、立法権は議会に帰属する。他の議会権限として、「公府高割税入之多寡（租税の税額を決定すること）」「内外征伐和睦 臨時之大評議（開戦・終戦の判断）」「外邦交際之大法（条約の締結）」が挙げられている。また、世襲制の徳川「大君」が任命した5人の宰相（大臣）について、議会はその大臣人事を承認する権限がある。さらに5人の大臣の中の少なくとも一人は現役の議員から任命せねばならないと規定されており、行政と議会が相互に権力を抑止する仕組みになっている。

山本案において議会は「議事院」と呼ばれ、これも上下に分かれる「議事者（立法権者）ハ事を出スノ権（行政権）ナク、事ヲ出ス者（行政）ハ背法者ヲ罪スルノ権（司法権）ナク、其三ツノ中ニ権壹人ニ依ル事ナキヲ善トス」と記され、議会の立法権と三権分立を規定している。

五つの案を比較すると、津田案のみ議会と政府が立法権を分担して持つとされているが、それ以外は議会に立法権が帰属している。また松平案のみ、立法権と行政権が分立せず、議会下院に行政権と司法権も直属しているが、これは三権分立のなかった徳川政権の行政機構を基本に考えているためであろう。

(3) 上院と下院の議員選出方法

つぎに上院と下院の議員の選出方法を比較してみよう。赤松案において上院議員は公卿・諸侯・旗本の中から30人を「入札（選挙）」で選出すると規定されている。下院については、「下局八国之大小ニ応して、諸国より数人ツヽ、道理ニ明なる人を自国及隣国之入札ニ而撰抽し、凡百三十人」と規定されている。すなわち、下院については、国をいくつか束ねた大きな選挙区より数人ずつ、合計で130人を「入札」で選出する。さらに「其両局人撰之法ハ、門閥貴賤ニ拘らず、道理を明弁し、私無く且人望之帰する人を公平ニ撰むべし」と明記され、身分や財産制限のない普通選挙で下院議員を選出する

としている。これは日本で初めての普通選挙の提言である。

津田案において、「制法上院は万石以上たるべきこと」とされているので、1万石以上の大名が自動的に上院議員となる。当時万石以上の大名は300人ほどいたから、議員数は300名となる。下院議員については「日本全国民の総代にして、国民十万人に付壹人ツヽ推挙」と記されている。下院は藩の枠組みを超えて、国民10万人につき1人の議員が「推挙」される。この「推挙」とは、今日の「選挙」の意味で使っていると思われる。津田も身分や財産の制限を付けていないので、普通選挙を志向している。当時の日本の総人口は3,000万人ほどであるから、10万人につき1人の議員を選ぶと下院の議員定数も300人となる。

松平案において「上院議事官十名 諸大名之内ニ而人選」とあり、上院議員は10名で諸大名の中から選出する。なお「御当家ニ而ハ上院議事之上位」と規定され、上院議長は徳川大君が世襲で就任する。下院議員は「大名小名無差別人選」とあり、石高を問わず大名・小名（旗本）から30名を選出すると定められている。松平案では上下両院の議員数はこのように少なく、議員資格は、上院は諸侯のみで、下院は大名と旗本にのみ与えられる。

西案で「上院は萬石以上大名列席」とあるので、すべての大名が自動的に上院議員となる。「下院は藩士壹藩壹人」とあり、各藩の代表として藩士を一人選出することになる。庶民の被選挙権については、「百姓町人も未タ文盲之時ニは」として、識字能力の欠如を理由に参政権を退けている。

山本案で上院議員は「縉紳家又ハ諸侯」とあるので、公卿ないし諸侯より上院議員を選出する。下院議員については諸藩の藩士から選出されるとされ、1万石で0.5人、5万石で1人、10万石で2人、20万石で3人の割合で議員を選ぶことになっていた。庶民の参政権については、「文明政事開ニ從テ四民ヨリ出ベシ然レドモ方今人材非士ハナシ」としている。すなわち下院議員は、当面藩士に限定しつつ、文明開化が進んで人材教育が行き届けば庶民にも参政権も認めることを想定している。

五つを比較しよう。西案は、上院議員が藩主で下院議員がその家臣ということなので、藩の枠組みはそのままで、確かに「列藩会議論」と言われるのも否めない側面がある。しかし他の案はそうではない。赤松案は、庶民も含めて普通選挙で下院議員を選出しようとし、選挙区も藩単位ではなく、より大きな選挙区から国民代表を選ぼうとしている。山本案も文明開化が進めば庶民にも参政権を広げるべきだと考えており、国民国家化を志向している。津田案はドイツを参考にしたと思われる。1867年当時、まだドイツ統一は完成していなかったが、プロイセンを中心に北ドイツ連邦が形成されていた。北ドイツ連邦は、連邦を構成する諸領邦の代表からなる連邦参議院と、国民の代表からなる帝国議会を持つ二院制で、帝国議会の方は男子25歳以上の普通選挙が導入されていた。

津田案における上院は、各藩の大名によって構成されるから、ちょうどドイツ連邦参議院に相当し、藩の垣根を超えた国民代表から成る下院はドイツ帝国議会に対応する。津田案の上院は確かに封建制の枠組みであるが、下院は近代的である。連邦制の津田案も「列藩会議論」の枠を超えたものである。

松平案もユニークな内容である。松平案では、上院が10名、下院が30名と議員数が最小である。松平乗謨は下院に行政機能も持たせる議会統治制度を志向している。おそらく、上院は徳川政権の老中と若年寄を合わせたもの、下院は勘定奉行・外国奉行・寺社奉行・町奉行など江戸の行政機構を拡充したものとして考えていたのであろう⁽²⁸⁾。松平案は西洋の統治機構を模倣しようとしておらず、徳川政権の延長上に近代国家化を目指そうとしていた。西洋とは異なる日本独自の近代化の方向性を模索していたのである。

(4) 内閣と行政

赤松案は、「天子ニ侍する宰相ハ大君・堂上方・諸侯方・御旗本之内、道理ニ明ニシて方今之事務ニ通し、万国之事情を知り候人を撰て六人を侍せしめ、一人ハ大閣老ニ而国政を司り、一人ハ錢貸出納を司り、一人ハ外国交際を司り、一人ハ海陸軍事を司り、一人ハ刑法を司り、一人ハ租税を司る宰相とし、其以下之諸官吏も皆門閥を論せず人撰」としている。すなわち、天皇の下に首相、財務大臣、外務大臣、陸海軍大臣、司法大臣、税務大臣の6人の大臣を選出して内閣を組織する。議会権限に「諸官之人選」があることから、大君・公卿・諸侯・旗本より選ぶ6人の宰相は主に上院議員から、大臣を支える諸官は主に下院議員から選出することを想定していたと思われる。議院内閣制である。

津田案において「総政府の大頭領は兼て日本全国軍務の長官たるべき」とされ、連邦政府の「大頭領」が国軍司令官も兼任する。連邦政府は、「国内事務、外国事務、海軍、司法、寺社、財用・貨幣鑄造・会計」の6局を設け、その「参与」は大頭領が任命する。しかし、肝心の大頭領の選出方法は記載なしである。

松平案においては、先に述べたように下院の中に行政機能も持たせようとしていたので、議会から独立した内閣は存在しない。

西案では「大君は行法之権之元首と立て」とあり、徳川家当主が世襲で大君職を継承し、行政府の長となると定められていた。大君は「全国事務府」「外国事務府」「国益事務府」（道路、鉄道、鉱山開発、海運など）「度支事務府」（財務）「寺社事務府」という5つの官庁の宰相（大臣）を任命し、行政を行う。既述のように、その人事には議会の承認が必要であり、宰相のうち的一名は必ず議員がなることとされていた。

山本案は、内閣のような行政機構の説明が欠落している。

以上のように、赤松案・津田案・西案は、5人ないし6人の大臣からなる内閣を組織

して行政機構を運営しようとしている。赤松と西は、議会在閣の大任を任命ないし承認するので、議院内閣制と言ってよいだろう。ただし西案は、徳川家の世襲大君が行政の長であると同時に上院議長も兼ねるという点、大君に過大な権限と実務負担を与えすぎると思われる。

その点、津田案は、関東領の世襲「大君」と「総政府（連邦政府）」の「大頭領」を分離している。津田研究者の大久保利謙は、大君が大頭領も兼任することを想定していたと推定する⁽²⁹⁾。しかし筆者は、おそらく津田は大君と大頭領は同一人物になることも可能であるが、別人であってもよいと想定されていたと推測する。というのも、世襲制の大君では、器量が伴わない場合、連邦政府の大頭領を兼任するのはあまりに荷が重い。だからこそ、津田は、大君と別に「大頭領」を設置したのであろう。大君に十分な能力があれば大頭領になることも可能だが、そうでなければ大頭領は有能な人物を別を選ぶべきと考えていたのではあるまいか。

(5) 国民の権利と義務

津田・松平・西という徳川政権の内部から出て来た建白書には国民の権利と義務についての規定は見られない。この規定があるのは赤松案と山本案である。

赤松案には「国中之人民平等ニ御撫育相成、人々其性ニ準て充分を尽させ候事」とある。「国中之人民平等ニ御撫育」とは簡潔な表現ではあるが、すべての国民一人ひとりを平等に扱って育てということなので、近代憲法の根幹である法の下での平等を含意しよう。「人々其性に準じ充分を尽させ」とは、人間一人ひとりの個性や適性に合わせ、それぞれが自分のやりたい仕事を選んで存分に尽くすべきということなので、国民が個人として尊重され、職業選択の自由もあることを含意していると言えるだろう。これに続いて、納税の義務として「百姓之年貢掛り米を減し、諸民諸物ニ運上を賦し、遊楽不要ニ関り候諸業諸品ハ運上之割合を強くし、諸民平等ニ職務ニ尽力」とある。これは農民に対して重すぎる税率を引き下げ、あらゆる職種へ平等に課税せよということである。ただし賭博など遊楽の業種については例外として税率を高くせよという。また、教育については「漸々諸学校を増し、国中之人民を文明ニ育候儀、治国之基礎」とする。すべての国民に教育を与えよというのだから、義務教育の規定である。

山本案には「人ヲ束縛セズ、其所好ヲナシ長技ヲ尽クサシム可シ」とある。諸個人が束縛されず、その個性や長所を伸ばすようにすべきということであり、個性の尊重や職業選択の自由も含意されているといえるだろう。また「従来上下隔絶ノ弊ヲ止メ、貴賤混淆学術技芸ヲ磨シメ、官ニ当ルハ貴賤等級ヲ不諭」とある。身分制度をなくし、「貴賤」で差別することなく、誰でも学芸を磨き、官吏の採用にも出自を問うなどということである。教育については、「先ツ人材ヲ教育スベシ」「才女ハ猶ホ学バスベシ」とあり、

女子にも高等教育を受けさせる必要性を唱えていることは特筆されてよい。納税については「四民共ニ賦ヲ平均スルヲ善トス」「遊芸其外遊女屋等益ナキ者ニハ多分賦ヲ収シメ」とある。課税の平等化を唱えつつ、しかし賭博や遊郭などは「益なき」とし、例外的に税を重くすることを唱えている。また、財産について長子相続から均分相続への転換も訴えている。

以上のように、赤松と山本の提言には、国民の平等と基本的人権の確立が希求されている。課税の平等化と、例外として賭博や遊郭などに対しては税率の引き上げが唱えられている点など、同様の提言である。親交のあった二人が、日頃こうした問題を議論していたのであろうことをうかがわせる。

奥田晴樹は、赤松が「国中之人民平等ニ御撫育相成」とするのを、課税の平等化のみを指すのであって、身分制度の解体まで踏み込んだものではないと論じた⁽³⁰⁾。しかしそれに続く「人々其性ニ準て充分を尽させ」という規定は、身分による職業の世襲化や序列化を否定する文言であろう。また赤松は、議員の選出や官吏の人選についても、「門閥」や「貴賤」を考慮してはならないと繰り返し述べていることから、身分制の廃止を目指していることは明らかであろう。

(6) 地方自治

地方自治に関して、赤松案・津田案・西案・山本案は藩の存続を前提としている。しかし西以外の三名は藩の力を弱めようとしている。赤松は、上院も下院も議員選出の母体を藩から切り離すことにより、立法府を藩のしがらみから解放しようとしている。津田案は、日本を徳川の関東領、禁裏の山城国、その他の大名領からなる連邦国家と規定し、その上で下院議員は藩とは無関係に国民代表を選ぶことにより、封建制度を近代的な連邦国家へと発展させようとしている。山本案は、「封建ト郡県トノ間ノ制度ヲ立ツベシ」としており、藩は当面そのまましつつも、藩を近代的自治体へと移行させようというものであった。

明確に藩の廃止を志向しているのは、松平案である。松平案では、各藩の領地の3分の2を召し上げ、「州郡」を設置し、州郡ごとに上下の地方議会を設置。州郡議会も上・下に分け、藩主は州郡の上院議員に、藩士は「入札」で下院議員になるというものであった。これは廃藩置州構想とでも呼び得るものである。封建制度の廃止と近代的な中央集権体制を構築しようという方向性が明らかである。従来、明治維新政府であったからこそ廃藩置県を断行できたと考えられてきたが、松平案の存在は、徳川政権であっても廃藩置県を断行した可能性を示している。

しかしながら、松平案を実行に移そうとした場合、外様の西南諸藩は激しく抵抗していたであろう。松平も、これに抵抗する諸侯は、断然武力で討伐せよと主張しているの

で、内戦の勃発は避けられなかった。この構想は、明治維新の逆バージョンで、内戦に徳川が勝利して、諸侯の力を削いで、徳川が「廃藩置州」を断行するというシナリオである。

戦後歴史学は、幕末議会論が藩の廃止を訴えていないことをもって、封建制の再建策と論じてきた。しかし松平案は明確に廃藩を志向しているし、赤松案、津田案、山本案も藩の力を弱めようという志向性が見られる。赤松は民主的な選挙で議員が選出されれば、あとは領主権や身分制度などの諸問題も、議会の立法によって自ずと改革されていくと考えていたと思われる。それは赤松が、議会の主務として「人気一和之法律を立」と論じている通りである。

(7) 軍 事

赤松案には、「兵ハ数寡くして、利器を備へ熟練せるを上とす」とあり、平時には最新鋭の兵器を備えることを前提に必要最小限の軍備を訴えている。常備軍は志願兵制であり、陸軍2万8,000人、海軍3,000人。常備軍は最初のみ武士から選抜するが、徐々に庶民に門戸を広げた志願兵制に切り替えていく。外国から攻められた場合、この兵力では到底足りないので、松平春嶽宛の建白書には「乱世ニハ国中之男女尽く兵ニ用立」とある。戦時には国中の男女がすべて民兵として防衛にあたるというのだ。そのため「諸民皆其土地へ教師を出して平常操練せしめ」とする。戦時に備えて全国民が定期的に軍事訓練を受けよということである。これは徴兵制ではなく、ふだんは各々の仕事をしながら定期的に軍事訓練を受けるという構想だ。

津田案では、海軍は「総政府」（＝連邦政府）の所管、陸軍は旧徳川領である関東領の所管とされている。そして連邦政府の大頭領が「全国軍務の長官」となる。陸軍を徳川家が掌握し続けるというのは、徳川の権力を温存させるための幕臣としての苦心の案であろう。

松平案には、「諸大名私家の兵卒留置候ニ不及義ニ御制度御定」とある。各大名の個別の軍事力は廃止せよということである。さらに「御当家御始諸大名尽く高三分之ニヲ上納」「御国之海陸軍御設各地要所ニ屯営」「全国守護之兵と仕候」「御当家ニ而全国守護兵之惣御指揮」とする。すなわち、徳川家も大名も領地の3分の2を上納し、それを財源に「全国守護之兵」（＝国軍）を建設し、全国各地に駐屯させ、徳川大君は国軍の総司令官となるべきという。

西案では、「兵馬戦艦の権は公儀御領は御領限り、諸大名封境内は境内限」とあり、当面は従来通り徳川領も各藩の領内も、それぞれ自前の軍事力で防衛することになっており、国軍の創設は将来の課題となっている。

山本案では、「軍卒ハ禄ノ大小ニ因リ一家ヨリ一人或ハ半人出サシム可シ、年齢十八

九ヨリ二十五迄ヲ常備兵トシ、二十六ヨリ三十迄ヲ国衛兵トシ、三十一ヨリ三十五迄ヲ第二国衛兵トス」とある。すなわち武士は禄に応じて、一家族から0.5人～1人を必ず兵役に出せということである。ただし学術技芸を志す者は、代人をたてることができる。これは武士に限定した徴兵制であるが、これを実行した場合、国軍の兵力は20万人規模になると思われる。山本の盟友の赤松が常備軍は陸海を含めて3万人程度でよいとしていたのと比べると、大規模である。

比較すると、赤松案・津田案・松平案は各藩の軍事力をなくして国軍に一元化しようとしており、西案と山本案は各藩の軍事権を当面はそのままにしている。松平案と山本案は大きな軍隊を志向しているが、赤松案は必要最小限の軍隊を唱えている。赤松案の常備軍は志願兵制で最小限に留めつつ、戦時にはすべての男女を民兵として国土防衛に当たる。すべての男女が参政権を持つ国民国家において、すべての男女が防衛義務も負うという近代民主国家の国民軍の構想といってよいだろう。

もっとも赤松は、松平春嶽への建白書で「国中之男女」と書いて、それが批判を受けた模様である。男尊女卑の強い薩摩藩に建白書を提出する際には「国中之男女」ではなく「国中之男子」と書き換えていた。

V 結 論

慶応3年、日本で最初の憲法草案作成の波があった。徳川政権の側から出ていた憲法草案としては、津田真道と松平乗謨と西周の三つの構想があり、徳川自ら議会を設置しようと動いていたことを示している。かりに明治維新がなく、徳川が自らの政体を近代化させていったとしても、薩長政権よりも早く議会を誕生させ、立憲政体に移行していたであろう。

西案は、藩の枠組みはそのままに諸藩の代表に立法権を与えつつ、それを抑止するため行政府の長である徳川大君にも強大な権力を与えてバランスを図ろうとするものであった。松平案は、封建制の廃止と中央集権化を志向しており、統治機構は徳川政権の制度をベースに近代化を図ろうというものであった。津田案は、藩を当面そのままに封建的分権体制を継承しつつも、近代的な連邦国家へ移行させようとするものであった。

もっとも徳川方から出ている憲法草案は、大なり小なり徳川家が持つ特別な権力を温存させようとしているため、西南諸藩との軋轢は避けられなかったであろう。松平案を実施に移せば西南諸藩の激しい反発を生むことは必定であり、内戦を引き起こす可能性は高かった。徳川大君に強大な権限が集中する西案も、少なからぬ反発を生むだろう。比較的穏健なのは津田案であるが、陸軍を連邦政府の所管ではなく、徳川の所管としている点など、反発を生む要素がある。

それと比較すると、赤松案と山本案は、親徳川の立場に立つものではなく、徳川も外様諸藩も対等な立場で、天皇の下での挙国一致の新政権を目指す内容であった。特定勢力に偏向していないので、対立する諸勢力を和解させ、近代国家にソフトランディングさせる可能性はあったといえる。普通選挙で選ばれた議員からなる議会を国権の最高機関とするという赤松案は、現行憲法にも通じる内容であり、総合的に見て慶応年間の憲法構想の白眉と言ってよいだろう。赤松は薩摩の軍事教官として薩摩藩に影響力があつたから、薩摩の西郷と大久保が武力討幕に踏み切ることなく、平和的な大政奉還の路線を模索していれば、この構想は実現する可能性が十分にあったといえる。

結論として、幕末議会議論が押しなべて封建的なものであり、近代的な新政府を創出する力がなかったから武力で徳川を倒すしかなかったという、戦後歴史学の解釈は修正される必要があろう。

《注》

- (1) たとえば原口清と石井孝は、西周の「議題草案」を徳川慶喜の意志そのものと見た上で、西の憲法草案が列藩同盟権力を目指すのか（原口）、それとも徳川絶対主義体制を目指すのか（石井）という解釈の相違から、激しい論争を繰り広げた。原口清『戊辰戦争』（塙書房、1963年）。石井孝『維新の内乱』（至誠堂、1968年）。
大久保健晴は、原口説や石井説を批判し、西の構想は「行政権と立法権の制度的均衡抑制関係の構築によって、徳川家と列藩諸侯勢力との協調体制」を創出し、漸次的に近代化を促そうとしたものであると論じた。大久保健晴『近代日本の政治構想とオランダ [増補新装版]』（東京大学出版会、2022年、56～58頁）。
- (2) 幕末議会議論を紹介した文献としては以下のものを参照されたい。尾佐竹猛『維新前後に於ける立憲思想』（文化生活研究会、1925年）。尾佐竹猛『日本憲政史大綱（上）』（日本評論社、1938年）。尾佐竹猛『明治維新（下）』（宗高書房、1949年）。藤井甚太郎『日本憲法制定史』（雄山閣、1929年）。江村栄一『憲法構想』（岩波書店、1989年）。これらの文献に、赤松小三郎、西周、津田真道、松平乗謨の建白書は紹介されている。ただし山本覚馬の「管見」が紹介されているものはない。それぞれの建白書を横断的な視点で憲法論的に比較分析するという作業はなされていない。
- (3) 知野文哉『「坂本龍馬」の誕生』人文書院、2013年。そもそも「船中八策」とは、原本はおろか写本すら存在しない出所不明の文書であった。知野の研究によれば、「船中八策」の元になった文書は、弘松宣枝著『坂本龍馬』（明治29年、民友社刊）に書かれた「建議案十一箇条」であると結論している。それは龍馬の縁者である弘松の「記憶」の中にあつたテキストであると知野は結論している。その後、「建議案十一箇条」からさまざまに修正が加えられ、最終的に、権威ある日本史籍協会編の『坂本龍馬関係文書』に収録されてしまい、その権威から、あたかも実在した文書であるかのように扱われることになった。
- (4) 遠山茂樹『明治維新』（岩波文庫、2018年 [原著1951年]、158頁）。
- (5) 同上。
- (6) 坂野潤治『日本憲政史』（東京大学出版会、2008年）。
- (7) 坂野潤治『未完の明治維新』（ちくま新書、2007年、45～46頁）。
- (8) 渋沢栄一編『徳川慶喜公伝(4)』（平凡社東洋文庫、1968年 [原著大正6年]、41頁）。

- (9) 尾佐竹猛『維新前後に於ける立憲思想』(文化生活研究会, 1925年, 146頁)。
- (10) 前掲書, 176頁
- (11) 大久保利謙「日本国総制度・関東領制度」『大久保利謙歴史著作集5 幕末維新の洋学』(吉川弘文館, 1986年, 157~158頁)。
- (12) 奥田晴樹『立憲政体成立史の研究』(岩田書院, 2004年, 41~42頁)。
- (13) 青山忠正「慶応三年一二月九日の政変」明治維新史学会(編)『講座明治維新 第二巻 幕末政治と社会変動』(有志舎, 2011年, 229頁)。
- (14) 関良基『赤松小三郎ともう一つの明治維新』(作品社, 2016年)。
- (15) 岩下哲典「幕末日本における秩序創出の困難さ——坂本龍馬・赤松小三郎の新国家・新秩序構想と暗殺」岩下哲典他『東アジアの秩序を考える』(春風社, 2017年, 317~318頁)。
- (16) 大久保利謙「津田真道の著作とその時代」『津田真道——研究と伝記』(みすず書房, 1997年, 28~35頁)。
- (17) 前掲書, 31~45頁。
- (18) 前掲書, 55~64頁。
- (19) 市川武治『松平乗謨と五稜郭』(千曲川文庫, 1982年)。
- (20) 赤松小三郎の『英国歩兵練法』については以下の文献を参照されたい。河元由美子「幕末兵学者の英書翻訳——赤松小三郎・浅津富之助訳『英国歩兵練法』を中心に」『英学史研究』(第51号, 2018年10月, 103-109頁)。なお, 河元は, 赤松の『英国歩兵練法』を, 蘭書を介さず, 直接英書から日本語に訳された最初の訳書であるとする。
- (21) 関良基, 前掲書, 43~46頁。
- (22) 前掲書, 59~71頁。
- (23) 赤松小三郎の徳川政権宛ての建白書は, 歴史作家の桐野作人氏によって発見された(『信濃毎日新聞』2016年年6月1日)。盛岡藩の『慶応丁卯雜記』には, 「赤松小太郎卯五月幕府え建白」と書かれている。それに続いて, 「数件御改正之儀奉申上候口上書」としてほぼ島津久光宛のものと同様の内容の文章が転載されている。赤松が幕府へ建白したものを盛岡藩が転写していたことから, その存在が確認されたのである。なお, この徳川政権宛の建白書は, 大信田尚一郎氏によって翻刻され自費出版されている。大信田尚一郎『信州上田藩士 赤松小三郎 幕府宛建白書 天幕御合体諸藩一和 上下議政局』(いわて教育文化研究所, 2018年)。
- (24) 廣沢安宅(莊田三平編)『幕末會津志士傳 一名孤忠録』(著者刊, 1923年)。
- (25) 青山霞村『増補改訂 山本覚馬傳』(京都ライトハウス刊, 1976年, 208頁)。なお, 読みやすいように句読点をふった。
- (26) 松平乗謨「病夫譚語」写本は, 維新史料稿本データベースの以下のサイトにある。
<https://cliimg.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/view/idata/M00/M/20/KE147/0680> (2022年6月6日最終閲覧)
- (27) 「病夫譚語」の全文ではないが, 主要部分が抜粋紹介されている文献としては, 例えば, 尾佐竹猛『明治維新(下)』(宗高書房, 1949年, 958~960頁)を参照のこと。
- (28) この点については, 東洋大学の岩下哲典教授からご教示を受けた。
- (29) 大久保利謙「日本国総制度・関東領制度」『大久保利謙歴史著作集5 幕末維新の洋学』(吉川弘文館, 1986年, 158頁)。
- (30) 奥田晴樹『立憲政体成立史の研究』(岩田書院, 2004年, 41~42頁)。

(原稿受付 2022年6月6日)

ドイツ外交文書に記された桂太郎の生涯

田 野 武 夫

The Life of Taro Katsura as Recorded in German Diplomatic Documents

Takeo TANO

要 旨

ベルリン外務省政治文書館所収の桂太郎関連の資料を分析する。ベルリン日本公使館での武官着任時の記録から逝去関連に至る文書において、桂の生涯に渡るドイツとの関係が記録されている。国家運営における財政健全化への志向など、重要な政治決定がドイツでの研鑽を基盤としていることが資料から窺える。桂が日独親善をライフワークとしたこと、またドイツが桂を国益上の最重要人物としていた事実が資料から判明する。

キーワード：桂太郎，日独関係，日本政治史

1. 序

桂太郎とドイツの関係については、主に日本語の資料において青年期の研鑽のエピソードとして扱われてきた。ドイツ側の文書による桂とドイツとの関係については研究がなされておらず、この不足を補うべく拙論「桂太郎とドイツ—ドイツ国内資料に見る政治姿勢と平和志向」において新たな視点の分析を行い、桂とドイツとの緊密な関係が構築されていた事実を検証した⁽¹⁾。特に桂太郎との「対談」Unterredung とのタイトルが付された文書には、当時の桂の東アジア情勢に関する分析また平和志向を基盤とした政治的態度を知るうえで重要な証言が多く含まれている。そこでは桂が常にドイツ側に平和志向を表明していたこと、ドイツ留学・滞在で得た経験・知識を自身の政治人生の基盤としていたこと、ポーツマス条約締結を決断する際に普墺戦争でのビスマルクを念頭に置いていたことなどが記録されており、桂とドイツとの深い関係性が明らかとなった。

前論文では紙面の制約の関係もあり、主に対談の内容に関する分析を行った。この対談以外にも桂太郎に言及する文書が多数存在している。本論ではこれらの資料の分析を通して、青年期から晩年に至る長期的視点から、桂とドイツとの関係を多面的に分析

する。

2. 桂太郎に関するドイツ国内の資料

桂太郎の関連資料に関して、プロイセン及び軍事関連の分野において年代的にドイツ国内で所蔵の可能性があるのは、以下の資料館である。

「ベルリン・リヒターフェルデ連邦文書館」 Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde

「ベルリン州立文書館」 Landesarchiv Berlin

「プロイセン枢密文書館」 Geheimes Staatsarchiv Preußischer Kulturbesitz

「フライブルク連邦文書館」 Bundesarchiv-Militärarchiv, Freiburg im Breisgau

「外務省政治文書館」 Politisches Archiv des Auswärtigen Amts Berlin

これらの文書館において、特に軍事関連の文書を主に所収しているフライブルク連邦資料館には、桂がベルリンで活動した時期の資料はほとんど残されてない。この資料館の前身であるポツダム文書館が戦災で、参謀本部関連の資料を含む多くのプロイセン軍事関連資料が焼失したことがその要因といえる。プロイセン枢密文書館では貴重な日本関連資料が所収されているが、年代的に桂太郎の活動期と重なっておらず、桂関係の直接的資料は見出すことはできない。ベルリン・リヒターフェルデ連邦文書館には日本大使館関連の資料を所収しているものの、桂太郎に言及する資料は見出せなかった。

これらの中で桂太郎に関連する資料を集中的に有しているのが、ベルリンの外務省政治文書館である。同文書館において、桂太郎の活動期と時期が重なり、桂への言及が想定される以下のタイトルの外交文書に関して調査を行った。

「日本公使館武官」 Der Militärattaché der Japanischen Gesandtschaft

(R251.024)

「ベルリン日本公使館」 Die japanische Gesandtschaft in Berlin (R250.986)

「独日関係」 Beziehungen Deutschlands zu Japan (R2.100–R2.108)

「日本の政治家」 Japanische Staatsmänner (R18.683–R18.693)

「日本の省庁」 Japanische Ministerien (R18.705–R18.711)

このカテゴリー以外にも桂太郎に言及している文書がある可能性はある。ただし日独関係という視点から見るとこれらの文書のカテゴリーが有力であると想定される。上記の資料のうち、桂太郎がドイツで活動を始めた1870年から死去した1913年までの文書

において、桂太郎に言及している文書数は年別では以下の通りとなっている。

1875年(3), 1878年(2), 1889年(1), 1891年(5), 1896年(4), 1898年(7),
1900年(5), 1901年(7), 1903年(10), 1904年(2), 1905年(8), 1906年(7),
1907年(11), 1908年(37), 1909年(8), 1910年(9), 1911年(21), 1912年(58),
1913年(21)

これらの数を見ると桂の首相在任前の文書数は27, 1901年の首相在任後は194となっており、首相就任後が数の上で圧倒している。第一次内閣(1901年6月2日-1906年1月7日)の文書数については28であり、首相在任期間が最も長いにもかかわらず、比較的数字は少ない。第一次内閣終了から第二次内閣までの移行期の1907年は19点と短期間ながら多い数字となっている。これは首相の座を辞し、時間的余裕ができたためドイツ側と接する機会を多く持つことができたという環境要因が考えられよう。第二次内閣期(1908年6月14日-1911年8月30日)では、文書数が62となり、第一次内閣時を大きく上回る数字となっている。ドイツ側にとって桂太郎の重要度が飛躍的に増している状況が伺える。注目すべきは1912年の文書数が58と年別で突出している事実である。この期間の文書は第二次内閣辞任後と第三次内閣発足時の移行期間が大半を占める。特に、桂太郎の欧州視察に向けて準備されたドイツ側の資料が多数を占めている。このことから欧州視察において、ドイツ側が如何に桂太郎という存在を重視していたことが分かる。第三次内閣(1912年12月21日-1913年2月20日)は約3か月の短命であったが文書数は20近くに上っている。その後の文書に関しても、桂逝去に関連する重要文書も残されている。

これらの文書の状況を鑑みると、ドイツ側の桂への関心は第一次内閣時もさることながら、第一次内閣終了以降に飛躍的に高まり、1912年の欧州訪問時に最高潮となっているといえる。桂とのドイツとの関係は、従来の日本語ベースでの研究では青年期の留学関係が中心的なテーマとなっていたが、これとは反対にドイツ側の資料では晩年期に資料が集中していることも判る。これらの資料は、桂という固有名詞に言及しただけのものもあれば、桂個人との対談など桂が前面に扱われている文書もある。後者の重要文書に関しても第一次内閣の終了時期以降に多く含まれており、やはり晩年期に集中しているといえるだろう。

3. 1870年代の桂太郎とドイツ

桂太郎は1870年から1873年にベルリンに留学し、1875年から1878年まで、在外武

官として再びベルリンに滞在した。桂は、1870年にベルリンに到着後、青木周蔵、佐藤進、荻原某の助力でドイツ語習得にむけて語学に従事したと述べている⁽²⁾。翌年よりパリース少将宅に同居し、2年半軍事学を研究した⁽³⁾。しかしながら、桂のベルリン滞在前期の活動内容の詳細に関する記録は残っていない。

ただしパリース少将の住居については、桂が渡独した1870年のベルリン市内の住所録がベルリン州立図書館に残っている。そこには“Paris, F. A. General•Major”という名があり、パリースの名“Friedrich Augsut Paris”と一致している。またパリースの住所については「少将」General•Majorという称号とともに「個人軍事研究所」及び「寄宿学校」との表記がなされており、パリース少将本人と断定できる。そこに記載されている住所は「テルトウ通り (Teltow Straße) 7b.II. 11-12」となっている⁽⁴⁾。このテルトウ通りは、現在のクロイツベルク区オーベントラウト通り (Obentrautstraße) に相当し、桂はここに居住していたと考えられる。

桂が日本公使館に武官として着任した時期のドイツ国内の資料としては、1875年4月27日の日付でドイツ外務省に送られた文書が外務省政治文書館に現存する。資料冊子「日本公使館武官」(R25.1024)の先頭ページがその資料であり、以下がその内容である。実物は裏表二頁の文書となっており、一ページ目の下に宛名が書かれ、文書の途中から二頁に移っている。これが現時点において、ドイツにおける桂に関する最古の文書と思われる。

1 頁

江戸 1875年4月27日

閣下に

心より謹んでご報告

申し上げます。当地の国防大臣より、

懇請を受けました。桂少佐が

次の役職である

武官としてベルリンに参りますので

外務省および

プロイセン王国国防省に特別に

ご推薦頂きたいとのことです。同氏には

在ベルリン日本公使館によって

いずれにせよあらゆる望ましい援助が

氏の目的達成のために

確約されることと存じますが、（しかし

宛

外務次官

フォン・ビューロー

閣下

ベルリン

2 頁

しかし国防大臣の望みに沿うべき
とも思うところでございます。

閣下におかれましては、
それ故に上の将校に閣下の
ご援助をお与え頂き、同氏を
場合によりましては王国
国防省に格別のご厚意をもって
ご推薦いただくことを
ここよりお願い申し上げます。

ホルレーベン

引用文にあるように、この文書の末尾にはホルレーベン（Holleben）とのメモ書きが残されている。テオドル・フォン・ホルレーベン（Theodor von Holleben 1840-1913）は、1875 年から 4 月 7 日から 1875 年 11 月 2 日まで短期間東京のドイツ公使館の代理公使を務めた。その後、1886 年から 1892 年まで再び東京に戻り公使の職を務めている⁽⁵⁾。OAG の会長を務めるなど日独交流にも重要な役割を果たした人物である。

桂への強い推薦状をホルレーベンが書いたのは、最初の短期の日本滞在の折で、しかも来日直後の時期である。宛名となっている「フォン・ビューロー」には「外務次官」Staatssekretär des Auswärtigen Amtes とある。外交関連で多くの名があるビューロー家の人物のうちで 1875 年の時点で Staatssekretär の役職名を持っていた人物では、ベルンハルト・エルンスト・フォン・ビューロー（1815-1879）が該当する⁽⁶⁾。また「国防大臣」Kriegsminister とは、当時陸軍卿の地位にいた山縣有朋である。『自伝』に書かれているようなベルリンの参謀本部での桂への厚遇の理由の一つとして、このホルレーベンの推薦があったと想定される。

この文書に続いて、「武官」の文書3頁目に青木周蔵による桂太郎到着の報告文書が収められている。この文書は1875年6月1日付のベルリンにおいて「外務省局長・枢密顧問フィリップスボルン閣下」宛に作成された報告書となっている。このフィリップスボルンは、1863年より外務省の局長（Ministerialdirektor）を務め、1873年から枢密顧問（Wirklicher Geheimrat）の称号を得たマクシミリアン・フォン・フィリップスボルン（Maximilian von Philipsborn 1815-1885）と考えられる⁽⁷⁾。同文書において青木は、桂太郎が日本帝国の武官に任命され数日前に到着したとの報告を行っている。この報告から、桂が1875年5月30日前後にベルリンに到着した事実が伺える。

1878年1月18日付の文書では、当時の日本公使館員の一覧が報告されている。ここでは公使の青木周蔵を筆頭に、三宮義胤（公使館秘書官）、河島醇（公使館専門担当官）本尾敬三郎（公使館専門担当官）と続き、一覧の最後に「桂太郎、少佐、公使館付き武官」と表記されている。一覧の末尾に桂の名が記されていることに桂の若き日の研鑽の時代が反映されているといえよう。また1878年5月22日の日付の三宮義胤の署名によるビューロー宛の文書では、「武官・桂太郎」が帰国したことが、報告されている。

桂は1875年に独逸公使館武官に任命され、同年6月にドイツに到着した。早速彼はドイツ政府に依頼し、軍事行政研究の研究を開始している⁽⁸⁾。桂はプロイセン第三軍団監督部に就き、軍事行政の中央機関（プロミンシャルオルガン）の研究を始めたとされる。

桂は自伝において、この研究を手助けしてくれた人物として「第三軍団の監督部長エンゲルハルト」の名前を挙げているが、この人物と思われる住所が先のベルリン文書館のベルリン市住所録に記載されている。そこには、Engelhard, W の名で「第三郡団一等監督」 Militair-Intendant des 3. Armee-Corps と表記され、その住所が「ゲンティーナー通り」Genthinerstraße 2.1. 11-1 と記されている⁽⁹⁾。この通りはティアガルテン地区に現存する通りである。またプロイセンの行政文書集「アクタ・ボルシカ」Acta Borussica の人名索引に Engelhard, Wilhelm (1827-1896) という名があり、「1867年ベルリン第三軍団監督」1867 Intendant III. AK Berlin と経歴が記されており⁽¹⁰⁾、桂の自伝における表記と一致する。よって桂が世話になった「エンゲルハルト」とはこの「ヴィルヘルム・エンゲルハルト」と断定できる。

また2020年よりオンライン検索を開始した「ドイツ人名録」のサイトでは、このエンゲルハルトの名が登録されており、軍の食料供給に多大な貢献をしたプロイセン王室の枢密顧問としての経歴が記載されている。エンゲルハルトは、1870年の普仏戦争でフランスに残った占領軍の食料供給の総指揮を任せられ、帰国後第三軍団の監督（Intendatur）の業務を担当し、1884年に「陸軍省の糧食部長」Chef der Verpflegungsabtheilung im Kriegsministerium となっている⁽¹¹⁾。彼の主たる功績は

軍への安定的な食糧供給のためのシステム構築であり、普仏戦争における食糧の備蓄、節約 (Ersparnisse) が持続的な利益をもたらしたと記されている。桂がこの人物と親しく接し、桂の第三軍での実地調査の便宜を図っていた事実から、桂もこの供給システムについて学んでいたと考えられる。その核となる要素は組織の安定運営と経済的合理性であり、これが桂の後の国家運営における強いコスト意識に影響を与えたと推測できる。

4. 第一次内閣前後

初期の文書で桂個人に焦点を当てている重要な文書として、「日本の省庁」Japanische Ministerien の冊子にある 1900 年 11 月 29 日と 12 月 27 日の二つが挙げられる⁽¹²⁾。ヴェーデル (Wedel)⁽¹³⁾ の署名を持つ、ビューロー宛のこの二つの手書きの文書は、伊藤内閣の陸軍大臣 (Kriegsminister) を務める桂太郎の大臣交代のプロセスが記録されている。

11 月 29 日付の報告書「陸軍大臣」der Kriegsminister では、桂が伊藤内閣において 2 度の解任願いの後、健康上の理由で再び解任を願い出た事実が報告されている。桂は閣議にも参加しておらず、事実上内閣の一員であることを放棄しているとされる。

桂のこの抵抗の理由として、伊藤の軍事行政が挙げられる。報告によれば、桂の不満の理由は伊藤内閣が陸軍において人気がないこと、また山縣内閣で非常に大きな発言力を持っていた桂が、特に韓国での強硬策を支持していた点を挙げている。さらに青木周蔵からの情報として、桂が日本の兵力を弱めることに反対している一方で、伊藤が中国での兵力を当初よりも大幅に減らした事実を指摘し、このことも桂をいらだかせたと推察している。桂は陸軍から高い信頼を得ており、他に陸軍大臣にふさわしい人物がいなと言われていたことから、伊藤は桂を説得するために、無期限の療養休暇を与えることを強く望んでいるとされる。

この報告からは、脆弱な伊藤内閣の実情と軍の強い信頼を背景にこれに見切りを付けようとする桂の様子が記されている。桂の実力とその存在力が、ドイツ本国に情報として送られている点は注目に値しよう。

約 1 か月後の 12 月 27 日付の文書「新任の陸軍大臣桂」der neuernannte Kriegsminister では、11 月中旬に陸軍大臣の解任を申し出ていた桂の後継者について報告している。「児玉男爵」が台湾総督を続けることを条件に、陸軍大臣の職を引き受けたが、この理由として彼が「伊藤内閣が長続きすると思っていない」という点を挙げている。

報告では、この児玉源太郎が酷評され、それによって桂への信頼が際立つといった書き方がなされている。この新任の陸軍大臣は、陸軍から高い信頼を得ていた桂に完全に

取って代わることはできないと予想している。兎玉は陸軍副大臣を務めたこともあり、非常に有能な将校だと思われているが、評判はあまり良くない。その理由として、兎玉が多額の借金を抱えている「道楽者」Lebemann であると断じる。さらに締め言葉として、政治的には兎玉は「フランス人の友人」Franzosenfreund とされている。

この文書全体に見られるトーンは、桂太郎の軍における突出した信頼と政治的实力であろう。兎玉に対する酷評とフランス派への言及がより桂の存在を浮き彫りにしている。

この陸軍大臣での経緯の後、桂をメインとした文書は、第一次桂内閣の発足について報告した1902年6月2日ビューロー宛の報告が挙げられる⁽¹⁴⁾。同文書では各大臣の名が列挙された後、桂内閣成立のプロセスが説明される。伊藤博文の「政友会」の影響が強く、桂内閣成立には多くの困難が伴ったとされる。伊藤は首相退任後も政友会の組織作りに専念し、桂内閣に対しても客観的な検討を通して是々非々の対応をすると述べている。他方で、桂内閣の閣僚の多くは山縣派の議員であり、政友会との衝突が起きれば大きな困難が生じるとしている。

5. 第二次内閣前後

第二次内閣発足時の1908年7月上旬から中旬にかけて、桂太郎に言及する文書が多く存在する。これは第一次内閣発足時よりも数が多い。

桂の新内閣発足の可能性を伝える電報が、1908年7月7日の日付で送られている。翌日の7月8日付の文書では、桂の再登板が報告され、親独的な小村寿太郎への言及とともに、ドイツにとってこの流れは極めて好都合である一方で、西園寺はドイツにとって不利益な存在と明言されている (R18.691)。また同日付の文書「来るべき内閣」Das kommende Ministerium では、9ページにわたって桂第二次内閣について報告がなされている (R18.710)。7月12日付の報告「西園寺内閣の退陣と日本の報道」Der Rücktritt des Kabinetts Saionji und die Japanische Presse では、西園寺内閣に関する日本の各新聞の記事内容の報告がなされ、桂第二次内閣発足日の1908年7月14日の日付で内閣発足の電報がドイツ本国に打たれている (R18.710)。

第二次内閣発足時では、7月18日と19日に桂に言及した文書が多数作成されている。これらの文書の内容で特徴的なことは、「桂侯爵の内閣への姿勢」Stellung des Marquis Katsura zum Ministerium (R18.710) で言及されているように桂の親独的姿勢であり、これがドイツにとって有益であるという言及である。また同文書では、ベルリンの武官時代等のドイツでの活動や日本の新聞での扱いが詳細に報告されている。また18日付の武官エツェルの報告などに見られるように、桂が人気の後藤新平を通信大臣に任命した事実など、後藤への言及も複数なされている点も特徴として挙げられる

(R18.691)。

また同じ日付の駐日ドイツ大使ムム⁽¹⁵⁾の報告「首相桂侯爵」Ministerpräsident Marquis Katsura では、ドイツ留学、滞在勤務も含め桂の生誕後の経歴の詳細が記されている。そこでは、ポツダム条約締結後、その内容に不満を持った民衆が、桂が懇意にする芸者の家にも押しかけ、命の危険に晒された事実まで報告されている。桂は山縣有朋派の人間であるが、その高いコミュニケーション能力で、自分と意見の合わない人間ともうまくやっていける度量を持っているとも記されている。

この報告の締め括りにおいても、桂の新ドイツ的な側面が強調されている点は注目に値しよう。桂はドイツでの教育の結果、ドイツに対して強い共感を持ち、その共感の根拠はドイツが日本陸軍の発展にとって重要であるという理解に基づいているとされる。

第二次政権の直前のドイツ協会学校関連の熱心な活動についても報告がなされている。ムムは、桂が1883年にドイツ協会学校の共同設立者の一人となり、1887年から1890年まで理事を務めた経緯を紹介している。さらに桂は今でもこの学校に強い関心を持ち、首相就任数日前にムムのもとを訪ね、同年秋に行われるこの学校の創立26周年記念に、同校の教員に最高勲章を授与の式典に参加するよう要請した、と報告している。またカール・アントン・フォン・ホーエンツォレルン公 (Prinzen Karl Anton von Hohenzollern) が日露戦争の現場視察後に桂にプロイセン王国赤鷲勲章 大十字章を授与した事実の報告を以て、ムムはドイツ帝国宰相フォン・ビューローへの報告を終えている。

その他複数の桂に関する報告がなされ、20日付の報告では桂との直接の対談についてその内容が詳細に報告されている⁽¹⁶⁾。

7月以降も断続的に桂に関する報告がなされており、やはり親しいドイツ的姿勢が強調されている。それ故にムムは日本における桂とドイツの評価に気を遣っていた事実が認められる。彼は「時事新報」がロシアの新聞「ノーボエ・ブレーミヤ」Novoye Wremja [sic] の記事の引用として、桂が日本の新内閣の外交政策は「言葉ではなく行動」の原則で導かれるべきと主張した、と述べる。桂が、米国、中国、ロシアに対して「論に明け暮れるより、もっと説得力のある方法」を取るべきと力による対処を示唆したという内容である。ムムはこの言説が元々ドイツの「フォス新聞」Vossische Zeitung から引用されたものであり、桂が同紙の特派員に語ったものとされるとの内容を紹介している。ムムはこれを全くのでっちあげとし、同じ主張を持つ複数の新聞の意見を紹介した上で、さらにフォス紙の実際の特派員であるシュレーダーの反論の言説を提示している。さらにムムはこの件について、桂との直接のやりとりを報告している。それによれば、桂はフォス新聞の記者とは接触しておらず、そのような発言はしていないと答え、また桂はこの件に関して全く意に介していない、と記されている。この報告

から明らかとなるのは、日本のメディアにおけるドイツの扱いにムムが神経を尖らせている事実と、彼と桂との距離の近さである。また桂が自身のデマに関して、大して気に留めていなかった事実も認めることができる⁽¹⁷⁾。

1910年1月4日付の8ページに渡るムムの報告は、桂を中心とする当時の政治状況を詳しく報告している。とりわけ1907年以降の日本の経済不況とその回復困難な状況について説明がなされている。貿易産業のみならず、米の収穫においても芳しい状況ではなく、日本経済は衰退の一途を辿っているとムムは主張する。しかし桂内閣の金融政策は国内の経済状況に大きな影響を及ぼしてはいないものの、海外での日本の信用は間違いなく強化されたと述べ、桂の経済政策に高い評価を与えている。桂は自らの財務のポートフォリオを持っており、政府支出の徹底的な節約と高額な国家債務の精力的な削減が最重要であることを正しく認識し、「真の軍人的なやり方で」nach echter Soldatenart それを実行に移しているとされる。ここでムムが強調しているのは、桂の緊縮財政による財政上の国際的信用の向上であり、またこれが軍人的性質によってなされているという点である。この軍人的とは、妥協を排した直線的な姿勢の強調とも取れるが、これはドイツ滞在時に形成されたものであり、先に述べたようにエンゲルハルトのような高いコスト意識とその実行力の影響等も考えられるであろう。その後、桂と政友会との関係、日中、日露関係、韓国併合の現状への報告がなされている⁽¹⁸⁾。

1910年1月9日の日付でベルリンにて報告された報告書には、日本のお雇い外国人であるレーンホルム(Ludwig Hermann Löenholt, 1854-不詳)と桂太郎と対談について報告がなされている。これは、レーンホルムが2回にわたって桂太郎と対談した内容を忠実に再現しようとしているものとされ、間接的ではあるが、興味深い内容となっている。

レーンホルムは1909年10月後半に桂太郎を訪ね、日独関係についての考えを尋ねている。これに対し桂は、ドイツに大きなシンパシーを抱いており、プロイセンの厳格で質素な精神のおかげで現在の自分があると答えている。桂は陸軍でドイツ式の陸軍システムを日本に導入し、日独の政治的友好関係の発展に尽力してきたとしている。桂は日独関係が三国干渉以前の状況に戻り緊密になることを望んでおり、特にマスコミ対応に関して、何か自分たちの側に問題があればそれを指摘して欲しいとも述べている。

同年11月27日に2回目の会談が行われた。ここでは桂の財政に対する緊縮的な態度について報告されている。桂によれば、日本は日露戦争の時に財政的にやや無理をし、健全な財政状況回復するために軍事費やその他の支出を制限しなければならなかった。西園寺政権では軍に対する予算削減は無理であったが自分にはそれが可能であり、陸軍と海軍の支出を厳しく制限し、同様に必ずしも絶対に必要でないと思われる支出も完全に抑えたと述べている。第二点として、外交政策において他国との摩擦を減らすことを

目標とする桂の姿勢を挙げている。特に中国に関して、日本が中国の独立を望んでいることを中国人に理解させることを桂が目指していると明記している。ここで桂が表明しているのは世界平和への貢献である。拙論で述べたように、桂は平和への希求をドイツ側に継続的に表明しているが、レーンホルムとの対談においてもこれが示されている。

その後レーンホルムは、マスコミにおける桂の否定的論調について尋ね、この点について桂がほとんど気にかけていないと報告している。レーンホルムは、自身がドイツの世論が日本で誤解されないように尽力したと述べているが、同時にイギリスフランスのマスコミによる日本への影響について懸念を述べている。

桂の禁欲的で質素な健全財政の取り組みが、ここでも述べられていることは注目に値しよう。そして本人自ら述べているように、それがプロイセンの軍事体制から来ていることを認めている。桂の政治及び経済政策がドイツでの体験を基盤にしていることがここでも認められるのである。

6. 日独協会関発足時

桂内閣退陣後、桂の親ドイツ主義は民間活動においても実践されており、その内容がドイツ本国にも報告されている。1912年6月18日付の駐日ドイツ大使レックス⁽¹⁹⁾による報告書では、日独協会設立に関する詳細な報告がなされている⁽²⁰⁾。ここでは同会設立の経緯に関する説明と並んで、設立に最も貢献した人物として桂太郎の名が明記されている。桂はこのように政治家としてだけでなく、個人としても常に日独交流の促進に多方面で尽力してきた。桂にとってドイツとの交流促進は、彼のライフワークであったといえよう。

同報告書では、前日の17日にドイツ大使館で開催された日独協会の夕食会に関する報告もなされている。同会には180名が参加しており、主たる参加者として、「山縣侯爵、桂侯爵、後藤男爵、青木伯爵、帝国大学総長濱尾男爵、永井教授、参謀次長大島陸軍少将」の名が報告されている。

ここでレックスが強調しているのは、出席を知らされていなかった山縣有朋の登場である。レックスはこのサプライズをドイツに対する敬意の現れと理解している。75歳になる山縣は、現在ではほとんど外出しないものの、未だに政府の精神的指導者であると報告されている。

日独協会のこの夕食会は初めてドイツ大使館において執り行われたものであるが、レックスは山縣の在席に対する謝意と、桂太郎の欧州訪問とドイツ滞在の成功と願って乾杯の音頭を取っている。桂はこれに対し、大きな喜びを以ってドイツに赴きたいと返答し、ベルリンの日々が最も良い思い出となっている、また旧友と再会することを望んでいる

と返答している。夕食会ではドイツ料理とドイツビールが振舞われ、日本人出席者に良い印象を残したようにみえるとレックスは報告している。「教養ある日本人の中でドイツとより信頼に満ちた関係を志向する確かな動きが感じられることに疑問の余地はない」との確信をレックスは示し、報告を終えている。

7. 桂太郎逝去関連

欧州訪問関連以降⁽²¹⁾で桂を中心に扱っている文書として、桂の逝去に関する報告が挙げられる。ここでもドイツにとって桂太郎という存在が如何に重要であったかを窺い知ることができる。1913年10月19日付の報告では、政府関係者や一般国民の参列の元、桂の葬儀が大規模に行われた様子が記されている⁽²²⁾。伊藤博文の時と同じような国葬という形ではなかったものの、葬儀の外装はそれと遜色がなく、一般の参列者も多数で、これほどの多くの人間はおそらく伊藤の葬儀の時にしか見られなかったとレックスは述べている。

桂の死去は、彼が古くからの良好な日独関係の主な担い手であったという点で、ドイツにとって甚大な損失を意味するとレックスは主張する。三国干渉によって引き起こされた日本における反ドイツの風潮にもかかわらず、自らのドイツに対する共感を決して失わず、全てのドイツ人に対し最大の好意をもって接したと、桂が生涯にわたって貫いた親ドイツ的姿勢を彼は称賛する。

先に述べたドイツ大使館での日独協会の宴席についても、レックスは再び言及している。青木伯爵の指揮のもと日独協会が復活し、大使館にて多数の日独協会員とともに山縣有朋が出席したのも、すべて桂太郎の演出によるものとレックスは推察している。しかし70歳になる青木周蔵は、病気のため日独協会を十分にサポートできる状態にはないなど、桂無き日独関係の今後についてレックスは懸念を示す。桂の政治的遺産を引き継ぐのは誰か、その時点でまだ明確ではないとレックスは述べるが、可能性として寺内正毅、後藤新平、加藤寛治の三名の名を挙げ、報告を終えている。

1913年10月29日の報告書では、桂の死去に伴うドイツ側からの贈答品の金額の報告がなされている⁽²³⁾。そこでは桂侯爵の棺に敷かれた花輪に50円、銀冠と花輪リボンのWの文字18円、合わせて68円が支払われたと記載されている⁽²⁴⁾。

8. 結 語

これまで論じてきたように、桂が生涯に渡ってドイツと極めて密接な関係を維持していたことが、ドイツ側の資料全般から伺い知ることができる。またドイツにとっても国

益上、桂が最重要の人物であったことが判る。さらに桂自身が自らの政治家としてのキャリアにおいてドイツが果たした役割が極めて大きいことを自覚し、これを公言していることも資料から知ることができる。特に桂の留学時代から首相に至るまでの過程において、強いコスト意識の形成という点においてドイツでの体験が強い影響を与えていたことが特徴として挙げられる。これは桂が世話になったエンゲハルトの経歴や、桂自身のプロイセンを意識した大胆な予算削減での発言などに見ることができる。また首相退陣後にすぐにドイツ関係の活動に取り組んでいる事実も示す通り、軍事・政治的領域を超えたドイツとの関係維持が彼のライフワークであった。桂にとってドイツは生涯に渡って公私ともに極めて重要な存在であり続けた。ドイツ側もこれを明確に認識し、最大限に活用しようとしていた。ドイツ側の資料において桂に関する否定的言説は皆無に等しく、肯定的な言説のみが克明に記録されている。桂とドイツのこの共鳴関係が、桂に関するドイツ国内資料全般の特質ということができる。

《注》

- (1) 拙論「桂太郎とドイツ—ドイツ国内資料に見る政治姿勢と平和志向」、『海外事情』69 (1) (特集 拓殖大学の一〇〇年と世界), 拓殖大学海外事情研究所, 2021年, 40-55頁。
- (2) 桂太郎著, 宇野俊一校注『桂太郎自伝』, 平凡社, 1993年, 73頁。
- (3) 同74頁。
- (4) ベルリン州立図書館のデジタルサイトにおいて1870年の住所録においてパリースの住所を確認することができる。https://digital.zlb.de/viewer/image/34111732_1870/591/(2022年6月22日確認)
- (5) Vgl. Biographisches Handbuch des deutschen Auswärtigen Dienstes 1871-1945 (以下BHAD), Bd. 2, S. 351ff.
- (6) Vgl. BHAD, Bd. 1, S. 326f.
- (7) Vgl. BHAD, Bd. 3, S. 475.
- (8) 『桂太郎自伝』, 88頁。
- (9) パリースと同じくベルリン州立図書館のデジタルサイトにおいて1870年時点でのエンゲルハルトの住所が記載されている。https://digital.zlb.de/viewer/image/34111732_1870/202/(2022年6月22日確認)
- (10) Vgl. Acta Borussica, bearb.v. Hartwin Spenkuch, Bd. 8/II, Hildesheim 2003, S. 519.
- (11) <https://www.deutsche-biographie.de/sfz13320.html> (2022年6月22日確認)
- (12) R18.708.
- (13) Vgl. BHAD, Bd. 5, S. 199ff. ドイツ外務省関連人物として3名のWedelの名があるが、同時期に秘書官として日本に滞在していたBotho Graf von Wedel (1862-1943)と推定される。
- (14) R18.709.
- (15) Vgl. BHAD, Bd. 3, S. 326ff. Alfons Mumm von Schwarzenstein (1859-1914).
- (16) 拙論, 上掲書, 47頁。
- (17) R18.618. 1908年10月1日付の報告書「桂内閣の政治に関するフォス新聞」(Die Vossische Zeitung über die Politik des Kabinetts Katsura)。

- (18) R18.619. 1910年1月4日付文書「年の瀬における日本」(Japan am Schlusse des Jahres)。
- (19) Vgl. BHAD, Bd.3, S. 636. Arthur Graf von Rex (1856-1926).
- (20) R2.108.
- (21) 桂の最後の欧州視察に関する文書の分析については、拙論、上掲書 49 頁以降参照。
- (22) R18.693.
- (23) Ebd.
- (24) 「2.1 マルク=1 円のレート=143.48 マルク」とマルク換算されたうえで、次回の正式な決算書に記載されると報告されている。

(原稿受付 2022年6月22日)

『梅蘭芳歌曲譜』と劉天華⁽¹⁾

久米井 敦 子

《Selections from the Repertory of Operatic Songs and
Terpsichorean Melodies of Mei Lan-fang》
and Liu Tian-hua

Atsuko KUMEI

要 旨

『梅蘭芳歌曲譜』は1930年の梅蘭芳アメリカ公演に向けて作成された楽譜集で、梅蘭芳の独唱部分を五線譜と工尺譜で記録したものである。採譜を行ったのは当時北京大学などで音楽教師を務めていた劉天華（1895-1932）であった。

本稿ではまず、構成、収録作品、編集過程の3項目を中心に『梅蘭芳歌曲譜』の概要を紹介する。

次に、『梅蘭芳歌曲譜』の「編者序」に見られる劉天華の楽譜に対する考え方を論じる。劉天華は中国の古代音楽が散逸した最大の原因を科学的な記譜法の欠如だと考え、その確立の必要性を主張していた。『梅蘭芳歌曲譜』の編集はその実践と位置づけることができる。

続いて「凡例」を手がかりに、劉天華が『梅蘭芳歌曲譜』に施した工夫や、記譜作業に対して抱いた限界について述べる。劉天華は工尺譜に数字譜の要素を取り入れてリズムの表記を可能にしたり、西洋音楽に存在しない奏法（唱法）の記号を創作したりするなどの工夫をすることで、正確で詳細な記録を試みた。しかしその一方で、五線譜によって中国伝統劇特有の即興性を表現することの難しさを感じていた。

『梅蘭芳歌曲譜』はアメリカの観客に提供された手引きにすぎず、その後の梅蘭芳の芸の継承に直接影響を与えることはなかった。

1940年代に数字譜版が発行され、戦時下の京劇ファンによって広く読まれた。

キーワード：劉天華、梅蘭芳歌曲譜、梅蘭芳

目 次

はじめに

1. 『梅蘭芳歌曲譜』の概要 — 構成、収録作品、編集過程
 - 1-1. 『梅蘭芳歌曲譜』の構成
 - 1-2. 『梅蘭芳歌曲譜』の収録作品
 - 1-3. 『梅蘭芳歌曲譜』の編集過程
 2. 『梅蘭芳歌曲譜』に見られる劉天華の音楽思想
 - 2-1. 「編者序」に見られる劉天華の楽譜に関する考え方
 - 2-2. 「凡例」に見られる記譜の創意工夫
 - 2-3. 「凡例」から読み取れる五線譜表記の限界
- おわりに — 『梅蘭芳歌曲譜』の意義

はじめに

1930年、京劇俳優の梅蘭芳（1894-1961）はアメリカ公演を行った。これは史上初の京劇の海外ツアーであった。1月18日に上海を出発した訪米団は神戸、横浜を経由し、同年1月31日にアメリカのシアトルへ到着した。その後7月に帰国するまで、ニューヨーク、シカゴ、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、ホノルルの各都市で数多くの公演を重ねる。現地では公演の合間に膨大な数の各界名士と会い、在米華人社会の歓待を受け、ポモナ・カレッジと南カリフォルニア大学から名誉博士号を授与された。ツアーは大成功の裡に終了した⁽²⁾。

アメリカ公演に向け、梅蘭芳のブレンである齊如山（1875-1962）を中心とした訪米チームは、アメリカの観衆が京劇や崑曲（「崑劇」とも言う）を理解して楽しめるようにするために徹底した事前準備を行った。中国伝統劇の歴史や上演作品の解説文はもちろん、舞台セット、衣装、舞台化粧や臉譜（隈取）、小道具、役者の所作などについて、膨大な数の解説図を作成したのである。これらの図の一部は現在も残存しており『梅蘭芳訪美京劇図譜』⁽³⁾にまとめられている。

齊如山は以下のように語っている。

おおよそ西洋人が中国の劇を見るのに、演技や道具、ふるまい、動きなどは目に入りやすいが、歌唱だけは慣れるのが困難だ。そこで皆と話し合い、現地で演じる予定のいくつかの演目をあらかじめ五線譜に起こしておけば、外国人は楽譜を見ながらピアノやヴァイオリンで演奏するうちに、慣れて自然に耳になじむようになるかもしれない、ということになった。（齊如山 1933, p. 22）

こうして、訪米ツアーの準備の一環として編集されたのが、『梅蘭芳歌曲譜』であった。『梅蘭芳歌曲譜』は訪米公演で上演される作品中の梅蘭芳の独唱部分を、五線譜と工尺譜で表した楽譜集である。齊如山はこの楽譜集の編集を、当時北京大学などで音楽を教えていた劉天華に依頼した。

劉天華（1895-1932）は「病中吟」、「月夜」などの二胡曲の作曲者として知られる音楽家で、中国民族音楽の近代化に貢献したとして高く評価されている人物である⁽⁴⁾。本論は、筆者が取り組んでいる劉天華研究の一部として『梅蘭芳歌曲譜』を論じようとするものである。

まず、『梅蘭芳歌曲譜』の概要（構成、収録作品、編集の過程）を紹介する。さらにそこから読み取れる劉天華の音楽観を明らかにしたうえで、最後にその存在意義に関し

て考察を試みたい。

文中の漢字表記は日本の漢字に統一する。引用部の日本語訳と（ ）内の注記は筆者による。

1. 『梅蘭芳歌曲譜』の概要 — 構成, 収録作品, 編集過程

1-1. 『梅蘭芳歌曲譜』の構成

『梅蘭芳歌曲譜』は1帙2巻の線装本で、五線譜版（図 1-1, 1-2）と工尺譜版（図 2-1, 2-2）の2巻から成っている（工尺譜については「2-2 ①工尺譜に対する工夫」で詳しく説明する）。五線譜版は左綴じの横書き、工尺譜版は右綴じの縦書きである。大きさは約31 cm×21 cmで、A4判よりやや大きい。五線譜版の巻頭（全体の巻末に相当する）には、中国語と英語で次のような説明がある。

本書初版は1050部発行、そのうち50部は成化宣紙の豪華版（原文：精装加套）でシリアル番号と著者印あり。1番は500元、2～50番は100元とする。売り上げは中華劇院の経費に充てる。

本品は第 13 番 劉天華 〈印〉

この記録から、発行部数は1050部で、シリアル番号付きの豪華版50部と普及版1000部の2種類があったことがわかる。本論を執筆するにあたり、筆者は2015年に梅蘭芳記念館から発行された復刻版を主要なテキストとしたが、これ以外に東京大学東洋文化研究所「雙紅堂文庫」所蔵の『梅蘭芳歌曲譜』を閲覧した。前者はシリアル番号13の豪華版の印影版で赤い表紙、後者は紺色の表紙でシリアル番号と著者印がなく、普及版と思われる。

『梅蘭芳歌曲譜』は五線譜版が主要であり、工尺譜版は参考にすぎないとされているが⁶⁾、編集者近影や序文など、楽譜以外の情報はすべて工尺譜版の巻頭にある。表紙をめくるとまず「浣華」と署名された中表紙があり、次のページには編著者のリストが毛筆で以下の通り書かれている。

劉天華 記譜

齊如山 徐蘭園 馬寶明 参訂

汪頤年 曹安和 周宜 楊筱蓮 張次醒 校字

徐蘭園は琴師で馬寶明は笛師である。いずれも当時の名奏者で、梅蘭芳と共演を多くし



図 1-1 『梅蘭芳歌曲譜』(五線譜版) 表紙



図 1-2 『梅蘭芳歌曲譜』「天女散花(西皮)」五線譜

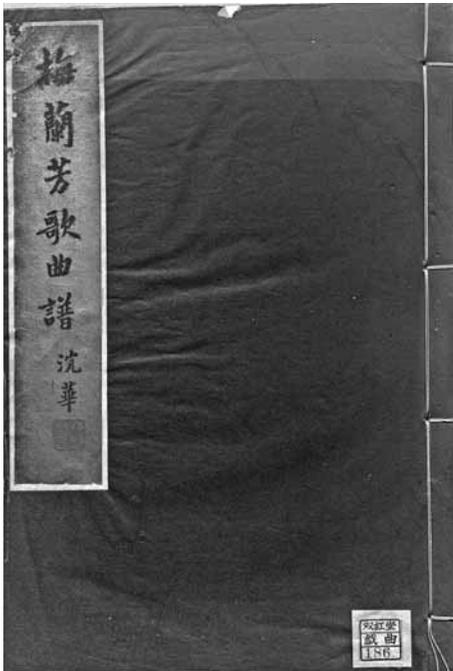


図 2-1 『梅蘭芳歌曲譜』(工尺譜版) 表紙

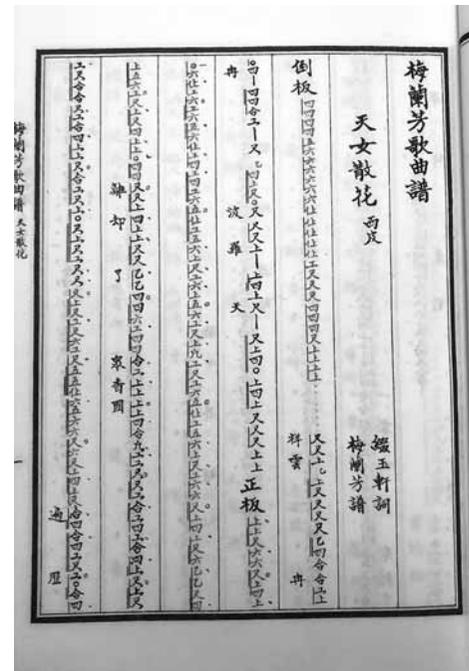


図 2-2 「天女散花(西皮)」工尺譜

ていた。「校字」の5人のうち汪頤年、曹安和、周宜、楊筱蓮是北京女子師範大学の学生で、劉天華の教え子である。彼女たちは1928年に劉天華が立ち上げた「国楽改進社」のメンバーであった。劉天華自身による「編者序」によれば、汪は楽譜の清書を、他の

3人は校閲を担当したと言う。周、楊の詳細は不明だが、曹安和（1905-2004）は後に中央音楽学院教授となり、琵琶奏者、研究者として多くの業績を残し、人材を育成し、中国民族音楽の研究に多大な貢献をした人物として知られている。中でも、1950年に音楽学者の楊蔭瀏とともに、最晩年の阿炳⁶⁾を訪ねて「二泉映月」などの演奏を録音して保存したことは有名である。汪頤年は劉天華の楽譜の清書を常に任された人物で、後に作曲家である黄自の妻となる。張次醒は字の清書を担当した人物とあるが、それ以上のことは明らかではない。

続いて「梅蘭芳歌曲譜目録」が活字で記されている。

像

序 李序，劉序，齊序，梅序，編者序

凡例

これ以降、18篇の収録作品のリストが続くが、それは次節で詳説する。

「像」は編著者近影である。まず「梅蘭芳先生 Mr. Mei Lan-Fang」があり、続いて「劉天華教授 Mr. Liu T'ien-Hua, Professor of Music in the National University of Peiping」, 「齊如山教授 Professor Ch'i Ju-Shan」, 「琴師徐蘭園先生 Mr. Hsü Lan-Yuan (Violinist)」, 「笛師馬寶明先生 Mr. Ma Pao-Ming (Flutist)」, 「汪頤年女士 Miss Wang I-Nien, B. A. (Peiping)」, 「曹安和女士 Miss Ts'ao An-Ho, B. A. (Peiping)」, 「周宜女士 Miss Chou I, B. A. (Peiping)」, 「楊筱蓮女士 Miss Yang Hsiao-Lien, B. A. (Peiping)」と続く。すべて1ページに1人ずつ、余白を充分に取ってページの中央に写真が印刷されているが、前の5人に比べて後者4人の女性の写真はやや小さい。

次に序について簡単に述べたい。それぞれの序の著者は以下のとおりである。

李序：李石曾　劉序：劉半農　齊序：齊如山　梅序：梅蘭芳

編者序：劉天華

李石曾（1881-1973）は民国期の教育家で、中華人民共和国建国後は故宮博物院の設立に貢献した人物として知られる知識人である。齊如山とは同じ河北省高陽の出身で交友が深かった。李石曾は序文で、梅蘭芳の芸術が文化や時代を超えて通用し、芸術性と学術性の両方において高い水準に達していることを論じている。

劉半農（1891-1934）は劉天華の実兄で、北京大学教授、北平大学女子文理学院院长などを歴任した文学者、言語学者である。序の中で劉半農は、自分は10年前に旧劇

(中国伝統劇)を批判して新劇(近代演劇)を擁護していたが、最近では新劇が成熟してきたので旧劇を鑑賞するようになった、と説明したうえで自身の中国伝統劇論を展開する。劉半農は新文化運動(1910年代後半)を代表する人物で、当初は運動の思潮に乗って白話文による創作を唱えて旧文化を批判していたが、途中から方向転換をし、批判をされていた⁷⁾。この序文はこうした批判に対する劉半農の釈明と読むこともできる。

斉序は斉如山による序文である。1ページにまとまった文語体による序は『梅蘭芳歌曲譜』の編集の目的を簡単に述べた後、「世界に規則のない芸術はなく」、「規則が緻密であるほど芸術の程度は高い」とし、五線譜こそが現在の世界で「最も通用していて最も緻密」だと述べている。「中国旧劇の歌詞を西洋の譜面で表すのは至難の業」であるが、「過渡期の国楽の改良(原文「改進」)は西洋音楽の紹介と並行して行うのが最も合理的」という劉天華の考え方に賛同を示し、「実際に(両者を)融合し1つにできたのは劉君が初めてである」と書いている。

続く「梅序」は梅蘭芳による序文である。短い文語体による序文には、斉如山を通して劉天華に楽譜の編集を依頼してから100余日をかけて編集作業が続いたことや、劉天華の丁寧で妥協がない仕事ぶり、何度もヴァイオリンで五線譜を再現したことがつづられ、梅蘭芳の劉天華に対する敬意が示されている。

最後の「編者序」は劉天華によるものであるが、詳細は2-1に譲る。

1-2. 『梅蘭芳歌曲譜』の収録作品

目録に示された『梅蘭芳歌曲譜』の収録作品は以下のとおりである。

- (一) 天女散花 綴玉軒詞 梅蘭芳譜
西皮 倒板, 正板, 二六, 快板, 搖板
崑曲 賞花時, 風吹荷葉煞, 錦庭樂(牌子), 一枝花(牌子), 尾聲
- (二) 霸王別姬 綴玉軒詞 梅蘭芳譜
西皮 南梆子頭段, 南梆子二段, 搖板, 二六, 夜深沈(牌子)
- (三) 千金一笑 綴玉軒詞 梅蘭芳譜
西皮 慢板轉二六
- (四) 廉錦楓 綴玉軒詞 梅蘭芳譜
反二黃 倒板, 原板, 搖板, 將軍令
- (五) 洛神
西皮 倒板, 正板, 原板, 回回曲(一)(牌子), 萬年歡(牌子), 一枝花(牌子),
回回曲(牌子), 二六, 快板, 搖板
- (六) 紅線盜盒

- 西皮 倒板, 原板, 流水板, 搖板
- (七) 嫦娥奔月
西皮 原板, 搖板, 南梆子
- (八) 西施
二黃 倒板, 慢板
- (九) 御碑亭
西皮 朶板, 小開門 (牌子), 二六
- (十) 貴妃醉酒
二黃 小開門 (牌子), 四平調頭段, 萬年歡 (牌子) (一), 四平調二段原板, 四平三段, 四平四段, 小開門 (牌子), 回回曲 (牌子), 四平調五段, 萬年歡 (牌子) (二), 倒板, 四平調頂板, 四平原板, 八叉 (一) (牌子), 八叉 (二)
- (十一) 上元夫人 綴玉軒詞 梅蘭芳譜
南曲 畫眉序
北曲 八仙會蓬海, 沉醉東風, 尾聲
- (十二) 木蘭從軍 綴玉軒詞 梅蘭芳譜
北曲 新水令, 折桂令, 尾聲
- (十三) 獻壽
南曲 山花子, 尾聲
- (十四) 金山寺
北曲 醉花陰, 喜遷鶯, 出隊子, 刮地風, 四門子, 水仙子
- (十五) 思凡
南曲 誦子, 山坡羊, 採茶歌, 哭皇天, 香雪燈, 風吹荷葉煞, 尾聲
- (十六) 佳期
南曲 臨鏡序, 賺, 十二紅, 節節高, 尾聲
- (十七) 游園
南曲 皂羅袍, 尾聲
- (十八) 刺虎
北曲 端正好, 叨叨令, 脫布衫, 小梁州, 么篇, 快活三, 朝天子

番号の後は演目名, その下の冒頭「西皮」「二黄」「反二黄」「北曲」「南曲」は劇種で, 前者3つは京劇, 後者2つは崑劇である。それに続く「倒板」「正板」などは曲名や調名を表す。「牌子」というのは定型の旋律であることを示している。

これらの作品は梅蘭芳とそのブレーン集団「綴玉軒」が創作した「古装新戯」と呼ばれるものである。古装新戯について平林 2013 はその芝居としての特徴を以下の3点に

まとめている。

- (1) その名称が示すように、伝統的な京劇とは異なる新たにデザインされた衣裳と扮装、すなわち「古装」を採用したこと
- (2) 京劇よりも古く、また文化的ステイタスも高かった崑劇のスタイルを参照し、台本の文辞をより典雅にすると同時に、舞踏を重視する「歌舞劇」として創作されたこと
- (3) 梅蘭芳によって演じられる古風典雅な女性を主人公とした神話劇や恋愛劇がメインの演目となっていること（平林 2013, p. 184）

また、古装新戯の方向性を以下のようにまとめている。

啓蒙の放棄と商業的傾向

懐古の強調と国粹への志向

商業性とそこに含まれるモダニズムの傾向

外国人の視線に対する意識（平林 2013, p. 184-185）

五四文化運動に象徴されるように、19世紀末から20世紀初頭の中国では留学帰りの若い知識人たちが旧文化の打破と新文化（西欧に倣った近代文化）の導入を提唱し、学術や芸術の各分野で改革を行った。演劇界にも従来の伝統劇ではない近代演劇を目指す潮流が生まれ、それは1910年代の「新劇（文明戯）」という過渡的な作品群を経て、1930年代には曹禺などの劇作家によって本格的な近代演劇（話劇）へと成熟していく。こうした文化思潮の根本理念は啓蒙であり、改革の目的は民衆の教育や社会改革であった。この流れの中で梅蘭芳ら「綴玉軒」一派も1910年代から「時装新戯」と呼ばれる啓蒙的な改革京劇を上演した。しかし彼らのその活動の主軸は最終的に、外国人の目を意識した、耽美的で懐古的な商業劇という、同時代の思潮とは異なる方向へと向かう。それが集約されたのが古装新戯であった。

古装新戯の創作意図は「梅蘭芳のために客を呼ぶこと」と「国劇（中国伝統劇のこと）を世界に向けて発展させること」だと齊如山は書いており⁽⁸⁾、古装新戯の創作が始まった1910年代半ばには「まだ中国の演劇を国外で演じるという発想」はなかったという⁽⁹⁾。1919年の日本公演に続くアメリカ公演が齊如山たちのこうした方針に沿った事業であったことは言うまでもない。

一部の演目に「綴玉軒詞 梅蘭芳譜」という署名があるが、これについて劉天華は「凡例」の第6項目で以下のように述べている。

「天女散花」,「霸王別姫」,「嫦娥奔月」,「千金一笑」,「紅線盗盒」,「木欄従軍」,「上元夫人」,「廉錦楓」,「洛神」などの劇は齊如山君によるものだが、齊君は、詞は友人と推敲したものだと言って個人名の記載を固辞した。本編(『梅蘭芳歌曲譜』のことを指す)では齊君の意を酌んで綴玉軒と記した。綴玉軒というのは梅君の書齋である。

劉天華は「書齋」と表現しているが、すでに述べた通り「綴玉軒」は一般に齊如山を中心とした梅蘭芳のブレン集団を指す。続く第7項目には以下のようにある。

旧劇(原文は「新劇」だが間違いであろう。後述する数字譜版では「旧劇」となっている)の楽譜の作者はこれまで署名をしなかったが、これは文を重んじて芸を軽んじる傾向の現れで、戯劇と音楽が進歩するうえで実に大きな障碍である。本編で「梅蘭芳譜」「陳嘉良譜」などのように名前を記したのは、作者を尊重するためである。旧劇で、詞や曲の作者を調査のしようがない場合は従来通り空白にしておくほかはない。

音楽に作者の名前を明記するのは西洋の習慣であり、中国では伝統的に、作曲者名はほとんど作品に記されることがなかった。作者の地位を向上させて音楽を近代化するためには作曲者名を明記することが重要だと考えていた劉天華は、国楽の近代化の一環として自分のすべての作品に名前を記した。これは当時、まだ珍しいことであった。『梅蘭芳歌曲譜』でも作者名を掲載する試みがなされているが、残念ながらその作業は必ずしも緻密には行われていない。例えば上の引用部分で挙げた9演目のうち、「洛神」,「紅線盗盒」の2つには作者名がなく、「嫦娥奔月」は目次の作者名が抜けている(楽譜には記載がある)。

1-3. 『梅蘭芳歌曲譜』の編集過程

では次に、『梅蘭芳歌曲譜』がどのように編集されたのかを簡単に見ていきたい。残された記録⁽¹⁰⁾からその過程を書き表してみよう。

まず劉天華は、梅蘭芳の伴奏者である琴師の徐蘭園と笛師の馬寶明に、収録作品の工尺譜の作成を依頼し、それを2人に演奏させた。その旋律を五線譜に起こし、ヴァイオリンで弾いて梅蘭芳に聞かせ、同時に梅蘭芳の歌を聞いて五線譜を修正した。このやりとりを何度も繰り返して改編を重ね、3か月かけて⁽¹¹⁾完成させたのが『梅蘭芳歌曲譜』であった。訪米団員の1人だった李斐叔の日記には、この作業が出発(1月18日)の直前まで続いていた様子がかかれてい

8時ごろ国楽改進社の諸君が交通飯店で壮行の宴を設けてくれた。劉天華先生が歓送のスピーチをして、梅先生がそれに答えた。10時ごろお開きとなり、劉天華先生の家へ行った。今回のアメリカ公演に持って行く演目の五線譜は劉天華先生や鄭穎蓀先生たちによるものである。今晚、また何度か検討し合い、家に帰って寝るころにはすでに1時になっていた。(李斐叔 2015, 原稿本 1929年 12月 22日)

2. 『梅蘭芳歌曲譜』に見られる劉天華の音楽思想

『梅蘭芳歌曲譜』には劉天華による文章が2篇掲載されている。1つは「編者序」、もう1つは「凡例」である。前者には主に、劉天華が考える楽譜や記譜の意義が力説されており、後者には楽譜の読み方や記号の説明など技術面の解説と、中国伝統音楽を楽譜に記すことの限界が論じられている。

2-1. 「編者序」に見られる劉天華の楽譜に関する考え方

劉天華は一貫して国楽（中国伝統音楽）の散佚を危惧していた。例えば、国楽改進社結成時の文章には以下のような記述がある。

私たちは経済力が及ぶ限り、(略)楽譜のない楽曲を記録しなければならない。音楽の名手の演奏を録音して、現存している国楽がこれ以上段々と消滅しないようにしなければならない。(「国楽改進社縁起」方立平 2009, p. 4-5)

当時、録音はまだ困難であり、楽曲を消滅から守る手段として現実的だったのは楽譜による記録であった。「編者序」で劉天華は、「音楽に楽譜があるのは言語に文字があるのと同じ」と表現し、続けて楽譜を残さなかった自国の伝統音楽に対して次のように苦言を呈している。

我が国の古えの音楽に楽譜がなかったわけではない。しかし唐の卷子本「幽蘭譜」⁽¹²⁾、「朱子儀礼経伝」の十二詩譜⁽¹³⁾、姜白石の詞譜⁽¹⁴⁾などは、あるいは律呂だけ、あるいは簡単な文字しか記していないため、音楽をしっかりと説明できておらず、いたずらに考古学者たちに骨を折らせるばかりで、実は役に立っていない。近代になって出現した琴譜や崑曲譜などは、比較的詳しく書かれているが、まだ欠点が多く、これらによって（音楽を）遠くまで伝えようとしても、必然的に不可能である。

こうした「古えの音楽」を表した中国の伝統的記譜には何が足りないと劉天華は言って

いるのだろうか。

音楽というものには、音の高低、軽重、抑揚、疾徐の区別がある。だから楽譜とは詳細な分析やこまやかな説明があって初めて完全なものとなるのである。(前述の)古い楽譜には、どれもそれがない。現在国楽が衰退し、国劇が危機に瀕している原因は1つではないが、完備された楽譜がないことが実際の致命傷となっているのである。

こうした、伝統的記譜法に足りない物、つまり「音の高低、軽重、抑揚、疾徐の区別(原文：高低輕重抑揚疾徐之分)」とは何を指すのか。

「高低」は音の高さだが、音階のことではなく、オクターブの区別を指すと思われる。伝統的な中国音楽の一部の楽器、例えば胡琴は音域が狭く、低い音域の音を出せなくなると、また高い音域に戻って演奏をしたという⁽¹⁵⁾。「軽重」はスタッカートやアクセントなどの音の重さの別、「抑揚」は音量の別や変化、つまりフォルテ、ピアノ、クレシェンドなどの強弱記号であると思われる。「疾徐」は速度であろう。こうした欠点を克服した中国伝統音楽の記譜の試みが、『梅蘭芳歌曲譜』であった。

では次に、『梅蘭芳歌曲譜』に施された工夫を、「凡例」を読み解きながら見ていきたい。

2-2. 「凡例」に見られる楽譜の工夫

① 工尺譜に対する工夫

工尺譜とは管色譜とも呼ばれ(『梅蘭芳歌曲譜』では「管色字譜」の語が使用されている)、中国、日本をはじめとするアジア地域で広く使用された伝統的記譜法で、音階を漢字で表した字譜である。劉天華は『梅蘭芳歌曲譜』で、工尺譜に数字譜の記号を応用した。

数字譜(簡譜とも言う)は数字で音階を表した楽譜で、中国では清末に学校教育や教会を通して伝わり、今でも民族音楽で使用されている。『梅蘭芳歌曲譜』の「凡例」には、以下のような記述がある。

一、管色字譜(工尺譜のこと)に関する説明

(略)

(乙) 工尺字の左に直線がない場合は、毎音1拍である。

(丙) 工尺字の左に直線が1本ある場合は、毎音半拍である。

(丁) 工尺字の左に直線が2本ある場合は、毎音4分の1拍である。

(戊) 工尺字の左に直線が3本ある場合は、毎音8分の1拍である。

これは数字譜の拍数を示す下線を、縦書きに転用したことの説明である。この説明は以下のように続く。

(己) 工尺字の下に直線を1本加えた場合は、1拍延ばすこと、2本加えた場合は2拍延ばすことを示す。

(庚) 工尺字の左下に点を1つ加えた場合は、元の音の2分の1の長さを加えるという意味である。

(辛) ○は休止記号である。

以上、各種記号はすべて西洋の簡譜（数字譜のこと）を参考にしたもので、創作ではない。

劉天華が伝統記譜法に欠如していたとした「音の高低、軽重、抑揚、疾徐の区別」のうち、工尺譜に加えられた情報は「音の高低（オクターブの別）」のみである。凡例には「工尺譜はあくまで参考で、記号を簡略した個所は五線譜と対照して参考にして欲しい」という文言がある。この楽譜集がアメリカ人の観客を対象にして編集されたことを考えれば重点が五線譜に置かれていることは明らかで、工尺譜は簡潔なものになっている。

② 五線譜に対する工夫

劉天華が伝統的記譜法に不足していると考えた「音の高低、軽重、抑揚、疾徐の区別」はすべて五線譜で表すことができる。しかし、中国の伝統劇の歌唱には五線譜で表現できないことが少なからず含まれており、それに対する劉天華の苦勞が「凡例」の文中に伺われる。



図 3



図 4-1



図 4-2



図 4-3

(乙) 【図 3】は「散板」、すなわち拍のない曲である。

(丙) 【図 4-1】は「嗽」である。嗽の歌い方、つまり（中国伝統劇で）【図 4-2】（と言う記号であらわされるもの）は、だいたい（五線譜で記すところの）【図 4-3】と同じだが、実際はもう少し曖昧（原文「含混」）である。伴奏パートでは

(嗽)「tr」で表したが、実際は tril (トリル) の歌い方 (演奏の仕方) とは異なる。「散」と「嗽」は五線譜にこれにあたる記号がないので、(記号を) 創作した。

このように、中国の伝統劇特有の「散」や「嗽」といった西洋音楽にはない表現については、新しい記号を創作しなければならなかった。

2-3. 「凡例」から読み取れる五線譜表記の限界

西洋音楽にない表現を表す記号は新しく考案すればよい。しかし、西洋音楽と全く異なる中国の伝統劇の音楽を五線譜で表記することの限界はこれだけではなく、「凡例」からは劉天華の苦心を読み取ることができる。

「凡例」の第3項目⁽¹⁶⁾には以下のようにある。

皮黄 (西皮と二黄) の歌唱 (原文「唱腔」) は変化がとても多いため、同じ部分でも個人によって歌い方の異なる時が往々にしてある。「天女散花」の「遍歴大千」の「千」について論じてみよう。梅君には以下のような各種の歌い方がある。本書に掲載したのはそのうち常用されるものにすぎない。舞台上上がる時は (これらと) 違う (歌い方をする) ことがよくある。

これに続いて 11 種類のバリエーションの楽譜が示される。

短い歌詞が長く歌われることは西洋のオペラでも珍しくない。しかしオペラ歌手は楽譜に忠実に歌わなければならないが、中国の伝統劇では俳優が即興でバリエーションを歌うことができる。その時ののどの調子、感情の高ぶり具合、観客の数や反応などによって長さもメロディーも変わる。この即興性こそが中国伝統劇の醍醐味であるが、緻密に音楽を記録する五線譜でこれを表現することはできない。

また、第9項目「五線譜に関する説明」中の (壬) には以下の通り書かれている。

皮黄は歌うとき強弱の差がとても少ないので (本書の五線譜には) 強弱記号を付けない。崑曲の楽譜には f, mf, p などを加えたが、実際は西洋音楽のように強弱が鮮明ではない。これは歌唱法の違いなので、無理やりこじつけるわけにはいかない。

前節で述べたとおり、劉天華は「編者序」で中国の伝統記譜法には「抑揚」、つまり強弱の変化を示す工夫がないと指摘したが、京劇や崑曲のような中国の伝統音楽にはもともとその「抑揚」が乏しいということをここで認め、断っているのである。

さらに次の (癸) には以下のようにある。

皮黄の調の高低は歌い手の声に合わせて決まるもので、厳格な法則はない。本書では西皮をF調、二黄をE調としたが、これらは梅君の声の平均的な高さに合わせて決めたものである。(したがって実際に)歌うときはこれとは異なる(調になる)かもしれない。崑曲は通常通りに崑笛で小工調を決めてDとした。ほかの調も同様に類推した。

音高が絶対的である西洋音楽に対して、中国の伝統音楽の音高は相対的である。絶対音高を表す五線譜は、まずどの高さを主音(=ド)にするかを決めるところから始める中国の伝統音楽とは親和性が低いと言える。現在の中国民族音楽が、移動ド式の数字譜を使っているのはそのためである。

このように、劉天華は西洋音楽と中国音楽との違いを認識したうえで、『梅蘭芳歌曲譜』の編集に取り組んでいた。

おわりに — 『梅蘭芳歌曲譜』の意義

その後、『梅蘭芳歌曲譜』はどのように評価されて来たのであろうか。この問題は稿を改めて詳細に考察しなければならないが、残念ながら、後の京劇界や音楽界で大いに注目をされて来たとは言い難い。

そう判断する根拠はまず、先行研究の少なさである⁽¹⁷⁾。『梅蘭芳歌曲譜』を学術的に論じているものは管見の限り李(2013)しかない⁽¹⁸⁾。

次に、その後の京劇界における『梅蘭芳歌曲譜』の存在の薄さである。新中国成立から現在に至るまで、梅蘭芳が演じた「梅派」の演目は曲譜として続々と出版されているが、その序文や解説に『梅蘭芳歌曲譜』への言及はない。これらの曲譜はすべて、梅蘭芳ら役者や伴奏者の音楽を数字譜で記録し、整理したものである。『梅蘭芳歌曲譜』の「凡例」で劉天華が指摘した通り、即興性が強く、また絶対音高という概念のない中国伝統劇の音楽は、五線譜との親和性が弱い。そのため五線譜で記録された『梅蘭芳歌曲譜』が梅蘭芳の歌唱の記録として京劇の現場で受け入れられ、その後の曲譜へ継承されたり、影響を与えたりすることはなかった。

しかし、『梅蘭芳歌曲譜』は京劇界とは別の場所で受け入れられ、梅蘭芳の歌唱を緻密に記録するという劉天華の事業は思わぬところで小さな貢献をしている。

1940年代、『梅蘭芳歌曲譜』の数字譜版が出版された(図5-1, 5-2)。著者は劍影という人物で、出版元は当時重慶にあった国劇研究社である。著者による序文から出版年は1943年ごろと考えられるが奥付がないので明らかではない。この数字譜版『梅蘭芳歌曲譜』は劉天華によるオリジナル版に「黛玉葬花」と「太真外伝」を加え、さらに劉



図5-1 『梅蘭芳歌曲譜』(数字譜版)表紙



図5-2 「天女散花」数字譜

天華が記録した楽譜の一部に加筆，改訂を施した増補版である。全5巻（初集～5集）だが，一斉に発行されたのか，逐次的に出版されたのかは確認できない。1946年8月10日の『申報』に再版の広告が見られるので，相応の発行部数があったと思われる。

この数字譜版『梅蘭芳歌曲譜』は，編者の劍影が知人のところで偶然入手した劉天華版『梅蘭芳歌曲譜』に感銘を受け，五線譜が読めない者でも楽しめるように数字譜に編集して出版したものだという⁽¹⁹⁾。アマチュアの愛好家や京劇ファンたちを対象としており，上演用の曲譜として書かれたものではない。そのため，この楽譜集が後の京劇や崑曲に何らかの影響を与えたことは考えづらい。しかし，梅蘭芳という大スターの歌を正確かつ詳細に記録した『梅蘭芳歌曲譜』が，レコードを聴くこともままならない戦時下，アマチュア京劇愛好家たちにとって生の舞台を見ることに近い体験となったことは確かだろう。

劉天華は生前，以下のような言葉を残している。

私たちは記譜法を改良し，世界の音楽と統一させて，各種の演奏法を可能な限り記入し，体系的な書籍を編集して，一般の人々の学習の便宜をはかりたい。（劉天華ほか「国楽改進社縁起」方立平 2009, p. 5）

「近年我が国でもっとも進歩がない学問は音楽であろう」⁽²⁰⁾ という危機感を持っていた劉天華にとって，音楽の一般民衆への普及は「国楽改進」の重要な目標の1つであり，

切実な願いであった。生前苦心して採譜した『梅蘭芳歌曲譜』が死後 10 年を経て多くの京劇愛好家たちの手に渡ったことは、劉天華にとって想定しえなかった自身の事業の成就だと言えないだろうか。

《注》

- (1) 本稿は 2022 年 3 月 12 日、第 29 回中国演劇研究会において行った口頭発表の内容に一部修正を加え、研究ノートとしてまとめたものである。
- (2) 訪米の日程については李斐叔 2015、齊如山 2005 などを参照した。
- (3) 王文章主編、文化芸術社、2006 年 5 月。
- (4) 劉天華の経歴などに関しては久米井 2014 を参照。
- (5) 凡例第 8 項目。
- (6) 1993-1950 本名は華彦鈞。無錫で活躍した盲目の辻芸人。琵琶や二胡を弾きながら即興で社会風刺を歌った。「二泉映月」「聽松」など二胡曲 4 曲と琵琶曲 2 曲を残した。
- (7) 例えば魯迅は劉半農の追悼文「憶劉半農君」のなかで「私は彼には常に 10 年前の劉半農でいて欲しかった」と書いている。
- (8) 「齊如山回憶録」, 平林 2013, p. 186 より再引用。
- (9) 「齊如山回憶録」, 平林 2013, p. 186 より再引用。
- (10) 齊如山 1933, p. 22-23, 劉北茂 2004, p. 174-175。
- (11) 《梅蘭芳歌曲譜》齊序, 劉北茂 2004, p. 174。
- (12) 唐の卷子本「幽蘭譜」:「碣石(けっせき)調幽蘭第五」(東京国立博物館所蔵)を指すと思われる。「碣石調幽蘭第五」は「中国南北朝末期の 6 世紀末ごろに伝承された琴曲 1 曲を『文字譜』(あるいは『文章譜』)と呼ばれるすでに失伝した記譜法によって記したものであり、その書写年代は、唐代 7 世紀から 8 世紀とされる」(山寺 2012, p. 1)、日本に現存する最古の琴(きん)の楽譜で、1954 年に国宝に指定された。日本への伝来時期は明らかではないが、江戸時代に儒者萩生徂徠(1666-1728)によって価値が見いだされたことで知られる。清朝の駐日公使随行員であった楊守敬(1839-1915)の『古逸叢書』(1884 年)に収録されたことによって中国へ伝わった。文字譜(または文章譜)は文章によって琴の奏法を示した楽譜である(山寺 2012, p. 1-3)。
- (13) 「朱子儀礼経伝」の十二詩譜:「風雅十二詩譜」を指すと思われる。「風雅十二詩譜」は宋代の詩譜で、南宋乾道年間(1165-1173)の趙彦肅の作とされる。朱熹『儀礼経伝通釈』所収(『中国音楽詞典』p. 104)。
- (14) 姜白石の詞譜:姜白石(姜夔 きょう・き、1155-1221)は南宋の詞人。字は堯章、号は白石。詩詞のみならず、書、音楽など多方面の芸術的才能に恵まれた。詞は宋代に流行した楽曲を伴う韻文の歌曲で、一般に既存の旋律に歌詞をあてはめて作られたが、姜夔は自ら作曲も行い、詞集『白石道人歌曲』6 卷には「揚州慢」,「鬲溪梅令」,「暗香」など、17 首の工尺譜が付された作品が収録されている(『中国音楽詞典』p. 188, 松尾 2005, p. 82)。
- (15) 「《月夜》及《除夜小唱》」(方立平 2009, p. 12-13)で劉天華は以下のように述べている。「胡琴にはいわゆる「三把(3つのポジション)」演奏法があるが、まだ誕生して間もない。おそらく三弦や琵琶などの楽器から転用されたのだろう。以前は中、下の 2 つのポジションを使っていたが、上(位置的に上、つまり低い音域のこと)のポジションの音は 1 オクターブ、あるいは 2 オクターブ高くして済ませていた」(方立平 2009, p. 12-13)。ポジションとは弦をおさえる位置のことで、下のポジションほど音は高くなる。
- (16) 「凡例」は全て「一」でナンバリングされているため、項目の順番を項目名とする。以下

- 同様。
- (17) 薛良 1991, 俞玉滋 1992, 王性昌 1996, 陽水 1997, 李春沐 2013。
- (18) 2022年3月26日, 2022 CHINOPERL (Chinese Oral and Performing Literature) CONFERENCE (オンライン開催)において安陽師範学院の王亜非氏が口頭発表「国劇與国楽—浅谈梅蘭芳與劉天華基于『梅蘭芳歌曲譜』的合作」を行ったが未見。
- (19) 編者序。
- (20) 「国楽改進社縁起」

参考文献

【『梅蘭芳歌曲譜』のテキスト】

- ・雙紅堂文庫(東洋文化研究所) 原版
 - ・梅葆琛, 林映霞ほか編『梅蘭芳全集』8(2000年12月, 河北教育出版社) 影印
 - ・梅葆琛, 林映霞ほか編『梅蘭芳演出曲譜集』第4卷(文化芸術出版社, 2015年10月) 影印
 - ・梅蘭芳記念館編『梅蘭芳歌曲譜』(2015年10月) 印影, 線装
 - ・劍影編『梅蘭芳歌曲譜』(山西人民出版社・三晉出版社 近代散佚戲曲文獻集成・名家文獻編 35, 2018年3月) 印影, 数字譜版
- * 本論では梅蘭芳記念館 2015 をテキストとした。

【梅蘭芳関連】

書籍

- ・齊如山『梅蘭芳遊美記』遼寧教育出版社, 2005年(オリジナル版は商務印書館, 1933年)
- ・王文章主編『梅蘭芳訪美京劇図譜』(文化芸術出版社, 2006年5月)
- ・李斐叔『梅蘭芳遊美日記』(国家図書出版社, 2015年10月)
- ・呉同賓ほか『京劇知識詞典』(天津人民出版社, 2017年5月)
- ・加藤徹『京劇』(中央公論新社, 2002年1月)
- ・加藤徹『梅蘭芳 世界を虜にした男』(ビジネス社, 2009年6月)

論文など

- ・薛良「《梅蘭芳歌曲譜》序言輯刊」(『中国音楽』1991年2期, p.1-6)
- ・俞玉滋「劉天華《梅蘭芳歌曲譜》述評」(『中国音楽』1992年3期, p.9-10)
- ・王性昌「劉天華所編的《梅蘭芳歌曲譜》」(『中国京劇』1996年11/25, p.57)
- ・陽水「劉天華訳編《梅蘭芳歌曲譜》的補充材料」(『中国京劇』1997年9/25, p.12-13)
- ・李春沐「紙上の声音——梅蘭芳歌曲譜的意義」(『文化遺産』2013年2期, p.58-68)
- ・平林宣和「『天女散花』考 梅蘭芳古裝新戲の再検討」(演劇博物館グローバルCOE紀要『演劇映像学』2, 2011年2月, p.189-208)
- ・平林宣和「古裝新戲の誕生 『嫦娥奔月』初期の文脈と古裝の由来」(氷上正ほか著『近現代中国の芸能と社会 皮影戲・京劇・説唱』好文出版, 2013年11月, p.179-197)

【曲譜・劇本】

- ・中国戲曲研究院編, 熊有容記譜整理『梅蘭芳演出劇本選集曲譜』(音乐出版社, 1959年9月)
- ・上海文芸出版社編『京劇曲譜集成』(上海文芸出版社, 1992年7月)
- ・中国戲曲学院編『京劇選編』第11集(中国戲曲出版社, 1990年11月-2003年10月)
- ・梅葆琛, 林映霞ほか編撰『梅蘭芳演出曲譜集』第4卷(文化芸術出版社, 2015年10月)

【劉天華關係】

書籍

- ・劉育和編『劉天華全集』（人民音楽出版社，1997年5月）
- ・劉北茂述『劉天華音楽生涯 胞弟的回憶』人民音楽出版社，2004年11月）
- ・方立平編『劉天華記憶與研究集成』（上海教育出版社，2009年2月）

論文など

- ・劉天華等「国楽改進黨縁起」（『新楽潮』1巻1期，1927年）
- ・劉天華「《月夜》及《除夜小唱》」（『音楽雑誌』第2期，1928年2月）
- ・劉天華「向本社執行委員会提出挙辯夏令音楽学校の意見」（『音楽雑誌』第2期，1928年2月）
* 上記3篇はすべて方立平2009をテキストとした。
- ・久米井敦子「劉天華の音楽観 北京大学時代を手掛かりに」（拓殖大学言語文化研究所『語学研究』130，2014年3月，p.127-147）
- ・久米井敦子「国楽改進黨幹事社員 その功績と限界」（拓殖大学言語文化研究所『語学研究』133，p.87-109，2015年12月）

【その他】

書籍

- ・山寺美紀子『国宝「碣石調幽蘭第五」の研究』（北海道大学出版会，2012年2月）
- ・中国藝術研究院編『中国音楽詞典』（人民音楽出版社，1984年10月）
- ・『新音楽中辞典 楽語』（音楽之友社，1977年3月）

論文など

- ・魯迅「憶劉半農君」（『魯迅全集』第6巻，人民文学出版社，1981年，p.74-77）
- ・松尾肇子「姜夔の楽論と南宋末の詞楽」（明木茂夫主編『楽は楽なり 中国音楽論集』好文出版，2005年3月，p.81-98）

（原稿受付 2022年6月20日）

小浜藩英学教師，塚越酸素彦（鈴彦，1842-1886）

関連史料調査報告

— 於福井県福井市，小浜市

塩 崎 智

Report on a Survey of Historical Materials Related to
Suzuhiko Tsukagoshi (1842-1886), an English Teacher
Employed by Obama Domain,
in Fukui Prefectural Library and Obama City Library

Satoshi SHIOZAKI

要 旨

1870年6月22日に横浜を出港したサンフランシスコ行きチャイナ号に、8人の日本人が乗船していた。本稿は、その中の1人の小浜藩士塚越酸素彦に関する、福井県福井市、同小浜市で行った史料調査の報告と、約40年前に発表された小浜藩の英学と塚越に関する先行研究の検証により構成されている。

調査報告の主な内容は、今回の調査で発見した塚越の伝記の内容の紹介と、小浜市立図書館に保管されている、酒井家文庫の英書に関する報告である。この英書の1冊に塚越が献呈した旨が自筆で書き込まれている。また、他の数冊にも、塚越あるいは同じ小浜藩の英語教師、星亨によると思われる書き込みがあり、これは写真付きで紹介している。塚越とこれらの書き込みに関しては、約40年前に現地を何度も訪問して行われた研究を発見した。今回の調査結果を基に、この先行研究の内容を検証した。なお、塚越個人に関する研究報告は、留学前と、留学後（帰国後を含む）に分けて、今後2回に渡り報告する予定である。

キーワード：小浜藩，酒井家文庫，横浜の英学，英学史

はじめに

拙著前稿「明治初頭，日本人米国渡航者リスト解題・史料の補足」において、1870年6月22日横浜発，7月13日サンフランシスコ（以後SF）着のチャイナ号の日本人乗船客を採り上げた⁽¹⁾。この船には8人の日本人が乗っており、彼等の名前は地元SF

の新聞と日本側の史料調査で明らかになった⁽²⁾。この1人である小浜藩士塚越酸素彦（1842-1886）に関する調査を，福井県立図書館・県文書館，福井県小浜市立図書館を2022年3月末に訪問して実施した。

最大の収穫は，塚越の伝記『金蘭簿物語』の発見である⁽³⁾。塚越の生涯に加え，著名な政治家星亨（1850-1901）との関係についても知ることができた。両者は横浜で偶然知り合い，小浜藩の英学教師として雇われ，江戸の小浜藩邸で藩士に英学を教えた後，小浜に転勤となった。

福井県立図書館で『金蘭簿物語』を閲覧した後，小浜市立図書館に移動した。同図書館には，小浜藩主酒井家が所蔵していた2万6,000冊の「酒井家文庫」と呼ばれる蔵書がある。そのリストの中に塚越の書き込みがある辞書を発見した⁽⁴⁾。他にも塚越の書き込みがある英書があるかもしれないので，塚越が横浜を発った1870年以前出版の英書の閲覧を事前にお願ひし実見することができた。

本稿では，まず塚越の伝記の内容をまとめ，星亨との関係も含めて，塚越の人生の概要を紹介する。次に，小浜市立図書館で閲覧することができた英書とその書き込みについて，田中洋による先行研究の内容の検証を試みる。

今回の論稿は，酒井家文庫の英書と塚越，星との関係についての記述が中心となる。後述するが，塚越は日本人米国渡航者の「留学生」と「労働移民」という枠組みのどちらにも当てはまらない渡米体験をしている。また，彼の留学前の江戸，横浜，小浜における体験は，幕末維新に英学と関わった様々な日本人の一例として大変興味深い。

塚越に関しては，伝記の記述内容を，これまでに蓄積された横浜英学史研究，星亨関係史料等を用いて吟味し，史実の抽出，仮説と今後の課題の提示等を2回に分けて発表する予定である。

本稿では原則として年号は西暦算用数字を使用し，史料の性質上必要な場合は，和暦漢数字を使用する。

本研究は，今から約40年前に出版された，池田哲郎『日本英学風土記』（篠崎書林，1979年）からそのアイデアを得ている⁽⁵⁾。筆者は，池田等が中心となって結成した日本英学史学会員として約20年間研究を続け2021年度をもって退会した。この学会の2022年初頭までの会長楠家重敏氏の宿願の一つに『日本英学風土記』等，学会の「至宝」とも言うべき出版物の加筆修正版の作成，発行があった。本稿は，研究者としての自分を育てていただいた日本英学史学会と，2022年1月に急死された楠家前会長への，ささやかであるが，身の程を知らぬ，報恩の試みでもある。

1. 酒井家文庫の現地調査の経緯

小浜市立図書館では、職員の方と塚越酸素彦に関する情報交換を行い、予約しておいた英書の閲覧、写真撮影等を行った。

小浜藩酒井家は、3代将軍家光の時代以来、大老、老中を輩出し、京都所司代を任された、譜代の名門藩である。小浜は京都の海の玄関口で、歴史的に京都と深い繋がりがあった。佐幕色濃厚の藩であったが、戊辰戦争では紆余曲折を経て新政府軍として出兵した。

小浜藩市役所職員で、酒井家文庫を管理され、小浜藩全般に詳しい川股寛享氏によると、戊辰戦争時に、脱藩した小浜藩士26名が浩気隊と名乗って幕府側についた。彼等は上野の彰義隊に加わり新政府軍と戦った。

塚越が渡米した、1870年6月22日発チャイナ号の日本人乗船客には、旧幕臣3人、戊辰戦争で新政府軍と戦った桑名藩士2人が「日本脱出」目的で乗船していた。塚越も同じ目的で、密出国的に国外逃亡したと推察した。酸素彦という名前も偽名に感じられた⁶⁾。この船には、当時、SFへの日本人出国の面倒を見ていたユージン・ヴァンリード (Eugene Miller Van Reed, 1835-1873) が乗船していた。塚越等日本人8人は、ヴァンリードに日本脱出を依頼した旧幕府関係者と考えた。

小浜市立図書館で、川股氏から浩気隊員のリストを見せていただいたが、塚越の名前はなかった。『金蘭簿物語』にも浩気隊に関する記述は無い。

小浜市でも、塚越は全く知られていない人物で、藩の史料の中で1,2か所その名前がでてきた程度である。伝記によると、塚越が小浜藩の英学教師として勤務したのは3年間ほどで、しかも小浜藩出身ではなかったということで、彼に関する現地の史料に限られているのはやむを得ない。今回の訪問では塚越の件を離れて、酒井家文庫の蔵書の豊かさに驚かされた。機会があれば、200冊あると言われる英書を全て閲覧したい思いに駆られた。

一連の情報交換の後、閲覧予約をしてあった酒井家文庫の英書を実見させていただいた。その結果については本稿後半で報告する。

2. 『金蘭簿物語』に見る塚越の人生

『金蘭簿物語』に綴られた塚越の生涯は以下の通りである。

1842年、今の群馬県太田市の平民の家に生まれた。塚越家は、元をたどれば新田義貞の家臣に遡り、本家の塚越家は地元の名家だった。それが奏功してか、塚越は1861

年に江戸に出て平民の身分でありながら昌平黌に入学し漢学を学ぶ。しかし，分家である実家が決して豊かではなかったため仕送りが途絶え，退学を余儀なくされた。在学期間は不明である。

塚越は太田に戻らなかった。医学と化学への関心が芽生え，江戸で職を転々と変えながら，書物を読み，学問修業をしていたようだ。

その後，医学修業の第一歩である英学の修業のために，1865年頃，横浜に移る。そこで，吉田橋の関門警備隊員をしながら横浜の外国人に英語を習った。星亨とは，この時期，近所の縁で知り合った。

1867年，横浜で小浜藩に英学教師として雇われ，士族となった塚越は1年間江戸の藩邸で英学教師を勤めた。塚越の斡旋により知人の星亨も英学教師として雇われた。1868年に，2人は小浜に呼ばれ藩士に英語を教授した。

1870年，塚越は小浜藩主に許可を得，渡航費等の初期費用を捻出してもらい，SFに単身で留学。学校には通わず，丸善の代理業等をして生活していたが，1873年に米国東部に移る。首都ワシントンの日本公使館で勤務した後，ニューヨークに移り，現地駐在で税務，財政調査中の若山儀一（1840-1891）に雇われた。同年9月に帰国，横浜税関に勤務したが，1886年に病死した。

横浜で出会った星亨との関係の理解を円滑にするため，主に田中洋の記述（「小浜学校 英学教授 塚越鈴彦」p.87）に依拠し，横浜出航までの，塚越と星の略歴を以下にまとめておく。

【塚越と星の年表】（月名は，出典が陽暦使用史料の場合は，算用数字で記述）

1842年（天保十三年三月七日）

塚越，上野国新田郡太田町（現群馬県太田市）生 [平民]

1850年（嘉永三年）

星，江戸新橋八官町生 [平民]

1860年（万延元年）

星一家，横浜へ移住

1861年（文久元年）

塚越，江戸に出て昌平黌入学

星，横浜の蘭医渡辺貞庵に弟子入り

1864年（元治元年）

星，横浜英学所に学ぶ

1865年（慶應元年）

塚越，横浜に吉田橋関門の警備隊員勤務の傍ら，外国人から英語を学ぶ

1866年（慶應二年夏）

星，横浜を去り，江戸牛込の幕臣小泉家の養子となり幕府洋式散兵隊に編入。前島密に英学を学ぶ〔士族〕

1867年（慶應三年春）

星，前島の世話で開成所英語世話役心得となり，軍事教練を免除

八月，前島が兵庫に移り，星，何礼之に英学を学び，海軍伝習所生徒英語世話役となる

九月，塚越，江戸小浜藩雇英学教師となり江戸牛込矢来の藩邸で勤務〔士族〕

十二月，星，海軍伝習所廃止で失業，横浜に戻り，塚原周造宅で共同生活を営む。また塚原の後継者として「万国新聞」の翻訳を担当

1868年（明治元年二月）

星，小浜藩に英学教師として雇われ，塚越とともに，江戸牛込矢来の藩邸で勤務

1868年（明治元年八月）

塚越，星とともに小浜に移り英学教師として勤務

1869年（明治二年九月頃）

星，小浜を去り大坂へ移る。星側史料によれば塚越同行

1870年（明治三年）6月

塚越，横浜からSFへ向け出航

3. 先行研究：田中洋の一連の研究（1976年-1984年）

『金蘭簿物語』が非売品だったこともあり，出版された後も，特に塚越が歴史的に注目されたことはなかったが，インターネット上で，塚越を扱った先行研究を発見した。福井県小浜市から鉄道で西に向かうと京都府舞鶴市がある。同市にある舞鶴工業高等専門学校の紀要に，塚越酸素彦と，小浜市立図書館保管の酒井家文庫所蔵の英書に関する計5本の論文が発表されている。著者はいずれも同校の人文科学科教授田中洋で，諸論文の発表年と論題は以下の通りである⁽⁷⁾。

1976年3月「福井県小浜市立図書館英書の書誌的研究 その1（辞書類）」

1977年3月「同上 その2（読本類）」

1978年3月「同上 その3（文法及び雑）」

1980年3月「小浜の英学」

1984年3月「小浜学校 英学教授 塚越鈴彦」

最初の3本は酒井家文庫の英書に関する調査報告で，4本目は酒井家文庫と，小浜藩の蘭学から英学への変化を結び付けようとした労作である。最後の「小浜学校 英学教授 塚越鈴彦」では、『金蘭簿物語』に書かれた塚越の生涯をまとめ，酒井家文庫の英書への書き込みと塚越の関係について述べている。この点は大変重要であるので本稿で詳細に考察する。

田中は星の伝記にも目を通し，星の伝記との相違点も指摘している。田中の研究では，星亨に関する情報は，有泉の『星亨』からの引用のみである。今後の研究で，塚越に関係がある星亨関連史料の検証も可能な限り実施したい。

田中の最後の発表後，小浜藩酒井家文庫の管理と整理に長年携わっていた，元小浜市立図書館長の小畑昭八郎と，福井県お雇い外国人のグリフィス研究で知られる，福井県在住の英学史研究者，山下英一も『金蘭簿物語』と塚越に言及している⁽⁸⁾。小畑，山下の記述によれば，小浜藩は医学校の開校を考え，そのために英学者が必要となり塚越を雇用したという。幕末維新期の英学と医学という興味深いテーマである。

4. 酒井家文庫の英書の調査

(1) 英語辞書類

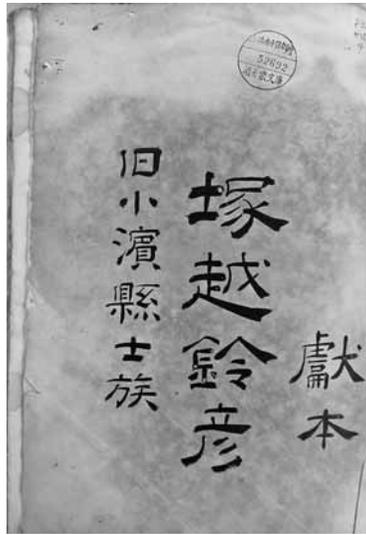
今回の小浜市立図書館訪問の主な目的は，塚越の書き込みがある，4巻本の『英華字典』*An English and Chinese Dictionary*, by W. Lobscheid, Hong Kong, Daily Press, 1866-1869 を実見することだった。

本書は幕末から明治にかけて，漢文の読み書きができた日本人に大変重宝された⁽⁹⁾。第1巻1866年，第2巻1867年，第3巻1868年，第4巻1869年出版となっている。辞書の購入は，1巻ずつでも4巻セットでも可能だった。香港では定価が4巻セットで30ドル，1冊ずつだと1冊7.50ドルだった。当時，外国から輸入された辞書は大変高価で，日本では個人では手が届かず，藩が購入した可能性が高い。塚越が4巻揃いで入手したとすると，1869年以降の購入なので，小浜で英語を教えていた時代である。

塚越は1865年から横浜で生活していたが，職業は吉田橋の関門の警備員で，小浜藩に英学教師として雇われた時（1867年）は五人扶持で，1869年には七人扶持となった。小浜市立図書館所蔵の「明治三年分限名前帳」には，「洋学司 四十石 役料三人口 塚越 酸素彦」と記録されている。士族としては少禄の部類である。独身で，出費を切り詰めていたとしても，『英華字典』4巻本の個人での購入は難しかっただろう。この入手経路は興味深い謎である。旧小浜県と書いてあるが，小浜県は1871年末には敦賀県となるので，塚越が留学から帰国後に酒井家に寄贈したことになる。

実物を手に取って見たところ，塚越の書き込みがあるのは，第4巻だけで他の3冊に

写真1 『英華辞典』の塚越による書き込み（筆者撮影）



は、書き込みは無かった（写真1参照）。

酒井家文庫には、塚越渡米以前に出版された、英語の辞書がもう2冊ある。1冊はヘボンの有名な『和英語林集成』*A Japanese and English Dictionary with an English and Japanese Index*, by J. C. Hepburn, Shanghai, American Presbyterian Mission Press, 1867である。これも大変高価な辞書で、日本で入手できたのは1867年以降ということになる。書き込みは一切無い。

もう1冊は、これも有名なウェブスターの辞書で、*An American Dictionary of the English Language*, by Noah Webster, Springfield, George and Charles Merriam, 1864である。日本で入手できたのは、1864年以降であり、これも書き込みは無い。ヘボンとウェブスターの辞書も、塚越個人ではなく、小浜藩が購入した可能性が高い。

酒井家文庫の本には様々な種類の蔵書印が押されている。この蔵書印が、その書籍が小浜藩に入手された時期を知る一つのヒントになる。田中の論考にはそれぞれの辞書の蔵書印が示されていて参考になるが、蔵書印が歴史的に何を意味するかは詳細が不明である。田中は蔵書印に着目していたが、英書の出版年には留意していなかったようだ。本研究は、出版年を重視し、蔵書印は状況に応じて副次的に使用することとした⁽¹⁰⁾。

塚越との関係はさておき、英学との関わりが全く知られていなかった小浜藩に、幕末の三大輸入辞書とも言うべきこの3冊が所蔵されていたことは何を意味するのだろうか。田中洋「小浜の英学」によると、酒井家文庫には、堀達之助編・堀越亀之助改訂『改正増補英和对訳袖珍辞書』（江戸開成所、慶應二年あるいは三年）と、*Military Dictionary*, by H. L. Scott, New York, Trubner, 1864といった辞書もある（p. 108）。後者の軍事辞典の購入理由は、1869年の小浜藩の英式兵制導入と関係があるのだろうか。塚

越の『英華字典』との関わりとともに，興味深い謎である。

(2) リーダー（Reader）とその書き込み

この辞書群の次に英学史的に重要なのは，リーダーと呼ばれる，英文読解のテキストブックである。今回の訪問で，発行年が1870年以前の以下のリーダーを閲覧した。

The Standard First Reader, for Beginners, by Epes Sargent, Boston, John L. Shorey, 1866

The Standard First Reader, for Beginners by Epes Sargent, Boston, John L. Shorey, 1869

The Standard Third Reader, by Epes Sargent, Boston, John L. Shorey, 1869

The First Reader of the School and Family Series, by Marcius Wilson, NY, Harper & Brothers, 1860

First Reading Book, by E. A. Sheldon, NY, Charles Scribner, 1867

最初の3冊は，幕末に慶應義塾等，日本でもよく使われたリーダーである。1stから5thの5段階あり，1stが入門レベルとなる。酒井家文庫には2ndも所蔵されているが，1870年以降の出版年だったので今回は閲覧申請をしなかった。4冊目は，通称ウィルソン・リーダーとしてよく知られている。5冊目の*1st Reading Book*の著者であるシェエルドン（E. A. Sheldon, 1832-1897）は，ウィルソン（Marcius Wilson, 1813-1905）と並んで，ペスタロッチの実物主義教育の米国における先駆者として知られている⁽¹⁾。

ウィルソン・リーダーには，「勉学所 第九号」の書き込みがあった。勉学所に関しては情報が無い。第九号というのは教科書の通し番号のことだろうか。1860年出版のこの本が，藩校等の学校で教科書として使われていて，学生に貸し出した際の番号かもしれない。リーダーで，現時点で最も興味深い点は，その内容よりも，むしろこのような書き込みである。

サージェントの1stリーダー1866年版の，表紙の裏の見開きの左右の頁に，鉛筆のような物を使った，アルファベットの小文字の筆記体の練習の書き込みがある（写真2参照）。右頁には， $15:18=x:450$ という計算式が書かれ，左下の方には，同じ式の和算のような式も見える。初心者用の1stリーダーにアルファベットの練習が書き込んであるのは分かるが，なぜ，数学の方程式が書き込んであるのだろうか。同一人物が英語の初歩と数学を同時に学んでいたことを示唆している。

幕末維新期の日本における，英書による数学指導に関しては，専門家に当たる必要がある。例えば，横浜英学所では，1864年頃から宣教師タムソンが数学を教えている。

写真2 1st リーダー 1866 年版表紙の裏 見開き右頁 (筆者撮影)

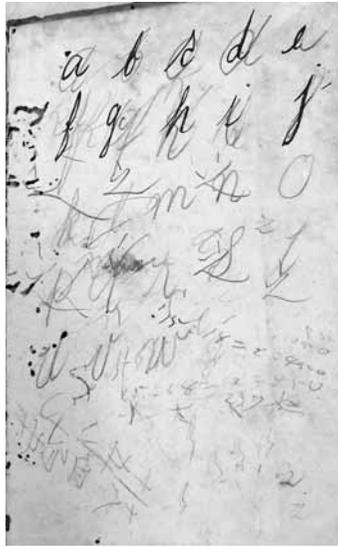


写真3 *New Elementary Algebra* (川股氏撮影)



使用していた教科書名は不明である。1865年2月24日タムソン筆の書簡では、算数を学ぶ生徒は英語よりはるかに少なく10人程度だったという⁽¹²⁾。この1stリーダーは1866年出版であるので、1866年冬の横浜の大火で消失した横浜英学所で使用された可能性は低い。

田中洋「小浜学校 英学教授 塚越鈴彦」によると、*New Elementary Algebra Embracing the first principles of the science* by C. Davies, New York, 1863にも書き込みがある (p.79)。筆者は未見であったので、書き込みの写真をデータで送っていただ

いた（写真3参照）。こちらは裏表紙左頁に，読み易い筆記体で，Tska Koshi と書いてあるので，田中の解説通りに塚越と読める。彼の所有だったことは間違いはない。右頁には「デヴィス 算術書」と筆で書かれている。これに関しては，1863年版であるので，塚越が横浜時代かそれ以降に使っていた可能性がある。『金蘭簿物語』では，塚越が化学と医学に関心を持っていたことが再三強調されている。塚越の理数系志向の現れを証明する英書となる可能性がある。

塚越が，いつこの「算術書」を使用していたかは定かではない。1863年出版であるので，彼が1865年から1867年までの横浜滞在時代に使っていたことも考えられる。今後の課題としては，先述の1stリーダーに書き込んであった $15:18=x:450$ という計算式がこの「算術書」にでていのかどうか等の確認をする必要がある。この式が使われていれば，1866年版の1stリーダーと1863年版の「算術書」は塚越が使用していた可能性が高まる。

書き込みが最も興味深いのは，3rdリーダーの1869年版である（写真4参照）。これについては，まず田中洋の最後の論稿（1984年）である「小浜学校 英学教授 塚越鈴彦」の冒頭部分を引用する（p.79）。

「Science strengthens, enlarges the mind と The Standard 3rd Reader にかきこみがある。小浜市立図書館蔵の英書の一冊の中にある。一体，だれがこういった言葉をかきのこしたのであろうか。小浜の英書に出会ってから長年，頭にあったものである。

この本には，更に，Thompson, Ballagh, Hepburn 等の名がある。表紙のうらに，This books belong to T. S. とある。また，別の一冊 New Elementary Algebra には Tska Koshi のサインがある。こういったかきこみに解答を幸運にも与えてくれた本がある。金蘭簿物語（塚越丘二郎述，昭和2年同勞舎刊）である。以下，この本に従って，このかきこみの人物，はたまた，小浜英学とのかかわり合いを解明していこうとするものである。」（p.79）

田中は，この7年前の1977年に発表した「福井県小浜市立図書館英書の書誌的研究（その2）（読本類）」で，この3rdリーダーの書き込みについて，既にやや詳しく触れているが，この書き込みの主が塚越であるという発見にまだ至っていなかった。「この本全体を通じて，学習者は非常に丹念に辞書をひき，かきこみをしている。このことは，最初の Lesson から最後の Lesson まで，徹底しておこなわれているのが驚きである。」と述べ，「このテキストは軍務所の指導教官のものであるか。学生のうちで優秀なものが，進んで学習したからであろうとも考えられる。」（p.199）と推測している。軍務所

は、1869年に小浜藩が設置した、英式兵制を司る部署である⁽¹³⁾。

その後、田中は酒井家文庫の『金蘭簿物語』に出会い、この書き込みの主を塚越と考えた。

サージェントの3rdリーダーは、筆者も小浜市立図書館で実物を閲覧した。田中の調査によると、この本は2冊あり、筆者が閲覧した本には、何の書き込みもなかった。小浜市立図書館の川股氏に、もう1冊の当該箇所の写真を撮影して送っていただき、後日、確認することができた⁽¹⁴⁾。

筆者は、川股氏から送られた書き込みの写真（写真4）を実見し、次のように書き込みを読み取った。

■左頁

- 左端の中段よりやや上辺りに、**星**と漢字で書かれている。
- **Thompson** が横書きで3段、筆記体で書かれている。その下に **Ballagh** が1段筆記体で書かれている。2段目の **Thompson** の左の方に **to** が見える。
- **Ballagh** の下の段に、**This book belong to H.** と筆記体で書かれている。
- その下に **Thompson** が2段、筆記体で書かれている。
- その下の段に **Hepburn** が1段、筆記体で書かれている。
- その下はかなり薄い字で **Ballagh** と筆記体で書かれている。
- 右端に、縦書きで、3つ **Ballagh** の名前が筆記体で書かれているが、最後の **h** の文字が抜けているように見える。

■右頁

- ほぼ中央やや左寄りに**星**と漢字で書かれている。
- 上段に4段に分けて、**Science strengthens and enlarge the mind. Therefore I must study delight** と書かれている。最後の **delight** は筆者による推測である。
- その下の段に、やや薄く **I must study diligent** と書かれている。最後の **diligent** は筆者による推測である。
- その下の段に **Then**（推測）**this reader belong to Hoshi Towl** と書かれている。
- 最下段左に、一番大きな字で、**Hoshi** と書かれている。

以上から明らかのように、これは塚越ではなく星亨の書き込みである。左右の頁に書かれた漢字の**星**は決定的だろう。田中もこの**星**の漢字は見たはずだが、塚越を意識しすぎたのか、言及していない。筆記体のアルファベットの解読には不明な点が多々あり、

写真4 3rd リーダー 1869年版（川股氏撮影）



田中の指摘も理解できるが、筆記体の頭文字同士を比べてみると、星のHはヘボンのHと同じ筆記体であり **Koshi** ではなく **Hoshi** と読める。

次にタムソン，バラ，ヘボンである。この3人はいずれも横浜英学所の米国人教員で，塚越と星が横浜にいた1865，1866年は同校で教えていた。同校ではブラウンも教えていたのだが，ブラウンの名前は書き込みに無い。その理由は二つ考えられる。ブラウンは1865年3月から長崎出張で2か月間横浜を離れたので，その間はヘボンが代講していた。1866年9月には，ブラウン等宣教師達は，横浜英学所の教職を辞した。つまり，1865年3月から5月の間と，1866年9月以降は横浜英学所では誰もブラウンに習っていなかった。もう一つの可能性は，ブラウンは最上級クラスで教えていたので，ブラウンには習っていない，中級か下級の生徒の書き込みということである⁽¹⁵⁾。

星は，横浜英学所の下級クラスで学んでいた。ブラウンに習っていない可能性が高い⁽¹⁶⁾。横浜英学所で使用されていたとされるテキストにはサージェントの1stリーダーと2ndリーダーはあるが，3rdリーダーに関しては不明である⁽¹⁷⁾。

もう1点付け加えると，田中は指摘していないが，この多くの書き込みがある3rdリーダーの出版年は1869年である。塚越と星が横浜で英語を学んでいた1865年，1866年には1869年版はまだ出版されていない。塚越は1869年に小浜で英学指導をしており，星も1869年の秋には小浜を出て大坂に移っていた。つまり，塚越，星のどちらにしても，この書き込みは横浜でなされたものではない。横浜での英学生時代ではなく，小浜での英学教師時代の書き込みということになる。

左頁の書き込みをよく見ると、タムソンの前に小文字の to が見える。つまり、これは星が小浜で指導用に使っていた教科書で、タムソン、バラ、ヘボンへのお礼の手紙を書く練習をしていたのではないか。

タイミング的には、1870年6月に横浜を出航して渡米した塚越が、かつて横浜英学所で英語を指導してくれた3人に、お礼の意味で惜別の手紙を書く練習をしていたとも考えられる。当時はまだ紙が貴重だったので、テキストの裏表紙等を使っていたのだろうか。

田中が推察した、3rdリーダーの書き込みの塚越筆説は完全には無視できない。その際に超えるべきハードルは二つある。まずは、漢字の星の書き込みをどう解釈するかである。もう一つは、塚越が横浜英学所で学ぶことができた可能性である。

横浜英学所に関する先行研究を調査したところ、警備員でも、学ぶことができた可能性に言及している論考は1本あり、頼まれれば誰にでも教えた、という談話もある⁽¹⁸⁾。平民身分だった塚越は横浜英学所に入学できず、3人の宣教師に、横浜英学所と同じテキストを使って個人指導を受けたという可能性もある。神奈川奉行に関する史料は大半が消失、焼却され、横浜英学所で学んでいた学生のリストも現存していない。塚越の横浜英学所との関係と、書き込みの詳細な解読と史料としての活用については、然るべき史料の発掘を待ち、今後の課題としたい。

(3) そのほかの英書

サージェントの3rdリーダーについての記述が長くなった。筆者が閲覧した、これ以外の英語教育で使用されたと思われるテキストブックは以下の通りである。

An Attempt to Simplify English Grammar, by Robert Sullivan, Dublin, M. & J.

Sullivan, 18th edition, 1868

English Grammar, on the Productive System, by Roswell C. Smith. Philadelphia,

E. H. Butler & Co., 1867

The Standard Grammatical Spelling-Book, by Henry Combes and Edwin Hines,

London, Longmans, 1867

これらは、いずれも英文法に関するテキストブックである。書き込みは全く無かった。いずれも1867年、1868年の出版であるので、日本で入手されたのは、早ければ維新の初頭と思われる。塚越が使用したとすると、江戸の小浜藩邸時代か、小浜時代ということになる。

英学関連書以外に、閲覧した英書は以下の書物である。

First Book on Civil Government, by Andrew W. Young, NY., Clark & Maynard,
1869

書き込みは無い。塚越が小浜を去る前に購入された可能性が高いが，小浜藩が本書を購入した理由は兵制改革に伴う一連の行政改革の必要性だろうか。

Natural Philosophy Part First for Children, by Mary A. Swift, 1867

Natural Philosophy Part Second for Children, by Mary A. Swift, 1866 Hartford,
William J. Hamersley, Publisher. Philadelphia J. R. Lippincott & co.

表紙が和綴じになっていて『理学初歩』と訳題がついている。発行地は YEDO。『理学初歩 乾』（Lesson 1-15）『理学初歩 坤』（Lesson 16-）の 2 冊分冊になっている。塚越の所有であれば，塚越の理科志向を示唆する史料になるが，所有者を示唆する書き込みは無い。

本書については，藤田豊「蘭学・英学物理書接点——理学初歩」という論考がある。開成所で使われた他に，大野，福山，松山，佐倉等の藩校でも使用されていた。幕末，知識人の間で自然科学への関心が一般化していたことを示しているという。一八六七年版と一八六八年版がある。

今回の調査で閲覧した英書は以上であるが，書き込み以外にも興味深い情報がある。1st リーダー 1866 年版と，*English Grammar, on the Productive System*, by Roswell C. Smith. Philadelphia, E. H. Butler & Co., 1867 の 2 冊には，「外国本屋薬種屋道具屋横浜本町通八十四番ハルトリー，並ニ江戸大阪商売仕候」という書店印が押してある。

ハルトリー（John Hartley）はイギリス人で，1864 年に薬剤師として横浜に来日した。翌年，独立して薬品・書籍の輸入業を営み，さらに東京の築地居留地，大坂の川口居留地にも商館を構えた。初期の東京大学に数多く洋書教科書を納入した⁽¹⁹⁾。想像をたくましくすれば，医学，科学に関心があり，米国渡航後，SF で英書取引に関わっていた塚越との関係も考えられなくはない。

おわりに

本稿では，筆者が福井県福井市，同小浜市で行った実地調査の結果と，その後発見した，主に田中洋の先行研究を紹介した。酒井家文庫の英書への書き込みに関しては田中が先行研究でかなりの紙幅をさいて触れていたため，田中の見解と筆者の調査結果を比較検証し，その結果についても記述した。

筆者の見解によれば、酒井家文庫の数冊の英書にみられる書き込みは、塚越によるものもあれば、星によるものもある。英書の出版年を考慮すると、その時期はおそらく塚越と星が英学教師として、小浜で活動していた1869年頃である可能性が高い。それらの書き込みから読み取れる史実に関しては、広範な背景史料を調査し、今後の検討課題としたい。

「はじめに」でも触れたように、本稿は一連の塚越酸素彦研究の「序論」とも言うべきものである。今後、『金蘭簿物語』の記述を、江戸居住時代、横浜居住時代、小浜藩英学教師時代、留学時代（カリフォルニアと東部）等に分け、他史料、豊富な先行研究の成果を援用し、ファクト・チェック、仮説や今後の課題の提示を2回に分けて行う。

『金蘭簿物語』は塚越の人生を詳細に語っている伝記ではない。収録された一次史料は大変貴重な史料であるが、その史料の背景が不明なものも少なくない。著者である次男の丘二郎が4歳の時に酸素彦は病死しているため、著者による父親の思い出は皆無に近い。第三者による記述に近いが、丘次郎の亡父に対する思い入れが強く記述は主観性が高い。

今後の研究はすでに進めているが、塚越酸素彦はなかなか手ごわい研究対象である。江戸、横浜、小浜、SF、ニューヨークと、行動範囲が広く、塚越が興味を持った範囲も医学、化学、貿易と幅広い。

最後に、塚越を研究する意義を明らかにしておきたい。塚越は上州出身の平民だが、読書好き（学問好き）で、江戸では昌平黌で学び、横浜で英学を学び始め2年後には小浜藩雇いの英学教師として迎えられ士族となった。「大出世」である。しかも、その小浜藩の英学教師という身分を捨て、1870年6月、ほぼ自費で明確な計画も無く、単独で米国へ留学する。チャイナ号に同船していた、桑名藩や幕臣出身者のような国外逃亡的渡米では無い。カリフォルニアでは、他の自費留学生のように苦学した形跡はあまり無く、逆に在米日本人の面倒を見ていた、という。東部に移動後も、持病のリューマチに苦しみなながらも、知的職業についている。

幕末維新时期の米国日本人留学生としては、今までに見られないタイプである。さらに塚越が「大出世」を果たした横浜時代も、横浜英学史研究に新たな光を当てる可能性がある。これまで横浜英学史は、ヘボンやブラウン等、著名な宣教師に学び、後年歴史に名を残した「明治の偉人」研究が中心だったという印象がある⁽²⁰⁾。塚越は、横浜時代の本職は、吉田橋の関門の警備員であり、帰国後は横浜税関勤務の1官僚に過ぎない。

幕末維新时期に英学志望で横浜に集まってきた日本人は、塚越や星のような平民あるいは幕臣以外の士族、維新後であれば脱走幕臣、といった下層ヒエラルキーの人物もいた。彼らと、宣教師も含めた横浜在住外国人とが織りなす、幕末維新时期の横浜英学の実相は大変興味深い。

福井県図書館・文書館，小浜市役所の酒井家文庫担当の職員の方々，舞鶴高等専門学校の図書館職員の方々，貴重な『酒井家文庫綜合目録』を長期間に渡り拝読させていただいた福井県北越市の山下英一先生，横浜在住宣教師に関する貴重な情報を提供していただいた中島耕二先生には，特に大変お世話になり，この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

《注》

- (1) 『拓殖大学人文科学研究紀要 人文・自然・人間科学研究』（47号，2022年3月）pp. 177-214。
- (2) 同上，pp. 193-202。
- (3) 福井県立図書館，県文書館に塚越の調査依頼をしたところ，職員の長野栄俊氏から，塚越は塚越鈴彦という名前であることを教わり，次男の塚越丘二郎が執筆した『金蘭簿物語』（1929年出版）を紹介された。長野氏からは，塚越に言及した論文，山下英一「グリフィスとその時代——一八九〇—一九〇〇年代の日本——」（『若越郷土研究』，45巻1号，2000年，pp. 1-13）も御教示いただいた。
『金蘭簿物語』によると，塚越酸素彦は『金蘭簿』という「渡米前後の生活を簡単に記したノート」を残していた。この内容を基に，次男の丘二郎が，肉親，塚越の知人の談話，残された書簡，書類の内容等をまとめて記述した伝記が『金蘭簿物語』である。
著者塚越丘二郎が執筆に使用した史料との照合作業が必要であるが，太田市立図書館，太田市教育委員会文化財課に問い合わせたところ，当該原史料の所蔵場所は確認できていない。塚越家が所蔵している可能性が高いが未調査である。
本書は，東京都の同労社印刷の非売品である。国外ではベルリン国立図書館も所蔵している。筆者が知る限り，『金蘭簿物語』を研究史料として活用，引用しているのは，有泉貞夫『星亨』（朝日新聞社，1983年）のみである。
- (4) 小浜市立図書館編『酒井家文庫綜合目録』（小浜市立図書館，1987年），p. 288に，書き込みが転記されている。
- (5) 『日本英学風土記』は，著者池田が全国の都道府県を回り，各都道府県の図書館等が所蔵している英学史関連一次史料を調査し，その結果についてまとめた労作である。インターネットが無い時代に，多くの貴重な史料を足で集め得た事に驚かされる。ちなみに，福井県の項（pp. 302-326）では小浜藩の英学については触れていない。著名な蘭学者杉田玄白（1733-1817）と中川淳庵（1739-1786）が小浜藩医であること，幕末に福井・小浜藩が蕃書調所に市川斉宮（1818-1899）と杉田成郷（1817-1859）を訳員として派遣したことに触れているのみである（p. 302）。
- (6) 塚越は，良之介，酸素彦，鈴彦と名前を変えている。海外移住150周年研究プロジェクトの調査結果（『遙かなる「ワカマツ・コロニー」』，彩流社，2019年）によると，海外旅券勘合簿神奈川県之部と於開港場免状相渡候航海人明細鑑に，明治三年の箇所「鈴彦」という名前が記載されている。リストのすぐ後に，同じ便に乗船した旧桑名藩士の高木貞作と山脇正勝（多藝誠輔）の「貞作」，「誠輔」が続くので，ほぼ間違いなく塚越酸素彦（鈴彦）だろう。『金蘭簿物語』（p. 4）に，酸素彦から鈴彦への漢字の変更は「鈴彦（明治三年，洋航に差掛る不都合に付止む無き事）」と書かれている。それぞれの記述は以下の通りである。
 - ・「海外旅券勘合簿神奈川県之部：免状番号 319，29歳。出身地は横浜北仲通四丁目森兵衛店，身分・職業は高橋屋小兵衛弟，渡航理由は米国商人ゴブル小仕としてサンフランシスコへ。」（史・資料 p. 98）

- ・「於開港場免状相渡候航海人明細鑑：出身地は横浜北仲通四丁目嘉兵衛店高橋ヤ、身分・職業は小房弟、渡航理由は米人ゴブル小仕ニ被雇、発行日は庚午五月二十三日、返納年月は（明治）6年10月4日、年齢31。」（史・資料 p.110）

年齢等、細かな点で相違はあるが、両方とも米人ゴブル小仕という点では一致している。ゴブルに関しては未調査である。

- (7) 田中は地の利を活かし、少なくとも8年越しで小浜市立図書館を訪問し、史料をじっくり何度も閲覧することができた。その論稿には、原史料に直に何度も接することができた研究者ならではの厚みと深みがある。「小浜の英学」の最後に、次のように田中は記している。「小浜市立図書館所蔵の英書に出会ってからすでに数年がたった。約200冊の英書があるというだけで、それらが語りかけているものが、何であるのか年を経るごとによやくわかってきた。」（p.110）

- (8) 小畑の「酒井家文庫目録編集あれこれ（第一回）」は、『若越郷土研究』32巻4号、1987年、pp.53-59）に、山下の「グリフィスとその時代——一八九〇——一九〇〇年代の日本——」（同45巻1号、2000年、pp.1-13）に掲載されている。酒井家文庫の経緯に関しては、小畑昭八郎「酒井家文庫の成立について」（小浜市立図書館『酒井家文庫総合目録』小浜市立図書館、1987年）pp.5-10を参照。

酒井家文庫は、1941年に旧小浜藩主酒井家から小浜町に寄贈された。蔵書は東京の酒井家から小浜城内の裁判所内にあった旧雲浜図書館に運ばれた。その後、戦火を避けるため、あるいはその他の理由により、転々としたが、最後は旧小浜町立図書館に納められた。

約2万6千冊の本の中には、由来と内容が異なる蔵書群があるが、今回の研究と関係が深いのは藩校の旧蔵本である。江戸藩邸にあった3つの藩校と小浜の順造館の蔵書である。それらが藩校別ではなく合体した形となって保存、管理されている。

- (9) 『英華辞典』に関しては、茂住實男「中国語を媒介にした英学研究」『大倉山論集』と、宮田和子『英華辞典の総合的研究 19世紀を中心として』を参照した。宮田によると、この辞書は「中国語あるいは英語の学習者と、商業関係者を対象とする」辞書だった（pp.108-109）。現在、4点セット以外も含めて、日本国内に76部の所在が確認されている（p.244）。

漢文の素養があった当時の日本人には大変好評だったようで、これを原著とする和刻本が、明治になってからも、2種類出版された。中村敬宇『英華和訳事典』（1879-1881）と、井上哲次郎『増訂英華辞典』（1883-1885）である。

- (10) 『酒井家文庫総合目録』のp.145以降に、付録二として印記集が色刷りで掲載されている。田中洋「小浜の英学」には「印影による英書分類」という節がある（pp.107-108）。田中洋「福井県小浜市立図書館英書の書誌的研究 その1（辞書類）」には、蔵書印の種類として、軍務所、小浜学校、酒井家、遠敷雲浜図書館、敦賀第五大区小学校、敦賀第七大区小学校が挙げられている（p.152）。数的検証はしていないが、1870年以前出版の英書は「軍務所」の蔵書印が多い印象を受ける。星が1869年、塚越が1870年に小浜を去った後、彼らが小浜藩に残した英書が、1869年に設立された軍務所に保管されたのではないだろうか。

- (11) 西本喜久子「19世紀アメリカにおける『ウィルソン・リーダー』の革新的要素と位置づけ——『マクガフィー・リーダー』との比較を中心に——」pp.131-133。

- (12) 中島耕二編『タムソン書簡集』p.38。

- (13) 田中洋「小浜の英学」pp.104-108。田中洋「福井県小浜市立図書館英書の書誌的研究 その1（辞書類）」によると、田中は、この軍務所の印章について防衛庁図書室、戦史室に調査を依頼した。陸軍奉行の管轄にあった出先行政機関ではないか、という返事を受け取ったという（p.153）。

- (14) 書き込みを実見、撮影していただいた川股氏によると、書き込みは、薄い下書きをペンでなぞっているように見える。そして、この下書きは鉛筆のように見えるという。

- (15) 誰がどのクラスを担当したかに関しては、公の史料があるわけではない。各宣教師の書簡の内容等が根拠となっている。
- (16) 小玉晃一，敏子『明治の横浜 英語・キリスト教文学』（笠間書院，1979年）p.37に、星は下級クラスだったと書かれている。出典は三宅秀の回顧談である（福田雅代『桔梗—三宅秀とその周辺』p.280）。この三宅の発言に依ると、最上級クラスの学生として、三宅秀，矢田部良吉，大鳥圭介，古屋作左衛門，藤倉健達，塚原周造の名前が挙げられている。
- (17) 横浜英学所でテキストとして使われた本と酒井家文庫の英書を比較しておく。塚越か星が横浜英学所で使用したテキストが、小浜に残されているかどうかを確認することが目的である。前出，小玉，pp.63-64を参照した。

横浜英学所では、サージェント・リーダーは1stと2ndが使われていたが、3rdに関しては史料に記されていない。田中洋「福井県小浜市立図書館英書の書誌的研究（その2）（読本類）」によると、小浜市立図書館には、1stは1866年版が5冊，1869年版が1冊，出版年無しが5冊，計11冊，2ndは1872年版が計8冊，3rdは1869年版が2冊所蔵されている。1stの1866年版は別として，出版年から判断すると，1865，1866年に横浜英学所で使われていたものでは無さそうだ。横浜英学所で使われていたとされるウェブスターの『スペリング・ブック』が，出版年は異なるものの，小浜にあるNoah Webster, *The Elementary Spelling Book*, New York, Appleton & Co. 1886と同一かどうかは不明である。横浜英学所で使われていたことが分かっている，『ステップ・バイ・ステップ』（初級編）と，ミッチェルの地理書は原書名が確認できていない。ブラウンが著し，上級クラスで使用したという『日英会話編』*Colloquial Japanese*は小浜には無い。塚越か星が横浜英学所で1865，1866年に使用した本が小浜に持ち込まれたケースは，あったとしてもごく少数と言えそうだ。横浜英学所が各クラスで使用したテキストの正式名称等の，より正確な情報を待ちたい。

- (18) 本稿注(15)参照。榎田益美「横浜開港場における英語教育——ヘボンを介して開設した「横浜英学所」（『郷土神奈川』，55号）は特にこの点について触れていない。茂住實男「横浜英学所（中）」（『大倉山論集』30号）では，ブラウンが1863年8月25日付けの書簡で，2人の大名子弟に英語を指導している例を挙げている。神奈川奉行は，江戸の開成所で幕臣以外の入学を認めていることを理由に，横浜英学所でも幕臣以外の自費入学を許可する願いを幕府に出している。これに対する幕府の返事は見当たらない。しかし，幕府は，幕臣以外にも，神奈川奉行所通弁，同所詰通詞に個人的に英語を学ぶことは許可している（pp.76-77）。

小玉晃一，敏子『明治の横浜 英語・キリスト教文学』では，星亨のような平民の例の他に，安藤太郎（1846-1924，鳥羽藩医の息子，幕臣）の1863年の例を引用している。「英学の先生は暁の星ほどもない。こっちは習いたいが，一途で方々を探すと，横浜に米国人が4人いて親切に教えてくれるとの話，行暮れた旅人が燈火を見つけたかのよう，さっそく出掛けた。（中略，鳥羽藩士の息子の安藤が吉田橋関門を苦勞して通る話が書かれている）そこでいまの税関や県庁のあるあたりには，運上所と称えたもので，そこへ米国人を尋ねると，見る影もなき長屋に4人が棲んでいて，破れ畳の上で教えている。もともと耶蘇教伝道の目的で渡来したもので，それには語学の教授をもって青年を手馴づけるのが早道であると，門を訪ずるものは喜んでこれを迎え，無月謝同様の厚遇をした。その先生がヘボン君・バラ君・タムソン君・ブラウン君でヘボン君はいまに壮健でいられる。（中略）当時わたくしどもの仲間には大鳥圭介・星亨・沼間守一・益田孝・林薫・三宅秀それに先年鎌倉で溺死した田中館理学博士ら，いわゆる後年の名士がいた。」（pp.57-58，原典は『横浜どんたく』上巻）。

- (19) <https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/html/tenjikai/tenjikai2005/tenji/index-f.html> (2022年8月19日最終閲覧)
- (20) 横浜在住宣教師に詳しい中島耕二氏から，横浜英学所で学んだ学生について以下のような教示をいただいた。

「幕政中に横浜に集まった英学志望者は、ヘボン塾、タムソン塾や横浜英学所に限定しても、林董、佐藤百太郎、三宅秀、高橋是清、鈴木知雄、沼間守一、早矢仕有的、益田孝、益田克徳、大槻文彦、安藤太郎、大鳥圭介、矢田部良吉、塚原周造、乙骨謙三、田中館愛橘、高松凌雲等が確認され、維新後にあつては、旧幕臣や佐幕系士族（上級武士から下級武士）のほか、前田利嗣、松平定敬、松平定教、大関増勤など旧大名の海外留学準備組が高島学校や横浜修文館で学んでいます。」

参考文献

● 基調文献（重要度順）

- ・塚越丘二郎『金蘭簿物語』（著者発行，1929年）。
- ・田中洋「福井県小浜市立図書館英書の書誌的研究 その1（辞書類）」（『舞鶴高等専門学校紀要』11号，1976年3月）pp.152-163。
- ・同「同上 その2（読本類）」（『舞鶴高等専門学校紀要』12号，1977年3月）pp.197-202。
- ・同「同上 その3（文法及び雑）」（『舞鶴高等専門学校紀要』13号，1978年3月）pp.150-161。
- ・同「小浜の英学」（『舞鶴高等専門学校紀要』15号，1980年3月）pp.100-122。
- ・同「小浜学校 英学教授 塚越鈴彦」（『舞鶴高等専門学校紀要』19号，1984年3月）pp.79-87。
- ・小浜市立図書館編『酒井家文庫綜合目録』（小浜市立図書館，1987年）。
- ・有泉貞夫『星亨』（朝日評伝選27，朝日新聞社，1983年）。
- ・野沢鷄一編著，川崎勝，広瀬順皓校注『星亨とその時代1』（東洋文庫437，平凡社，1984年）。

● その他の文献

- ・小畑昭八郎「酒井家文庫目録編集あれこれ（第一回）」（『若越郷土研究』32巻4号，1987年7月）pp.53-59。
- ・海外移住150周年研究プロジェクト編『遙かなる「ワカマツ・コロニー」』（彩流社，2019年）。
- ・小玉晃一，敏子『明治の横浜 英語・キリスト教文学』（笠間書院，1979年）。
- ・権田益美「幕末期から明治初期の横浜開港場における英語の学習 — 林薫一族を事例に —」（『港湾経済研究』50号，2011年）pp.139-148。
- ・同「横浜開港場における英語教育 — ヘボンを介して開設した「横浜英学所」」（『郷土神奈川』55号，2017年）pp.16-32。
- ・酒井シズ「良斎と秀」（福田雅代『桔梗 — 三宅秀とその周辺』，1985年）pp.20-33。
- ・中島耕二「宣教師デビット・タムソンの生涯 — 誕生から日本基督一致教会の創立までを中心として —」（『明治学院大学キリスト教研究所紀要』35号，2002年）pp.225-275。
- ・中島耕二編，日本基督教団新栄教会タムソン書簡集編集委員会訳『タムソン書簡集』（教文館，2022年）。
- ・西本喜久子「19世紀アメリカにおける『ウィルソン・リーダー』の革新的要素と位置づけ — 『マクガフィー・リーダーとの比較を中心に — 』（『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』56号，2007年）pp.131-140。
- ・藩政史料調査会「小浜藩酒井家史料の調査」（『史学雑誌/史学会 編』66号，1957年2月）pp.154-161。
- ・藤田豊「蘭学・英学物理書接点 — 理学初歩」（『英学史研究』17号，1985年）pp.19-26。
- ・宮田和子『英華辞典の総合的研究 19世紀を中心として』（白帝社，2010年）。
- ・茂住實男「中国語を媒介にした英学研究」（『大倉山論集』27号，1990年3月）pp.301-321。

- 同「横浜英学所（上）」（『大倉山論集』29号，1991年3月）pp.235-268。
- 同「横浜英学所（中）」（『大倉山論集』30号，1991年12月）pp.59-90。
- 同「横浜英学所（下）」（『大倉山論集』32号，1992年12月）pp.125-165。
- 山下英一「グリフィスとその時代——一八九〇—一九〇〇年代の日本——」（『若越郷土研究』45巻1号，2000年）pp.1-13。

* 本稿で使用した写真は，すべて小浜市（酒井家文庫・小浜市所蔵）の撮影と掲載の許可を得ている。

（原稿受付 2022年6月22日）

事前刺激トレーニングによる走力の向上と コンディショニング

米 重 修 一

Development of Running Abilities and Better Physical Conditioning through Stimulation Training

Shuichi YONESHIGE

Abstract

This article discusses that stimulation training to help generate power using hamstrings is effective in developing running abilities and having better physical conditioning.

Keywords: 初動負荷走法, ランニングフォーム, ハムストリングス, 事前刺激トレーニング

1. はじめに

本論は、米重（2017）「事前疲労方式トレーニングによる記録向上」¹⁾で発表した研究を発展させてその成果をまとめたものである。

2017年の論文¹⁾ではランニングの前にレッグカールトレーニングによるハムストリングスの出力準備を行うことで、初動負荷走法²⁾による走力の向上に繋がるということを紹介するとともに、骨盤の角度の重要性を強調した。

本論では、ランニングの前に、レッグカールトレーニングに加えて、チェンジ・ウォーキング・フロム・ランニングを取り入れることで体幹からハムストリングスへの順の出力が可能になり、その結果、更に強いハムストリングスの出力が得られ、一層の走力の向上に繋がることを報告する。

このチェンジ・ウォーキング・フロム・ランニングは、初動負荷理論³⁾（1994）の考案者である小山裕史氏により、「走っている状態から歩行にかえる動き、これは、神経と筋肉の機能が高まるとできるのです。身体の中心部にうまく力を発揮させ、腕や足という末端部に力を伝えていく動作の基本トレーニングです」³⁾と説明されている。

初動負荷走法の基礎となる初動負荷理論²⁾は、体幹から末端部への筋肉の運動連鎖により、高いパフォーマンスが発揮できるという考え方である。体幹以外の末端部の筋肉を先行して出力してしまうと、体幹から出力する運動連鎖の崩壊となってしまう。「人間の場合、膝を深く曲げず、足底全体で着地するという連続動作の中で、進行方向に骨盤が前傾できると、重心が先に移動し、足底部はまだ地面を押さえています。その最後のギリギリの瞬間に拇趾球が地面を押すと、更なる加速度が生まれます。これが本当の『キック』です。旧来の『速く走るには拇趾球で地面を蹴りなさい』とは全く逆の動作ですね。スピーディーでしなやかな走りのできる馬やピューマ達の動きに近いのが『初動負荷走者』です⁴⁾と述べられている動きに必要な感覚が、チェンジ・ウォーキング・フロム・ランニングにより養われると考える。

筆者は1985年スペインにて、10000 m ロサンゼルスオリンピック金メダリスト、イタリアのアルベルト・コバ選手と一緒にトレーニングを行う機会を得た。その際コバ選手は、トレーニングのウォーミングアップに、着地した脚を地面に長く接地したタイミングでの走法と、短い接地タイミングでの走法を繰り返すトレーニングを取り入れていた。筆者と一緒にこのトレーニングを実施したところ、大胸筋から背筋へと出力し、ハムストリングスが地面を強く押し、走速度の上昇を実感した。このことで、ハムストリングスを強く出力させる準備を行うことが、走力の向上に繋がることを知るきっかけとなった。

このことを踏まえて、本研究では、体幹からハムストリングスへと出力し、強いハムストリングスの出力を得る準備に、チェンジ・ウォーキング・フロム・ランニングを取り入れた。

コバ選手が行っていたこのトレーニングの手法と、チェンジ・ウォーキング・フロム・ランニングは、身体を中心から、腕や脚へと末端部へ向上的に力を伝えるという同じ考え方に基づいている。

本研究では、体幹からハムストリングスへ出力する初動負荷走法が恒常的に行われるよう、事前刺激トレーニングとしてレッグカールトレーニングとチェンジ・ウォーキング・フロム・ランニングを取り入れることが、ランナーにとって有効であるかを検証する。被験者は岐阜県の中京高校の陸上競技部員である。さらに本稿では、筆者が選手として、事前刺激トレーニングを行って大会に臨んだコンディショニングの成果を報告する。また、日本人選手とケニア人選手の筋肉横断面積の比較に基づく考察を行い、筆者の大学駅伝監督としての経験を紹介する。

2. 初動負荷走法

初動負荷走法は、「反射的、加速的に動くためには、右足が出る時に、右足に右胸を乗せるように、左足が出る時に左胸を左足に乗せるように動作させる。垂直軸が形成された上に交互に上体が乗り込むので、地面を押す力が大きくなる。肩、肩甲骨、鎖骨の動きが柔らかい動作のできる人であれば、右足に右胸が乗る時、肩甲骨がスライドして、右胸は加速的に内向きに動く……これを Dodge Movement（かわし動作）と呼ぶ。この動作ができると、反射的に骨盤にまでいたる大きな背中の筋肉が瞬時に働かされ、骨盤を通じて接地足の腿裏の出力を爆発させる。そしてその後、振り出し足の緊張を緩めて、振り出しやすくする²⁾ という考え方であり、ランニングで、能動的に筋肉を動かして動作するものではなく、身体の変化に伴って自然に運動させる、という考え方である。

また、本研究でハムストリングスに出力させることをポイントにした理由は、「ハムストリングスは強大な後方スイング筋、立ち上がりの筋としての力を発揮します。脚の前方への振り出しは腸腰筋が受け持っていますが、先述のタイミングがシンクロナイズできれば効率良く働きます²⁾」と説明されているように、ランニングにおいて、地面を押す動作と、振り出した脚を引き戻す両方の役目を行う筋肉である。そのような考えに基づき、ハムストリングスに事前に刺激を与えるレッグカールトレーニングと、チェンジ・ウォーキング・フロム・ランニングにより、体幹から出力する初動負荷走法がいかにかに効果的であるかを検証した。



図1 二人一組のレッグカールトレーニング

3. ランニングテストの方法

岐阜県瑞浪市営陸上競技場の走路で、当初から計測してある 200 m の走路を利用した。記録の計測方法は、スタート係の中京高校の陸上部員が、スタート地点横に立ち、用意、GO と旗を小気味良く振り下ろした。

ゴール地点に陸上部員がストップウォッチを持って、タイムを計測した。

3000 m ジョギングランニングを集団で行い、下記に示す「事前疲労方式トレーニングによる記録向上」¹⁾と同じ手法で初動負荷走法の準備を行った。

1 回目のタイムトライアルの前に、図 1 に示したように、サポートする方の人が相手の片方の踵に手を添えて、10 回目でマックスになる負荷を与えて片足ずつ、3 セット、レッグカールトレーニングを行った。

レッグカールトレーニングは通常両足同時に行うものであるが、片足ずつの足でレッグカールトレーニングを行う理由を以下の通り説明した。

片方ずつのレッグカールトレーニングを行うことで、アンバランスがある場合、弱い方のハムストリングスに大きな負荷を感じるので、筋力のアンバランスを知ることができる。アンバランスが判明した場合、強い方よりトレーニング回数を増やしてレッグカールトレーニングを行うことで、左右のアンバランスが修正される。通常行う、両足同時にレッグカールトレーニングを行うと、強い方のハムストリングスだけが強化され、弱い方のハムストリングスが取り残され、ますますアンバランスになるので、避けるべきであると伝えた。

レッグカールトレーニングを終えて、以下のことを説明して 1 回目のタイムトライアルを行った。

1 回目タイムトライアル

1. スタートで地面を蹴らない。

「スタートで一番最初に大胸筋を使って身体を前に出しましょう、すると事前刺激トレーニングを行ったハムストリングスに力が伝達されるので、大胸筋⇒背筋⇒ハムストリングス⇒腸腰筋へと出力していきます。これが初動負荷走法です」と説明した。

2. 膝を高く上げて走ろうとしない。

3. つま先で蹴らない。

1, 2, 3 の準備を行い 1 回目のタイムトライアルを行った。

2 回目タイムトライアル

全員で 30 m ジョギング、10 m ウォーキングを繰り返すチェンジ・ウォーキング・

フロム・ランニングを10回行った。

GOの合図でチェンジ・ウォーキング・フロム・ランニングで得た骨盤が前傾された感覚で出力することを意識して、ハムストリングスを出力させて走るように説明し、2回目のタイムトライアルを行った。

4. タイムトライアル結果

表1に示したように16名の被験者のうち、11名に記録の向上が見られ、1回目の平均タイムが28"09から2回目の平均タイムは28"01へと記録の向上が確認できた。

1回目のタイムトライアルでハムストリングスに、事前に刺激が入った状態で初動負荷走法を行った後と、2回目のタイムトライアルにチェンジ・ウォーキング・フロム・ランニングを取り入れた初動負荷走法を比較して、2回目のタイムトライアルで走力の向上が見られた。このことは、1回目のタイムトライアルで、ある程度ハムストリングスの出力ができていたところに、2回目のタイムトライアルで、体幹からハムストリングスへの運動連鎖が構築されてハムストリングスから更に大きな出力が得られ、記録の向上に繋がったと考えられる。

表1 中京高校陸上部員の200mのタイムトライアル結果

瑞浪市営 陸上競技場
2019年1月12日
スタート15時 気温5度

	性別	学年	1回目	2回目
1	男	3	27"52	27"31
2	男	3	26"83	26"81
3	男	3	28"21	28"42
4	男	3	26"53	26"72
5	男	3	28"64	28"22
6	男	2	27"21	27"12
7	男	2	27"39	27"64
8	男	2	28"56	28"43
9	男	2	28"36	28"24
10	男	2	28"77	28"16
11	男	2	28"36	28"54
12	男	1	27"63	27"38
13	男	1	28"91	28"62
14	男	1	28"43	28"22
15	男	1	28"68	28"65
16	男	1	29"37	29"64

5. 事前刺激トレーニングを取り入れたレースへのコンディショニング

本節では、筆者が選手として大会に臨んだ際の事前刺激トレーニングによるコンディショニングについて述べる。

表2は、筆者が初マラソン日本新記録を樹立した際、ポイント練習の前に、レッグカールトトレーニングにより、体幹からハムストリングスへと出力するための準備を事前刺激トレーニングを行い、初動負荷走法によるコンディショニングを行ったトレーニングメニューである。

「初動負荷理論の特徴の具現化は、神経と筋肉の合目的な協調性を高めます」(小山2004)²⁾と説明されているように、初動負荷走法を行うことで、ハムストリングスから腸腰筋へと出力し、骨盤(腸腰筋の腸骨筋は左右の骨盤の中にあるため、骨盤が出力している感覚になる)が地面を押していることを感じ、勝手に脚が動く感覚を実感できる。すなわち、勝手に脚が動く感覚を得ることが初動負荷走法の確認手法である。

レースの12日前を、血液検索のタイミングとして、スポーツドクターに診断を仰いだ。ヘモグロビン値は14.6 g/dlで、マラソンに向けて適正なヘモグロビン値であると診断された。

筆者が在籍していた旭化成陸上競技部の、マラソンに向けたトレーニングスケジュールは、レースまでの3ヶ月間で40 km 走を12回取り入れ、持久力を蓄えるメニューの40 km 走の間に1 km×10回のインターバルトレーニングや20 kmのペースランニングを取り入れ、持久力の蓄積と、スピード持久力の向上を行いレースに出場する手法である。筆者が行った40 km ペースランニングのタイムは、レースの3ヶ月前の、1回目の40 km ペースランニングが2°12'00"であった、40 km 走の回数を重ね、最後の12回目の40 km ペースランニングは、2°9'50"まで記録が上昇した、そのことで有酸素能力の向上が確認できた。

40 km という長い走行距離では、本来、初動負荷走法の大胸筋⇒背筋⇒ハムストリングス⇒腸腰筋へと出力したいものを、風向きの変化、登り下りの起伏に対応する際、無意識に腕の筋肉を先行して出力する走法となりやすい。体幹以外の筋肉を先行して出力することで、筋肉の運動連鎖の崩壊となる。筋肉の運動連鎖の崩壊は、大腿四頭筋が先行して出力する走法となる。そのことで足裏に強い着地衝撃を受けるランニングフォームとなり、血管の中で赤血球が破壊される「溶血性貧血」を起こすことが示唆される。「溶血性貧血」とは石田(2012)⁴⁾によれば、「足底部への衝撃が原因で物理的に赤血球の破壊が亢進→溶血を起こし、血中ハプトグロビンの結合許容量を超えたヘモグロビンが尿中へ排泄されることで生じる」(スポーツと貧血)⁵⁾と報告されていることから、へ

ヘモグロビン値を確認することで、着地衝撃の少ない走法となっていることの確認手段とした。

レースの12日前を血液検索のタイミングとして、スポーツドクターに診断を仰いだ。ヘモグロビン値は14.6 g/dlで、マラソンに向けて適正なヘモグロビン値であると診断された。この後もヘモグロビン値を定期的に測定し、適性値に保たれていることの確認を続けた。

1月24日、レースの11日前、レッグカールによる事前刺激トレーニングを行い、ハムストリングス⇒腸腰筋へと出力する運動連鎖の準備を終え、スタミナ筋と呼ばれるハムストリングスが力を発揮するようにしておいて、フルマラソンの約半分の距離、20 km 走をレースのリハーサルと位置付けしてタイムトライアルを行った。筆者はトラックレース、駅伝においてもレースの10日前、または11日前に、全力でタイムトライアルするメニューを、リハーサルと位置付け行っていた。

マラソン大会に向けたリハーサルの目標タイムを60'00"としたが、結果は59'10"であった。このことはスピード、持久力、共に充実していることで出せるタイムであり、目的とする筋肉の出力順による走法であることを示唆した。このリハーサルで目標タイムに届かない場合は「末端部に位置する腕や、膝ふくらはぎの筋肉はリラックスが必要で、張力を発揮させたくありません。この動作形態が初動負荷理論の特徴です。末端部の筋肉が大きく出力すれば、せっかく身体根幹部で作り出した力が生かされず、むしろ動きが硬くなり、加速度が制限されます」(小山2004)²⁾と説明されているように、末端部の出力により、ハムストリングス⇒腸腰筋へと出力する筋肉の運動連鎖が崩壊していることが疑われる。ジョギングでハムストリングスを長めに地面を押すタイミングを取ると、次第にハムストリングスが強く出力し、目的の筋肉の出力順の再構築が確認できる。

1月27日、レースの8日前、レッグカールによる事前刺激トレーニングを行い、30 km 走を、1°43'44"で行った。2日前のリハーサルの疲労は残っていると考えられるものの、レースに向けた、持久力を蓄積するタイミングであると考えて30 km 走を行った。レースまでの10日～11日前のリハーサルのタイムトライアルで全力で走ることと、レースまでの7日～8日前の30 km 走で持久力を蓄積する2つのメニューが、レースの結果を左右する重要な仕上げ期間であると考えた。

この考え方は、トラックレースや、駅伝のレースにおいても同じ考え方で、トラックレースの10000 m に出場する場合、10～11日前に、インターバルトレーニングでリハーサルメニューを行い、7～8日前に30 km 走を1°45'00"で行った。

3000 m 8'30" (200 m) 2000 m 5'30" (200 m) 3000 m 8'30" (200 m) 2000 m 5'30" で、(200 m) のリカバリー走以外の合計距離 10000 m のメニューを、28'00" の合計タ

事前刺激トレーニングによる走力の向上とコンディショニング

表2 事前刺激トレーニングを取り入れたフルマラソンのコンディショニング

1990年	朝のトレーニング	メイントレーニング	備考
1/22 (月)	12 km ジョギング	14 km ジョギング 100 m×4本	
1/23 (火)	12 km ジョギング	14 km ジョギング 100 m×4本	血液検査 ヘモグロビン値 14.6
1/24 (水)	12 km ジョギング	レッグカール 右 25 kg× 10回, 左 25 kg×10回以上 3セット後 20 km ペース ランニング	20 km リハーサルタイム 59' 10"
1/25 (木)	12 km ジョギング	14 km ジョギング 100 m×4本	
1/26 (金)	12 km ジョギング	14 km ジョギング 100 m×4本	
1/27 (土)	12 km ジョギング	レッグカール 右 25 kg× 10回, 左 25 kg×10回以上 3セット後 30 km ペース ランニング	30 km タイム 1°43' 44"
1/28 (日)	12 km ジョギング	14 km ジョギング 100 m×4本	
1/29 (月)	12 km ジョギング	14 km ジョギング 100 m×4本	
1/30 (火)	12 km ジョギング	レッグカール 右 25 kg× 10回, 左 25 kg×10回以上 3セット後 5 km ペースラ ンニング	5 km タイム 14' 28"
1/31 (水)	12 km ジョギング	14 km ジョギング 100 m×4本	
2/1 (木)	12 km ジョギング	14 km ジョギング 100 m×4本	
2/2 (金)	12 km ジョギング	レッグカール 右 25 kg× 10回, 左 25 kg×10回以上 3セット後 2 km ペースラ ンニング	2 km タイム 5' 43"
2/3 (土)	12 km ジョギング	14 km ジョギング 100 m×4本	
2/4 (日)	10 km ジョギング	1 km ジョギング ストレッチ, バウンディン グトレーニング, 3 km ジョ ギング, 100 m×4本	42.195 km, 2位 タイム 2°12' 00" 《初マラ ソン日本新記録》

タイムで達成できた場合、レースでは28'00"以内のタイムが達成されると想定し、リハーサルメニューの設定タイムにした。

駅伝においては、旭化成陸上部が全日本実業団駅伝に挑む際、リハーサルの距離を10 km とし、上位7名をメンバーに決定して、7区間に配置を行っている。

仕上げ期間のリハーサルメニューと30 km 走を終えたら、ここからレースまでの残りの日数を、疲労を取り除くことに重点を置き、リハーサルより更に体調を上げて行く期間とした。

1月30日、レースの5日前、レッグカールによる事前刺激トレーニングを行い、5 km を14'28"のペースランニングを行った。リハーサルの疲労は残っているものの、レース当日の最初の5 km で予測される通過タイムを15'00"とし、ここで予測タイムより速いタイムを体験しておくことで、レースでは余裕を持って通過できることを目的とした。

2月2日、レースの2日前、レッグカールによる事前刺激トレーニングを行い、2 km を、5'43"のペースランニングを行った。このトレーニングメニューは、レース前の最後のタイム計測のトレーニングであるが、レース当日は6'00"が想定されるものの、想定タイムより速く行い、余裕を持って通過できるためのトレーニングとした。

2月4日、初マラソン日本新記録樹立。

6. 日本人選手とケニア人選手の筋肉横断面積の比較

本研究は、ハムストリングスの事前刺激トレーニングにより、ハムストリングスから腸腰筋へと出力する走法で、パフォーマンスを出す考え方である。腸腰筋の重要性について、榎本（2007）らの研究で、日本人のトップランナーとケニア人のトップランナーの、筋肉の横断画像を三次元人体形状計測装置を用いて、横断面が算出された（表3）。

榎本ら（2007）によると「筋肉の横断面積は、ケニア人選手は大腰筋（腸腰筋）が大きく、日本人選手は内転筋が大きかった。ケニア人選手の走動作は、キック脚のスイングは、下腿がすばやく、かつ大きく前傾し、支持期を通して大腿のスイングスピードが大きい、そして、離地後、いったん後方へ送らせて、股関節屈曲トルクがタイミング良く、大きく発揮されることで効果的に大腿の前方スイング動作を行えると考えられた。ケニア人選手は、大腿の大きく、かつ速いスイング動作により大腰筋（腸腰筋）に代表される股関節屈曲群が発達しており、これは生まれつきというよりむしろ走速度の高い、かつ起伏の激しいところを走っていることで他の生理学的特徴とともに発達し、トレーニングの効果として表れているものと考えられる」⁶⁾。日本人選手が内転筋の発達が大きかったことは、小山（2004）により「今まで、走ることの基本として教えられてきた、

表3 日本人選手とケニア人選手の横断面積の比較

部位名	横断面積・絶対値 (cm ²)		横断面積・絶対値 (%)	
	日本人選手	ケニア人選手	日本人選手	ケニア人選手
大腿四頭筋	68.5±7.3	70.9±8.0	42.6±2.7	45.0±2.3
縫工筋	3.9±0.9	5.7±1.7	2.4±0.5	3.6±0.7
外側ハムストリングス	13.6±1.5	13.9±1.8	8.4±0.7	8.8±0.6
内側ハムストリングス	18.5±2.4	17.5±2.3	11.5±1.3	11.1±0.8
内転筋群	27.0±3.1	22.2±4.0	16.9±1.8	13.9±1.2
下腿三頭筋	52.7±8.2	44.5±4.4	57.0±2.7	54.7±2.8
腹直筋	13.6±2.8	13.9±3.2	3.9±0.7	3.9±0.8
外側腹筋群	48.4±5.3	51.5±8.2	13.8±1.5	14.3±2.1
大腰筋	35.1±3.7	38.5±1.7	9.9±0.7	10.8±1.3
脊柱起立筋	46.8±5.4	4.6±3.1	13.3±1.4	12.4±1.1

平均値±標準偏差

代表者 榎本靖士「ケニア人長距離選手の生理学的・バイオメカニクスの特徴の究明」～日本人長距離選手の強化方策を探る～、『一般財団法人上月財団 スポーツ研究助成事業報告書』(2007) pp. 12-13. より引用し筆者が作成

膝を高く上げて、つま先で強く蹴るという、全く不合理なこの動作を続けると、腿の内・表・裏側の筋肉が硬化します²⁾と指摘されているように、日本人選手は体幹以外の筋肉を先行して出力しがちであるためと考えられる。それに対して、ケニア人選手の典型的なトレーニングの場所は、凸凹した路面と起伏のある場所である。インターバルトレーニングや長い距離を走るトレーニングにおいても、常にハムストリングスから出力することにより、ハムストリングスが後方へのスイングと引き戻しの両方の役目をし、更に腸腰筋が引き戻しの役目をするのが反復され、腸腰筋の筋肉量の多さにつながったことが示唆される。現在、ケニア人選手の走力と、日本人選手の走力を比較すると、日本人選手に遅れが見られるものの、本研究で得られた事前刺激トレーニングを行って、ハムストリングス⇒腸腰筋へと出力する走法でトレーニングを行うことで、ハムストリングスと腸腰筋が発達し、世界との差は縮められるものと考えられる。

7. 大学陸上への示唆

筆者は、本学の陸上競技部の指導者となり、箱根駅伝に出場した。陸上競技部のクラブハウスにレッグカールマシーンを設置し、レッグカールトレーニングによるハムストリングスの出力準備を行い初動負荷走法を行うことを強化方針とした。また、公園の起伏を利用したクロスカントリートレーニングを重視した。コンディショニングは、筆者が現役時代行ったことを参考にして10日前にリハーサルメニューを行った。

第75回箱根駅伝の1区のスタート前、本学の東勝博選手に「これまで箱根駅伝の1区のレースを分析したが16km地点にある登り坂で、ほとんどの大学の選手が、腕の

筋肉を先行して出力し、運動連鎖の崩壊で腕を抱えた走法になるので、他大学の選手が腕を抱えていることを目視、確認できたらスパートのタイミングなので一気にスパートしよう」と、作戦を伝えた。東選手は、作戦通りのタイミングで一気にスパートしてきて本学初の箱根駅伝区間賞獲得者となった。選手に、初動負荷走法は体幹以外の筋肉を先行して出力させない走法であることを伝えるのは、レースの戦略にも使える考えである。

本学卒業の中本健太郎が、日本代表選手となり、2012年ロンドンオリンピックマラソン6位、2013年世界陸上モスクワ大会マラソン5位と、両大会で入賞するレースの中で、最後まで体幹以外の筋肉を先行させず、ハムストリングスから腸腰筋へと出力した効率の良い走法を持続して成果を挙げた。このことは初動負荷走法が、日本人が今後、継承すべき走法であることを示した。本学在学中に、レッグカールトレーニングにより、ハムストリングス出力の準備を行い、クロスカントリートレーニングを行ったことで、マラソンランナーに必要とされるハムストリングスから腸腰筋が強化されたと考えられる。これらのトレーニングは、世界で活躍するために必要なトレーニング方法であると考えられる。

8. まとめ

2人一組になり、ハムストリングスの事前刺激トレーニングを行った初動負荷走法の研究を進展させて、ハムストリングスの事前刺激トレーニングに、更にチェンジ・ウォーキング・フロム・ランニングを取り入れたことで、200mのタイムトライアルで69%が記録の向上者となったことは、レッグカールトレーニングによる、ハムストリングスから出力することを目的としたこれまでの研究と比較して、レッグカールトレーニングを行い、更にチェンジ・ウォーキング・フロム・ランニングを取り入れることで、体幹からハムストリングスへと出力する走法が、更に走力の向上に繋がることを示唆している。2019年度、中京高校陸上部の、全国高校駅伝岐阜予選の結果が、2時間10分30秒から、週3回、インターバルトレーニング等のポイント練習の前に、ハムストリングス出力の事前刺激トレーニングと、チェンジ・ウォーキング・フロム・ランニングを取り入れたトレーニングを、岐阜県高校駅伝予選まで1月から11月まで10ヶ月間行った結果、2020年の全国高校駅伝岐阜県予選では2時間7分56秒へと、2分36秒記録が向上し、チーム力の向上が確認できた。

フルマラソンのレースに出場するためには、持久力の蓄積と、筋肉に疲労を残さないコンディショニングが重要である。ポイント練習の前に、レッグカールトレーニングによる事前刺激トレーニングを行い、ハムストリングスから腸腰筋へと出力する準備を終えて、疲労が蓄積しやすい大腿四頭筋が先行して出力することを封印した走法でコンディ

ショニングを行ったことで、初マラソン日本新記録が達成できたと考えている。事前刺激トレーニングを行ってのコンディショニングは、レースに向けて有用な手法であると考えられる。

日本人選手とケニア人選手の筋横断面積を比較したとき、ケニア人選手の腸腰筋の筋肉量の多いことが知られているが、このトレーニングを行うことにより腸腰筋が発達し、世界との差は縮められるものと考えている。また、大学陸上において、初動負荷走法を指導し、体幹以外の筋肉を先行して出力させないことを意識させるのは、レースの戦略としても有用だろうと考える。

最後に、今回のランニングテストに協力して下さった中京高校陸上部の皆さんに心から感謝申し上げる。

参考文献

- 1) 米重修一「事前疲労方式トレーニングによる記録向上」九州大学『総合文化学研究所 総合文化学論輯』第6号(2017) pp.15-22.
- 2) 小山裕史「奇跡のトレーニング」講談社2004, pp.35-39.
- 3) 同上, pp.89-90.
- 4) 同上, pp.84-85.
- 5) 石田浩之「ヘモグロビン値正常, フェリチン低下にどう対応するか?」『慶応義塾大学論文』2012, pp.9-14.
- 6) 榎本靖士, 岡崎和伸, 岡田英孝, 渋谷俊浩, 杉田正明, 高橋英幸, 高松潤二, 前川剛輝, 森丘保典, 横澤俊治「ケニア人長距離選手の生理学的・バイオメカニクスの特徴の究明」～日本人長距離選手の強化方策を探る～, 『一般財団法人上月財団 スポーツ研究助成事業報告書』(2007) p.1.

(原稿受付 2022年6月15日)

“El Conde Niño” de *Riojarchivo.com*

Oscar Javier MENDOZA GARCÍA

Resumen

Como parte del trabajo de campo, hacemos una presentación musical transcribiendo las melodías de las catorce versiones cantadas del más popular romance “El Conde Niño” recopiladas en el sitio web *Riojarchivo* recogidas de pueblos de La Rioja, España. Comentamos también sus letras junto con otras dos versiones no cantadas también ahí recogidas.

Previamente enumeramos otras versiones publicadas de otros autores, unas con pauta musical y otras sin ella. Hacemos un análisis musical y comentamos el porqué, dentro de la variedad, se dan parecidos melódicos entre algunas de esas versiones. Vislumbramos que hay influencias melódicas entre ellas, de otras versiones de lejanas regiones de la Península Ibérica y de canciones populares.

Apreciamos diferencias en la letra entre las diferentes versiones del romance y que se cortan palabras o aparecen formas regionales en la dicción con el fin de acomodar los versos al octosílabo que caracteriza al romance. Algunas letras carecen de los versos de cabeza y otras se ven truncadas en la parte final o con diferentes terminaciones.

Como estudio etnomusicológico de un repertorio particular, centrado en la región riojana española, nos ayuda a percibir de manera visual las diferentes melodías recogidas y el cómo se han originado estas versiones del más veces interpretado romance, “El Conde Niño”. Estudio que nos da pautas para comprender los rasgos antropológicos, del folklore y la cultura, la forma de hablar y comunicarse y la idiosincrasia de los oriundos y habitantes de esta región.

Palabras Clave: Romance, El Conde Niño, El Conde Olinos, Folklore, Etnomusicología, La Rioja.

INTRODUCCIÓN

Nos basamos principalmente en este estudio en las grabaciones del romance “El Conde Niño” de “Riojarchivo: Archivo del Patrimonio Inmaterial de La Rioja”, que en el sitio web *Riojarchivo.com*¹ recoge estos testimonios orales grabados de música tradicional, de dichos y, en general, del folklore riojano de España². El objetivo de esta colección³ es recolectar documentos audiovisuales sobre el folklore riojano: canciones, romances, danzas, bailes, instrumentos musicales, cuentos, leyendas, juegos, adivinanzas, dictados tópicos, gastronomía, indumentaria, religiosidad popular, cultura agraria y pastoril, etnografía, dialectología, etc. En

bastantes romances de este sitio web se hace referencia a la obra impresa y publicada por Javier Asensio García, *Romancero general de La Rioja*⁴ que incluye 240 romances en 1250 versiones, con dos CDs en los que los propios informantes cantan los romances. Algunos de ellos también refieren al libro *Por campos del romancero: Estudios sobre la tradición oral moderna* de Diego Catalán⁵.

De entre sus treinta y cinco romances agrupados en el apartado “Amores Desdichados” de los romances que recoge el sitio web de *Riojarchivo.com* hay dieciséis con el título “El Conde Niño” con su correspondiente número romano que los diferencia y que nos sirve para señalar los capítulos de este estudio. Siete de estos romances son documentos audiovisuales, los otros nueve, solo grabados en audio. En cuanto a estos que llevan el título de “El Conde Niño” aparte de dos versiones recitadas, las demás son cantadas. De esas cantadas transcribimos ahora sus melodías en primicia, aunque pudieran asemejarse a otras versiones recogidas ya en papel pautado y publicadas o, pudiera ser, a otras que no se han hecho públicas. Al igual que otros documentos de este sitio web, estos romances van acompañados con la indicación de los nombres de los informantes, con su fecha de nacimiento, su localidad de origen, donde lo aprenderían, los nombres de los recopiladores con la fecha y lugar de la grabación (a veces en un lugar diferente al del que son oriundos los informantes), la transcripción, algún comentario y una pequeña enumeración de otros romances de similar temática.

Implícito en el título, queremos examinar prioritariamente las diferentes melodías del romance “El Conde Niño” que aparecen en el sitio web *Riojarchivo.com* y fueron recogidas de personas oriundas de algún pueblo riojano de España. Aunque son dieciséis los recogidos hasta el momento, transcribimos la melodía de catorce de ellos puesto que el VI, de Ribafrecha y el VIII, de Foncea, son recitados. Sin señalar la letra en la partitura, nos centramos en la transcripción de la melodía de los cuatro primeros versos (a veces de los dos primeros porque algún verso se repite con la misma o diferente melodía), melodía que se va repitiendo de forma continua en todas las demás estrofas del romance aunque con diversos matices y acomodaciones a la letra hechos por los informantes. Los comentarios que hagamos de las letras se pueden contrastar fácilmente con las letras que están transcritas en cada apartado del sitio web, por lo que evitaremos escribirlas. El propósito de esta transcripción musical es tratar de ayudar a objetivar y analizar los datos musicales que podamos entresacar de ellos. Después del ingente trabajo de campo realizado por los recopiladores, que es digno de encomio y alabanza, nuestro reto pudiera pensarse cosa baladí pero nos parece, aunque no sea loable, válido para el análisis etnomusical de este romance en la pequeña región riojana de España.

No son las únicas versiones de “El Conde Niño” recogidas en La Rioja. En el sitio web *Pan-Hispanic Ballad Project*⁶ se recogen 432 versiones de este romance tanto en España como en otros países de Europa, África y en el continente de América, cuya letra se puede ver en el apartado de Ballad Database⁷, de las que 8, sin registrar la música, son de pueblos riojanos de España⁸: Las Ruedas de Enciso

(n. 9171), Villar de Torre (n. 9172, que la recitadora dice haberla cantado cuando jugaban a la sogá), Baños de Río Tobía (n. 9173, y variante de Viniegra de Abajo que se cantaba en las labores caseras), Matute (n. 9174), Logroño (n. 9175), Villoslada de Cameros (n. 9215 y 9216), y Ezcaray (n. 9217, con los nombres del conde Olinos, Olindo y Olindos). Las tres de estos dos últimos pueblos están “contaminadas” con el romance “Enamorada de un muerto”.

El musicólogo de origen alemán Kurt Schindler (1882–1935) recoge entre 1929 y 1932 una versión muy completa en partitura manuscrita de este romance que titula “El Conde Olinos (Villoslada)”⁹. Es una versión de Villoslada de Cameros¹⁰ que, él mismo aclara en el subtítulo, proviene musicalmente del “Vito” andaluz. Con otros 36 documentos de La Rioja, es parte de su gran colección de folklore de la Península Ibérica, que se publicó *post mortem*¹¹. Apenas hay una pequeña diferencia en el primer compás de esta versión con la vulgata de “El Vito” andaluz¹²: la versión riojana comienza con las dos primeras notas, las que corresponden a “Cami”, primeras sílabas de “Caminaba”, repitiendo el “la3” para subir al “la4” de su octava superior en “naba”, terminación de la palabra “Caminaba”. Sin embargo sí coincide esa primera parte con la versión de “El Vito” de Fernando Obradors que interpretan profesionales del canto¹³, en que se da el salto de octava del primer compás al segundo, como así mismo está transcrito en un acompañamiento para piano en La menor¹⁴. Por tanto, podemos afirmar que el ritmo ternario y la melodía de esos dos primeros versos son idénticos en ambas canciones. Por el contrario, la parte posterior, los dos versos finales, difieren algo musicalmente ya que “El Vito” mantiene siempre la sensible aumentada y esta versión de Villoslada de Cameros la aumenta dos veces y otras dos veces la deja sin alterar. Esta versión de Kurt Schindler, con el mismo compás ternario 3/8, mantiene el carácter de la escala frigia moderna que nos connota su proveniencia del sur de la península ibérica (se dice que “El Vito” es de Córdoba). Ambas mantienen la peculiar cadencia frigia moderna andaluza (sol, fa, mi, en este caso do#, si, la) y ese ritmo sincopado que caracteriza a la canción folklórica hispana que le da un aire burlesco y a la vez saleroso. Igualmente las dos tienen la cadencia de las estrofas intermedias en ese quinto grado (digamos de la escala diatónica), típico flamenco, preparando así la nota para continuar con la siguiente estrofa. La distancia con la región andaluza habrá ocasionado algunos de esos cambios mencionados pero las similitudes son tan notables como para afirmar que esa versión riojana proviene del sur de España que basada en la música popular se difundió desde el siglo XVII en multitud de fantasías con ese mismo ritmo festivo y la peculiar cadencia andaluza.

Otras versiones de “El Conde Niño” que de forma exigua vamos a citar aquí están recogidas y transcritas en papel pautado por Bonifacio Gil García en una obra póstuma que recoge 580 canciones y 71 romances de la región riojana¹⁵. Entre tales romances se recogen siete versiones musicalizadas y una gran cantidad de versiones en la letra de este que tratamos aunque con títulos a veces diferentes. Las versiones musicalizadas de este mismo romance están recogidas en Autol (n.

5: El Conde de Marcelino, p. 26, en Sib mayor), en Ezcaray (n. 61 de p. 28: “Se pasea el Conde Olindos” que en el cuarto verso cambia a “Olindo”, en Sol mayor; ver la ingente variación de las letras en pp. 307–308: “El Conde Niño o Conde Olinos”), en Santa Eulalia Bajera (n. 64: Madrugaba Marcelino, p. 29, en Fa mayor y ritmo de 6/8), en Baños de Río Tobía (n. 65: Madrugaba el Conde, madre, p. 29, en Sol mayor, n. 67: La mañana de San Juan, ¡Trampalantrán! Madrugaba Marcelino, p. 30, en Sol mayor, y n. 104: Madrugaba Marcelino la mañana de San Juan, pp. 41–42, en Sib mayor), en Arnedo (n. 66, erróneamente numerado como 67: Mañanita, mañanita, mañanita de San Juan, p. 30, en Fa mayor), en Casalarreina (n. 103: Marcelino se pasea por las orillas del mar, p. 41, en Do mayor), y en Nájera (n. 305: Se levanta de mañana, p. 120, en Do menor). Este último termina en “si natural” cuando debiera resolver en la tónica “do” como muy bien está preparada la cadencia haciendo sensible el “si” del compás anterior, originalmente “si bemol” por estar en la escala de Do menor. Ha de haber sido un error de transcripción al pasar la música manuscrita, en que es fácil confundir el “si3” con el “do4” de las líneas adicionales bajo el pentagrama, a partitura impresa.

Hacemos la transcripción musical directamente de la audición de las versiones del romance “El Conde Niño” de la página web *Riojarchivo.com*. Al transmitirse estos oralmente no existen partituras ni hemos encontrado su musicalización de forma impresa o siquiera manual. Otros autores eméritos han hecho trabajos de campo en La Rioja recogiendo en papel pautado romances y canciones folklóricas. Entre ellos cabe señalar al ya mencionado Bonifacio Gil García, de quien ya transcribimos en partitura impresa algunas canciones tradicionales inéditas que él había manuscrito con acompañamiento¹⁶. La gran mayoría de canciones de su recopilación riojana ya habían sido editadas en el citado *Cancionero Popular de La Rioja*¹⁷. Las melodías que ahora transcribimos nunca fueron escritas en papel pautado, aunque pudieran asemejarse a otras versiones recogidas y ya publicadas en el cancionero citado o, pudiera ser, a otras particulares que no se han hecho públicas.

La versión vulgata¹⁸ transmitida en las escuelas y en tiempos de ocio no tiene semejanza melódica con las versiones que vamos a transcribir. Esa que llamamos vulgata, por ser la más cantada, tiene una ligera variación melódica al principio con respecto a otra versión transcrita y armonizada por Eduardo Martínez Torner (no Tarner, como aparece escrito) en tiempos franquistas¹⁹. En esta el varón es “el Conde Olinos”, pero en otras dos versiones del mismo libro es el Conde Lino²⁰, con pérdida de la común sinalefa (de la “e” y la “O”). Sus melodías difieren bastante de la versión vulgata. De este tipo de música popular se dice que no tiene autor, que son piezas musicales anónimas, cuando sería más acertado afirmar que, aunque hayan sido ideadas por una o varias personas en particular (ya no identificables), su autor es el pueblo. El compositor idea y a veces escribe una obra musical para que sea interpretada. El intérprete musical actúa así de mediador entre la idea del autor o su partitura y el oyente, explica a su manera el valor de la obra musical pautada. La misma palabra latina “interpres-interpretis” lo dice, el

que está entre dos puntos, en este caso entre el compositor y quienes oyen su obra. Por tanto, es el que ejecuta una obra musical con canto o con instrumentos, preparada de antemano para un público espectador, oyente y vidente.

Nuestra labor ahora es hacer una descripción musical tras una plasmación pautada de esas manifestaciones de la vida que hizo el pueblo y lo ha ido transmitiendo oralmente hasta hoy mismo. Tratamos de hacer una deconstrucción de esas variaciones orales de un romance determinado en un ámbito geográfico reducido viendo sus variaciones narrativas y musicales como estudio etnográfico de sus gentes. En vez de interpretar tratamos de “des-interpretar” (por así decir), intentando ver los parecidos o no entre las diversas versiones que reflejamos en pauta musical. Se trata de hacer una “deconstrucción” de la música del romance que tras sufrir continuas transformaciones ha quedado grabado en este sitio web. Es posible que ante la falta de memoria musical se haya reinventado más de una versión, sumando así más versiones a las que hubiera. Con esa “deconstrucción” intentamos, no averiguar los defectos o deformaciones que se hubieran podido generar sino, descubrir ese proceso cultural popular que con el tiempo ha generado tan rico acervo de versiones musicales y narrativas sobre el mismo romance en La Rioja, Comunidad Autónoma de España.

Mantenemos la misma numeración romana de las versiones que hay en *Riojarchivo.com* para dividir este artículo en capítulos que además titulamos con el nombre del pueblo de origen de cada uno de los informantes del romance.

I. EL VILLAR DE POYALES

El Conde Niño I



El Villar o El Villar de Enciso y Poyales son dos poblaciones pertenecientes a Enciso, en la parte meridional oriental de la región autónoma de La Rioja. Transcribimos musicalmente lo correspondiente a los dos primeros versos, música que se va repitiendo sucesivamente de dos en dos versos: “Baja el hijo del rey conde / la mañana de San Juan”. Es un comienzo paralelo al romance del Infante Arnaldos que también da comienzo con la mañana del mágico día de San Juan (24 de junio), culmen de la estación del amor que da paso al verano. Es curiosa la distribución musical pues repite el primer verso uniéndose al segundo (del quinto al noveno compás), verso que se vuelve a repetir: “Baja el hijo del rey conde, baja el hijo del rey conde la mañana de San Juan, la mañana de San Juan”. De esta forma la mitad de la estrofa, que son dos versos, se divide musicalmente en tres

partes: el primer verso en cuatro compases, su repetición seguido del segundo en cinco compases y la repetición del segundo en los tres compases finales. El primer verso termina en el tercer compás pero alarga el sonido en el cuarto en que se descansa para inspirar y ejecutar de seguido los cinco compases de la segunda y tercera frase musical (repetición del primer verso y primera enunciación del segundo) donde tras una mínima pausa canta los tres últimos compases (repetición del segundo verso). Resulta un fraseado equilibrado con la primera y tercera parte igualadas en duración y contrapesadas con la segunda parte, el doble de largo que ellas por ejecutar el primer y segundo versos de seguido. De esta forma la ejecución resulta más larga ya que se va duplicando el enunciado del romance en todos los versos. El tono es mayor, como son la mayoría de estos romances que transcribimos y los que hay. Comienza con la tónica para hacer una semicadencia de reposo en la sobretónica, quinta nota de la dominante. La segunda y tercera frases musicales hacen un juego melódico típico de canciones populares que como vemos en los compases sexto, séptimo y octavo va botando sobre la dominante que asciende a la sobredominante repetitivamente. El parecido, quizá no buscado directamente pero sí resultado de la influencia adquirida por la experiencia de oír alguna otra melodía popular. Por poner un ejemplo, con la canción tradicional “Vamos a contar mentiras”, con la que se nos muestra evidente el parecido melódico a pesar de que esta esté en tono menor²¹. En esa canción popular, en los compases octavo, noveno y décimo hace el mismo movimiento ascendente repetitivo y desciende después a la subdominante igualmente de forma repetitiva en los compases decimosegundo y decimotercero, acabando en la medianta, preparando así la cuarta frase. Vemos que vuelve a repetir la dominante de forma reiterada en los compases decimoquinto y decimosexto que se alarga en el decimoséptimo, para resolver con la cadencia, como se prevé, en la tónica. Con esos apoyos repetitivos en la dominante, nota fundamental del tono, se consigue una tensión continua que pide con más fuerza la cadencia perfecta V-I de la escala diatónica. Se trata por tanto de una tendencia melódica que hemos ido adquiriendo con la audición de esta y otras canciones populares en nuestra vida. Apreciamos similar influencia de esta canción popular en la versión XII.

El título no está numerado en la página web que usamos por ser la primera versión citada. Aunque las informantes no lo cantan, el recopilador añade algunos versos que corresponden al romance “Sufrir callando”, versos en que la princesa, tras la muerte de su amante, le cuenta su pena a su tía al no poder confiar ni en su padre, ni en su hermano:

¡Válgame Dios de los cielos / qué *penosito* es mi mal!
tengo los amores muertos / al otro lado del mar.
Si se lo digo a mis padres / es padre me ha de pegar
si se lo digo a mi hermano / es crío y lo ha de hablar
si se lo digo a mi tía / es tía y lo ha de lograr.

Y la tía le augura su próxima muerte:

Sobrina, si no es más que eso / eso sí lo lograrás

por la tu puerta florida / lo han de pasar a enterrar
y cuando pases le dices / y cuando pases dirás:
“adiós, amante del alma / qué solito tú te vas
antes de los ocho días / te *tengo ir* a buscar”.

Este añadido del romance “Sufrir callando” está así escrito en la versión III aunque no está grabado por las informantes pues hay un corte tras la muerte del caballo del conde a mano de los guardias de la reina. Las informantes lo retoman cantando que “a los 3 días cumplidos la hija del rey mala está, a los 2 y no cumplidos la unción le van a llevar, a la una y no cumplidos la hija del rey muerta está”, parte literaria que los recopiladores transcriben modificando a su parecer.

A diferencia de otras muchas versiones que están truncadas, esta versión está completa, señalando los tres estados del reino de la naturaleza por el que pasan los finados amantes que se convierten en el mundo vegetal (azucena y rosal), pasan al mundo animal (paloma y gavilán) y terminan en el mundo mineral (ermita y altar). Una transformación con una clara enseñanza crítica: el amor del que se les privó a los amantes permanece como deseo de cohesión entre ellos para siempre.

II. SAMANIEGO

El Conde Niño II



Esta versión es una de las apenas tres que están en tono menor en este archivo del sitio web riojano. Las otras son la XIII, de Mansilla de la Sierra, y la XIV, de Villamediana de Iregua. No es frecuente encontrarlas en esta tonalidad, algo que nos muestra su autenticidad. Nos produce este tono menor una sensación de tristeza, dando un ambiente armónico a la dramática muerte de los enamorados protagonistas, la princesa y el conde. El compás de subdivisión ternaria de 6/8 viene a coadyuvar a ese sentimiento melancólico que ya nos genera el tono menor. Este movimiento ternario es muy apropiado para una continuada recitación de los versos ligando las frases y dándonos una sensación de fluidez en el discurso del relato cantado. Con esa misma tonalidad, fuera de lo común, la canta Paco Ibáñez²² y la recoge y canta también nuestro apreciado maestro Joaquín Díaz en tierras castellanas con otras melodías que expresan muy propiamente el abatimiento ante la frustración de los enamorados y su dramático desenlace²³. También lo hace en tono mayor²⁴: al igual que Gabriela Pizarro²⁵ con el título de

“Conde Lino”, que gracias a la reducida tesitura usada le dan también este cariz sentimental.

Nos centraremos en hacer un análisis comparado de la versión II y XIV que tienen cierto parecido melódico y rítmico, dejando aparte la XIII (también en tono menor), que transcribimos en compás ternario y difiere más en el movimiento melódico. Curiosamente ambas versiones, II y XIV, tienen como protagonista a “Fernandito”. Observando los lugares de origen de esta versión y de la versión XIV, vemos que son pueblos no muy lejanos entre sí. El pueblo de esta versión II es Samaniego, de la Rioja Alavesa y el de la versión XIV es original de Villamediana de Iregua, al sur de la capital riojana y muy cercana a ella. El primero, Samaniego es, en términos de folklore, pueblo riojano y lo fue también históricamente, aunque hoy pertenece a Álava. Está al borde de la Comunidad Autónoma de La Rioja, al este de Álbalos y a una distancia de Logroño de 22.57 kilómetros. El segundo, Villamediana de Iregua, es un pueblo que gracias a estar justamente al lado de Logroño, 4.57 kilómetros al sur, es el que más crecimiento de población ha tenido últimamente en La Rioja. Por tanto ambas poblaciones distan una de otra 26.58 kilómetros, siendo por tanto pueblos cercanos y con la vía de comunicación del río Ebro ya que ambos se sitúan en su ribera (uno a cada lado), y también por ello con un posible trasvase musical y de letra del romance de uno a otro. Esta versión fue recogida en 2008.

Vemos que ambas versiones repiten el primer verso, “Estaba don Fernandito”, con similar melodía, como buscando un mayor establecimiento del tono que les dé firmeza desde el comienzo. En la versión XIV parece que comienza a grabarse cuando ya ha cantado la informante una vez el primer verso. En los demás dísticos se repite siempre el primer verso con idéntica melodía. Algo peculiar de ambas versiones es el quedar asentado el tono con firmeza desde el primer verso; en esta versión se parte de la dominante en el primer verso para acabar en la misma dominante mientras que en la versión XIV se parte de la tónica para acabar en la dominante, creando ya en ambas la tensión de la frase musical en esta primera frase musical. En ambas, el segundo verso, “a la orillita del mar”, también se repite pero con diferente melodía; en las dos versiones la melodía de este segundo verso busca reforzar la tensión en la dominante que es donde semicadencia repitiendo el verso.

En esta versión II, comienza la melodía de la dominante para descansar en la misma en una frase que se repite; en la tercera parte de la frase musical salta a la sobretónica para volver a reposar en la dominante de la escala superior; en la cuarta frase empieza con la subdominante que desciende y asciende para concluir en la tónica, preparada por la añadida sensible, fa#, en un elegante movimiento melismático. Vemos pues cómo afianza el suspense en la dominante partiendo de ella de forma repetida y acabando en ella en la tercera parte de la frase. En la versión XIV, parte de la tónica e igualmente descansa de forma repetida en la dominante creando esa tensión también al final de esas dos primeras frases musicales. El repetir esa primera frase hace también que se alargue más en ambas

versiones, algo que le es propicio sobre todo a esta versión II que, en cuanto a la letra, está un poco truncada (resultan 24 versos) con respecto a la completa XIV (34 versos).

En esta versión II, el segundo verso va buscando la dominante de forma ascendente a partir de la segunda del tono para ir bajando desde la cuarta del tono, como si se tratara de una cadencia plagal, que enseguida busca la resolución convirtiendo la séptima del tono menor en sensible, que necesariamente ha de ir a la tónica, pero lo hace pasando primero por ella y ascendiendo a la tercera, haciendo un adorno final para poder intercalar las tres últimas sílabas del verso. Vemos que en la versión XIV se ataca directamente a la dominante en el segundo verso y consigue subir la melodía hasta una sexta del tono antes de caer en la dominante para reposar, y por tanto asciende hasta un grado más que en esta versión II, dándole así un brillo especial.

A diferencia de la versión XIV que comienza con la dominante en la tercera parte del fraseo musical, en esta versión II se comienza con la sobretónica (la) ascendiendo al cuarto grado (do), séptima de la dominante del tono, que repite hasta tres veces descendiendo a la tercera para buscar otra vez hacia arriba la semicadencia en la dominante, produciendo así la tensión natural que resuelve descendiendo en el quinto y último compás de este verso. Algo peculiar, que tampoco se ve en la versión XIV, es que en esta versión se altera de forma ascendente el séptimo grado (fa#), ajeno a la escala menor natural, produciendo una típica escala menor armónica que, además de evitar el confundirla con una escala en tono mayor, refuerza así el protagonismo de la tónica como centro y fundamento de la melodía gracias a que se puede resolver en cadencia perfecta utilizando en el acompañamiento la séptima de dominante sobre el quinto grado. Esa séptima, en este caso el “do”, es precisamente la que se ha oído repetidamente para buscar la semicadencia y con la que comienza el descenso buscando la cadencia. Nota séptima de la dominante que, tras su repetición, permanece en el oído esperando su natural resolución en la tercera del tono. De esta forma nos prepara para la definitiva distensión final que se deja oír de alguna manera ya en la previa resolución de la sensible del penúltimo compás, que adorna subiendo de forma diatónica por la sobretónica hasta la mediante para descender definitivamente sobre la tónica. El no salir del tono principal creando una tensión y distensión con los grados I-V-I, hace que sean melodías tan pegadizas. Y esto ocurre tanto en esta versión II como en la XIV y las demás que tratamos.

El ritmo de esta versión es de subdivisión ternaria, a diferencia de la versión XIV, que es binaria. Este ritmo, de seis corcheas en cada compás, nos da una sensación de suavidad, como ligado, que parece cohesionar de forma más afín con la tristeza de los dos amores desdichados del romance. Sin embargo el memorizar este ritmo ternario se nos hace más costoso que el binario (así el de la XIV), que se convierte en más popular al darnos la impresión de ir marcando el paso. La versión que canta nuestro admirado maestro Joaquín Díaz en tono menor comienza por la tónica de la octava alta para ir descendiendo paulatinamente,

haciendo sonar repetidamente la dominante en la parte final de la segunda y tercera parte de la frase musical para acabar, pasando por la quinta de la dominante al final de la tercera parte de la frase musical, en la tónica de una octava inferior a la del comienzo. En su versión no repite los versos, que son cuatro para las cuatro partes del fraseo musical, cuando en estas versiones que transcribimos son dos versos para las cuatro partes de la frase melódica, con lo que pudiera resultar más tedioso pero a la vez se da oportunidad a otros para que repitan la misma frase.

Ese descenso en tono menor parece muy apropiado para dar ese ambiente de pena ante la impotencia de los amantes para poder casarse y su fatal desenlace. Estas versiones en tono menor, a pesar de parecer más auténticas y quizá antiguas, por su relación con el tema cantado de amores desdichados, son mucho menos oídas que las ejecutadas en tono mayor, una de ellas la vulgata, entre el público e incluso en las transcripciones que aparecen en la web. Se aprecia cómo la ley natural nos hace recordar mejor el tono mayor y con el ánimo de ponernos a cantar de oído, tendemos a escoger más fácilmente ese tono que el menor.

III. BERGASILLAS SOMERA

El Conde Niño + Sufrir callando

El Conde Niño III



El protagonista del romance es ahora San Lorenzo convertido después en Marcelino, que siguen teniendo las mismas cuatro sílabas que el título “Conde Niño”, y que otros nombres como “Conde Olinos” (métricamente al formar sinalefa “de” y “O”), y las mismas que “Fernandito” de la versión II. Este recurso de usar un tetrasílabo es muy recurrido musicalmente, resultando canciones en compás binario con un ritmo muy fácil de memorizar y que por tanto se hacen populares con celeridad. Según se explica en *Riojarchivo.com*, este comienzo “Quién tuviera tan fortuna como de amores gozar, como tuvo San Lorenzo la mañanita San Juan” (corregimos “mañenita”, tal cual se oye) es una “contaminación” del romance “El Infante Arnaldos” que dice así:

¡Quién hubiera tal ventura
sobre las aguas del mar
como hubo el infante Arnaldos
la mañana de San Juan!

Salta a la vista que el nombre del infante Arnaldo se transforma en este principio de nuestro romance en un santo, San Lorenzo. Sin embargo esta intrusión solo es en los cuatro primeros versos. En el noveno verso, es cuando se da esta variación del nombre del protagonista San Lorenzo en Marcelino. Esa variante de San Lorenzo, dice *Riojarchivo.com*, se ve raramente en alguna otra versión de Aragón, región limítrofe de La Rioja. Según el sitio web hay otra intrusión hacia la mitad del romance “Sufrir callando”, que está en boca de la infanta que, después de ver matar a su amado, lo piensa para sí y luego se lo comunica a su tío:

¡Ay de mí, triste de mí, / a quién le contaré mi mal!²⁶
si se lo digo a mi padre / de cólera (cólera) me’ ha’i matar,
si se lo digo a mi hermano / es chico de poca edad,
si se lo digo a mi tío / secreto me ha de guardar.
Estando en estas palabras / pasó por allá su tío.
“Escuche usted estas palabras / y escuche usted, tío mío
los amores me se han muerto / tierra me les van a dar”.

El romance “Sufrir callando” lo canta nuestro maestro Joaquín Díaz²⁷ mencionando la idea de la protagonista de contarle su mal a su madre, a su padre, o a sus hermanos. La mención del tío nos hace pensar más bien en la interpolación del romance “La enamorada de un muerto”, que también aparece en la versión XVI²⁸.

La versión está recogida en Bergasillas Somera, pueblecito de la parte oriental de La Rioja, en la ladera del monte Talao, en la sierra de la Hez. Siendo tan remoto el lugar, vemos cómo se ha propagado este famoso romance en una particular versión que mezcla parte de otros, primero intercalando a San Lorenzo (Patrono de Ezcaray, en la parte occidental de La Rioja, distante de este pueblo que tiene por patrono a San Cristobal) en lugar de Arnaldo, romance donde se inspira el principio, y después introduciendo versos de “Sufrir callando” de manera muy apropiada para expresar la sensibilidad de la infanta que manifiesta el desconsuelo y soledad en que se queda ante la muerte de su amante.

Es una versión muy completa en cuanto a su narración, al igual que la versión I. En esta, tras la transformación de los protagonistas en arboleda (reino vegetal) dice:

“De ella salió leche clara / y de él salió sangre real”
siguiendo la transformación común en paloma y gavián.

Hemos optado por transcribir la melodía en compás ternario, pero hay que pensar en un movimiento “allegretto” (más de cien pulsaciones por minuto). Aunque de esta forma queda bien marcado el tiempo, hemos de pensar en que, al igual que la anterior versión de subdivisión ternaria, tiene un carácter volátil, consiguiendo un recitativo natural y un fraseado ligado suavemente. La melodía comienza con la dominante, re, para descansar en la subdominante del tono, do, (Quién tuviera tan fortuna como de amores gozar) y continúa la segunda parte (como tuvo San Lorenzo la *mañenita* San Juan) en la misma dominante para

resolver en la mediante del tono. Con esta cadencia colgada, en que no acaba la melodía en la tónica, se produce un final suspendido que no da la impresión de que sea auténtico final. De esta manera nos deja en una sensación de espera en la continuación del romance con los versos sucesivos. Además es muy apropiado también para mantenerse en el tono, sin bajarse por cansancio o desgana, y poder atacar la primera nota del siguiente verso con resolución y exactitud. Incluso al final del romance, en sintonía con los anteriores hemistiquios finales, cadencia en la mediante de la tónica, dando continuidad al romance y dejando al oyente con el deseo de que se siga alargando.

El sonsonete del romance busca de manera natural el construir el verso con ocho sílabas. Así lo consigue en “Charon guardias al palacio” que de haber dicho “echaron” habrían resultado nueve sílabas, rompiendo el ritmo octosílabo del romance. Tal contracción deformando la palabra nos da idea de la sencilla pronunciación vulgar que realza el valor poético con intuición rítmica y lo hace así original. Aunque hemos transcrito la música de manera única para todo el romance, hemos de señalar que la informante hace diferentes variantes melódicas para acomodar el texto al ritmo. Así en el segundo verso en vez de mantener el mi, hace un doble giro al re (mi, re, mi, re); en el cuarto verso también hace un descenso al do en vez de subir directamente al mi (re, re, re, do). Percibimos la deformación de la palabra “mañanita” (como se transcribe en *Riojarchivo.com*) en “mañenita”. Con la terminación acentuada de “San Juan”, que alarga la sílaba final, percibimos bien el natural ritmo octosílabo del romance. Otra contracción popular no solo de La Rioja sino de muchos otros pueblos, es el verso: “De corera me’ ha’i matar”, en lugar de “de cólera me ha de matar” (en que saldrían nueve sílabas), con lo que la métrica octosilábica, peculiar del romance, permanece. Es así esta versión, una buena muestra del valor poético del romancero, que, cantado en todo el mundo, produce variaciones acomodadas al habla de cada lugar concreto.

IV. BAÑARES

El Conde Niño IV



resulta fácil de entonar. Es un ritmo muy llevadero, bien marcado pero ágil y fraseado, con unos descansos bien marcados en la transcripción al acabar los versos, que en la voz del intérprete no lo llegan a ser tanto. Descansa muy bien al final del segundo verso en la dominante (nota de la que parte repitiéndose hasta seis veces) para ir descendiendo en el tercer verso desde la tónica en forma de progresión hasta la dominante del tono, el mi. En el cuarto verso, partiendo de la sobretónica del tono, parte del acorde de la dominante, busca la dominante para resolver con cadencia perfecta. Se aprecian bien las notas y acordes fundamentales del tono de La para fijar el tono al principio y al final, su dominante Mi para hacer la semicadencia a mitad de estrofa, repitiéndola en el tercer verso: I-V-I. Fácil, por tanto, de memorizar al no salirse en los finales de los versos de los dos acordes fundamentales.

Esta versión de Bañares, del partido judicial de Santo Domingo de la Calzada, en el oeste de La Rioja, es corta al tener un final trunco, ya que acaba bruscamente: “él murió a la media noche / y ella a los gallos cantar”. Él es aquí el “Conde Olinos”.

V. VILLARROYA

El Conde Niño V



Esta versión es de Villarroya, en la parte oriental de La Rioja. El protagonista masculino vuelve a ser Marcelino que en la mitad del romance se convierte en “rey conde Marcelino” por motivos musicales y filológicos, buscando acomodar la melodía a un octosílabo, que es la métrica propia del romance. Lo transcribimos en tono de Do mayor partiendo de la medianta que cae en la tónica de forma repetida dando consistencia a la fundamentación del tono. Como es costumbre en el canto popular, hace una semicadencia descansando en la dominante en la mitad de la melodía y pasando por la subdominante momentáneamente resuelve, de la manera esperada, desde la dominante a la tónica: I-I-V-IV-V-I. Es pues una cadencia preclásica que le da un gran carácter conclusivo.

El tema de “Heroes of Salamanca”²⁹ es una danza popular del noroeste de Inglaterra que tiene cierto parecido casual en sus dos primeros compases con esta versión de “El Conde Niño”. El compás es sin embargo 6/8 pero el ritmo y melodía se parecen, si bien es cierto que en “Heroes of Salamanca” se comienza con la quinta y en el romance por la tercera, ambos del tono mayor.

Corregimos los primeros versos de la última estrofa que debe decir:

“Si de un ojito estás ciega / de los dos ha de cegar”.

Con ese castigo a la reina termina esta completa versión. El protagonista tiene aquí el nombre de Marcelino.

VI. RIBAFRECHA

Es un recitado, sin cantar. La música ha tenido que existir pero la informante se limita a declamarlo. Está recogido en 1992 en Laredo, Cantabria, aunque el municipio del que es oriunda la informante es Ribafrecha, al lado izquierdo del valle del río Leza y al sur de Murillo de río Leza y de Villamediana de Iregua, en las estribaciones de la Sierra de Cameros.

Es una versión completa. Curiosamente, la princesa recibe aquí el nombre de Laureana, también tetrasílabo. Él es el conde Marcelino, el mismo que en las versiones III, V, VII, XII y XIII.

VII. AZOFRA

El Conde Niño VII



Esta versión de Azofra, a 36 kilómetros al oeste de la capital riojana, comienza con la repetición de la dominante en tiempo débil para marcar bien la tónica en el tiempo fuerte del segundo compás. Hace una repetición exacta de la primera frase musical descendiendo desde la mediente por medio de un tresillo hasta la dominante en que hace semicadencia. Un descenso desde el tresillo que, al estar el verso ya completado, rellena con “tunturuntún”. En la tercera frase (correspondiente al segundo verso) predominan notas del acorde de tónica y en la cuarta resuelve desde la tercera en forma descendente: V-I-V-I-V y V-I-V-I.

Los primeros dos compases, aunque con ritmo diferente, nos recuerdan por su parecido melódico al 2º movimiento de la Sonata 1 para violín en Mi mayor de Beethoven (op. 12/1). Este movimiento en La mayor, también comenzando con la dominante mi, hace una serie de variaciones repitiendo el mismo fraseado cadencial.

Comienza la informante con el verso “Marcelino fue a hacer aguas tunturuntún” que repite, al igual que repite el siguiente verso para cadenciar. Es una versión trunca grabada en 2014, solo llega hasta el anuncio del homicidio por parte

de la reina: “Hija, si supiera eso / lo mandaría matar”, que el recopilador completa con otra recogida en la misma localidad, a treinta y seis kilómetros al oeste de la capital, en 1981³⁰, que termina con las aves volando par a par.

VIII. FONCEA

La informante hace una recitación semitonada sin apenas variación melódica, con alguna interrupción pero resulta una versión completa. Está recogido en 2015. El municipio está un poco aislado, al sur de los montes Obarenses, al noroeste de la región riojana lindando con Pancorbo, de Castilla y León.

Esta versión es completa en cuanto a la transformación de los amantes en los tres reinos en los que se clasifica la naturaleza: vegetal, animal y mineral. Ella se vuelve oliva, después paloma y al final ermita; el “hijo del conde” (nombre que recibe en esta versión) se vuelve olivar, después gavián y, al final, pie de altar. Como en otras versiones largas, la princesa le niega la curación de la vista a su madre, la reina, por no haberla dejado casarse, por cortarla siendo oliva y por matarla siendo paloma. Estas transformaciones aparecían ya en la literatura europea y oriental, mezclando el amor y la muerte. Es por tanto una leyenda universal que en esta versión ha logrado mantenerse íntegramente.

IX. ARNEDO

El Conde Niño IX



Arnedo es cabeza de partido judicial de la Rioja Baja. Es atravesado por el río Cidacos que nace en tierras sorianas y tras cruzar Calahorra desemboca en el río Ebro.

En el sitio web donde recogemos la melodía se dice equivocadamente que esta es la “tonadilla vulgata”. Hemos de decir que aunque tienen un similar ritmo en compás ternario difieren notablemente en la melodía, como se puede comprobar con la partitura vulgata³¹. La melodía parte de la tónica con una anacrusa en un compás ternario haciendo la semicadencia en la supertónica. Resultan nueve compases. Este movimiento de vals resalta en esta versión, que le da una sensación de seguidilla bailable. Se aprecia cómo la melodía de los dos primeros versos define claramente el tono fluctuando entre la tónica y la medianta subiendo hasta la dominante para hacer la semicadencia en la sobretónica del tono que

Santa Eulalia Bajera

64 (♩ = 66)
38 F

Ma - dru - ga - ba Mar - ce - li - no La ma - ña - na de San
Mien - tras que el ca - ba - llo be - be Mar - ce - li - no echa un can -

Juan A dar - le a - gua a su ca - ba - llo A las
tar, Y la rei - na, que es - cu - cha - ba, A su hi -

o - ri - llas del mar.
ja man - dó lla - mar.

En ella semicadencia en la sobredominante de Fa, diferente a nuestra versión, que lo hace en la quinta, la dominante, la misma semicadencia que se recoge en Baños de Río Tobía, del valle del río Najerilla³³, de notable parecido melódico y rítmico a la nuestra aunque esté en un compás más marcado de tres por cuatro y esté escrita en Sol mayor. Esta localidad, Santa Eulalia Bajera, está en el río Cidacos, cerca de Arnedo, por tanto cerca de Lagunilla de Jubera (donde se recoge nuestra melodía), ambas en las estribaciones del norte de la sierra de Cebollera, al sur de La Rioja. La cercanía de ambas poblaciones, 17,47 kilómetros, nos hace pensar que la semejanza de su compás y melodía no es algo fortuito y que tienen un origen común o, al menos, ha habido un trasvase comunicativo de uno a otro.

No muy lejano a Lagunilla de Jubera está Villoslada de Cameros, pueblo sito más en la parte meridional de la región, en la Sierra de Cebollera, al que cruza el río Iregua. Comentamos la versión de este pueblo en la introducción³⁴. La versión popular del “El Vito”, aunque en tono menor y usando la escala melódica al reposar en la dominante (pero sin alterar esa séptima en ninguna parte), pudiera haber tenido alguna influencia en esta versión de Lagunilla de Jubera, en compás binario pero de subdivisión ternaria y otros cambios melódicos. Esta versión en que se pierde en parte la sincopación y la cadencia flamenca pudiera ser ya del del siglo XIX en que tiene más esplendor la música andaluza, o por otra parte, podría ser anterior por provenir directamente de alguna versión popular anterior o incluso hasta de la emigración tras la invasión musulmana a tierras riojanas, entre otras del norte.

Es original el también tetrasílabo nombre del varón: “condesillo”. Como en la versión I aparece la palabra “penosito”. Como en las versiones III y XI, hay una intrusión del romance “Sufrir callando” en la que la princesa piensa contarle su “penosito mal” al padre, pero es a la tía (al igual que en la versión I) a quien pide consuelo, quien le vaticina su muerte a los ocho días. Igualmente peculiar, es la transformación de ella en “amapola” que después corrige la informante en “blanca rosa” y de él “un blanco rosal” que después corrige en “blanco hospital”.

XI. VINIEGRA DE ARRIBA

El Conde Niño XI



Viniegra de Arriba está en plena Sierra de La Demanda, cabecera del Sistema Ibérico, en el sur de la región riojana.

Está en tono de Sib mayor. Al título se añade “La guardadora de un muerto” porque intercala una cuarteta de tal romance tras la muerte del conde:

“Lo ha tenido nueve meses / metido en un *balsamar*
pa que no huela a difunto / cuando lo vaya a besar”.

Es una intrusión incongruente en este caso, pues a la princesa no se le habría permitido guardar el cadáver del conde. El añadido de “nueve meses”, tiempo inverosímil pero significativo, pudiera aparecer en alguna versión de “La guardadora de un muerto” pero no en la que citamos³⁵. Se trata de un viejo romance no muy conocido. El ensamblaje textual de esos versos está muy logrado, aunque desvirtúa la trama más común del relato del romance. También se ve una intrusión semejante en la versión XVI. El nombre del varón protagonista es “el hijo del buen conde”, la única versión que así lo nombra. Al igual que en la versión anterior, la X, de él “salió un hospital” donde van “mancos y tullidos a curar”. Allí va la reina tullida, que pide la curación al que ahora llama “buen conde”, quien se la niega y la manda irse reprochándole por sus acciones con ellos.

XII. VADILLOS DE CAMEROS

El Conde Niño XII



Está en Re mayor. Es una versión trunca en cuanto a la letra, con resonancias

melódicas antiguas. Va repitiendo cada verso con diferente melodía. Comenzando con la tónica en el primer verso, vuelve a repetirlo unido al segundo verso partiendo de la dominante haciendo melodía con la sobredominante repetitivamente, (la, si) semicadenciando en la mediente, fa. De esa forma se consigue dar firmeza a la dominante que da la sensación de dejar colgada ahí la melodía en espera de la resolución. El segundo verso es vuelto a repetir desde la mediente para cadenciar en la tónica Re. Esa repetición de seis grupetos con la dominante y la sobredominante nos connota la misma repetición de la famosa canción folklórica “Vamos a contar mentiras” que hemos citado en la versión I. En ella apenas son dos notas (negras) más cuatro pares de corcheas los que se repiten en forma de progresión ascendente desde la dominante. En esta versión son hasta seis los “grupetos” de corcheas que ascienden igualmente desde la dominante a la sobredominante y uno que desciende de la dominante a la subdominante; en total siete. En las dos versiones, escritas en el mismo tono, Re mayor, la distancia de esa alteración es de un tono. Por lo tanto, se produce el mismo efecto de quedarse la melodía colgada en la dominante provocando con esa tensión la ansiada espera en la resolución en la tónica, creando así una cadencia perfecta.

Es una versión bastante trunca, en cuanto termina con la amenaza de la reina a su hija de que si fuera verdad que se va a casar con Marcelino (en este caso sin título nobiliario) “lo mandaría matar”.

XIII. MANSILLA DE LA SIERRA

El Conde Niño XIII



Mansilla de la Sierra está en la cabecera del río Najerilla. El viejo pueblo fue inundado por el embalse de Mansilla en 1959, habiéndose construido previamente otro pueblo nuevo en la ladera del monte. La informante, nacida en los años veinte del siglo XX, aprendería el romance en lo que antes era tal pueblo, hoy ruinas

sumergidas en el pantano que a veces despuntan en tiempos en que merman sus aguas.

El ritmo es ternario, dándole un movimiento jovial y movido. La melodía, en tono de La menor, parte de la tónica para terminar en la misma nota, preparando así la continuación de los demás versos. Esta versión tiene la particularidad de que repite el verso tercero dos veces, antes del cuarto una vez y para rematar vuelve a repetirlo siguiendo con el cuarto. El final del segundo verso queda colgado en la dominante, preparando así el comienzo del tercer verso en la sobredominante o sexta del tono menor. Es el fa4 con el que también acaba el cuarto verso haciendo semicadencia, algo que le exige tener que repetir los dos últimos versos con los que se va descendiendo para terminar en el la3, quedando preparada la tónica para continuar con las demás estrofas y dando también sensación de conclusión al ser cadencia perfecta. Es una melodía saltarina en sus dos primeros versos y después melodiosa en los siguientes, que ayudada con ese ritmo con puntillo a partir del tercer verso le da un carácter recitativo y de continuidad.

Aunque es una versión literariamente sin truncar al final, no se menciona la transformación de los protagonistas en el reino vegetal, pasando directamente al reino animal, convirtiéndose en aves. El varón es Marcelino, el más nombrado en las demás versiones riojanas.

XIV. VILLAMEDIANA DE IREGUA

El Conde Niño XIV



Versión similar en tonalidad menor con la II de la vecina Rioja Alavesa, original de Samaniego. El fraseo consiste en cuatro partes: la primera y su repetición fijan la tonalidad menor concluyendo en la dominante tras oírse la sensible (do#) produciendo ya la tensión musical desde el comienzo; la tercera parte produce una mayor tensión partiendo de la dominante y quedando colgada en esa misma quinta; la cuarta resuelve comenzando por la subdominante del tono de Re menor que viene a coincidir con la séptima de la dominante que exige imperiosamente el descenso a la mediente, una sucesión que repite para acabar en la tónica en una

cadencia perfecta. Percibimos que el primer verso de la primera estrofa está solo cantado una vez, esto es, no tiene repetición. Adivinamos que la grabación comenzara cuando la informante ya habría cantado una vez el primer verso pues se nos hace más difícil pensar que se saltara esa primera repetición. En todos los demás versos se repite, tal cual hemos anotado en la partitura. Notamos también que en la cuarta parte de la frase musical, que corresponde con el segundo verso, y en alguna ocasión más, la intérprete, por capricho del momento quizá, resuelve en el antepenúltimo compás desde la dominante, con la misma altura de tono en que terminaran la primera y segunda frases musicales, la³, y no desde su séptima, sol⁴, que es como hemos transcrito porque es la regla general de los demás versos. Podría deberse esa pequeña variación al tener muy fijado ese la³, dominante que se ha oído repetidamente en las dos frases musicales anteriores. El ritmo binario es más marcado que en la versión II, que es de subdivisión ternaria (6/8) y le da una sensación de más suavidad. El ataque de la tercera parte del fraseo musical es repentino y su pausa final más larga, como descanso para resolver con la cuarta parte final.

Como en la versión II repite el primer verso con la misma melodía, algo que solo ocurre en estas versiones y no en las demás. Con ello se deja bien fijado el tono desde el principio creando una expectación en el oyente por cómo ha de ser la continuación. A diferencia de la versión II que parte de la dominante para hacer pausa en la tónica, en este caso se crea una gran tensión musical al partir de la tónica para descansar repetidamente en la dominante, resolviendo al final en la tónica, que son los acordes básicos tonales de la escala diatónica: I-V, I-V, V-V, V-I. Haciendo esa repetida pausa en la dominante, crea ya la tensión de la frase musical en este primer verso por partida doble. No solo en ese verso sino también en el segundo y en el tercero semicadencia en la dominante. Esa repetición de la dominante y el descanso en ella es algo en que coincide con la versión II. Ello es lo que hace que sea una melodía fácil de memorizar. Podría pecar, al igual que la versión II, de mucha repetición del texto con lo que se alarga su ejecución, pero musicalmente no se aprecia ese cansancio pues otras versiones, como cualquier romance, que no repiten el texto siguen repitiendo la misma melodía hasta el final. En el segundo verso se parte de la dominante consiguiendo una más amplia tesitura que llega por la parte de los agudos hasta la sexta del tono, buscada para ir a reposar descendiendo de nuevo a la dominante. Esta amplitud de tesitura sobre la versión II le da más brillantez a la melodía y un mayor lucimiento al ser ejecutada.

El varón es Fernandito, que siendo tetrasílabo consigue fácilmente el peculiar octosílabo. Por otra parte, este cariñoso nombramiento, nos da la sensación de estar ante un personaje joven. Esta versión no menciona, aunque lo presuponga, la muerte de los protagonistas. También es algo brusca la transformación de los protagonistas post mortem en manantial donde va la reina a curarse de su ceguera y la princesa rehúsa devolverle la vista diciendo:

“Cuando yo era princesita / tú me mandaste matar

y ahora que soy fuente rica / agua no te quiero dar”.

Es la única versión en que al final se declara que la reina mató también a su hija.

XV. AVELLANEDA DE CAMEROS

El Conde Niño XV



Avellaneda de Cameros es un lugar despoblado del municipio de San Millán de Cameros, en la Sierra de Cameros, en el centro-sur de la Comunidad Autónoma de La Rioja. Está a una distancia de 27.4 kilómetros de Lagunilla de Jubera, versión X, cercanía que nos hace pensar que su similitud melódica es muy razonable y ha tenido que haber comunicación entre ellas.

El movimiento con puntillo en un compás binario le da un aire de marcha alegre y bailable. Puntillo que a veces se pierde en la interpretación de la informante por la excesiva velocidad de su ejecución y al concentrarse en el recitado del romance. Remarca bien los tiempos fuertes del segundo, tercero, quinto, sexto y séptimo compás, evitando marcar en ellos el tiempo débil del compás, produciendo así un efecto sincopado. En la interpretación falta la segunda parte de la penúltima estrofa.

Parte de la dominante do4 en anacrusa subiendo de un salto hasta la mediante del tono para hacer la semicadencia en la misma dominante. En la segunda parte aumenta la tesitura por arriba subiendo hasta la dominante do5 para darle más vistosidad y, volviendo a empezar en el do4 en el cuarto verso, acaba con una cadencia perfecta en la tónica. La primera frase tiene cinco compases y también la segunda, contando el intermedio como de ambas partes.

El nombre del varón es “conde”, que después dice la princesa es “el hijo del vizconde” y que posteriormente se nombra en su tumba como “vizconde”. La princesa pide a su tío que entierre el cadáver de su amante. Sin mencionar la muerte de la princesa sigue el romance:

“Y a eso de la media noche / ya los llevan a enterrar”

Peculiar de esta versión es que cada uno de los finados se transforma en un rosal con un letrero. El de ella dice: “la culpa es de mi mamá”, y el de él dice: “a los ciegos vista dar”. Termina con la negativa de curar a la reina: “tuerta y ciega quedarás”.

XVI. AGUILAR DEL RÍO ALHAMA

El Conde Niño XVI



Aguilar de Río Alhama es un pueblo de la sierra en la cabecera del valle del río Alhama, lugar montañoso, en la parte suroriental de La Rioja.

Tiene un final trunco en cuanto a la letra, terminado con el entierro de la princesa. El varón recibe el nombre de “conde Olinio”. Al final, fruto de la repentización y la intuición que busca formar el verso octosílabo, dice que la princesa es hija de “Luis conde”, con lo que perdería el título de realeza. No aparecen las transformaciones comunes, pero sí la comunicación de desesperanza de la princesa a su tío. Son unos versos intercalados tras la muerte del conde, en que la princesa le comenta a su tío el amor que sentía por el conde, sentimiento de pena e impotencia para superarlo que es presagio de su propia muerte inminente:

“¡Ay, tío lo que me pasa / no lo puedo remediar!

Que han matado al conde Olinio / y su cuerpo está en la mar”

Son versos que denotan la interpolación del romance “La enamorada de un muerto”. En este caso la princesa recurre directamente a su tío, sin mencionar a su padre ni a su hermano. Vimos también la intrusión de este romance en la versión III³⁶. También en el romance “La enamorada de un muerto”, con diferencia en las versiones, la princesa suele recurrir, ante su desgracia, a un peregrino, a un labrador o a un cazador, para que la consuelen y la ayuden. Ver también los cuatro versos que intercala la versión XI sacados del mismo romance, que allí añade al título como “La guardadora de un muerto”³⁷.

Observamos que comienza en anacrusa y tiene varias ligaduras tras el primer ictus en la tesis de algunos compases, dejando el segundo y tercer tiempo sin vocalizar, provocando así el arsis de tensión melódica. Es una síncopa que le da un movimiento rítmico singular de tensión y distensión o reposo en la tesis del

compás. La tesitura no es amplia, apenas llega a la subdominante del tono por arriba y a cuatro notas por debajo de la tónica, que corresponde con la dominante. No es por tanto complicada su interpretación para quien carezca de amplia tesitura.

Hacemos la transcripción de la primera estrofa en que repite el tercer y cuarto verso. Al ser cantado por varias personas, se salta el tercer y cuarto verso de la tercera estrofa, la cuarta estrofa entera y el primer y segundo verso de la quinta estrofa. A excepción de la primera estrofa, todas las demás se cantan sin repeticiones con lo que de hacerlo sin repetir la última parte, habría que saltar de la mitad del quinto compás a la mitad del noveno. En la última estrofa, sin empezar con la melodía de los dos primeros versos, comienza con la del tercer verso desde el principio, volviendo a repetirla de nuevo en el tercero. Con ello da la sensación de estar buscando con precipitación el final del romance, pero hemos de achacarlo al haber cambiado de informante en los últimos versos y, al no tener la letra a la vista, haber pensado que el penúltimo verso habría de ser el último, buscando anticipadamente la cadencia.

CONCLUSIÓN

Sentimos no haber transcrito en su justa medida muchos matices del estilo interpretativo de los sujetos que generosamente han dejado plasmada su voz en la grabadora y bastantes hasta su imagen en la videocámara. Estos informantes, en su totalidad mujeres, son ya de avanzada edad en el momento de la interpretación, tanto que cuando las escuchemos ya habrán podido pasar en cierto número a una mejor vida. Gracias sinceras a todas por su desinteresada aportación al legarnos este patrimonio inmaterial de cultura en el que quedan expresados el ser y sentimiento de los ancestros de esta región.

Con esos matices interpretativos nos referimos al timbre de voz, el arranque inesperado a cantar o el ataque para comenzar los versos y la emisión de notas que a veces no alcanzan la altura precisa a pesar de haber comenzado en una grave tonalidad, o los *glissandos*, especialmente ascendentes, que son tan típicos de aficionados a cantar y se manifiestan más proclives en personas de edad avanzada. Otros matices serían los casi inapreciables trémolos o diminutos melismas sobre la misma sílaba y los portamentos repentinos de forma disimulada hacia otro tono inferior como consecuencia de la tendencia natural hacia la comodidad en la ejecución. Otras veces se aprecia una interpretación agógica en que el sujeto modifica la velocidad de su ejecución, en la mayor parte de los casos con una tendencia acelerativa hacia la resolución del verso que coincide con la cadencia en la tónica escogida. A veces ese aspecto agógico se refiere a una o varias notas que por considerarse de paso pierden algo del tiempo que se esperara de ellas en su ejecución o más veces referido a una sección del verso que suele coincidir con el final. Ello debido a la atención que el intérprete presta a la letra posterior en que acaba el verso y no tanto por la falta de aire en los pulmones para poder acabar la

frase. Hemos evitado la plasmación del término musical *accelerando* o el *rubato* usado más bien por compositores musicales de una obra que prescribe esos matices para el intérprete. En este caso son matices que van surgiendo de forma natural en cada informante. En ocasiones en que se canta en grupo de dos o tres se percibe una anticipación de uno de los integrantes a la hora de atacar el comienzo de un verso, llevando así el liderazgo de la letra. Esta es una tendencia que pretende no perder el hilo de la narración y servir de ayuda al resto de intérpretes por parte de quien se cree con más dominio del conocimiento de la letra. Con ello hay casos en que se saltan versos que otro intérprete más fiel a la narración pudiera haber tenido en mente. Por supuesto que los *ritardando* o calderones no se dan en estas interpretaciones populares de gente de avanzada edad, más pendientes de la letra del verso que en malgastar el aire, que tampoco les iría muy sobrado.

El “tempo” suele ser ligero y ágil, nunca *largo* o *adagio*, pero tampoco *vivace* ni *presto*. Más bien corresponde a un “tempo” superior al *moderato* que sería el *allegro*, de 120 a 168 pulsaciones por segundo. Hemos prescindido de añadir esta indicación en la partitura porque apenas reflejaría el capricho del intérprete en ese momento, pero esa velocidad es la norma general. Otros matices expresivos de la dinámica musical y que van del “pp” (*pianissimo*) al “ff” o “fff” (*fortissimo*) o “fz” (*forzando*) o “cres.” (*crescendo*) o “dim.” (*diminuendo*) se nos hacen también innecesarios en esta transcripción porque no son propios de quienes interpretan el romance. Son términos que pudiera añadir un intérprete a la hora de recordar estos cantos populares y con la idea de dar brillantez y aportar su impronta artística profesional.

El tono lo hemos escogido procurando que la máxima altura fuera el do⁵, el do de pecho de la notación científica o internacional, con 523,25 vibraciones por minuto, o sea dos notas más altas que el la 440 hercios, el del diapason, que llamamos la⁴. No nos referimos al do⁶, que es el que popularmente se entiende como de pecho, pero que en realidad no lo es pues es percibido como resonando en la cabeza al usar el llamado “falsete” por sobresalir del registro normal del cantado, sobre todo en los agudos, como efecto de utilizar la vibración de la mucosa de la glotis cuando está casi cerrada al máximo. Por la parte grave de la tesitura hemos determinado que la tonalidad elegida nunca sobrepasara el la³. De esta forma habría de poder ser cantado por cualquier voz aunque no estuviera ejercitada en el “bel canto” y careciese de amplia tesitura, sobre todo en los sonidos agudos que son los más difíciles de lograr, máxime en personas de edad avanzada como son las informantes (siempre de género femenino). En la mayoría de los casos, para ajustarnos a tal tesitura, hemos tenido que subir el tono original en que se ejecuta, que aleatoriamente comenzaban de forma natural en un tono relativamente bajo y con poca brillantez debido a su edad y al hecho de no ser cantantes profesionales.

Viendo el conjunto de versiones, tanto de *Riojarchivo.com* como las demás mencionadas, apreciamos la gran variedad musical que se ha generado en pueblos más bien cercanos entre sí, pertenecientes a la Comunidad Autónoma de La Rioja a excepción de Samaniego, versión II, que hoy es de la Rioja Alavesa, País

Vasco, pero lindando con La Rioja y en cuanto al folklore muy unida a ella. Una variedad rítmica y melódica que se genera no solo en la región sino hasta en diferentes versiones del mismo pueblo. Dentro de esas diferencias hemos señalado algunas similitudes entre una versión y otra que, al ser cercanos geográficamente, nos dan pistas del trasvase o comunicación entre ambos lugares.

Muchos de los pueblos donde se aprendieron estas variantes del romance están en la parte sur de la región, lo que es el Sistema Ibérico donde, al haber lugares más aislados e incommunicados que otros, se ha mantenido con más facilidad el aprendizaje de oído de este y otros romances, así como cuentos y dichos transmitidos oralmente. Nos hace ver que las posibilidades de variantes musicales son inmensas. Además se pueden ir modificando con el tiempo.

Hemos comentado musicalmente alguna otra versión, como la recogida en Villoslada de Cameros por Kurt Schindler y otras recogidas por Bonifacio Gil García, por su parecido con alguna versión de *Riojarchivo.com*. Al estar esas otras versiones ya catalogadas en partituras nos hemos limitado a citarlas en la introducción. Hemos de pensar que habrá otras muchas versiones recogidas en grabaciones privadas puesto que cada intérprete tiende a hacer sus propias variaciones.

Apreciamos la existencia de melodías breves a modo de melismas, con notas seguidas, tanto en compases binarios como ternarios. Sobre todo en compases de 6/8, binario pero de subdivisión ternaria, tienen un carácter de seguidilla, muy apropiado para expresar el cariz recitativo del romance que lo hace melodioso y agradable de escuchar.

Observamos alguna característica de la canción popular española, así el gran uso de la síncopa que le da un pícaro gracejo al ritmo. La sincopación de versiones como la IX y la X o la de Santa Eulalia Bajera (transcrita por Bonifacio Gil), entre otras, es muy notable, ritmo musical jocoso que nos transmite esa gracia española, a la vez burlesca y divertida. Rasgo que muestra la impronta popular de esta región y que adquiere costumbre con el trasvase de otras formas musicales de regiones tan lejanas como las andaluzas de donde hemos citado “El Vito”, quizá originario de Córdoba, en las versiones X y XV que se parecen, en la de Santa Eulalia Bajera de Bonifacio Gil y en la de Villoslada de Cameros de Kurt Schindler. Hay también una tendencia a la comodidad en melodías de tradición popular que pierden esa gracia de la síncopa. Sin embargo es común ver esa sincopación en canciones latinas actuales, una de las razones por la que se hacen tan populares.

Hemos visto las similitudes de las versiones I y XII con la canción popular “Vamos a contar mentiras” y cómo en ellas y las demás que hemos visto de forma pautada se acentúa el apoyo constante en la tónica y dominante para una mayor fijación del tono y, sin salirse de sus acordes fundamentales, crear una cadencia perfecta (I-V-I), algo peculiar de la canción popular y que por ello se memoriza con facilidad y se difunde con presteza. Son rasgos de esa influencia adquirida al criarse uno oyendo esa estructura melódica y cadencia popular.

A pesar de que las melodías difieren de un intérprete a otro, se puede

comprobar que la letra es muy común entre ellas y también con otras versiones de provincias circundantes, como son Burgos, Soria y de la Comunidad Autónoma de Aragón. Así como en Aragón, también en La Rioja se mezcla este romance con versos de “La guardadora de un muerto” o “La enamorada de un muerto”. También común a otros lugares es intercalar versos de otros romances, como de “El infante Arnaldos”, de “Sufrir callando”, de “Gerineldo” y de “El quintado”. Los nombres del protagonista de estas versiones del sitio web no son nunca como el del título “El Conde Niño”, sino otros tetrasílabos como “Marcelino” (III, V, VII, XII y XIII, el más numeroso), “Fernandito” (II y XIV), “Conde Olinio” (IX y XVI), “Conde Olinos” (IV), “condesillo” (X), “San Lorenzo”, al igual que en Bergasilla Somera transcrito por Bonifacio Gil, (III, que también lleva el nombre de Marcelino), y otros nombres no tetrasílabos como “hijo del conde” (VIII), “hijo del rey conde” (I), “buen conde” (XI) y “conde”, “vizconde” e “hijo del vizconde” (XV). “Laureana” es, solo en la versión VI, el único nombre, también tetrasílabo, que se le da a la princesa. Nombre que nos connota el estar coronada. Estos nombres tetrasílabos son muy convenientes para conseguir el ritmo octosilábico, una querencia de ritmo que se adapta a nuestra habla y oído hispanohablante y que nos da una sensación familiar, de añoranza, a la vez que es pegadizo, pudiéndolo memorizar con facilidad.

La letras de estas versiones no difieren, en general, de las de otras latitudes. También hemos observado cómo en muchas ocasiones el informante acomoda la letra a la prescrita melodía de versos octosílabos con lo que surgen palabras defectuosas y regionalismos que nos muestran la forma de hablar y son una muestra más de la originalidad de cada versión. Así, “penosito”, “te tengo ir a buscar” (de la I), “mañenita”, “de córera me’ ha’i matar” (de la III), o “charon”, en lugar de echaron (de la IV) buscando ensamblar la letra al octosílabo típico del romance, cuyos versos pares riman en asonante quedando libres los impares. Son regionalismos, pronunciaciones vulgares, que adquieren valor poético gracias a la intuitiva repentización rítmica del informante que le da gran originalidad y nos produce una añoranza por el terruño.

En algunas versiones nos hemos detenido en explicar cómo se ha escogido un tono menor o un compás ternario para expresar el abatimiento y frustración del conde y la princesa ante la prohibición real de no permitir su casamiento y la pena de la princesa al ver el lamentable crimen de su amante que es causa de su también trágico desenlace. El romance de “El Conde Niño” es una forma popular de protesta contra las diferencias de clases sociales y la negativa determinante social de no interferencia, ni trato ni mucho menos unión legal entre ellas. El romance critica ese modelo social impuesto por la clase dominante que ninguneaba la voluntad y libertad personal para unirse en matrimonio con alguien de inferior categoría social. Es un romance, entre otros, de manifestación de subcultura popular, de rechazo a unas normas contra natura impuestas por la clase social alta que se sentía poseedora exclusiva de la cultura y con el derecho a imponer sus ideas con el objetivo de preservar su estatus social sin posible mezcla

con “los otros”, los marginados de inferior rango social al suyo. A la vez, el romance nos muestra el triunfo de la razón y el amor con el final feliz post mortem de los amantes y el castigo consecuente infringido a la reina por su acción criminal con el fin de romper toda posibilidad al derecho natural humano de la princesa de ser libre para casarse por amor con quien fuera. El alargamiento final del romance no pretende sino hacer énfasis en la obstinación de la reina en no aceptar ese derecho del que privó a su hija. Con la muerte, toda esperanza de amor se pierde, pero el romance trata de enseñar que ese sublime sentimiento de conexión de los amantes vence a la muerte y se perpetúa. De ahí que también se lo titule como “Romance del amor más poderoso que la muerte”. Aunque romance castellano medieval extendido por África y América, estaría inspirado en una leyenda celta y tiene semejanzas con una leyenda china, “Los amantes mariposa”, cuyo registro se remonta al siglo IX.

A pesar de estar ya grabadas estas versiones en el portal virtual *Riojarchivo.com*, hemos hecho la transcripción musical para poder estudiar musicalmente también la variedad de la melodía que apreciamos más palpablemente viendo la partitura. El hecho de ser el romance más conocido, con más versiones en todo el mundo y el más veces cantado, nos hace pensar que es uno de los más antiguos de la Edad Media. Que esta pequeña muestra visual valga como reflexión sobre el trabajo de campo de la recogida audiovisual del sitio web y sirva de modesta ayuda a quienes quieran interpretar y disfrutar en el futuro las variaciones de nuestros ancestros riojanos de este viejo y universal romance: El Conde Niño.

Notas

- 1 <https://www.riojarchivo.com>
- 2 Para acceder a esta documentación en la web hemos de entrar el sitio web *Riojarchivo.com*, pinchar en “Categorías”, donde está el apartado “Romancero”, y ahí escoger los romances referidos a “Amores desdichados”, entre los que están las dieciséis versiones recogidas de “El Conde Niño”.
- 3 Este sitio web es una iniciativa de la Asociación Cultural Espiral Folk de Alberite, La Rioja, liderada por Javier Asensio García y Helena Ortiz Viana.
- 4 Javier Asensio García, *Romancero general de La Rioja*, Piedra de Rayo, Logroño, 1998.
- 5 Diego Catalán Menéndez-Pidal, *Por campos del romancero: Estudios sobre la tradición oral moderna*, Gredos, Madrid, 1970.
- 6 <https://depts.washington.edu/hisprom/>
- 7 <https://depts.washington.edu/hisprom/ballads-new/bdgpidaction.php>
- 8 <https://depts.washington.edu/hisprom/optional/balladaction.php?igrh=0049>
- 9 Bonifacio Gil García, “Canciones del Folklore riojano recogidas por Kurt Schindler”, versión n. 9216 de Villoslada de Cameros, Revista *Berceo*, año XI, n. 41, Logroño, 1956, p. 407, texto en pp. 393-394.
- 10 Municipio de la comarca de Cameros (en la subcomarca de Camero Nuevo), en la parte norte del Parque Nacional Sierra de Cebollera, en el curso alto del río Iregua, en el centro-sur de La Rioja.
- 11 Kurt Schindler, *Folk Music and Poetry of Spain and Portugal*, Hispanic Institute, University of Columbia, New York, 1941. *Música y poesía popular de España y Portugal*, Universidad de Salamanca y Columbia University, 1991.
- 12 <https://1.bp.blogspot.com/-HkVG1LQFxiK/UYIXsqn7tII/AAAAAAAAABxs/6Mxo7Int>

- HdY/s1600/flauta+el+vito.TIF.
- 13 Fernando Obradors, *El Vito, Canciones Clásicas Españolas*, Vol. III: <https://anaprofe.music.blogspot.com/2013/05/partitura-cancion-popular-el-vito.html>
 - 14 <https://musescore.com/user/6537691/scores/2476391>. Ver compás trigésimo.
 - 15 *Cancionero Popular de La Rioja, Materiales recogidos por Bonifacio Gil García*, CSIC y Gobierno de La Rioja, Barcelona, 1987.
 - 16 Oscar Javier Mendoza García, *Pueblos riojanos en romances, coplas y dichos recogidos por Bonifacio Gil García*, IER (Instituto de Estudios Riojanos), Logroño 1909, pp. 124-125 (Dicen las Zalamerás), pp. 158-159 (El Chivirichón), p. 223 (Arbolito de La Rioja) y pp. 260-261 (Santo Domingo).
 - 17 Bonifacio Gil García, *Cancionero Popular de La Rioja, ... op. cit.*
 - 18 https://es.wikipedia.org/wiki/Archivo:Romance_del_conde_olinos.jpg
 - 19 Sección femenina de F. E. T. y de las J. O. N. S., *Mil canciones españolas*, Edi. Almena, Madrid, 1966, pp. 705-706.
 - 20 *Ib.* pp. 703-704
 - 21 <https://www.pinterest.es/pin1/752945631421415506/>
 - 22 https://youtu.be/a_C2BKNmbPU
 - 23 <https://youtu.be/mon5uRklIBM> y <https://youtu.be/XD1uLMpBR0E>
 - 24 <https://youtu.be/aFdX0VuFEEL>
 - 25 Joaquín Díaz y Gabriela Pizarro, Disco *Romances de Acá y de Allá*, Vol. 1, n. 3, Chile-España, Fonomusic, 1987.
<https://music.apple.com/de/album/conde-lino/489643483?i=489643491>
 - 26 Esta última frase la dice el romance sefardí:
“¿A quién contaré mi mal, / a quién iré yo a contarlo?”
Manuel Alvar, *Poesía tradicional de los judíos españoles*, Editorial Porrúa, edi. 3ª, México, 1979.
 - 27 Joaquín Díaz y Gabriela Pizarro, Disco *Romances de Acá y de Allá*, Vol. 1, Chile y España, vol. 1, n. 5, Fonomusic, 1987.
Es clara la intrusión de los versos de “Sufrir callando”, romance de la que siendo niña se “malcasó” con don Rodrigo que la puso de ventera y le daba el pan y el vino racionado. Ella piensa en quién confiar sus penas (“peores que un cautivo”):
“Si se lo digo a mi madre / se pondrá a llorar conmigo;
si se lo digo a mi padre / dirá que así lo he querido;
si lo digo a mis hermanos / matarán a don Rodrigo”.
En nuestro romance no se menciona a la madre (de la que nada se puede esperar en este caso por ser la causante de la tragedia), sí al padre y al hermano y añade al tío, que no se menciona en “Sufrir callando” porque la protagonista prefiere callar y no contar su desgracia a nadie por el temor de que los hermanos maten a Rodrigo.
<https://music.apple.com/de/album/sufrir-call%C3%A1ndo/489643483?i=489643495>
 - 28 <https://gatopardoblog.wordpress.com/2019/08/01/romance-enamorada-de-un-muerto/>
 - 29 Jaime Knowles, *Libro Northern Lass A*, p. 30. Ver en:
<https://www.itma.ie/digital-library/score/pw-joyce-nli-1912-443>
 - 30 Felipe Abad León, *Azofra. Historia viva de un pueblo riojano*, Editorial Ochoa, Logroño, 1981.
 - 31 https://es.wikipedia.org/wiki/Archivo:Romance_del_conde_olinos.jpg
 - 32 Bonifacio Gil García, *Cancionero Popular de La Rioja...*, *op. cit.*, n. 64, p. 29.
 - 33 *Ib.* n. 65, p. 29.
 - 34 Ver nota 9.
 - 35 <https://poemas.nexos.com.mx/la-guardadora-de-un-muerto/>
 - 36 <https://gatopardoblog.wordpress.com/2019/08/01/romance-enamorada-de-un-muerto/>
 - 37 <https://poemas.nexos.com.mx/la-guardadora-de-un-muerto/>

(原稿受付 2022年6月16日)

明治4年頃の英学に関する一考察

— 額田県の郷学校に焦点を当てて —

保坂芳男

A Study of English Studies in the Early Meiji Era:

Focusing on *Go-gakko* in Nukata Prefecture

Yoshio HOSAKA

Abstract

Education was centralized after the new school system (*Gakusei*) in August 1872, and the educational policy of the clan gradually lost its originality.

The following is a description of the state of English education during this period, focusing on the local schools in *Nukata* Prefecture, Aichi. Although *Nukata* Prefecture existed for only one year, there were traces of active attempts to introduce English studies.

Among the schools, *Koromo Goggakko* and *Toyohashi Giko* actually taught English, but we have to conclude that they were failures. It may be clear that the elementary school curriculum of *Nukata* Prefecture was only presented as an ideal and exemplary curriculum.

キーワード：明治初期の英学，額田県，郷学校，拳母郷学校，豊橋義校

1. はじめに

明治4年は激動の時代であった。国内では、断髪令、廃藩置県が行われ、西洋化の流れは加速しつつあった。当時、英学においても各藩や各県がその重要性を理解し始め、藩校や郷（学）校、義校等の学校で英語を教授し始めた頃であった。しかしながら、2度の廃藩置県で行政が混乱した上に、明治5年8月の学制頒布により教育の中央集権化が進み、藩の文教政策は徐々にその独自色を失っていった。

その時期の英学の様子を額田県の郷学校に焦点を当てて述べることにする。額田県の存続はわずか1年ではあったが、積極的に英学を取り入れようとした形跡があるからである。

2. 廃藩置県と額田県

本研究で述べる額田県は、明治4年11月15日の第一次府県統合で、田原県他10県が統合され、同時に名古屋県から知多郡を移管されて成立した県であった。さらに、11月20日、伊那県のうち足助庁が管轄する三河国内の地域（旧三河県）を編入した。明治5年11月27日、愛知県に合併されるとともに額田県は廃止となった。

3. 先行研究分析

額田県の学校に関する研究（仲，1962；近藤，1940等）はそれほど多くない。その中でも英学に関する詳細な研究は田畑（2017）のみであると言っても過言ではない。

3.1. 田畑（2017）に関して

額田県の郷学校に関しても仲（1962）や他の研究も存在するが、英学に関して詳しく述べているのは管見の限り田畑（2017）以外にはないであろう。額田県との関連でいえば、以下のように結論付けている。

- ① 「額田縣小學課業表」には暗誦科目に「英独語學五百言」「英独語學三百言」「英独語學一百言」が含まれており、暗誦という科目のなかで英単語を学習しようと計画したことが窺れる。
- ② 拳母小学校の前身である藩校崇化館では、洋学教授の実績はなかったが、小学校になる前の郷学校において、英語教育を取り入れた。そこで採用された教材のレベルが高かったのは元藩校という学校のレベルに合わせたためと考えられる。

4. 額田県の郷学校

額田県は僅かに一年ばかりで廃止され、愛知県に合併されたため、十分な教育の成果を見る余裕もなく、郷学校は義校となり、その後学制実施による公立小学校の設立とともにその母体となった。

5. 額田県小学課業表（額田県版）

『愛知県教育史』によると、「県の奨励と督励の下に郷学校が管内に広く普及したこと

は最も注目すべき特色であった」(p.94)とある。その後身の各市史を見ると、京都の番組小学校のような教育課程が見られる。

5.1. 京都の小学課業表（京都版）との比較

全体的には、教科が4つ（句読、暗誦、習字、算術）で、降順五等制である点は京都版も額田県版も全く同一である。等（学年）ごとに科目の詳細を見てみると若干の相違しか見られない。

5.2. 実施の状況

後身の市史を読む限り、額田県小学課業表は当時の1つのモデルではあったが実施が疑わしいという記述が多い。

6. ま と め

明治4年11月～明治5年11月、わずか1年間ではあったが、額田県では京都の課業表を参考に額田県小学課業表を作成した。それは、額田県内の郷学校の教育課程の一つの目標であり理想でもあった。その中には、「英独一百言」等で英単語を学ぶ計画であったことは想像できるが、多くの場合、英学教員の不足や生徒の理解不足等の問題で、実施までには至らなかったり、十分な教育効果をあげられなかったりしたようである。そうこうしているうちに、明治5年11月、愛知県に併合されて郷学校は廃校となった。

その中でも拳母郷学校や豊橋義校などは、実際に英語を教授したが、失敗であったと判断せざるをえない。

額田県小学課業表はその通り実施された形跡はなく、あくまでも理想的、模範的な課業表として県が提示したにすぎなかったことが明らかになった。

参考文献

- 愛知県教育委員会（編）（1973）.『愛知県教育史』第3巻，愛知県教育委員会。
田畑きよみ（2017）.「明治初期初等教育機関における言語教育計画——愛知県および岐阜県の義校事例として——」『言語情報科学』（15），東京大学大学院総合文化研究科，91-107.

謝 辞

本研究には令和3年度拓殖大学人文科学研究所の助成を受けたことを記しておかなければならない。愛知県への調査や書籍の購入等々，財政的な援助のおかげで研究が大きく進んだ。改めて感謝申し上げたい。誠にありがとうございました。

なお，本稿は、『東日本英学史研究』（第21号）掲載論文の抄録である。日本英学史学会東日

本支部の許可を得て抄録として掲載することができました。感謝いたします。ありがとうございました。

(原稿受付 2022年6月16日)

拓殖大学研究所紀要投稿規則

(目的)

第1条 拓殖大学（以下、「本学」という。）に附置する，経営経理研究所，政治経済研究所，言語文化研究所，理工学総合研究所，人文科学研究所，国際開発研究所，日本語教育研究所および地方政治行政研究所（以下、「研究所」という。）が刊行する紀要には，多様な研究成果及び学術情報の発表の場を提供し，研究活動の促進に供することを目的とする。

(紀要他)

第2条 研究所の紀要は，次の各号のとおりとする。

- (1) 経営経理研究所紀要『拓殖大学 経営経理研究』
- (2) 政治経済研究所紀要『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』
- (3) 言語文化研究所紀要『拓殖大学 語学研究』
- (4) 理工学総合研究所紀要『拓殖大学 理工学研究報告』
- (5) 人文科学研究所紀要『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』
- (6) 国際開発研究所紀要『国際開発学研究』
- (7) 日本語教育研究所紀要『拓殖大学 日本語教育研究』
- (8) 地方政治行政研究所紀要『拓殖大学 政治行政研究』

2 研究所長は，次の事項について毎年度決定する。

- (1) 紀要の『執筆予定表』の提出日
- (2) 投稿する原稿（以下、「投稿原稿」という。）及び紀要の『投稿原稿表紙』の提出日
- (3) 投稿原稿の査読等の日程

(投稿資格)

第3条 紀要の投稿者（共著の場合，投稿者のうち少なくとも1名）は，原則として研究所の専任教員，兼担研究員および兼任研究員（以下「研究所員」という。）とする。

2 研究所の編集委員会が認める場合には，研究所員以外も投稿することができる。

3 研究所の編集委員会は，前項に規定する研究所員以外のうち，講師（非常勤）の投稿について，年度1回を限度に認めることができる。

(著作権)

第4条 投稿者は，紀要に掲載された著作物が，本学機関リポジトリ（以下「リポジトリ」という。）において公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することを許諾しなければならない。

2 共同執筆として紀要に掲載する場合には，共同執筆者全員がリポジトリにおいて公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することについて承諾し，投稿代表者に承諾書を提出しなければならない。投稿代表者は，共同執筆者全員の承諾書を投稿する原稿と一緒に研究所に提出しなければならない。

(執筆要領および投稿原稿)

第5条 投稿原稿は、研究所の紀要執筆要領の指示に従って作成する。

2 投稿原稿は、図・表を含め、原則として返却しない。

3 学会等の刊行物に公表した原稿あるいは他の学会誌等に投稿中の原稿は、紀要に投稿することはできない(二重投稿の禁止)。

(原稿区分他)

第6条 投稿原稿区分は、次の表1、2のとおり定める。

表1 投稿原稿区分：第2条に規定する理工学総合研究所を除く研究所

(1)論文	研究の課題、方法、結果、含意(考察)、技術、表現について明確であり、独創性および学術的価値のある研究成果をまとめたもの。
(2)研究ノート	研究の中間報告で、将来、論文になりうるもの(論文の形式に準じる)。新しい方法の提示、新しい知見の速報などを含む。
(3)抄録	本条第5項に該当するもの。
(4)その他	上記区分のいずれにも当てはまらない原稿(公開講座記録等)については、編集委員会において取り扱いを判断する。また、編集委員会が必要と認めた場合には、新たな種類の原稿を掲載することができる。

表2 投稿原稿区別：理工学総合研究所

(1)論文、(2)研究速報、(3)展望・解説、(4)設計・製図、(5)抄録(発表作品の概要を含む)、(6)その他(公開講座記録等)

2 投稿原稿区分は、投稿者が選定する。ただし、紀要への掲載にあたっては、査読結果に基づいて、編集委員会の議を以て、投稿者に掲載の可否等を通知する。

3 紀要への投稿が決定した場合には、投稿者は600字以内で要旨を作成し、投稿した原稿のキーワードを3~5個選定する。ただし、要旨には、図・表や文献の使用あるいは引用は、認めない。

4 研究所研究助成を受けた研究所員の研究成果発表(原稿)の投稿原稿区分は、原則として論文とする。

5 研究所研究助成を受けた研究所員が、既に学会等で発表した研究成果(原稿)は、抄録として掲載することができる。

(投稿料他)

第7条 投稿者には、一切の原稿料を支払わない。

2 投稿者には、抜き刷りを30部まで無料で贈呈する。但し、査読を受けた論文等に限る。

(リポジトリへの公開の停止及び削除)

第8条 投稿者よりリポジトリへの公開の停止及び削除の申し出があった場合または編集委員会がリポジトリへの公開の停止及び削除が必要と判断した場合には、リポジトリへの公開の停止及び削除をおこなうことができる。

(その他)

第9条 本投稿規則に規定されていない事柄については、編集委員会の議を以て決定する。

(改廃)

第10条 この規則の改廃は、研究所運営委員会の議を経て研究所運営委員会委員長が決定する。

附 則

この規則は、令和2年3月1日から施行する。

拓殖大学人文科学研究所紀要 『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』執筆要領

1. 発行回数

紀要『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』(以下、「紀要」という)は、原則として年 2 回発行する。原稿提出期日および発行は、次のとおりとする(厳守)。

(1)	原稿は、 6 月末日締切 - 10 月発行
(2)	原稿は、 10 月末日締切 - 3 月発行

2. 執筆予定表

投稿希望者は、研究所が定めた日までに、紀要の執筆予定表に必要な事項を記入・捺印し、学務部研究支援課(以下、「研究支援課」という。)に提出する。

3. 使用言語

使用言語は、日本語又は英語とする。ただし、これら以外の言語での執筆を希望する場合は、事前に人文科学研究所編集委員会(以下、「編集委員会」という)に書面にて申し出て、許可を受ける。

許可を受けた原稿は、必ず外国語に通じた人の入念な校閲を受けたものに限る。

4. 様式

投稿する原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロ原稿 2 部を、編集委員会に提出する。

- (1) ワープロを使用する際は、A4 判の白紙片面を縦長に用い、横書きで、1 行 39 文字、1 ページ 34 行で印字する。その際、天地、左右各 30 mm 程度の余白をとっておく。縦書きの場合もこれに準ずる。
- (2) 欧文による原稿の場合は、A4 判の白紙片面を縦長に用い、天地左右の余白を 30 mm 程度とり、1 行 78 文字、1 ページ 34 行で印字する。外国語の要約の原稿もこれに倣う。
- (3) 原稿の分量は、本文と注及び図・表を含め、原則として、A4 縦版・横書で次のとおりとする。なお、日本語以外の言語による原稿の場合もこれに準ずる。
 - ① 日本語および全角文字で記す場合、原則として 24,000 字以内。
 - ② 欧文の場合、原則として 48,000 字以内
- (4) 投稿者は、紀要の複数の号にわたり、同一タイトルで投稿を希望することはできない。ただし、「資料」の場合は、同一タイトルの原稿を何回かに分けて投稿することができる。その場合は、最初の稿で、記載原稿の全体像と回数を明示しなければならない。

5. 原稿

- (1) 原稿区分は、「拓殖大学研究所紀要投稿規則」に記載されているとおりするが、「その他」の区分、定義については付記のとおりとする。
- (2) 原稿の受理日は、研究支援課に到着した日とする。
- (3) 投稿は、完成原稿の写しを投稿者が保有し、原本を編集委員会宛とする。
- (4) 投稿する原稿とあわせて、「拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究」投稿原稿表紙に必要な事項を記入、「拓殖大学機関リポジトリへの公開等の許諾」に捺印し、原稿提出期日までに添付する。

6. 本文表記

- (1) 本文の構成を章・節・項のように分ける場合、それぞれの表記の仕方は、例えば、章は I・II……、節は 1・2……、項は 1)・2)……などの表記方法があるが、本紀要の場合、執筆者の研究分野が多岐にわたることを考慮し、とくに定めない。各執筆者が所属する学会の学会誌などの表記方法に準ずること。
- (2) 数字は算用数字を用いる。数字や欧字は、1字のみの場合を除き、半角とする。
ただし、縦書きの場合に限り、数字は原則として漢数字を用いる。
- (3) 特殊な字体（イタリック・ボールド・ギリシャ文字など）・紛らわしい文字（I〈エル〉・1〈イチ〉・i〈アイ〉・0〈ゼロ〉・O〈オウ〉など）や大文字・小文字（W と w など）は、明瞭に区別できるように指定する。また、添え字も、上付き・下付きを明瞭に指定する。
- (4) 本文中に文献・資料を引用・参照する場合は、下記の例のように、文献・資料の著者名（姓のみ）と発表年を示し、必要に応じて関連ページも示す。
青木（2001）は……、上村（2002：50-61）は……、青木・上村（2003）によれば……、……という説がある（大山 1998：43-52）。……という見解もある（飯田 2003；太田 1999）。青木ほか（2004）は……、など。
- (5) 本文中に文献・資料の一部を引用する場合は、引用部分を、「」でくくる、字下げする、活字ポイントを小さくする、などの方法で表す。

7. 図・表・数式の表記および作成

- (1) 図（図には写真も含む）および表は必要最小限にとどめる。とくに、同じデータに関する図と表の重複は避ける。
- (2) 図および表は、各図・各表ごとに別紙とし、それぞれ、図 1・図 2… 表 1・表 2…のように通し番号を明示し、執筆者名を記入する。
- (3) 図および表のタイトル・説明文・出典などの原稿は、別紙にまとめる。外国語の要約をつけた場合は、図・表のタイトルと説明文は、外国語を併記することができる。
- (4) 本文中の図および表の挿入希望位置は、本文原稿の右側余白に記入する。また、図・表の大きさや体裁について希望がある場合は、本文原稿上に枠で指定するか、おおよその大きさなどを右側余白に記入しておく。なお、図・表の大きさや体裁は、編集委員会で決める。したがって執筆者の希望に添えない場合もある。
- (5) 図および表を本文中に引用する際は、「図 1 によれば……」「……は表 3 に示される」などのように示す。
- (6) 図は、黒インクで明瞭に描いたものか、ワープロあるいはコンピューターソフトを使用して描いたもので、そのまま写真製版が可能なもの（版下原稿）に限る。
- (7) 表は、ワープロあるいはコンピューターソフトを使用して作成する。
- (8) 図中や表中の文字や数字の大きさ、図の表現の細かさについては、刷り上がりの大きさで明瞭に読みとれるよう、縮小率を十分考慮して決める。
- (9) 数式は専用ソフトなどを使用して正確に表現する。数式の上下は 1 行ずつあける。

8. 注とその記載方法

- (1) 注は、本文内容の補足説明を行う場合と、引用・参照した文献・資料の出所を明示する場合に用いる。
- (2) 本文中の当該箇所の右肩に（ ）でくくった通し番号をつけ、注の内容は、本文のあとに、通し番号順にまとめて記す。

9. 文献・資料の表示方法

本文中で引用・参照した文献・資料を表示する方法としては、本文中には著者の姓と発表年のみを記し（これについては、前ページの本文表記4を参照のこと）、原稿末尾の文献・資料表に詳しく表示する方法と、本文中には記さず、本文のあとの注に詳しく表示する方法の二つが一般的である。

(1) 文献・資料表に表示する場合

- ① 文献・資料表に、下記の要領で記載する。なお、文献・資料表は、原稿の末尾（注の後ろ）に掲載する。
 - a. 学術雑誌など定期刊行物の場合は、著者名・発表年・文献名・定期刊行物名・巻または号番号・文献の最初と最後のページを明記する。単行本の場合は、著者名・発表年・書名・出版社（出版所）名を明記する。
 - b. 著者が複数の場合も、全著者名（姓名）を列記する。
 - c. 定期刊行物の巻・号番号およびページについては、巻ごとの通しページがある場合は、巻番号（ゴシック）と通しページを記す。巻ごとに通しページがない場合は、巻番号（ゴシック）のあとに号番号を（ ）でくくって示し、号ごとのページを記す。号番号のみの場合は、（ ）でくくった号番号とページを記す。
- ② その他の書式（記載順序や方法）については、本紀要の場合、執筆者の研究分野が多岐にわたることを考慮し、とくに定めない。各執筆者が所属する学会の学会誌などの要領に則って、統一した形式で記すこと。
- ③ 文献・資料の並べ方は、下記の要領による。
 - a. 日本語文献・資料、アジア地域言語文献・資料、欧語文献・資料の順に並べる。
 - b. 日本語文献・資料は、著者名の五十音順に並べる。アジア地域言語文献・資料はそれぞれの著者名の当該言語の固有の配列順（あるいはカタカナ表記の五十音順）に並べる。欧語文献・資料は著者名（姓が先）のアルファベット順に並べる。
 - c. 同じ著者の文献・資料は発表年の順に並べる。同じ発表年のものが複数ある場合は、本文の引用順に、a・b……を発表年のあとにつけて並べる。

(2) 注に表示する場合

- ① 注の該当箇所に著者名・文献・資料名などを詳しく表示する方式で、この場合は、文献・資料表を省くことができる。
- ② 表示例は、以下の通り。

【日本語文献・資料】

小林政吉『宗教改革の教育史的意義』（創文社 1960）p. 12. 《単行本の場合》

林 泰成「ピーターズのコールバーグ批判」（佐野安仁、吉田謙二編『コールバーグ理論の基底』世界思想社 1993）p. 34. 《単行本所収の論文の場合》

石井雅史「コミュニケーションと規則」（日本哲学会編『哲学』第51号 2000）pp. 270-272. 《学術雑誌等の掲載論文の場合》

G. ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』宇波彰訳（法政大学出版局 1974）p. 25.

《和訳書の場合》

【英文文献・資料】

Alexander C. Judson, *The Life of Edmund Spencer* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945), p. 145. 《単行本の場合》

A. H. Bullen (ed.), *The Works of Francis Beaumont and John Fletcher* (Variorum ed.;

London London: George Bell and Sons, 1908), pp. 49–53. 《論文集の編者表記の場合》
G. M. Dutcher et al., *Guide to Historical Literature* (New York: The Macmillan Co., 1931),
p. 50. 《著者が3名以上の場合》

F. A. Moe, “School Retrenchment,” *School Review*, XLII (May 1934), p. 40.

《学術雑誌等の掲載論文の場合》

John Calvin, *The Institutes of the Christian Religion*, trans. Henry Beveridge (2nd ed.;
Edinburgh: T. & T. Clark, 1895), I, pp. 40–45. 《英訳書の場合》

【欧文文献・資料の略語の用法】

欧文文献・資料の引用・参照の際によく使われる略語（loc. cit., ibid., op. cit.）の用法を、以下に記す。

loc.cit. 同じ文献・資料の同じ箇所を連続して引用する場合に用いる。

ibid. 同じ文献・資料から連続して引用する場合に用いる。その際、前と引用ページが異なる場合には、当該ページを表示する。

op.cit. 前に挙げた文献・資料に、いくつかの注を隔てた後に、再び言及する場合に用いる。したがって、この場合は、著者名（姓のみ）とページ数とを必ず表示する。

上記の略語は、単行本と学術雑誌の場合はイタリック体で、論文の場合はローマン体で表記する。

[使用例]

(1) T. M. Parrot and R. H. Ball, *A Short View of Elizabethan Drama* (New York: Charles Scribner's Sons, 1943), p. 190.

(2) *loc. cit.*

(3) *ibid.*, p. 325.

(4) E. H. C. Oliphant, *The Plays of Beaumont and Fletcher* (New Haven: Yale University Press, 1927), p. 67.

(5) Parrot and Ball, *op. cit.*, p. 198.

(6) Oliphant, *op. cit.*, pp. 89–91.

∴

その他のよく用いられるページ表記略号（ただし、英文文献・資料の場合）

p. 5. = page 5 の意味

pp. 17 f. = pp. 17 *et seq.* とも表す。これは page 17 and the following page の意味

pp. 20 ff = pp. 20 *et seq.* とも表す。これは page 20 and the following pages の意味

* 欧文文献・資料では、注に示す場合と、文献・資料表に示す場合とでは、著者名などの表記の仕方が異なる。これについては、以下の例を参照のこと。

〈 注に示す場合 〉

Alexander C. Judson, *The Life of Edmund Spencer* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945), p. 145.

〈 文献・資料表に示す場合 〉

Judson, Alexander C., *The Life of Edmund Spencer*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945.

* なお、インターネット上の文献・資料を引用・参照する場合は、文献・資料表あるいは注に、原則として下記の事項を記載する。

執筆者・タイトル・年月日（掲載年月日あるいは更新年月日あるいは取得年月日）・URL

10. 原稿の審査

編集委員会が審査し決定する。その手続きは次の通り。

- (1) 原稿の内容に応じて編集委員以外の査読者を選び、査読を依頼する。それとともに編集委員の中から担当委員を選ぶ。査読者および担当委員は、原則として各1名とするが、場合により複数名とすることもある。
- (2) 査読者および担当委員は、論文・研究ノート・抄録・その他については、以下の11項目について原稿を検討し、査読結果（掲載の可否・原稿種類の妥当性についての意見や原稿に対するコメントなど）をまとめ、それを編集委員会に報告する。
 - ① タイトルは内容を的確に示しているか
 - ② 目的・主題は明確か
 - ③ 方法・手法は適切か
 - ④ データは十分か
 - ⑤ 考察は正確かつ十分か
 - ⑥ 先行研究を踏まえているか
 - ⑦ 独創性あるいは学術的価値（資料的価値）が認められるか
 - ⑧ 構成は適切か
 - ⑨ 文章・語句の表現は適切か
 - ⑩ 注や参考文献の表記は、執筆要領に添ったものになっているか
 - ⑪ 図・表の表現は適切か
- (3) 編集委員会は、これらの報告に基づいて、委員の合議により、掲載の可否、原稿種類の妥当性および次項の「審査結果のお知らせ」に添える文書の内容などを決定する。なお、掲載の可否については、①このままで掲載、②多少の修正の上で掲載、③大幅な修正が必要、④掲載見送りの4段階で判定する。③については、執筆者の修正原稿を査読者と担当委員が再査読し、その結果に基づいて、編集委員会が掲載の可否等を決定する。
- (4) 研究会記録および公開講座記録の原稿については、原則として掲載する。ただし、この場合も編集委員の中から担当委員を選び、担当委員は上記項目の9)等を検討する。その結果、執筆者に加筆修正を求めることがある。

11. 原稿の審査結果・変更・再提出

- (1) 投稿の採否は、編集委員会の指名した査読者の査読結果に基づいて、編集委員会が紀要への掲載を決定する。その際に編集委員会は、原稿区分の変更を投稿者に求める場合もある。
- (2) 編集委員会は、査読に基づき、若干の訂正、あるいは書き直しを要請することができる。

また、上記判定を受けた投稿者は、その趣旨に基づいて、原稿を速やかに修正し、再度、編集委員会に提出する。ただし、査読結果の内容に疑問・異論等がある投稿者は、編集委員会にその旨を申し出ることができる。
- (3) 投稿者は、投稿を許可された原稿（査読済）を、編集委員会の許可なしに変更してはならない。
- (4) 査読の結果、大幅な修正がある場合には、投稿者の修正原稿を編集委員会が再査読し、その結果に基づいて、編集委員会が紀要への掲載の可否等を決定する。
- (5) 編集委員会が、紀要に掲載しない事を決定した場合は、人文科学研究所長（以下「所長」という）より、その旨を投稿者に通達する。

12. 投稿原稿の電子媒体の提出

投稿者は、編集委員会の査読を経て、修正・加筆などが済み次第、A4 版用紙（縦版、横書き）

にプリントした完成原稿1部と電子媒体を提出する。電子媒体の提出時には、使用OSとソフトウェア名を明記する。

なお、手元には、必ずオリジナルの投稿原稿（データ）を保管しておく。

13. 校正

投稿した原稿の校正については、投稿者が初校および再校を行い、所長、編集委員長が三校を行う。

この際、投稿者がおこなう校正は、最小限の字句に限り、版組後の書き換え、追補は認めない。

また、投稿者は、編集委員会の指示に従い、迅速に校正を行う。

投稿者が、期日までに校正が行われない場合には、紀要への掲載はできない。

14. その他

本執領に定められていない事項については、投稿者（執筆者）と協議の上、編集委員会が判断する。

15. 改廃

本執筆要領の改正は、編集委員会が原案を作成し、本研究所会議の議を経て、所長が決定する。

附則

この要領は、平成18年4月以降に投稿される原稿から適用する。

附則

この要領は、平成26年4月以降に投稿される原稿から適用する。

附則

この要領は、平成29年4月以降に投稿される原稿から適用する。

付記：「その他」の区分・定義について

①	研究動向：	ある分野の研究成果を総覧・整理しまとめたもので、研究史・研究の現状・将来への展望などを論じたもの。
②	調査報告：	ある課題についての文献・アンケート・聞き取り調査などの報告で、調査の意義が明確なもの。
③	資料：	文献・統計・写真など、研究にとっての資料的価値があると思われる情報を吟味し、それに解説をつけたもの。
④	討論：	本紀要に掲載された論文等に対する批判・質問および執筆者からの反論・回答。
⑤	研究会記録：	本研究所主催の研究会の講演内容および質疑の概要。
⑥	公開講座記録：	本研究所主催の公開講座の講演内容の詳細な記録あるいは概要。

以上

天理図書館所蔵、〇八一―イ二七―二六(二)一。

(98) 〔二八八二年〕四月七日付・福島安正より福島安広宛、天理大学附属天理図書館所蔵、〇八一―イ二七―二六(二)一。

(原稿受付 二〇二二年七月四日)

収、三三〇頁。

(84) 福島日記一八七七年二月二〇、二三三、二五日の条、および日記中に記された行程表、前掲、太田編『福島將軍遺蹟』所収、三三五―三三八頁。前掲、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。

(85) (一八七七年五月) 一五日付・福島安正より福島安広宛、松本市立博物館所蔵、〇〇四四一―七九。

(86) 福島日記一八七七年三月一〇日の条、前掲、太田編『福島將軍遺蹟』所収、三三八頁。この『福島將軍遺蹟』に転載された日記は、既述のように原文からの写し間違いなどがあるため、原本の前掲、明治十年日記(天理図書館所蔵)より引用を行った。

(87) 福島日記一八七七年三月一日の条、前掲、太田編『福島將軍遺蹟』所収、三三九頁。前掲、明治十年日記(天理図書館所蔵)より引用。

(88) 福島日記一八七七年四月一八日、二〇日の条、前掲、太田編『福島將軍遺蹟』所収、三三九頁。前掲、明治十年日記(天理図書館所蔵)より引用。

(89) 前掲、(一八七七年五月) 一五日付・福島より福島安広宛。さらに六月、政府軍旅団が水俣から大口(現、鹿児島県伊佐市)をめざして進撃した際、その際の激しい交戦を次のように描写している(明治十年日記、天理図書館所蔵。前掲『福島將軍遺蹟』所収の日記とは別の頁に六月四日付で書かれており、『遺蹟』には掲載されていない)。

三日、第三旅団、上小場口攻撃、大関山及長左エ門ガマヲ抜キ、進テ城山ヲ畧シ、続テ国見山及ヒ久木野ヲ落ス。久木野ハ我兵、之ヲ防禦スルニ地形甚タ悪シキヲ以テ、一谿ヲ隔テ、久木野ニ向テ防禦線ヲ定ム。此日野戦、及ヒ針歩銃ノ若干ヲ分捕ル。賊、死体ヲ散シ走ル。我兵、死傷四十余人。戦後、賊ノ踪跡ヲ知ラス。

大関山ノ戦ヒ、彼我讓取スルコト五回ニシテ遂ニ我カ有トナリ、激門奮撃、鋭削ヲ交ヘント云。

このとき福島はまだ熊本城下かそこから比較的近い所にいたと考えられ

るが、一日遅れでこうした前線の状況を知ることができた。

(90) (一八七七年) 七月二八日付・福島安正より福島貞子宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一一。

(91) 西南戦争中の福島はそれ以外にも病気が多く、疾病下痢(三月二日〜七日)、熱痛(三月一日〜三日)、病氣(五月一日〜三日)といった記録がある(福島日記中に記された行程表、前掲、太田編『福島將軍遺蹟』所収、三三六―三三七頁)。前掲、島貫『福島安正と単騎シベリヤ横断』上巻は、これは福島が主として長崎に行つて同地の英米仏等の列国軍艦の動向を観察し、または種々の工作を行った証拠と見るべきものである、福島は主として山県参軍の指示で外国勢力が鹿児島支援に走らないよう硬軟両様の工作を行ったと判断されるとしている(五四―五五頁)。同書では根拠となる資料が提示されていないので、そうした見方が正しいかどうか判断は難しい。あるいは福島は本当に病氣であった可能性もあり、現時点で結論を出すのは困難である。

(92) 福島日記一八七六年六月二三日の条、前掲、太田編『福島將軍遺蹟』所収、三三二頁。

(93) (一八七七年) 九月一〇日付・福島安正より福島貞子宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一二。福島は脚気の療養にあつたが、効き目がないため「甚タ難渋」し、陸軍臨時病院副長の石黒忠憲一等軍医正より診断書を得て、有馬温泉で三週間の入浴治療を行うことになった。一八七七年九月七日付・福島安正より陸軍省参謀局長・鳥尾小弥太中将宛、「願第三四二号 九月七日 有馬行の件 福島十一等出仕」JACAR: C09081379900、自己願書綴 指令済之部 明治一〇年五月六日〜一〇年一〇月三日(防衛省防衛研究所)。

(94) (一八七七年) 一〇月六日付・福島安正より福島貞子宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一三。

(95) 前掲、「福島將軍年譜」三六八頁。

(96) 前掲、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。

(97) (一八八〇年二月) 二二日付・福島安正より福島安広宛、天理大学附属

理に関する翻訳作業を継続していた形跡がある。その一例として、当時誕生からまだ日の浅かったルーマニア公国（一八五九年成立、一八八一年より王国）についての以下のような記述が残されている。これは今日確認することのできる彼の示した外国情報として、もっとも古いものである（明治十年日記、天理大学附属天理図書館所蔵、〇八一―イ二七―一）。

羅馬尼

。摩拉達維（「モルダヴィア」）及ヒ襪拉幾（「ワラキア」）ノ二侯国、一政府ノ下ニ相聯合セシメ□之ヲ羅馬尼ト名ク。

。域内人口四百五十万。

。摩拉達維（「モルダヴィア」）ハ二侯国中ノ北部ニシテ、奥地利匈牙利（「オーストリア・ハンガリー」）及ヒ魯西亜ノ間ニ位ス。首府ヲ乎西（「ヤシ」）ト云フ、人口八万。加拉斯（「カラス」、現メドジディア）ハ国ノ東南、多脳（「ダニューブ、ドナウ」）ノ河岸ニ連ル。通商最モ盛ノ地ニシテ、船舶ノ来往織ルカ如ク、人口六万。其他主眼ノ都府ヲイスマイル（「イズマイル」、現ウクライナ領）及ヒキリア（「現キリア・ベケ」）ト名ク。共ニ多脳河ニ浜ス。一千八百五十六年、魯西亜ヨリ得シ所トス。

〔〇〕襪拉幾（「ワラキア」）ハ、北ハ加尔白山脉（「カルパティア山脉」）ノ境ニ、東西南ノ三面ハ共ニ多脳河ニ連ナリ、首府ヲ不加勒斯（「ブカレスト」）ト云フ。即チ羅馬尼全部ノ京城ニシテ人口十三万、市街甚タ方正ナラズト雖トモ、建築頗（「ル」）美麗ニシテ見ルニ足ル者多ク、府外遊園甚タ多クヲナス。ジウロゼヴヲ（「ジュルジュ」）ハ多脳河ニ浜シ、堅固ノ城砦ヲ築ク。国ノ南方ニアリ。ブラヒロヴ（「ブライラ」）ハ又、多脳川ニ跨リ、貿易甚タ繁昌トス。人口四万五千、国ノ東部ニアリ。クライヴァ（「クラヨーヴァ」）ハ国ノ西部ニ位ス。即チ小襪拉幾（「小ワラキア」）ワラキアの西部をいうノ首府トス。

ルーマニアの主要都市に関する紹介である。福島が日ごろ翻訳し、後述

のように山県有朋陸軍卿にも伝えていた海外の地理情報には、以上のようなものも含まれていたのではないかと考えられる。なお右の引用文には日付が入っていないが、その前後に記された文章から、一八七七年三月二十七日以降、六月四日前に書かれたものであると推察される。この一文は前掲『福島將軍遺續』所収の日記とは別の頁に書かれており、『遺續』には掲載されていない。

(74) 福島日記一八七六年六月七日、八日の条、前掲、太田編『福島將軍遺續』所収、三三四頁。

(75) 前掲、『福島將軍遺續』に転載された日記は、原文からの写し間違いや抜け落ちがあり正確な記録とはいえないため、日記の原本である明治九年日記（天理大学附属天理図書館所蔵、〇八一―イ二七―一）と照合した。その結果、「Hyph」は「Hugh」が正しいことが判明したが、「Mo Catmont」についてはその通りに記されていることがわかった。しかしイギリス人、とくにアイルランド系で「Mo Catmont」という姓は通常はあり得ないと考えられる。

(76) 福島日記一八七六年六月八日の条、前掲、太田編『福島將軍遺續』所収、三三四頁。

(77) 同右。前掲、明治九年日記（天理図書館所蔵）より引用した。

(78) 福島日記一八七六年六月一日の条、前掲、太田編『福島將軍遺續』所収、三一九―三二〇頁。

(79) 福島日記一八七六年六月五日の条、前掲、太田編『福島將軍遺續』所収、三二二頁。

(80) 福島日記一八七六年六月一三日の条、前掲、太田編『福島將軍遺續』所収、三二六頁。

(81) 福島日記一八七六年六月三日の条、前掲、太田編『福島將軍遺續』所収、三三一頁。

(82) 福島日記一八七六年六月一四日の条、前掲、太田編『福島將軍遺續』所収、三二七頁。

(83) 福島日記一八七六年六月二日の条、前掲、太田編『福島將軍遺續』所

- (56) 前掲、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。
- (57) 前掲、島貫『福島安正と単騎シベリヤ横断』上巻、三五頁。
- (58) 前掲、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。
- (59) 前掲、秦編『日本陸海軍総合事典』第二版、『一六三、五〇五—五〇六頁。』
- (60) 前掲、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。
- (61) 吉田光邦『NHK市民大学 万国博覧会とその歴史と役割』(日本放送出版協会、一九八五年)、六一—六六頁、同『改訂版 万国博覧会——技術文史的に——』(日本放送出版協会、一九八五年)、七八—八二頁。
- (62) 関根仁「一八七六年フィラデルフィア万国博覧会と日本——参加過程・状況を中心に——」『中央史学』第二四号、二〇〇一年三月、八四頁。別の研究では、入場者は一、〇一六万を数えたとされている(前掲、吉田『NHK市民大学 万国博覧会』、六三頁)。
- (63) 前掲、関根「一八七六年フィラデルフィア万国博覧会と日本」、八七—九〇、九二、九七、一〇〇—一〇一頁。日本側が用意した日本館は二階建て、瓦ぶきの屋形風のもので、別に住宅風の売店も設けられたほか、周囲には日本式の庭園がつけられた。日本からの出品物は一四二のメダルを得ることができ、まず成功であった(前掲、吉田『NHK市民大学 万国博覧会』、六六—六七頁)。別の研究によると、日本の出品物が万博事務局から受けた褒章は一五五点となっている(伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、二〇〇八年、二四頁)。
- (64) 前掲、関根「一八七六年フィラデルフィア万国博覧会と日本」、九五頁。
- (65) 杓名貴彦「勸農開物翁の幕末・明治——田中芳男と博覧会・博物館——」佐野真由子編『万博学——万国博覧会という、世界を把握する方法——』(思文閣出版、二〇二〇年)所収、八七—八八頁。
- (66) 前掲、関根「一八七六年フィラデルフィア万国博覧会と日本」、九二、九四頁。
- (67) 前掲、島貫『福島安正と単騎シベリヤ横断』上巻、四—五頁。福島日記一八七六年六月二三日の条、前掲、太田編『福島將軍遺稿』所収、三三—三三頁。
- (68) 前掲、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。出国から帰国までメンバー全員が完全な団体行動をとったかどうか不明であり、ここではとりあえず福島の出国日、帰国日のみを記した。福原、小澤、石黒、黒田、福島の名は二月一日付で陸軍省に帰朝届がなされているので、一緒に帰国したと考えられる(「宮内へ米国より帰朝の者更に省云々回答」JACAR: C04026827700「大日記 送達の一部 一月土 陸軍省第一局」防衛省防衛研究所)。そのほかの西郷、野津、川崎の三名の薩摩出身者は別行動をとった可能性がある。
- (69) 前掲、島貫『福島安正と単騎シベリヤ横断』上巻、五—一頁。
- (70) 佐野真由子「序説・万国博覧会という、世界を把握する方法」前掲、佐野編『万博学』所収、三一—四、一—二頁を参照のこと。
- (71) 吉田邦光編『図説万国博覧会史——一八五—一九四二——』(思文閣出版、一九九九年第三版)、二五—二七、五七—六二、七七—八〇、一一四—一一五、一三二頁にそうした細密画が掲載されている。同じく日本館については、同書口絵Ⅲ頁、四〇—四一、一五〇、一六一頁。平野晁臣『万博の歴史——一八五—一九七〇——』(小学館クリエイティブ、二〇一七年)、五—一五三、五五頁掲載の画も合わせて参照した。
- (72) なお、後に福島はアメリカで同国政府より寄贈された若干の書籍を陸軍省に献納している(一八七八年二月一日付「福島安正より福島安広宛、憲政資料室所蔵『福島関係文書』一〇—一五—一六」)。
- (73) 福島日記一八七六年六月五日、六月一日の条、前掲、太田編『福島將軍遺稿』所収、三二二、三二八頁。
- ちなみに翌一八七七年、後述するように福島は西南戦争に従軍し、書記の任務を遂行するが、その合間においても戦争とは直接関係のない海外地

ないかと推察される。

- (33) 前掲、「二八七三年」二月一日付・福島より福島安広宛。
- (34) 前掲、「福島將軍年譜」二六七頁。同じころ、福島よりも一歳年長（一八五一年生）の栗野慎一郎は愛宕下の勸学塾でイギリス人のアイザック・ランバート（Isaac Lambert）に（い）し学び、自得するところがあったという（池田哲郎「九州英学史（下）——福岡・長崎——」『英学史研究』一九七二巻四号、一九七二年四月、二頁）。
- (35) 前掲、「二八七三年」二月一日付・福島より福島安広宛。
- (36) 「二八七三年」四月七日付・福島安広宛書簡、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一五—四。
- (37) 前掲、「福島將軍年譜」二六七頁、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。
- (38) 前掲、「二八七三年」二月一日付・福島より福島安広宛。
- (39) 一八七三年四月三日に司法省に勤めはじめてからごくわずかの間、遅くとも四月七日には江藤邸に移っている。前掲、「二八七三年」四月七日付・福島より福島安広宛書簡の封筒には「東京三大区麹町七丁目二十番地 司法卿江藤新平邸偶居 福島安広」と裏書されている。なお麹町から司法省までは歩いて三〇分程度で、通勤時間は大幅に短縮された。
- なお江藤は福島を自邸に住ませた直後の四月一九日に司法卿から参議に転任した。しかしそれから半年後の一八七三年一〇月、明治六年政変によって参議の職を辞し、翌一八七四年二月に佐賀の乱を起こした結果、四月に刑死する。こうした江藤の末路が福島に衝撃を与えたことは想像に難くない。
- (40) 前掲、「二八七三年」二月一日付・福島より福島安広宛。
- (41) 同右。
- (42) 同右。司法省に職を得たものの、彼の給料はごく低いものであった。あるとき父親の安広が不慮の支出のため福島に送金を頼んだところ、一、二回くらいは至急の才覚もできるが、三回以上はなかなか力に及び難く、そのときは悪しからず思し召されて下さいと返答している。今月四円を用立

ても、来月には返済しなければならず、そうなると手持ちはわずかに六円となって公私支出の半分は不足し、改めて四、五円の金策に苦しむことになるので、毎月思志を休める暇がなく、自然学務の妨害となってしまいます。「ア、如何ニセン」、しかし現在のご困却を傍観するのは子たる者の務めではなく、及ぶところの力を尽くして月末までに少しでもご送金したい、と福島は苦しい懐具合を打ち明けている（一八七四年）八月二十六日付・福島安広より福島安広宛、司法省野紙、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇〇三。しかしそれでも二日後と考えられるが、父に三円を送金している（一八七四年カ）八月二十八日付・福島安広より福島安広宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一〇。

- (43) 前掲、「二八七三年」二月一日付・福島より福島安広宛。
- (44) 同右。
- (45) 同右。
- (46) 前掲、「福島將軍年譜」二六七頁。福島は一歳のときに亡くなった母に代わって自分を育ててくれた祖母に深く感謝しており、たとえ一日でもよから祖母に東京の繁栄ぶりを見せ、わずかでもその恩に報いたいと念願していた（前掲、「二八七三年」二月一日付・福島より福島安広宛）。
- (47) 前掲、「二八七四年」八月二十六日付・福島より福島安広宛。
- (48) 前掲、秦編『日本陸海軍総合事典』第二版、一三五頁。
- (49) 前掲、「二八七四年」八月二十六日付・福島より福島安広宛。
- (50) 前掲、「二八七四年カ」八月二十八日付・福島より福島安広宛。
- (51) 同右。
- (52) 一八七四年七月二十六日付・福島安広より福島安広宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇〇一—二。
- (53) 前掲、「二八七四年」八月二十六日付・福島より福島安広宛。
- (54) 同右。
- (55) 前掲、鳥貫『福島安広と単騎シベリヤ横断』上巻、二五頁、原文は福島安広『単騎遠征報告総論』第一、防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵、文庫—千代田史料—二二二、一頁。

九〜一時(のち二時)、午後一〜三時であり、夏期休暇(六月二日〜七月二日)と冬期休暇(二月二五日〜一月一日)が設けられていた。生徒数は、〇〇〇名、入舎生は五五〇名をそれぞれ上限とした(同書、一六〇頁)。

(19) 前掲、上沼『伊沢修二』、三八頁。

(20) 外務省編『小村外交史』(原書房、一九六六年)、一六頁。

(21) 神足勝記「大学南校以来」村田保定編『安場咬菜・父母の追憶』(安場保健発行、一九三八年二月)所収、四四一頁、鳩山一郎『私の自叙伝』(改造社、一九五二年)、三五頁。

(22) 前掲、牧野『回顧録』第一巻、六五頁、前掲、鳩山『私の自叙伝』三三三頁。

(23) 福島安正筆「大学南校生徒心得」一八七〇年九月中旬筆写、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一八。

(24) 一八七一年二月二日付、福島運治身元引受証、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇〇九一。

(25) 前掲、「福島將軍年譜」三六七頁。

(26) 同右。この年譜はオットー・ズィツヒェルを「オット・シセル」と誤って記載している。なお、北門社は一八六九年に函館の貿易商人、実業家であった柳田藤吉の出資によってつくられた。柳田は福沢諭吉や箕作麟祥の勧めにたがって学校を起すことにし、早稲田にあった三井家所有の旧高松藩下屋敷を買い取ってそのまま校舎にあてた。正式な校名は「北門社新塾」で、生徒数は三〇〇名とし、数名の教師が雇われることになった。

当初学校の管理は山東一郎に任されたが、入塾志願者が多く手不足のため、やはり早稲田で西洋式病院の蘭疇院を開設した医師の松本良順が招かれて共同管理者となった。北門社は設立者柳田の意志により、四万八千両の資金をもって三年間無月謝で維持する見込みであったが、志願者の増加で開塾期限を短縮して閉鎖することになったという。その後、跡地は大隈重信が購入し、その別邸(現、大隈庭園)となった(早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』第一巻、早稲田大学、一九七八年、四二四〜四二

七頁)。

(27) ズィツヒェルとの合意書、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一五一。

(28) (一八七二年)八月一日付・福島安正より福島安広宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇一五一。読みやすさを考慮して、文意を損なわない程度に原文を現代語に改めた。以下、現代語訳の引用については同様。

(29) 宗^き洞^じ寺は曹洞宗の寺院で東京都新宿区須賀町一〇―二に現存する。四ツ谷駅より九〇〇mの地点にあり、北門社があった早稲田から三・五km、徒歩四五分程度で行ける距離である。

(30) (一八七三年)二月一日付・福島より福島安広宛、憲政資料室所蔵「福島関係文書」一〇〇二。ここで福島はズィツヒェルのことを「シセル」と記している。あるいはズィツヒェルは教え子たちと英語で会話をする中で、自分のことをやや英語風にズィセルとでも呼ばせていたのかもしれない。前掲「福島將軍年譜」がシセルの語を用いているのも、そういうところから来ているのではないか。

(31) 前掲、「福島將軍年譜」三六七頁。なおズィツヒェルはやがて自身の蘭疇社が廃止になり、学生が散り散りになろうとしたとき、福島だけを留めて新たな就職先となった後述の軍医寮に伴い、さらに退校する生徒たちを率いて市ヶ谷御門外の洞雲寺に私塾・化成社を設けたという(前掲、(一八七三年)二月一日付・福島より福島安広宛)。

(32) ここで「西洋に対して屈折した心理が少なく」と記したが、もちろん当時の学生が西洋一辺倒であったわけではない。大学南校の学生の多くは、最初は「単純な攘夷党」であった。たとえばフルベッキ夫人が帰省を終えて日本に戻ったとき、出迎えたフルベッキと夫人が相抱擁、相接吻したのを目撃した彼らは、これを「獣類の行為」と呼んで憤慨した。しかし学問が進むにつれて、欧米が先進国であることを認め、渡航留学したいとの情熱を抑えがなくなったという(前掲、外務省編『小村外交史』、一六一〜一七頁)。これが普通の学生の態度であったが、とりたてて彼らと異質な人生を歩んできたわけではない福島も、同じような心理を抱いていたのでは

(3) ④の松本市立博物館所蔵の福島書簡の所在については、阿部由美子「長野県にある近代中国史関係資料と史跡について——川島浪速、川島芳子、肅親王善耆、河原操子、福島安正——」近現代東北アジア地域史研究会編『News letter』第二三号、二〇一一年二月より知ることができた。

(4) 秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』第二版』(東京大学出版会、二〇一八年第二版第三刷)、一三五頁。

(5) 「福島将軍年譜」太田阿山編『福島将軍遺蹟』(東亜協会、一九四一年六月、大空社、一九九七年復刻)所収、三六七頁。

(6) 田中薫『シリーズ藩物語 松本藩』(現代書館、二〇〇七年)の第五章「松本藩の幕末・維新」。そのほかに、金井圓「松本藩」児玉幸多、北島正元監修『新編物語藩史』第四卷(新人物往来社、一九七六年)所収、信州大学教育学部歴史研究会編『信州史事典1——松本藩編——』(名著出版、一九八二年)も合わせて参照した。

(7) 「維新前松本藩士族屋敷割図」(松本市立博物館所蔵)は「国宝松本城」のウェブサイトで閲覧が可能である。https://www.matsumoto-castle.jp/collection/type01/635.html(二〇二二年六月二八日閲覧)。

(8) 説明板は一九九三(平成五)年三月、松本市城北地区景観整備委員会が立てたものである。

(9) 前掲、「福島将軍年譜」三六七頁。

(10) 福島安正「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」、国立国会図書館憲政資料室所蔵「福島安正関係文書」九二(以下、憲政資料室所蔵「福島関係文書」と略記する)。この史料については、拙稿「資料紹介 福島安正『慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴』」『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』第四四号、二〇二〇年一〇月において全文翻刻を行っている。

(11) 同右、ならびに前掲、「福島将軍年譜」三六七頁。前掲、島貴『福島安正と単騎シベリヤ横断』上巻、三四—三六頁も合わせて参照した。

(12) 上沼八郎『伊沢修二』(吉川弘文館、一九六二年)、二二—二四、三四—三六頁。ここで伊沢が選ばれたという大学南校の「貢進生」について述べておきたい。一八七〇(明治三)年、太政官は各藩の優秀な青年(一六

二〇歳)を大学南校に集めるため「貢進生制度」を導入した。これにもとづき一五万石以上の藩は三名、五万石以上は二名、五万石未満は一名の学生を選抜し、学資の便宜をはかって東京に送り出した。貢進生に選ばれた者としては一八五一年生の伊沢のほかに、五四年生まれの高平小五郎、古市公威、五五年生まれの小村寿太郎、杉浦重剛、穂積陳重、五六年生まれの鳩山和夫などがあり、『東京帝国大学五十年史』所載の「貢進舎生姓名簿」にも伊沢、高平、小村、杉浦の氏名はあるが、松本藩(六万石)は「田邊節」とあるだけで、福島(一八五二年生)の名はない(『東京帝国大学五十年史』上冊、東京帝国大学、一九三三年十一月、一四七—一六三頁)。福島は貢進生ではなかったと考えられ、のちに学資が続かず、大学南校を退学することになる一つの原因はその点にあったのではないかと推察される。

(13) 前掲、福島「慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。

(14) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』通史一(東京大学、一九八四年)、二〇、二八、九五—九六頁。なお開成学校、および同時期に接収復興された医学校(旧医学所)、昌平学校(旧昌平坂学問所)の三校が東京大学設立(一八七七・明治一〇年)の源流をなすことになる(同書、八一頁)。

(15) 同右、九六、九八頁。

(16) 同右、九九—一〇一、一二六—一二七頁。

(17) 福島が正則と変則のどちらを選んだかは明らかではない。福島より五年遅れて入学した牧野伸顕の場合、「その当時授業は凡て英語で行はれ、僅に日本歴史が日本語で教授されるだけだった」と回想している(牧野伸顕『回顧録』第一巻、文藝春秋新社、一九四八年、六三頁)。福島の場合もネイティブか否かは明らかではないが、少なくとも日本人の教員から英語による授業を受けていた可能性がある。

(18) 前掲、『東京大学百年史』通史一、一五五—一六一頁。生徒のレベルは九段階に分類され、一等から四等までが専門科、五等から八等までが普通科であり、春秋二回の定期試験によって等級が決まった。授業時間は午前

い文官として山県に見出された福島は、西南戦争が起こると征討総督本営付の書記として、はじめて戦場での情報を取り扱う任務についた。その上で文官から武官に転じて山県直属の伝令使となり、本格的な情報活動に専心していったのである。

おわりに

本稿では明治後期に陸軍の情報活動、インテリジェンスの中核を担った福島安正が、明治初年の青少年期、どのような足跡と思想形成過程をたどったかを検証した。結論として以下の五点を指摘することができる。

第一に、幕末の松本藩時代から新式の軍事教練などを通じて西洋化の波を受け始めていた福島は、明治維新直後、開成学校、大学南校で英学を学んだ。学資が続かず大学南校は退学したが、その後、私塾の北門社を経て、蘭疇社のズイッヒェル、林邸居住の漢学者・巖田正義、江藤新平邸のピン氏、耐恒学社のホワイト、個人教師の鈴木唯一、成功社といった形で学校と教師を転々としながら勉学、とくに英学に励んだ。

第二に、そうした過程で福島は西洋人と直に接し、彼らとコミュニケーションをとるという経験を積んだ。それとともに日本の西洋化、「文明開化」を歓迎し、その進展を願う彼は、たとえば陸軍文官時代、マッカーマント大尉を案内した際に見られたように、イギリスについては文明国としてポジティブなイメージを抱いていた。

第三に、司法省文官となった福島に大きな衝撃を与えたのは、一八七

四（明治七）年の台湾出兵であった。このとき清国との戦争を予想した彼は強い危機感を覚え、愛国心を燃やし、それが契機となって陸軍省文官、さらに武官へと転身していくことになる。

第四に、陸軍文官時代、フィラデルフィア万博に派遣され、さらに西南戦争に征討総督本営付書記として参加した福島は、戦場から送られる情報を取り扱う任務につき、これが彼の軍事情報活動の出発点となった。

第五に、以上の過程で福島の中で形成された根本的な価値観は、刻苦勉励して身を立て、家名を揚げ、さらに「皇威ヲ海外萬国ニ輝カサン」というものであった。自己の立身出世と日本の国権拡大、対外発展は彼においては矛盾せず、相補い合うものにほかならなかった。

以上の点に見られる若き日に培われた福島の特徴は、その後、陸軍で情報活動が続ける上でつねに彼の思想の根底にあり、その言動の基盤として作用することになるのである。

《注》

- (1) 拙稿「チベットをめぐる日本の諜報活動と秘密工作——一八九〇年代から一九一〇年代を中心に——」(1)、『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』第四〇号、第四一号、二〇一八年一月、二〇一九年三月、「一八八〇年代における日本陸軍の対清情報活動——福島安正を中心として——」『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』二三卷二号、二〇二〇年三月、「福島安正のユーラシア大陸旅行——一八八〇年代から九〇年代を中心として——」『拓殖大学 国際日本文化研究』第四号、二〇二一年三月。
- (2) 島貫重節『福島安正と単騎シベリヤ横断』上巻（原書房、一九七九年）。

ないが、前線から総督本営に送られた情報にもとづき、妻にその有様を以下のように伝えている。

近來官軍愈々勝利、既ニ去ル廿四日、四旅団ノ大兵ヲ以テ都ノ城ヲ襲撃、賊心ト死ヲ極メテ防戦スルト雖トモ竟ニ官兵ノ奮進ヲ支ル能ハス一時ニ敗走、市街ニ火ヲ放ツノ暇モナク頗ル狼狽シテ逃走セリ。未タ詳ラカナラズト雖トモ、降伏ノ人員千七百ニ及ビシト云フ。斯ノ如ク賊ノ人員ハ漸ク減少シ、又糧米ニ欠ケリ、彈藥ニ困リ、人望ヲ失ヒ、内論ヲ生シテ互ニ疑念ヲ抱キ、勢ヒ井中ノ蛙ノ如ク如何共セン方ナシ。之ニ反シテ官兵ハ次第二其人員ヲ増加シ、進ムヲ知テ退クヲ忘シ、毎戦全勝、勇氣以前ニ百倍シ、彈丸ヲ冒シテ先ヲ争ヒ、実ニ賞スベキ有様ナリ。最早平定目前ニ迫レリ。⁹⁰

妻にあてた文章なので、正確を期した報告書ではなく、やや情緒的なトーンが見受けられるが、ここで福島が「最早平定目前ニ迫レリ」と戦争の終結を予告している点に着目したい。城山の戦いで薩軍が敗れ、西南戦争が終了したのはそれから約二ヶ月後の九月二四日であった。福島は下級官吏とはいえ、征討総督本営において多くの機密に接していたため、戦争の帰趨を早くからつかむことのできる立場にあったといえる。

ただし戦争の終了を目前にして、福島は既述のように八月末、細島で脚気となって後送された⁹¹。そのころの福島は病人でありながら活字情報にも敏感で、戦争前には『読売新聞』を講読していたが、東京に引き揚

げる途中、有馬温泉で療養した際には、『團團珍聞』と『読売新聞』を妻から送ってもらっている⁹³。そして病気が快方に向かうと、「帰京之上ハ此度こそ一代ノ奮発ヲ顕シ、十分勉強、聊カ名誉ヲ後世ニ伝ヘント追思ヒ込ミ居候」との決意を語った⁹⁴。勉学に励み、自分の名を揚げたというのである。

西南戦争が完全に終息してから約七ヶ月後、福島は臨時士官登用試験に合格し⁹⁵、一八七八（明治一一）年五月七日、陸軍中尉（歩兵科）に任官するとともに、参謀局伝令使に任命された⁹⁶。こうして福島は陸軍卿から参謀本部長に転じていた山県有朋直属の伝令使二名のうちの一名となったのである。

陸軍将校となった福島は、ますます仕事に打ち込んだ。父親に対して、五年ぶりになるので帰省したいところだが、「一八七九（明治一二）年八〜二月の清国調査旅行より」帰朝後、ことのほか繁忙で、とても都合がつかないと書き送っている。その代りに彼は、父に自分の写真と山県に書いてもらった書画を送ることにした⁹⁷。またあるいは父親に、近頃〔山県〕参謀本部長の直命で「隣邦兵備略」という出物の取り調べに従事しており、少なくとも六〇日間は身体の自由を得ないので、到底約束の期限までに帰省はできない、また明日から東京鎮台諸兵大演習のため山県中将に随行して下総地方に向かうので、ことのほか繁忙であると洩らしている⁹⁸。

ここには山県に重用されながら、情報勤務に励む福島の様子が映し出されている。大学南校や私塾で世界地理の勉強に励み、陸軍で地誌に詳し

攻ヌキ、是ヨリ速ニ植木ヲ取ルニ都合ヨシ。多分明日ハ熊本城ト連絡ヲトル。委細罷リ通り御届ケ申ス。総督ヘ宜シク御届ケヲ頼ム。三月九日 川村参軍 小澤大佐

これは征討総督本営の参謀であつた小澤武雄陸軍大佐（福島とともにフィラデルフィア万博に派遣）より海軍の参軍・川村純義中將に託された有栖川宮征討総督への伝言である。このような本営中枢部の文書、情報に福島はアクセスすることができたわけである。また薩軍に包囲された熊本城では、薩軍兵力の減退にともない、部隊をたびたび城外に出撃させた。それについて福島は、まだ本営と彼自身、熊本に到達していなかった時点で以下のような情報を得て、やはり筆写している。⁸⁷⁾

〔四月〕八日 熊本城兵突出ノ一大隊ハ、奥〔保鞞〕少佐之ヲ卒ヒ、午前三時城門ニ整列、続テ城ヲ出テ、ヤブノウチ橋ヲ渡リ、通り町へ出ル。中間ヨリ右ニ曲リ、安政橋ノ川上ヲ徒歩渡リシ。此安政橋ノ両側ニハ賊兵アルヲ以テ、残ル哨兵ナシ。賊ニ当リ突出ノ一大隊ハ其虚ニ乗シ、中牟田村六ヶ村御船街道ヲ通貫シ、御取川ヲ徒歩渡リシ。隈ノ庄ニテ官軍ノ偵察兵ニ逢フ。是ヨリ木原山ニ添フテ宇土ニ着ス。賊士一名ヲ擒ニシ、我兵死傷三名ナリ。黒川ヨリ報知。

このようになりに詳しい戦況の状況を福島は知ることができた。さらに本営とともに熊本に入ってから、次のような記録を残している。⁸⁸⁾

四月十八日

龍田山〔立田山〕ニ登ル。山腹招霊社ノ石、悉ク賊ノ破壊スル所トナレリ。賊、之ヲ坪井川ノ妨水ニ用ヒシト云フ。又、墓ヲアバキ、見ルニ忍ビタルノ兇暴ヲ極メタリ。墓碑戦地ノ字ヲマ〔磨〕滅ス。軍用電信局ヲ開ク。

四月廿日

午前〔零時〕第三十分頃ヨリ頼リニ水善寺〔水前寺〕ノ方ニ砲声アリ。城内戒厳ス。一時后ニ至テ全ク止ム。此夜賊兵襲来ス。哨兵撃テ之ヲ退ク。

午前六時ヨリ諸口進撃、別働隊ハ御舟ヲ取り、其兵ハ水善寺ヨリ進テ、竹ノ宮八丁馬場等ニ入り、別働第五旅団ハホタクボ新南部下南部等ヲ陥レ、三浦ノ手、并ニ二旅団ハ格別ノ戦ヒナシ。

熊本城内の征討総督本営参謀部にあつて福島は、右のような戦況を知ることができた。また当初、撤退した薩軍の所在は明らかではなかったが、「探偵」がそれを突き止め、人吉を根拠地として日向、大隅、薩摩の間に兵を出していることがわかった。しかし政府軍側は兵の部署を定めて諸口で戦い、「官軍勝利多ク、死傷甚タ少ナシ」といった有利な情勢にあると福島は父親に書き送っている。⁸⁹⁾

七月、政府軍は薩軍を追って都城に進撃した。当時、海上ルートによって熊本から鹿児島に入っていた福島自身はその戦いを実見したわけでは

ごろ帰宅している。⁽⁷⁹⁾一三日にも夕方から九段の山県邸に向き、同じ訪問客の曾我祐準少将、原佳仙にも会った。⁽⁸⁰⁾このように世界の地誌、地理に通じた福島は山県陸軍卿に重宝がられ、たびたび呼び出されていた。その結果、六月二三日にフィラデルフィア万博派遣の命を受けるのである。⁽⁸¹⁾その翌年、西南戦争の勃発にあたって福島は山県の下で征討軍団書記となり、さらにのち文官から武官に転じて山県の伝令使に就任するが、その萌芽は早くから現れていた。

なお陸軍の文官として働く一方、福島は依然として勉学に励んでいた。たとえばある日、浅草の遠藤敬止なる人物の家で「文明論の会議」、つまり勉強会を開いたが、皆が漢学の知識に乏しいのを遺憾に思い、漢学に達した教師を一人選ぶことに決めた。月三円ないし六円を出し、その人物を各々の自宅に呼んで、一週間に二回（一五時～一七時半）、文章論および史記、左伝などを講じてもらうことにしたのである。⁽⁸²⁾また別の日には福島自身の家で文明論の勉強会を開いている。⁽⁸³⁾福島とその有志は、当時よく読まれていたギゾーの『ヨーロッパ文明史』（François Pierre Guillaume Guizot, *The History of Civilization in Europe*）のような文献の講読会を行っていたものと考えられる。大学南校を退学し、私塾を渡り歩くなど苦勞を重ねた福島は、司法省に加えて陸軍省就職後もあくなき向学心を発揮していた。

陸軍文官時代の福島にとって最大の事件としては、フィラデルフィア万博見学以外では、一八七七（明治一〇）年一月から九月までの八ヶ月にわたった西南戦争をあげなければならない。同年二月一五日、西郷隆

盛を頂く薩軍が熊本に向かつて進軍を開始すると、政府は征討軍（征討総督・有栖川宮熾仁親王、参軍・山県有朋陸軍中将、川村純義海軍中将）を編成した。同月二〇日、福島は参謀局で大阪行きを命を受け、横浜から一、〇〇〇人を超える警察官（巡查、警視、警部）を收容した汽船に同船して出港し、二三日、大阪から汽車で神戸の三宮に到着後、神戸から山県陸軍卿らと同じ船で九州に向かった。福島が征討軍団書記を拝命したのはこの日のことであった。以後、馬関を経て博多に上陸し（二五日）、征討総督本営にしたがって四月一七日に熊本、七月二五日に鹿児島に入った。さらに八月六日都城、一八日宮崎、二二日高鍋、二二日新町、二四日細島（現・宮崎県日向市東部、細島半島にある地名であり、「島」ではない）へと進んだが、細島で脚気となったため後送された。⁽⁸⁴⁾熊本に入るまでの間、福島は多忙をきわめた。大阪で征討軍団書記を命じられてから、絶えず征討総督本営付で山県参軍のもとにあった彼は、「日夜甚夕繁激ニシテ、殊ニ熊本城連絡ノ以前ノ如キハ一寸ノ安眠モ出来ス。頗ル心痛致シ居候」といった状況にあった。⁽⁸⁵⁾書記である福島は文官であって、実戦に参加したわけではない。しかし職務上、前線から様々な戦闘詳報が入り、それを処理しなければならなかった。そのうちの目ぼしい情報を、彼は日記に書き留めている。田原坂の激戦が行われていた三月、福島はまだ福岡に駐留していたが、以下のような文書に接し、それを筆写した。⁽⁸⁶⁾

昨今戦猛シク、竟二今日午後六時頃、田原坂ヨリ少シ背後ノ砲壘ヲ

の要請であった。案内の手順は出頭の上で説明するとあった。翌八日、午前六時半に自宅近くの牛込橋から人力車に乗って七時に参謀局に着き、さらに八時に官房に到着した。そこから軍馬局より手配された馬車に乗って半蔵門外の英国公使館に向き、ハリー・パークス公使 (Sir Harry Smith Parkes) と面会した。そこで「マカルトマン 英国騎兵大尉 (Captain Huyh Mo Catmont)」を紹介され、同大尉を馬車に案内して見学を開始した⁽¹⁴⁾。このマカルトマンという姓は福島の誤記で、マッカーマント (Captain Huyh McCalmont) が正しいのではないかと考えられる⁽¹⁵⁾。

マッカーマント大尉は一八七三年の第三次イギリス・アシャンティ戦争に出征した経歴があり、今回は世界の兵備を観察するため、アジア、清国から日本に来たところで、二、三日を出ないで横浜を出港してサンフランシスコに向かい、アメリカを回った上でイギリスに帰る予定だということであった⁽¹⁶⁾。ちなみに、のちにイギリス陸軍少将となり、政治家としても活動した同姓同名のマッカーマント (Sir Huyh McCalmont, 一八四五—一九二四年) という人物がおり、これが福島の会ったマッカーマント大尉と同一人物である可能性がある⁽¹⁷⁾ので、その点については今後の調査課題としたい。

福島とマッカーマント大尉の二人はまず竹橋の近衛砲兵営に赴き、寝室、食堂、厠、病室、獄舎にいたるまで残らず視察した。しばらく士官室で休憩したのち、馬車で馬場先外の東京鎮台騎兵営に移り、同様に綿密に見て回った。それが終わると、突然、兵営内で非常呼集の命令が下っ

た。各兵が銃をもって厩に走り、数分を出ないうちに馬上に銃を負い、剣を握った攻撃態勢をつくった。「其迅速ナル実ニ驚クベク、英ノ士官モ又大ニ感激セリ」。整列が終わると、福島はマッカーマント大尉を英国公使館に送り届けた。別れ際に大尉は自分の姓名と住所を告げて名刺を渡したが、その名刺には第七輕騎兵 (連隊所屬)、住所はアイルランド、ダブリンのキルデア通り (Kildare Street) とあった。そして、もしイギリスに来ることがあれば、必ず問い合わせるようにと告げ、礼を述べた。これに対して福島は「実ニ文明国民間、交際ノ厚キ、之ヲ以テ証スルニ足ル」と感銘を受けている⁽¹⁸⁾。福島にとってもマッカーマント大尉にとっても、印象の良い出会いであったといえる。福島のイギリス観は決して悪いものではなかった。それどころか「文明国」としてのイギリスに好意的なイメージをもっていたことがうかがえる。

こうした日常の翻訳、通訳の業務に加えてさらに着目したいのは、山県有朋陸軍卿との直接的な関係が強いことである。たとえば一八七六 (明治九) 年六月一日、福島は本所錦糸町二番地の高野貞潔 (妻の父) 方より牛込揚場町一七番地の華族中山邸内に転居した。引越の手続きを終えた日没後、陸軍省の使いが平賀大尉の書簡を持参し、その内容は山県陸軍卿が福島を自邸に招きたいというものであった。そこで直ちに同邸に向かうと、山県は用事がなくて暇なので「地誌を尋問」したいという⁽¹⁹⁾ことであり、居合わせた内閣顧問の木戸孝允、工部省七等出仕の末松謙澄 (翌年、山県の秘書官となり西南戦争に従軍) とも面会している⁽²⁰⁾。

六月五日、やはり福島は午後三時に山県邸を訪れ、地理を講じ、五時

一等軍医正兼馬医監 石黒忠恵（新潟県平民）

砲兵少佐 黒田久孝（静岡県士族）

陸軍省十等出仕 福島安正（長野県士族）

福島は七月一日に日本を出発し、一〇月三〇日に帰国するまで三ヶ月余りの旅路について⁽⁸⁸⁾。まずサンフランシスコに上陸した後、鉄道で大陸を横断し、ニューヨーク、フィラデルフィア、ワシントンなどを訪問した。福島はもっとも若く二三歳であり、英語の通訳官をつとめ、アメリカ側との交渉にあたった。のちに陸軍軍医総監になる石黒忠恵（三三歳）と親しくなり、兄事して終生の交友関係を結んだのはこのときからであった⁽⁸⁹⁾。

この初の海外旅行を通じて、またフィラデルフィア万博を見学して、福島がどのような感想、アメリカ・西洋観を抱いたのかは明らかではない。しかしながら当時の万博主催者たちは、地球のできるだけ遠いところまで広く視野を及ぼし、世界を一望のもとに収め、整理し、理解したい、すなわち世界を把握したいという欲求に突き動かされており、万博はその「世界」の景色を映し出すものであって、いわば「世界を把握する方法」であった⁽⁹⁰⁾。福島はフィラデルフィア万博を見学することによって、この「世界」に接し、それを把握する大きな視座を得たのではないかと考えられる。

またフィラデルフィア万博については数々の細密画が残されているが、福島が見たであろう広大な敷地と多数の建物群、中でも長大な本館や機

械館の規模は今日の目から見ても驚くべきもので、前記の巨大蒸気機関、溶鉱炉用大送風機に加え、ポンプの組み合わせによる華麗な噴水、会場内を走る蒸気機関車、新技術の展示物（電信機やタイプライター、ミシンなど）、見物に訪れた群衆の雑踏などと合わせて、明治初年の東京からやって来た福島にとっては夢のような世界であったと推察される。少なくとも、西洋の科学文明の進歩を目の当たりにして衝撃を受けたことは間違いないのではないだろうか。初めて海外に出た福島青年の心に残る大きな印象が刻印されたことは確かであろう⁽⁹¹⁾。

話を日本国内に戻し、陸軍省参謀局に勤務する文官として、福島は通常、具体的にはどのような仕事をしていたのであるか。一八七六（明治九）年の例を見ておくと、基本的には英語文書の翻訳である。たとえば六月五日、福島は午前五時より英国海軍敬礼式の大略六枚を訳したのち、参謀局に向いて原田大佐に渡し、課長の木村少佐より地学辞書〔地学辞書〕一冊を借りて一二時四〇分前に帰宅している。また六月一七日、午前八時に福島は出頭し、オセアニア州、アフリカ州所屬の島嶼全部について記された翻訳二〇枚を提出している。いずれも平日であったが、彼の場合、今日のような九時出勤・一七時退勤といったワークタイムに縛られていたわけではなく、自宅で翻訳作業を進めていたようである⁽⁹²⁾。

加えて通訳をつとめることもあった。六月七日の午前中、参謀局より自宅に書簡が届き、中を開けてみると、英国陸軍士官が近衛兵営と鎮台騎兵営所を見学するので、明日八日午前八時に官房に出頭するようにと

の将来を暗示するもの、エンジンつき農業機械、手押しや動力による多数のポンプのようにアメリカの現実を表現するものが展示され、毎分一、〇〇〇発を発射するガトリング砲も注目されたものの一つであった。会期中の入場者は約九八〇万人で、当時としては成功を収めた万博となつた。⁶²

この万博については日本にも参加の勧誘がなされ、日本政府はアメリカとの国交を考慮、重視し、開催から約一年半前の一八七四（明治七）年一〇月末に参加を正式決定した。翌一八七五年一月に太政官の正院内に米國博覧会事務局が設置され、三月には同事務局が内務省の勸業寮に移管された。ここで博覧会は内務省の民業奨励政策、殖産興業政策の一環に組み込まれることになり、内務卿の大久保利通が米國博覧会事務局の総裁、西郷従道陸軍中将が副総裁、田中芳男、山高信離、関澤明清、塩田真らが事務官に任命され、事務局の体制が整えられた。出品の目的は賞牌（賞として与えられる記章、メダル）を得て海外に美名を輝かし、将来の輸出を増進することであり、日本全国から物品が募集、蒐集される。その結果、日本の出品物は陶磁器や漆器などの美術・工芸品が中心となったが、それらは会場で注目を集め、非常に好評であり、国際社会の縮図ともいえる万博で日本を強く印象づけることになった。⁶³

なおここで、陸軍の西郷中将がなぜ米國博覧会事務局の副総裁に選ばれたのかという疑問が生じるが、研究者によると、西郷はその直前まで台湾蕃地事務都督として台湾出兵を指揮しており、その西郷をアメリカに渡航させることにより、万博という場において国威発揚を行うための

パフォーマンス的要素を付与したのではないかという。⁶⁴

フィラデルフィア万博にあたっては、副総裁の西郷、および事務官一九名（大半が勸業寮出仕）、事務官随員九名、御用掛四名、その他一六名（審査官、大工等の職人など）の合計四九名が派出された。このうち例えばウィーン万国博覧会（一八七三年）に参加経験がある筆頭事務官の田中芳男は、ほかの事務官や出品人とともに、一八七六年五月一〇日の万博開会に先立ち三月一〇日に横浜を出港し、二六日にサンフランシスコに到着、そこからシカゴ経由で四月四日にフィラデルフィアに入り、万博開催中の七月に帰国便に乗船の上、八月には帰国している。⁶⁵ また派出された者の中には、陸軍将校として事務官に日高次郎中尉（諸接待、翻訳監督）、御用掛に徳川昭武少尉（翻訳、一八六七年のパリ万博に將軍名代として派遣された経験あり）もいた。⁶⁶ しかしそれらとは別に、万博が開会してから一ヶ月余り後の六月末、副総裁の西郷従道をリーダーとする陸軍だけのメンバーによる派遣団が編成され、福島もそれに加わり、フィラデルフィアに派遣されることになった。そのメンバーは以下の八名である。⁶⁷

副総裁	陸軍中将	西郷従道
随員	歩兵大佐	福原 実（山口県士族）
	同上	小澤武雄（小倉県士族）
	同上	野津道貫（鹿児島県士族）
	会計一等副監督	川崎祐名（鹿児島県士族）

福島は陸軍省に採用されると同時に参謀局第一課分課に配属された⁽³⁸⁾。当時陸軍では山県有朋中将が陸軍卿と参謀局長を兼任していた。参謀局長は参謀局長(将官一)、伝令使(佐尉官二)、第一(総務)課、第二(亜細亜兵制)課、第三(欧亜兵制)課、第四(兵史)課、第五(地図政誌)課、第六(測量)課、第七(文庫)課から構成されていた。参謀局長の職掌は「陸軍卿ニ属シ、日本総陸軍ノ定制節度ヲ審カニシ、兵謀兵略ヲ明カニシ、以テ機務密謀ヲ参画スルヲ掌ル。平時ニ在リ地理ヲ詳カニシ、政誌ヲ審カニシ、戦時ニ至リ凶ヲ按ジ、部署ヲ定メ、路程ヲ限リ、戦略ヲ区画スルハ参謀局長ノ専任タリ」と定められていた。また参謀局総務課内に別に諜報提理(佐官一人)が置かれ、「戦時諜報ノ事ヲ総理」させ、在外公使館付武官を管掌した⁽³⁹⁾。

参謀局時代の福島は以下の任務を命じられている⁽⁴⁰⁾。

- 一八七四(明治 七)年二月二五日 参謀局御用で横浜へ差遣
- 一八七五(明治 八)年 二月一九日 陸軍省御用で大阪へ差遣
- 四月二五日 第一課分課から第五(地図政誌)課分課に移動
- 一八七六(明治 九)年 一月 九日 参謀局御用で横浜港へ差遣
- 一月二四日 参謀局御用で下関へ差遣
- 五月二二日 参謀局の関迪教中佐御用で横浜へ随行
- 六月二三日 正院よりフィラデルフィア万

- 国博覧会へ差遣候事(七月一日出発、一〇月三〇日帰朝)
- 一八七七(明治一〇)年 一月二三日 参謀局付を申し付けられる
- 一月二五日 参謀局第五(地図政誌)課分課を申し付けられる
- 二月二〇日 参謀局御用で大阪へ差遣
- 二月二三日 征討総督本営より征討軍団書記を申し付けられる

これを見ると福島は、横浜に三回、大阪に二回(そのうちあとの一回は西南戦争出征)、下関に一回、出張を行っている。しかしここでとくに注目されるのは、一八七六(明治九)年にアメリカのフィラデルフィア万国博覧会へ派遣されていることである。

フィラデルフィア万国博覧会は一八七六年五月一〇日から十一月一〇日までの半年間、アメリカ独立二〇〇周年の祝典として開催された。フィラデルフィアが選ばれたのは、いうまでもなく独立宣言発表の地であったためである。会場となったフェアモント公園には幅一四二メートル、長さ五七二メートルという壮大な本館が建てられ、そこでは鋳工業と教育関係の陳列が行われた。そのほかに機械館、農業館、園芸館など数多くの建物が設けられ、機械館ではコーリス(George Henry Corliss)の巨大な蒸気機関や、溶鉱炉に風を吹き込む大送風機が人目を引いた。またこの万博では、裁縫ミシン、タイプライターのように現代人の家庭

……今や国家ノ一大事、皇国支那ト兵ヲ交ヘ運ヲ天ニ問ハントスレト、支那ハ謂ユル地球之大国、兵衰武弱ト口ニハ云ヘト人口五億之上ニ出テ、皇国ハ僅カノ一孤島、実ニ国家ノ存亡ナリ。然リト雖モ義アリ信アリ恥ヲ雪クハ民間ノ大義、万一兵ヲ開クニ至ラハ、士農ヲ問ハス兵ニ入り家ヲ忘レテ族ヲステ、身ヲ支那国ノ土トナシ血ヲ黄河ニソ、グト思ヲ残ス念ハナシ。之ヲ思ヘハ、有カタキ微々タル官ニ加ハレト、兵ヲ免カレ身ヲ修メ多年ニ望ム学問ノ道ヲ進ムハ一大幸福、心ニ問フテ心ニ答ヘ万苦ヲ犯ス今日之形勢……

これによると、清国は兵が衰え、武は弱いといわれるが、人口五億人以上を擁する世界の大国であり、他方日本は一孤島にすぎず、今回の事件は国家の一大事であり、国の存亡がかかっているという。さらにもし日清開戦となれば、日本人は身を捨てて、異郷の地に朽ち果てても悔いはない、それを思うと、自分は微々たる官吏となり、兵役を免れ、学問の道を進んでいられるのは幸せだが、いろいろと自問自答して多くの苦しみを感じているというのである。このように福島は、台湾出兵をめぐる日清の本格的な戦争を想定し、それに強い危機感を抱くとともに、自分は国内で安閑としてよいのかという思いに駆られていた。

結局、日本の台湾出兵に対して清朝政府は妥協的態度をとり、日清間に戦端は開かれなかった。しかしこのときの思い、戦争の予感福島にとつて精神的に大きな転機をもたらした。後年、彼は次のように振り返っている。「抑モ安正ガ不肖ヲ顧ミス東洋ノ形勢ニ注目シテ、以テ聊カ国

家ニ報ヒント欲セシ端緒ハ、実ニ明治七年台湾征討ノ役ニ於テ之ヲ開ケリ」⁽⁵⁶⁾。つまり福島は台湾出兵をきっかけに東アジアの情勢に視線を向け、報国の精神を催したというのである。清国の存在を意識することによって、逆に自国を意識し、愛国心を燃やしたということである。

以上のように司法省時代の福島は、単に同省で翻訳を行ったり、私塾で英学を学び、地理や歴史の知識を増やすだけでなく、台湾出兵を契機として現実の東アジアの国際情勢に切実な関心を持ち、国家の前途を憂え、自分のあり方を考えるようになった。単なる学問だけに飽き足らなくなった彼がやがて軍人の道を進むようになるのは、自然の流れであったといつてよいのかもしれない。

三 陸軍文官時代

一八七四（明治七）年九月一日、福島は十二等出仕として陸軍省に採用された⁽⁵⁷⁾。これは武官ではなく文官としての任用であった。当時、陸軍では台湾出兵の準備等の関係で英語力のある者を急に採用する必要を生じ、これに福島も応募したという。面接の際、陸軍省の試験官が「陸軍省職員を志願するからには、少し位は軍事について勉強したことがあるはずだと思うので、何でもよいから軍事について得意とするところを述べてみよ」と問いかけた。それに対して福島はアメリカの独立戦争史について述べたので、試験官たちは自分たちでさえ知らない軍事知識をもっているというので即座に採用を決定したという⁽⁵⁷⁾。

として日夜勉強するのが舎長の権であると述べている。⁽⁵⁰⁾

ただし皇国の国威を世界に輝かせるといっても、福島はウルトラナショナルリストであったというわけではなく、西洋から謙虚に学ぶことが重要であると考えていた。それと関連して、彼は次のように述べている。今や皇国は万国と交際するに及んで、その国の学を学び、その国の律を知らなければならぬ。その際、洋人に学ぶことが必要であるが、洋人を雇う金がないため「青年が」志をまっとうできないという実に悲しむべきことがある。たとえ富人がいても、彼らは金の番人に等しく、私欲をほしいままにし、甚しきに至っては「鳥獣のごとき外国人をわが皇国に入れる以上の害があるだろうか」などと政府を嘲るばかりであり、開化の一助をなそうとする者は実にまれである。患うべく、悪むべきことであると福島はいう。⁽⁵¹⁾ 西洋人から学び、日本を文明開化に導くことによつて、日本の威光を対外的に示すというのが彼の基本方針であった。

これまで見てきたように、福島は「日ニ公務ヲ励ミ、月ニ学課ヲ収メ」ていた。⁽⁵²⁾ 日々、司法省の仕事をこなすかたわら、毎月私塾で授業を受けていた（あるいは教えていた）のである。そうした中で得た英学の新知識はすぐに役立つものでもあった。父・安広が病気で悩んでいることを聞いた福島は、以下のような治療法を洋書から翻訳して知らせている。

ご逆上の際〔頭部ないし顔面が熱く充血した際〕、最良の治療法は、まず冷水を土瓶のようなものに入れ、高さ三尺から五尺（九一cm～一五二cm）ほどの所で三人がこれを持ち、瓶口からご頭上へ冷水を落と

して脳中を冷ませば、患いは決してありません。私も酷熱の際、精神を極め、憤励読書するとき、そうした事情が数度あり、甚だしい場合は暫時目が暗み、物色を混じて頭痛激烈、すこぶる困却していましたが、この治療法を人身究理の書中で学んで雀躍し、朝夕これを施して以後、この患いを免れていますので、以上の大略をご忠告申し上げます。食品は野菜を第一とし、とくに暑中、魚肉は避けるべきです。ただし野菜のうち最良の人生を養うものは菜をもって魁とします。魚肉中、養生の主なもの、ニシン、ウナギ、ドジョウの類です。以上、洋書より訳出しました。⁽⁵³⁾

このように福島は父親に伝えたが、彼自身、真夏の暑さをはねのけるため、頭に冷水を落として勉強しているというところが興味深い。

そうした中で、当時の福島に何よりも大きな衝撃を与えたのは、一八七四（明治七）年五月から一二月にかけて行われた台湾出兵であった。

この事件はそれより約二年半前、台湾に漂着した宮古島の島民が台湾先住民によって殺害された事件（一八七一年二月、琉球漂流民殺害事件）に端を発するが、日本は台湾に三、〇〇〇名の派兵を行い、現地を制圧した。この事件をめぐる日本と清国の戦争が起こるかもしれないと予感した福島は、次のような一節を書き残している。管見の及ぶ限りでは、それは今日確認することのできる彼の政治的な意見として、もっとも古いものである。⁽⁵⁴⁾

つては絶たれたが、彼の志は変わらず、自ら「開明ノ域」に進み、「国恩ニ報テ以テ累代ノ家名ヲ起シ、末世ノ榮ヲ成立セシメン」という決意であった。⁽⁴⁵⁾ 立身出世して家名を揚げるという強い希望は、環境がどうであつても揺らぐことがなかった。

佐賀の乱勃発から江藤刑死までの間（一八七四年二～四月）、福島は病気の祖母を看護するため松本の実家に帰っていたようであるが、その回復を見て東京に戻った。⁽⁴⁶⁾ 帰京後、彼は司法省の業務を行いつつながら、私塾の成功社に入校する。しかし校主が大病を患い入院したため、塾則が乱れ、塾生間の「暴行至ラサル所ナク」、瓦解の状況になつたため退学した。

そのころ（一八七四年春）、彼の生活に再び転機が訪れた。二一歳で「高野氏ノ長女」と結婚したのである。この結婚にあたって福島は、できるだけ外部の煩わしさを静かな土地に住んで、妻と協力しながら奮励し、学業に従事し、家族の困窮を救って子孫の繁栄を実現したいと考えていた。司法省の翻訳業務だけでは生活が苦しいので、もっと勉強して、高い地位につきたいというわけである。彼にとって学問は、それ自体楽しいものでもあったのだろうが、何よりもまずキャリアアップのための手段であった。そしていろいろと新婚の住まいを探した結果、福田氏なる人物の邸の長屋（牛込下宮比町九番地）に転居した。牛込の下宮比町は現在も新宿区にあり、JR飯田橋駅のほど近くで江戸城外堀が目の前にあり、明治当時は閑静な住宅地であつたと考えられる。以上の経緯を福島は松本の父親に手紙で伝えており、父を呼び寄せた結婚式は

できなかつたようである。⁽⁴⁷⁾

福島の妻となつた「高野氏ノ長女」とは、旧幕臣・高野貞潔（三〇〇石）の娘・貞子であつた。⁽⁴⁸⁾ 私塾で教師と生徒それぞれの経歴を踏んできた福島は、新婚早々、貞子に勉学の指導を行っている。彼は松本の父親にその状況を次のように書いている。貞子は「昼夜憤励」、その進歩は「意外迅速」であり、すでに国学では皇国単語を暗誦し、日本地理学、万国地理学、修身大意、勸善懲惡の道を論じる書、西洋事情を卒業し、近日、日本外史を始める手続に運んでいます。近頃洋書も始め、私としても「共ニ学事ヲ勉強シ、後榮ノ期モ目前ニ顕ハレ候様ノ心地ニテ、聊カ万苦ノ一喜ト致シ居候」。このように福島は貞子の勉学を導き、彼女もよくそれに応えたため、深い喜びを感じていた。貧しい中で自分と妻が勉学に励むことが、やがて一家の繁栄につながると信じていたのである。そこで彼は、父親に次のように依頼している。松本でも弟や妹を励まし、「万苦ニ堪ヘテ一箇ノ英名ヲ取」るよう訓責してほしいというのである。⁽⁴⁹⁾

このように若き日の福島は、刻苦勉勵、奮闘努力して身を立て、家名を揚げるという価値観を一心に追求する人生を歩んでいた。新しい明治の時代を迎えた向学心旺盛な青年の典型であつたといえよう。さらに福島は自分や家だけでなく、日本の名声も高めなければいけないと考えていた。このころ、彼は私塾の舎長もつとめていたようで、ただ己れの業を鼻にかけていたずらに金を貪るのが舎長の権利ではない、自分に余るものは乏しい人に与え、ともに尽力して「皇威ヲ海外萬國ニ輝カサン」

の福島は明け方まで猛勉強したようである。しかし約三ヶ月後の七月、ピン氏は仔細があつてイギリスに帰国した。⁽⁴⁰⁾

そこで江藤と相談した結果、八月より福島は耐恒学社に入塾した。校師〔校長であろうか〕はホワイトというイギリス人であつた。このホワイトから学ぶことによつて「少シク進歩ヲ覚」えたという。このように向学心旺盛の福島は、司法省で翻訳の仕事にあたるかたわら、依然として私塾に通いつつたのである。ところが休日は課業がないので満足できず、仙台出身の竹中新平なる旧友を訪ね、そのついで元大学南校の中博士で当時は正院翻譯局の五等出仕であつた鈴木唯一と面会し、「羅テン学」の教授を依頼した。そのころラテン語を教えることができるのは、鈴木と司馬凌海だけであつたといふ。⁽⁴¹⁾

以上のように大学南校退学後の福島は、私塾の北門社を経て、蘭疇社のズイッヒェル、林邸居住の漢学者・巖田正義、司法省就職後には江藤新平邸のピン氏、耐恒学社のホワイト、個人教師の鈴木唯一といった具合に学校、教師を転々とした。しかしそこに一貫して見られるのは、学を成し遂げたいという強い執念であつた。

こうして福島は学問を追求し続けたが、彼の環境、とくに経済状況は容易に好転しなかつた。目白台の林邸に移つてから「愈々窮困身二迫」つたが、「孝（学）若シ成ラズンハ死スルモ帰ラス」の言葉を守り、軽衣や要器を売つて漢書、外史を買い、手放さなかつたのは「机硯筆墨ノ類」だけであつたといふ。司法省採用が決まつたときも、役所に来ていく服がなく、「非常ノ策ヲ廻ラシ、嚴證ヲ納シテ」ようやく三五円を調達し、

衣服をあつらえるとともに、恩義のあつた数名の人々にお礼をした。しかし、しばらくあとで二〇余円を前借したため、合計五五円の借金を負うことになつた。これは司法省入省の翌月の五月中に返さないといけなかつたため、八月に至るまでは一ヶ月九円の収入しかなかつた。それなのに消費は、学費、書籍代（和書、漢籍、洋書）、新聞代からペン、インク、石筆・石版、あるいは和洋の衣類、食事、入浴、洗濯、郵便、重炭、油にいたるまで枚挙に暇がなく、生活レベルが異なるため同僚との交際費も負担となつた。⁽⁴²⁾

そうした一方で、福島は酷暑の中、重病を患い、「幸ヒ一生ヲ得ル」ような経験をしたといふ。一八七三（明治六）年夏、東京では脚気の患者が続出し、福島の学友・知己もそれで亡くなる者が九人出た。福島も罹患し、八月半ばから「両脚肥満、動氣激烈、歩行意ノ如クナラス」、食欲を失い、周囲に棺桶が運び出されるのを見て、「死、日ヲ俟ノミ」と沈鬱な気持ちに陥つた。友人から牛込逢坂に脚氣治療で効果をあげている老医がいると聞いた彼は、人力車で出向き、水散丸をもらつて養生したところ、一〇日後に効き目が現れ、九月下旬には回復することができた。ただし薬代のため約八円を費やしたのは、借金にあえぐ中で痛手であつただろう。⁽⁴³⁾

元氣になつた福島は奮起して「公務ヲ励ミ、学課ヲ勉メ」たが、一〇月に耐恒学社が閉校する。学校のオーナーが赤字を償うため、学舎を九段坂上の富士見丁に移転したことが問題となり、オーナーと生徒の立場が両立できなくなつたためである。⁽⁴⁴⁾このようにまたしても福島の学びの

忙のため、たまに教えることがあっても十分な効果をあげることができず、福島を慨嘆させることになった。⁽³³⁾

その一方で福島は一八七三（明治六）年一月、芝山内（増上寺源興院）にあったイギリス人ジョン・R・ブラック（John Reddie Black）創刊の邦字新聞『日新真事誌』社につとめたほか、愛宕下の勧学塾で教師をつとめた。⁽³⁴⁾ そうしたとき蘭疇社時代の教え子の父親で大蔵省出納寮につとめる林某なる人物が、福島にコンタクトをとってきた。福島は勉学が杜絶したことを伝え聞き、将来どうするつもりか使いを出して問い合わせてきたのである。そこで福島が目白台の林邸に向いて事情を説明すると、林は虚しく時間を費やして「開明ノ巨魁」（文明開化の先駆者的地位）を他人に奪われてはいけないと論じ、自邸に居住する富山出身の士族・巖田正義という人物を紹介した。巖田は「皇漢ノ学」に通じているので、しばらく彼の下で漢籍を学び、時を待つのがよいというのである。そこで福島は師匠のズイッヒェルに相談したところ、ズイッヒェルは賛同し、「たとえ君が百般の洋書に目をさらし、千秋氷雪を冒しても、漢学の力がなければ坐石の有志に警戒するのみである。洋書を訳し、あまねく日本内外の人民に示し、避邑遠里の愚夫を開化の域に扇動する実はない」と「懇々説論」した。感激した福島は直ちに目白台に行き、林の下に住み込んだ。林は食費を援助し、鋭気を取り戻した福島は、巖田正義からまず十八史略、日本外史、あるいは必要な経書を学び始めた。そしてちょうどそのころに司法省就職の話が舞い込んだのである。⁽³⁵⁾

これは急にもたらされた話で、一八七三（明治六）年四月二日、松本

に一時帰京していた福島が東京に戻ると、筑摩県東京出張所から突然公文書が届き、司法省において用務があるため一〇時に出頭するようにと連絡し、事情がわからないまま司法省に向くと、その翌日より働くことになってしまったというものであった。⁽³⁶⁾ 翌四月三日、二〇歳の彼は一三等出仕として司法省の明法寮（法律の実務家を養成する学校）の翻訳課に採用された。⁽³⁷⁾

以後、福島は目白台の林邸から司法省まで約八kmの道を通ったが、通勤に時間がかかり、学課が妨げられるのが嘆きの種であった。林も同情してくれたが、ここで救いの手を差し伸べたのが初代司法卿の江藤新平である。江藤も林の場合と同様に、かつて四ツ谷の蘭疇社に三人の子供を学ばせており、その子らを助けていた福島がどのような人物かを知っているという経緯があった。江藤は福島に次のように提案した。「わが家でピンという名のイギリス人を雇い、子弟を教育させている。君が私のところに住み、ピン氏から学べば大いに幸福を招くであろうし、通勤の里程も減って少なからぬ便宜を得るだろう」。これを聞いた福島は感激し、もし自分が利に走り、私欲をほしのままにしていたら、今日の困窮にあつてだが助けてくれるだろうか、「後栄ヲ期セント欲セバ、他人ノ栄ヲ祈ルニ如カス。皆天道ハ一ナリ」と感じ入った。⁽³⁸⁾

江藤の申し出を林、ズイッヒェルに語ったところ、両者は「雀躍欣喜」して江藤の提案を受け入れるように勧めた。そこで福島は喜んで麹町の江藤邸に移り、朝から日暮れまでの公務以外に、ピン氏に「窮理修身ノ学」を質し、天文・地理・経済・地質・歴史の各課を学んだ。このころ

いたところ、幸い四ツ谷南寺町というところに宗福寺という大きな寺があり、そこに六月一日移転しました。そうすると先見にたがわず生徒が日に増加し、今日では英独仏学の徒が合わせて六〇余名となり、さらに日に日に新しい生徒が加わる勢いです。⁽²⁸⁾

教師の恩が深いのに感じ入って学校を盛んにしようとしたと福島は記している。この教師とはズィツヒエルであろう。ズィツヒエルと一緒に蘭疇社を盛り上げるため適当な移転先を探し、結局、四ツ谷の宗福寺に新たな教室を開いたというのである。⁽²⁹⁾ ちなみにズィツヒエルは同じ一八七二年の二月、銀座の大火に遭い、築地にあった住居、財産を失っていた。そうした事情を知る福島は蘭疇社を助け、「聊力師恩ニ報ントス」⁽³⁰⁾との気持であったという。彼はズィツヒエルを助けて、塾務も担った。具体的には生徒の教育指導、授業にあたっていたと考えられる。福島が貧窮の極にあったにもかかわらず、他の私塾からの招聘を退け、師恩に報いたため、ズィツヒエルは「流涕感激」したという。⁽³¹⁾ 大学南校で新知識を得ていた彼は、自分とそれほど年齢の変わらない後進の指導を行っていたのであろう。この時期は西洋の知識をいち早く取り入れた者とそうでない者のギャップが大きかったため、わずかな先行者であっても教師の役割を務めることができたし、またそうした者が未熟ではあっても教壇に立つことが求められた。例えばこれは少々極端な例ではあるが、大学南校の教授試補であった矢田部良吉は生徒の福島より一歳年長であるにすぎなかった。

以上、修学期の福島の動向を見てきたが、ここでおさえておきたいのは次の三点である。第一に彼は、官立の開成学校、大学南校、私塾の北門社、蘭疇社で学んだ。とくに北門社、蘭疇社ではドイツ人のズィツヒエルに親しく接触し、教えを受けるだけでなく、一緒に塾の運営にあたった。このように早い時期から西洋人と直に付き合ったことが、やがて彼が陸軍の情報将校として海外に乗り出し、英独仏露語および中国語を駆使して臆せずコミュニケーションを取るようになる基礎を築いたのではないかと考えられる。第二に福島は、彼の世代の多くがそうであったように西洋化、文明開化の申し子であった。幕末にすでに西洋式の軍事教練を体験し、一六歳から開成学校、大学南校で英学を学んだ。学校で英語、地理や歴史を学ぶ中で、彼の目は西洋世界に大きく開かれたと考えられ、蘭疇社時代には同校を盛り上げ、「皇国開化」の一助をなしたいとまで考えるようになっていた。そこには日本の西洋化を正しいものと信じて疑わない当時の青年の素朴な心情がうかがえる。西洋に対して屈折した心理が少なく、それを大らかに受け止めるというこのとき身に付いた姿勢は、やがて彼がアメリカやヨーロッパへ赴任した際にも発揮されることになるのである。⁽³²⁾

二 司法省時代

その後、ズィツヒエルは日本政府に登用され、住まいを陸軍の軍医寮〔軍医部に相当〕に移し、先述のように福島をそこに伴ったが、公務多

の者もその規則に従わなければならなかった。

福島は一八七二（明治四）年三月まで大学南校に在籍していたが、学資が続かなくなり、同校の退学を余儀なくされた。そこで彼は私塾に移ることにし、同年二月、明治新塾と称する学校に入るため、松本藩大属の地位にあった野山なる人物に身元の保証を依頼した。野山が明治新塾の執事あてに書いた身元引受証には、福島が「洋学修業」のため入塾を希望している旨が記されている⁽²⁴⁾。

福島が実際に明治新塾に入ったかどうかは不明であるが、同じ一八七一年、彼は早稲田にあった北門社に入学したことがわかっている。それに先立つ一八六九年、福島は開成学校で学ぶ一方でこの北門社にも通い、そこで万国史を講読していた。ここでいう万国史は当時アメリカでよく用いられ、日本でも歓迎された『パーレーの万国史』(Peter Parley's *Universal History: On the Basis of Geography*) の類であろうか。福島は大学南校退学後、かねてからなじみのあったこの私塾で学ぼうとしたのである。北門社の社長はオットー・ズィッヒエル (Otto Sichel) というドイツ人であった。福島は五名の仲間とともにこのズィッヒエルに英語の教授を願い出ており、その英文合意書が残っている。そこには次のように記載されている⁽²⁵⁾。

- ① タノ・ミツヨシとその仲間であるカシモト・ツナツグ、福島安正、ヨシミ・ヨシツグ、マツバラ・シンノスケ、カタヤマ・ヨシノリとオットー・ズィッヒエルは次の合意書を交わした。

② タノとその仲間は、明治四（一八七二）年八月一日より四ヶ月間、ズィッヒエルを私塾の教員として雇用する。

③ ズィッヒエルは英語とドイツ語についての共通講義を教える。

④ ズィッヒエルは日曜日と公の休日だけ休みをとる。

⑤ ズィッヒエルはエノウ寺に居住し、支援を提供する。

⑥ 彼の報酬は生徒一人あたり二両となる。

この合意書によると、福島と五名のグループは、北門社の社長ズィッヒエルを個人教授とし、彼が住んでいたエノウ寺で英語とドイツ語の指導を受けたようである。翌一八七二年、柳田藤吉が北門社を閉鎖すると、ズィッヒエルは別に蘭疇社を開いた。北門社は柳田がオーナーであったが、その管理については先述のように蘭疇院を創設した医者松本良順があたっていた。ズィッヒエルはこの松本の保護下に、蘭疇院に付属する形で蘭疇社を開学したのではないかと考えられる（「蘭疇」は松本の雅号）。これに合わせて福島も蘭疇社に移籍した。同社の模様を彼は父親に次のように伝えている。

早稲田村に開校した蘭疇社に入り、ここに留まることすでに六ヶ月。しかるに学生はいまだ三〇名に満たず、ただその内外に限られているようです。これはまったく人の耳に入らないからです。教師の恩が深いのに感じ、適當の場所を選んで学校をすこぶる盛んにし、加えて皇国開化の一助としたいと考え、同志と種々その目的のために心配して

は「非常に乱暴」であり、食欲旺盛な学生は神田一ツ橋外の護持院ヶ原にあった校舎（現、共立女子大学の所在地）の近くにあって神保町の菓子屋や蕎麦屋にいつもたむろしていた。²²⁾

これまで確認されている福島関係の史料の中でもっとも古いものとして、福島が筆写した大学南校の「生徒心得」がある。²³⁾これはもともと一八七〇（明治三）年二月に制定されたものの改訂版と考えられ、一七カ条から成るが、その要点を摘記すると以下になる。福島が学んだ教場の有様をうかがうことができよう。

- ① 教場の諸規則を守り、教官の指揮に従うこと。違背する者には退学を申し付ける。
- ② 講習〔専門科目〕・語学・数学の三課を兼学しなければならない。
- ③ 修業時間は午前九〜一二時、午後一〜四時で、遅刻する者には課税がある。
- ④ 入学時、これまでの学業に応じて仮に等級を決め、四季の定期試験で真の等級を定める。
- ⑤ 数学は加減乗除、分数比例までは終えなければならない。
- ⑥ 課業の書籍は時宜により貸し渡し、または払い下げるので心得ておくこと。借りる際は短冊に書名を書いた上で捺印し、その課業が終われば返却し、短冊を教官に示した上で新規の書籍を貸し渡す。
- ⑦ 不快故障等で欠席した場合は、生徒勤惰取調局へ届け出ること。
- ⑧ 三ヶ月のうち欠席が二〇回以上の者は除名となる。

⑨ 講習〔専門科目〕・語学・数学のうち一課でも欠ける者は除名となる。

⑩ 退学を申し付けられた者は、その退学の次第により、かつ改心の様子が証人よりはっきりと申し出されるならば、退学日より三ヶ月後に再び入学を許すこともある。

⑪ 洋服を着用し、または無刀無袴などで出席するのは禁止である。

庶人といえども同断。

⑫ 毎月の休業日は第一日、日曜日。もし第一日が日曜の場合は一日を休業とする。

⑬ 事故のため退学を希望する者は、生徒勤惰取調局へ届けること。

⑭ 寄宿舎に入りたい者は、等級六等以上で年齢一六歳から二五歳までの者に限る。

⑮ 自らの希望で寄宿舎を出る者は除名となる。

⑯ 寄宿舎を出るよう申し付けた者は直ちに除名となる。

⑰ 宿所・姓名・肩書などが変わった場合はすぐに生徒勤惰取調局へ届けること。

福島はこのような規則の下で学生生活を送っていたわけである。とくに興味深いのは、⑪「洋服を着用し、または無刀無袴などで出席するのは禁止である。庶人といえども同断」の個所である。洋服を着用して、あるいは刀を差さず、袴を履かないままでの出席は不可であるという。旧武士の子弟が生徒のほとんどを占めていたことがうかがえ、士族以外

書調所（一八六二年に洋書調所、六三年に開成所と改称）であり、その主要な任務は洋書洋文の翻訳と洋学教育であった。新政府はこの開成所を接收し、開成学校として復興する。開成学校の正式開講は一八六九年一月であり、五月までの間に頭取・内田正雄以下、二等教授として入江文郎（仏学）、中浜万次郎（英学）、鈴木暢（鈴木唯一、英学）、箕作秋坪（蘭学）等、三等教授として伊東昌之助（英学）等、教授試験として大築彦五郎（元幕府ロシア留学生）、市川森三郎（平岡盛三郎、元幕府イギリス留学生、物理学者）、辻理之助（辻新次、旧松本藩士、化学その他）、矢田部良吉（のち植物学者）等がいた。また三月に語学および学術教師として採用されたオランダ系アメリカ人のゲイド・フルベッキ（フェルベック、Guido Herman Fridolin Verbeck）など英米仏の外国人教師もいた。¹⁴

福島入学当初の教員は以上のような人々であったが、この初期の開成学校に関しては講義日程などの規則が残っておらず、その実態についてははっきりしていない。ただし開講と同時に英語、フランス語クラスが設置されたらしく、新知識を得ようとする者が全国から続々と上京して学生数が急増し、施設、教官の拡充増員に迫られた。寮の寄宿生は定員三〇〇名とされていた。¹⁵

しかし正式開講から五ヶ月後、福島が入学して間もない一八六九年六月、開成学校は昌平学校、医学校と合わせて「大学校」として形式的に総合的な組織として統合され、さらに一二月に開成学校、医学校がそれぞれ大学南校、大学東校と改称された。¹⁶したがって福島は当初は開成学

校、途中から改名された大学南校で学んだことになる。

福島在学当時の大学南校の生徒は、まず正則（外国人教師にしたがって語学および諸学科を学ぶ）と変則（日本人教官にしたがって語学および諸学科を学ぶ）のいずれかのコースを選ぶ必要があった。¹⁷その上で基礎科目として、①語学（英語、仏語のどちらか、一部独語もあり）、②数学を学び、そうした一般教育課程の普通科を終えた者のみが専門科（理科、法科、文科）に進み、たとえば文科であれば、③歴史、文章、地理などのうちから一科、または数科を選択することができた。多少の例外はあったものの、①③のうちどれか一つでも欠けていれば除名となる決まりであった。また普通科の英語教科書としてはジョージ・P・カッケンボス（George Payn Quackenbos）、地理教科書としてはJ・ゴールドスミス（J. Goldsmith）やマーシヤス・ウィルソン（Marcus Wilson）が著したアメリカの標準的な学校教科書が用いられた。¹⁸福島は英語、数学の基礎科目に加えて、専門科で地理を学んだと考えられる。ここで、そのころの大学南校の雰囲気を紹介しておきたい。生徒の気宇は壮大で、新時代のエリートをもって任じ、将来の大政治家や大外交官を志し、焼き芋をかじりながら口角泡を飛ばし、治国平天下を談じた。¹⁹「明治維新の大業は白面書生の手に成れり、吾等一朝風雲に会さば、身卿相となりて国政を料理する易々たるのみ」というのが彼らに共通する抱負であった。²⁰その一方で、薩摩、佐賀、熊本、長州、加賀、筑前などの大藩の学生は各グループを形成して街路を闊歩し、その威容を誇示したが、学資が潤沢であったため、酒食に耽溺する者もいた。²¹学校の気風

安広はつねに家計に苦しんでおり、福島は一一ないし一二歳のときから藩の茶道部屋に雇われ、家計を助けていた。⁵⁾

松本藩は譜代大名(戸田松平家)で、当時の藩主は戸田光則(みつひさ)であった。この光則の下で松本藩は財政、軍制改革(西洋砲術、西洋火術の導入など)を行うとともに、二度にわたる長州征討(一八六四、一八六六年)を命じられている。しかし一八六八(慶応四)年に戊辰戦争が始まり、新政府の東征軍が松本の間近に達したとき、佐幕を捨て勤皇の誓約をし、北越戦争や会津戦争に新政府軍の一員として参加することになる。⁶⁾

福島の生誕地は松本城北方の旧町名・西町にあり(現地名・松本市開智三丁目二)、「維新前松本藩士族屋敷割図」を見ると、該当個所に「福島幸八郎」の名が記載されている。⁷⁾現在、同地には西町公民館が立てられ、児童用のブランコ、滑り台を具えた小さな公園となっており、敷地内の中心あたりに「福島大将誕生地」と刻まれた石碑が立っている。また公園入口に「郷土の英雄『福島安正大将』略歴」と題した説明板があり、「この旧宅地は大将の遺書により、松本市に寄附されて以来、小公園として市民から親しまれている」との由来が記されている。⁸⁾周辺の区割りには昔からそれほど変わっていないと思われ、旧土族町の雰囲気が残っており、とくに福島生誕地から徒歩二分(一九〇メートル)の地点に江戸中期の武家屋敷「松本市重要文化財高橋家住宅」が保存公開されており、当時の藩士の暮らしぶりをうかがうことができる。

一八六三(文久三)年、一〇ないし一一歳の福島は藩の茶道部屋で働くかたわら、藩の練兵「西洋流」に入って兵式練習と軍鼓を学んだ。⁹⁾

八六五(慶応元)年、一二ないし一三歳のとき、オランダ銃を用いて二〇〇発の射撃を行い、藩主・戸田光則から賞を受けている。¹⁰⁾幕末の動乱期にあって、信州松本でも西洋式軍事訓練の波が押し寄せていたのである。さらに一八六七年、一四ないし一五歳の彼は軍事修業のため江戸に出て、旗本・鈴木邦三郎の塾生となり、兵式訓練を修め、他方、大小鼓笛とラップを学んだ。翌一八六八年より戊辰戦争が始まると、父・安広は北越戦争に参加して越後口に出征し、福島は藩命によって松本に帰ることになった。¹¹⁾

以上の福島の境遇は、同じ信濃国の高遠藩の貧しい下級士族であり、のちに教育者、文部官僚として知られるようになる伊沢修二(福島よりも一歳年長、一八五一年生)の場合とやや似ている。幕末の高遠藩も兵制改革を行い、オランダ式訓練を採用し、士気を鼓舞するために鼓笛隊を編成したが、伊沢はその鼓手に選ばれた。そして一八六七年に「徳川家のため戦死すべき覚悟」をもって江戸に上るが、結局高遠藩は翌一八六八年の戊辰戦争では新政府軍に加わることになる。その後、明治維新を迎えた伊沢は英学を志し、高遠藩内で選抜された貢進生として大学南校に入学する。¹²⁾西洋列強のアジア進出と幕府の瓦解という時代の奔流に押し流されながら洋学に活路を見出し、いく若き日の福島や伊沢の姿は、当時の下級武士の子弟に多かれ少なかれ共通するものであっただろう。

一八六九(明治二)年、一六歳の福島は藩主・戸田光則の上京にしたがって東京に向かい、同年四月より開成学校に入学して英学を学ぶようになる。¹³⁾開成学校の前身は、幕府が一八五七(安政四)年に開校した蕃

はじめに

福島安正（一八五二—一九一九年）は明治期において陸軍参謀本部第二部長（情報担当）、参謀次長を歴任し、陸軍の情報活動、インテリジェンスの中核を担った人物である。当時の陸軍の情報活動というところ明石二郎（一八六四—一九一九年）が取り上げられがちであるが、福島は明石の先達として対外情報収集の基礎を築き、明石の先駆的役割を果たした人物であった。

明治期陸軍のインテリジェンスの実態と本質を検討する場合、福島は第一のキーパーソンとなる。そのため筆者は彼のさまざまな時期における情報活動を検証してきた^①。しかしそうした活動を理解する上で、その原点となる彼の思想形成期の考察は欠かすことができない。福島はどのような青少年期を過ごし、そこでどのような教育を受け、将来の行動の基礎を築いたのか。その情報活動の起源はいかなるものであったのか。この点を究明することによって、のちの彼の言動がより良く読み解けるのではないかと考える。

これまで若き日の福島についてはほとんど研究がなされてこなかった。ただ一つの例外として、島貫重節氏の『福島安正と単騎シベリヤ横断』上巻がある。ここでは少年期から陸軍に入るまでの福島が描写されている^②。同書はそれまであまり明らかにされていなかった福島の情報活動を詳細に追った先駆的な作品であり、歴史上の空白を大幅に埋めた貴重な

研究である。ただし青少年期の福島については、時系列的に説明がなされておらず、断片的な情景をつなぎ合わせた観があり、記述の根拠となる資料についても明確な提示がなされていない。これは同書の主眼があくまで福島のシベリア単騎横断旅行（一八九二—九三年、三九歳—四〇歳）の検証に置かれているため、やむを得ないともいえる。

そこで本稿では、島貫氏の用いていない資料も活用しながら、青少年期の福島の言動を洗い直し、再検証してみたい。その上で、後年の彼の情報活動の源流をさぐることに目的である。今回用いるのは、①太田阿山編『福島將軍遺蹟』所収の福島日記と年譜、②国立国会図書館憲政資料室所蔵の福島安正関係文書、③天理大学附属天理図書館所蔵の福島日記と書簡、④松本市立博物館所蔵の福島書簡である。いずれも学術論文としては、はじめて利用されるものとなる^③。

なお原文の引用に際しては、読み易さを考慮して、片仮名、合字を通常の平仮名に改め、適宜句読点を補った箇所があることを断っておきたい。

一 修学期

福島安正は嘉永五年九月十五日（一八五二年一〇月二七日）、信濃国松本藩の下級武士であった安広の長男として生まれた^④。幼名を金重太郎と呼び、長じて運治、のち安正と称した。安正は一歳（満年齢、以下同様）で母を失い、父と祖母によって育てられている。家は貧しく、父・

青少年期の福島安正と情報活動の起源

澤田次郎

要旨

本稿は明治後期に陸軍の情報活動、インテリジェンスの中核を担った福島安正が、明治初年の青少年期、どのような足跡を示し、いかなる思想形成過程をたどったかを検証するものである。結論として以下の諸点を指摘することができる。

第一に、幕末の松本藩時代から新式の軍事教練などを通じて西洋化の波を受け始めていた福島は、明治維新直後、開成学校、大学南校で英学を学んだ。学資が続かず大学南校は退学したが、その後、私塾の北門社を経て、蘭疇社のズイツヒェル、林邸居住の漢学者・巖田正義、江藤新平邸のピン氏、耐恒学社のホワイト、個人教師の鈴木唯一、成功社といった形で学校と教師を転々としながら勉学、とくに英学に励んだ。

第二に、そうした過程で福島は西洋人と直に接し、彼らとコミュニケーションをとるという経験を積んだ。それとともに日本の西洋化、「文明開化」を歓迎し、その進展を願う彼は、たとえば陸軍省文官時代、マッカーマント大尉を案内した際に見られたように、イギリスについては文明国としてポジティブなイメージを抱いていた。

第三に、司法省文官となった福島に大きな衝撃を与えたのは、一八七四（明治七）年の台湾出兵であった。このとき清国との戦争を予想した彼は強い危機感を覚え、愛国心を燃やし、それが契機となって陸軍省文官、さらに武官へと転身していくことになる。

第四に、陸軍文官時代、フィラデルフィア万博に派遣され、さらに西南戦争に征討総督本営付の書記として参加した福島は、戦場から送られる情報を取り扱う任務につき、これが彼の軍事情報活動の出発点となった。

第五に、以上の過程で福島の中で形成された根本的な価値観は、刻苦勉励して身を立て、家名を揚げ、さらに「皇威ヲ海外萬国ニ輝カサン」というものであった。自己の立身出世と日本の国権拡大、対外発展は彼においては矛盾せず、相補い合うものにほかならなかった。

以上の五点に見られる若き日に培われた福島の特徴は、その後、陸軍で情報活動を続ける上でつねに彼の思想の根底にあり、その言動の基盤として作用することになるのである。

キーワード：福島安正、陸軍、参謀本部、情報、諜報、インテリジェンス

目次

- はじめに
- 一 修学期
- 二 司法省時代
- 三 陸軍文官時代
- おわりに

執筆者および専門分野の紹介（目次掲載順）

河原 清志（かわはら・きよし）	外国語学部教授	通訳翻訳研究，スピリチュアルケア論
大森 裕二（おおもり・ゆうじ）	工学部教授	アメリカ演劇，比較文学
富田 爽子（とみた・そうこ）	人文科学研究所客員研究員	英文学，書誌学
関 良基（せき・よしき）	政経学部教授	環境政策
田野 武夫（たの・たけお）	政経学部教授	ドイツ近代思想，ドイツ文学
久米井敦子（くめい・あつこ）	商学部教授	中国近代音楽史，中国近現代文学
塩崎 智（しおざき・さとし）	外国語学部教授	比較文化，日米交流史
米重 修一（よねしげ・しゅういち）	工学部准教授	コーチング学，動作解析学
オスカル・メンドサ（おすかる・めんどさ）	外国語学部特任講師	哲学，人類学
保坂 芳男（ほさか・よしお）	外国語学部教授	英語教育史，お雇い外国人
澤田 次郎（さわだ・じろう）	政経学部教授	日本政治史，日本政治思想史

表紙ロゴ『拓殖大学論集』は、西東書房、二玄社のご協力をいただきました。
2社に感謝申し上げます。

- (1) 「拓」 次の2項目を合成
手偏 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.12の「持」より）
石 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.15）
- (2) 「殖」 西嶽華山廟碑（二玄社刊，p.90）
- (3) 「大」 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.9）
- (4) 「學」 史晨後碑（二玄社刊，p.52）
- (5) 「論」 尹宙碑（西東書房刊，p.36）
- (6) 「集」 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.11）

人文・自然・人間科学研究 第48号 ISSN 1344-6622（拓殖大学論集328） ISSN 0288-6650

2022年（令和4年）10月25日 印刷

2022年（令和4年）10月31日 発行

編集 拓殖大学人文科学研究所編集委員会

編集委員 田野 武夫 海口 浩芳 長尾 素子 末延 俊生 関 良基
小林 敏宏 村上 祐紀 永江 貴子 廣澤 明彦 大森 裕二

発行者 拓殖大学人文科学研究所長 田野 武夫

発行所 拓殖大学人文科学研究所

〒112-8585 東京都文京区小日向3丁目4番14号

Tel. 03-3947-7595

印刷所 (株) 外為印刷

THE JOURNAL OF HUMANITIES AND SCIENCES

Number 48

October 2022

CONTENTS

Articles:

- Kiyoshi KAWAHARA Diversity of Sense-Making:
Verification through Book Reading Sessions (1)
- Yuji OMORI A Conflict Between Imperialism and Ecosophy:
The Emperor Jones as a Drama of Kingship (25)
- Soko TOMITA English Encounter with Italy in the Age of Edward VI (41)
- Yoshiki SEKI The Constitutional Designs in 1867, Japan:
Kosaburo Akamatsu, Mamichi Tsuda, Norikata
Matsudaira, Amane Nishi, and Kakuma Yamamoto (65)
- Takeo TANO The Life of Taro Katsura as Recorded
in German Diplomatic Documents (84)

Study Notes:

- Atsuko KUMEI 《Selections from the Repertory of Operatic Songs and
Terpsichorean Melodies of Mei Lan-fang》 and
Liu Tian-hua (98)
- Satoshi SHIOZAKI Report on a Survey of Historical Materials Related to
Suzuhiko Tsukagoshi (1842–1886), an English Teacher
Employed by Obama Domain, in Fukui Prefectural
Library and Obama City Library (116)
- Shuichi YONESHIGE Development of Running Abilities and Better Physical
Conditioning through Stimulation Training (136)

Material:

- Oscar Javier MENDOZA GARCÍA
“El Conde Niño” de *Riojarchivo.com* (148)

Abstract:

- Yoshio HOSAKA A Study of English Studies in the Early Meiji Era:
Focusing on *Go-gakko* in Nukata Prefecture (177)

Article:

- Jiro SAWADA Fukushima Yasumasa’s Thought Formation during
the Youth Period: The Origin of His Intelligence Activities (1)

-
- Instructions to Authors (181)
-

Edited and Published by
INSTITUTE FOR RESEARCH IN THE HUMANITIES
TAKUSHOKU UNIVERSITY
Kohinata, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8585, JAPAN